

濫觴 RAN●SHOO

■ 濫觴 (らんしょう)

この言葉の意味は、「物事の始まり。物事の起こり。起源」といったものである。

「濫」は「あふれる」、「觴」は「杯（さかずき）」の意。揚子江のような大河でも、その源は杯（觴）にあふれるほどの、つまりはささやかな水であるという意。

「孔子曰ハク、昔者、江ハ岷山ヨリ出ヅ。ソノ始メテ出ヅルヤ、ソノ源ハ以テ觴ニ濫ルル可シ。」（『荀子・子道』）が出典。

この NEWS LETTER [濫觴] は、英国国際教育研究所で学ぶ皆さんへのささやかな、けれども真摯なメッセージとなって、教育や学問の世界での新しい宇宙を創造しようとする皆さんの磁場となるように創刊されたものです。

既成の価値観に躍らされる事なく、一杯の水を、清く澄んだ水を、皆さんとともに、照れることなく、汲み続けていこうと思っています。

図師照幸

表面張力との出会い

その出会いはやはり、僕にとってきわめて衝撃的なものであった。

信州の田舎料理を食べさせるその店は僕たち詩を書く者たちの溜（たま）り場となっていたが、その夜も僕は数人の詩人たちとおでんを頬張りながら酒を飲んでいて。

話題はいつも現代詩の可能性についての見解の違いから出発し、＜愛とは何か＞の議論を経由し、まとまりのない自己中心的な論理の分散で終わった。

その夜もようやく第2段階の＜愛＞についてそれぞれが語り始めたところだった。僕の前にその料理屋のおかみがコップ酒のお代りを、たぶん5杯目だったと思うが、突き出した。小さな受け皿の上に、コップが置かれ、そうしておいてからおかみは器用に爛（かん）をした日本酒を注いだ。僕は何気なくその所作を眺めていたが、注がれた日本酒を見ていて＜アッ＞と声を出しそうになった。

＜フ克蘭デイル＞、そう思ったのだ。コップに注がれた日本酒がコップの縁を越えて盛り上がっている。それはまさしく膨（ふく）らんでいた。僕はそれを見つめながら、＜きれいだな＞と思った。天井の電球の光を抱きしめながら膨れ上がった酒は輝いていた。仲間の議論からはずれた僕は、しばらくの間見つめ続けた。

この美しさはいったい何なのだ。分析することが生きることだという妄想に取りつかれていたその頃の僕は、目の前に突きつけられたものに必死で取り組んだ。

どうしたんだよ、突然、仲間が僕に問いかけたときはおそらく数十分が経過していただろう。

ウン、これを見てよ、きれいだよ。なにが？これだよ、この膨らみだよ。ああ、表面張力か。ヒョウメンチョウリョク？ああ、こういうふう膨らむ力のことを表面張力というんだよ。そういえばかつて学校で習ったことがある。

＜ヒョウメンチョウリョク＞！それからの僕の、大袈裟でもなく＜生きる＞ということの多くの部分にこの＜表面張力＞は位置することになる。

僕はその夜の衝撃をあくる日の分析に繋いだ。

岩波の『理化学事典』によれば、表面張力という現象は、つまりは何と、＜収縮＞するということであった。液体がその表面積をできる限り小さくするためにそのものの中心に向かって働く力である。

フ克蘭デイルと見えたものは実は内へ内へとシュウシュクしていた、という事実は、僕の感性を徹底的に打ちのめした。

貧しい電球の光を哀しく抱きしめながら膨らんでいた液体は、実はもっともっと深い哀しみの中へと収縮していた。奥へ奥へと沈んでいく哀しみだった。

表層の美しさはつまりは虚像に過ぎない。僕はその時、表層の美しさに打たれたのか、それとも深層の哀しみの予感に震えたのか。

それからの僕は、コップ酒を飲む度に、小骨に似た異物感を喉（のど）に感じるようになった。時にそれは2日も、3日も刺さったままで僕の生きざまを息苦しくするのだ。

僕は自分の顔を知らない 人間にとって<自分>とは何だろう

小学校を卒業した僕は、けれども明るく日も学校に行かなければならなかった。当時、少年合奏団というものに属していた僕は、他の少年合唱団との合同演奏会が NHK によって企画されていたため、練習をしに学校に出かけたのだ。

前半の練習が終わり、休憩時間に僕たちはドッジ・ボールをして遊んだ。そのゲームの最中に僕は頭を強打し、一瞬意識を失った。すぐに意識を取り戻した僕は、後半の練習に臨んだ。しばらくして僕の異常に気付いた仲間が僕をテストした。「1足す1は?」「名前は?」

むろんちゃんと答えた(らしい)のだが、「卒業式はいつあるの?」などと聞いていたという。

しばらくして頭が痛いと言い出した僕は、学校の保健室に連れていかれた。そこでかなり苦しみだしたらしい。母親が呼ばれ、僕は病院に運ばれた。脊髄の中のミズの検査や脳波の検査等をして結局入院することになった。実は、ドッジ・ボールをして頭を打ったところから病院で目覚めるまで僕は何にも覚えていない。目覚めたのは数日後であった。

中学校に入学するまでの春休みはずっと病院で過ごした。退院後も僕は気になって仕方なかった。「僕の頭はおかしくなってしまったのじゃないか」と。

そのころから僕は自分の部屋に閉じ籠もりがちになった。父の本棚からいろいろな本をこっそり持ち出してはドキドキしながら読むようになった。モーパッサンの『女の一生』を読んだときは強い衝撃を受けた。ボードレールの『悪の華』という詩集を思い切って本屋から買ってきたのもそのころだ。「思い切った」というのは、きっとイケナイ本だと思ったからだ。

そのうち自分でも創作の真似事をするようになった。生徒手帳にはたくさんの詩(みたいなもの)を書き留めた。

創作を始めるともともと本が読みたくなって、立原道造や中原中也、さらに萩原朔太郎へと読み進めるようになった。

そうしているうちに、つまり創作をしたり詩作品を読んでいるうちに、<自分>というものの存在について考えるようになる。

どんなに本を読んでも、そこに表されている世界はいつも僕という存在との関わりを持たない限り単なるフィクションでしかありえない。たとえばイエス・キリストは、彼に興味を持ち聖書の言葉と対峙しない限り、作り話の中の登場人物に過ぎない。言葉を換えれば、僕の存在を抜きにしてはキリストは存在しないということである。僕がキリストを生んだということである。

歴史上の人物だけでなく、例えば、たった今、アフリカの全く知らない村の首長は、その全く知らないが故にほとんどこの世に存在しないに等しい。

つまり、僕は(そしてあらゆる人間は)、僕の存在の上にあらゆる世界を位置づけるしかないのである。

ならば、その僕自身はどのように位置づけられるのか。常に自分の目からしか自分以外の世界を見ることのできない僕は、しかしながら一度たりとも自分の顔をナマで見たことがないのである。僕は自分の顔を知らない。

愛するとはいったい何だろう

(1) 与え、求めぬこと。それを愛とよぶのか。

この地球の上には何十億という人間が住んでいるそうだが、そのすべての人間が幸福でありたいと願いながら、すべての人間がそうであるとは言い難い。

悲しいことだ。

けれども、その、人間の幸福感というものはどこからやってくるのだろうか。どういう時に幸せであり、どういう場合に不幸なのか。

人間は愛するということを識っている。その愛するということにしても、はたして幸福感を運んでくれるものなのか、苦しみを連れてくるものなのか、難しい問題である。

人を憎むことだって人間は識ってしまった。そのことで毎日の生を支えているものもいるだろう。

なにがなんだかわからない。

けれども、素直に問い直してみるならば、やはり幸福感で満たされたい。では、どうすれば幸せになれるのだろうか。

シェル・シルヴァスタイン (Shel Silverstein) は朝鮮戦争の退役軍人で、詩人であり、音楽家であり、漫画家でもある。その彼の作品に、『おおきな木』というものがある。絵本である。

僕のその作品との出会いは、もう 10 年以上も前のことである。初めて読んだときはわかった気でいたのに、繰り返し読んでいくうちにわからなくなってしまった。

話の内容はこうだ。

一本のおおきなりんごの木がある。そこに一人の少年が毎日遊びに来ていた。少年と木はいつも仲良く遊んだ。木は幸せだった。

その少年も時が経つにつれて青年となり、恋をした。りんごの木のもとには彼女と一緒に遊びに来るようになり、そして二人は結婚した。

少年は会いに来なくなった。

ある日、少年は久しぶりにやって来るとりんごの木に家がほしいと訴えた。木は自分の枝を与えた。それから少年は幾度もやってきてはりんごの木をハダカにしていった。結局、木は切り株だけの姿となった。それでも木は幸せだった。

永い年月が流れた。ある日、年老いた少年がやって来た。木は言う、「もう何も与えることのできるものはない」。少年は答えた、「何もいらない、ただ腰かけて休ませてくれればいいよ」と。孤独な少年は黙って腰かける。木は幸せだった。

『おおきな木』の原題は『THE GIVING TREE』である。与えることこそが愛のあるべき姿である、というのだろうか。りんごの木は少年に生命を削るかのように与え続け、そしてそれを幸せであると感じている。たしかにそうかも知れない、とも思う。

与え、けっして求めない。そのことに喜びを感じることのできる者こそが永遠に幸福なのかも知れない。そうすることによってはじめて真実の幸福を手に入れることができるのかも知れない。

しかし、それは本当だろうか。僕はそうかも知れないという思いを抱きながら、しかしなお息苦しい蟠りを覚えてしまうのだ。(次号に続く)

愛するとはいったい何だろう

(2) 与えるとは何か。何かを断念することか。

『おおきな木』の一本のりんごの木は、ひとりの少年に、自分の肉体を削って、木の葉を与え、果実を与え、枝を与え、幹を与え、生命を削るかのようにすべてを与える。一箇の切り株になっても、なおくを与えることを忘れないりんごの木に、僕たちは真の<愛>の姿を見るべきなのか。

『おおきな木』の原題は、『THE GIVING TREE』であるが、その名の通り、与えることこそが愛のあるべき姿である、と言いたいのだろうか。

たしかにそうかも知れないとも思う。与え、けっして求めない。そのことに喜びを感じることのできる者こそが永遠に幸福なのかも知れない。

エーリッヒ・フロムがかつて愛を論じたとき、「愛とは第一に与えることであって、受けることではない」と主張したが、この物語に貫流する中心的な思想はまさしくそのことなのだろう。

しかし、では、<与える>とは何か。何かを断念することか、奪われることか、あるいは喪失することか。つまり、犠牲的愛を以て<愛>の至上とするのか。

フロムは言う。<与える>ことは人間の能力の最高の表現なのであり、<与える>という行為においてこそ、人は自分の生命の力や富や喜びを経験することになる、と。

たしかに、そうだと思ったりもする。と、その瞬間、僕は自分を偽るような苦しさに襲われる。

僕は、欲する。欲しい、と思うだろう。愛する相手には、愛されたいと思う。矢を放ちながら僕は、的を見据えている。今、放たんとする矢が果てしない闇の彼方へ消えていくとしたら、僕は（静かに）号泣するであろう。

けれどもまた、僕は、シルヴァスタインの、つまりはフロムの、<強さ>を愛してもいる。それは、憧憬というべき程度のものなのかも知れないが。

わからないのだ。<与える>ということが、何かを断念することだとも、奪われることだとも、あるいは喪失することだともけっして思わない。しかし、そういった意味ではなく、やはり僕は、欲する。

しかし、何を、僕は欲するのだろうか。愛されたい、と欲するのだ。けれどもまた、愛されたいという思いと<与える>ということとは実は相反することではないのかもしれないという思いに、今たどり着けそうな気がしている。愛されたいという思いは、真に<愛する>ということによって充たされ、昇華される概念なのではないか、そう思い始めている。これはつまり、フロムの思想と同じであり、ゆえに僕の情念の未熟さがさらに<でも、やっぱり>と囁きかけてくるのだ。

ふたつの愛

憶良に、「子らを思ふ歌」という作品がある。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ いくより 来りしものぞ まなかひに もと
なかりて 安眠しなせぬ

銀も金も玉もなにせむにまされる宝子にしかめやも

「瓜を食べると、子どものことが思われる。栗を食べると、ますます子どものことがいとしく思われてくる。いったい、子どもはどこからやってきて、わが子となったものなのだろう。いつも目の前にちらちらと見えていて、安眠することもできない」といった長歌と、「この世で貴い宝だという、銀も、黄金も、玉も、いったい何になるろう。優れた宝物、それはわが子に勝るものがあるろうか」という反歌である。

また、次のようにも歌う。

すべもなく 苦しくあれば出で走り去ななと思へど子らに障りぬ

「どうしようもなく苦しくなってくるとき、家を出ていってしまおうと思うことがある。だがそれも子どもたちが気がかりでできない」という意である。

いずれも、親の、子どもに対する愛情の深さを歌ったものであるが、ここで歌われている愛は、前号および前々号の『濫觴』で考えてきた、まさしく＜与える愛＞である。

親の、子に対する愛は、＜愛される＞ということに期待しない、＜与える愛＞をその本質とする。それは、異性に対する愛とは異質の愛とすることができるだろう。

しかしまた、＜愛＞というものの本来の形がそこにはあるのかもしれない。

その、子どもへの思いを振り切って、異性への愛に走る愛の形もある。

「私くらいお前を愛してやれるものはいないよ。お前は今より人を愛することがあるかもしれないけれど、今よりも愛されることはないよ」という安吾に、三千代は四歳の娘と別れて、坂口安吾という薬漬けの作家のもとへと走る決意をする。風呂敷包み一つ持ってやってきた三千代に安吾は言う、「子どもはほっといても育つものさ！」

夫や子どもがありながら、あるいは妻や子どもがありながら、人を愛するということの不条理は、しかしながら当人にとっての不条理とはならない。

しかしこの形態は、社会が長い時間をかけてつくりあげた論理や倫理といったものによって、つまり既存の価値観によって、激しい攻撃を受けることになり、多くの場合、結局は一つの極々わかりやすい結末を迎えることになるのである。

愛は、つまり哀しい。

狂気の作家・安吾の妻となった三千代はくり返し別れようとしながら、心中さえもしようとしながら、今度は夫を捨てることができない。三千代は、安吾をひたすら愛することで、彼女自身の生を生きようとした。

これもやはり、＜与える愛＞なのだが、と同時に激しく奪っているようにも思えてくる。

教師論 その1

僕が英国に渡り、数年経ってから、つまり 5、6 年も前の話である。日本に帰国した際に、久しぶりに中学のときの恩師を訪ねた。既に彼は退職しており、彼の言葉を借りれば晴耕雨読の毎日だという。

かなり老けたな、と思ったが、だからといって哀れさとか、惨めさとか、そういったものは感じなかった。むしろ不思議なさわやかさを感じた。

一緒に、ゆったりした気持ちでお酒を飲んだ。彼の奥さんにも過ぎ去った時を感じたが、酒の肴は相変わらず旨かった。

「照さん」（僕が中学生の頃から、彼は僕のことをそう呼んだ）と彼は言った。

「教師というものはね、自分の教えた教え子がね、どんな人生を送っているのかということ、いつも気に掛けていなくてはいけない、そう思っているんだよ」

かつて生徒からは鬼のように恐れられた教師の、柔和な、しかしながら凛とした言葉であった。

僕は彼のことを尊敬していた。彼に担任をしてもらったとか、教科（数学）を教えてもらったとか、そういう経験は実はない。彼は当時、教頭先生で、若い教師に限らず、中年の教師たちでさえも恐ろしいほど厳しく叱責する、そういう教師であった。彼が廊下を歩くと、不良ばい生徒だけでなく他の教師たちも背筋を伸ばさなくてはならない、そういう雰囲気かどりに漂った。

中学生であった僕は、けれども不思議な教育愛を彼に感じた。

いま僕は彼に＜教育愛＞を感じたと書いた。ではいったい、＜教育愛＞とは何だろう。

「教育者と学習者とが相互に信頼し尊重しあっているときに両者を媒介しているもの。その内容は見返りを求めない愛、＜与える愛＞（アガペー）であり、愛し愛される愛＜兄弟愛・人類愛＞（フィリア）であるとされる。しかし教育愛は、語られれば語られるほど、コミュニケーションとしての愛（体験的に得られた信頼関係）から乖離し、＜子どもを愛さなければならない＞という強迫観念を喚起する記号としての愛に変わっていく。」（田中智志『AERA Mook13 教育学がわかる。』朝日新聞社）

どうしてこんな下手な定義や解説の仕方をするんだろうという（いつもの）思いはそのままにして、＜教育愛＞というものの定義化がいわゆる教育学者によって一応は試みられていることはわかった。

教師と教育愛、そして学校。結局はその変質が進みつつあるということなのだが、いま僕たちは、つまり教育者（「の端くれ」という言葉があるが、僕はこの気持ちの悪い卑下を感じさせる言葉遣いが嫌いだ）として、その位置と可能性をじっくりと見つめてみたいと思う。

つまり、たとえば、教育とはいったい何なのか、教師とは、学校とは、などという拘りである。（続く）

教師論 その2

もう数ヶ月経ってしまったかもしれないが、ある日の朝日新聞の「声」の欄に次のような内容の投書を見つけた。

もはや学校には先生はいない。生徒のことを親身になって考えてくれるのは塾の先生たちだ。青春という甘酸っぱいながらも懸命な時間は今まさに塾にこそ存在する。

ここでいう塾とはいわゆる進学塾のことである。投書の主もまたそういった塾の講師であった。おそらく投書した本人も含めて、塾の教師こそが真摯に教育に打ち込んでいると言いたいのであろう。

とんでもない思い上がりと稚拙な誤解である。いつのころからだろう、いわゆる塾や予備校が表社会にその姿を曝し始めたのは、それはおそらく世の中が金満化し、成り上がっていくバブルの時期である。そういう時代が産み落としたものはだれもが手っ取り早く判断することができる<数字>という記号である。

塾や予備校を礼賛するものが増えつつある。谷沢永一という売れっ子の学者（関西大学教授）などもつい最近同じようなことを新聞に語っていた（談話）。そこになんらかのレトリックがあったとしても僕はそういう塾・予備校礼賛を認めない。

現代の塾や予備校に教育はない。そこで行われていることは、どのようなレトリックを用いたとしても点取り競争に過ぎない。いい中学や高校、大学に入るための点取り競争、その競争に勝つための訓練に過ぎない。そこには異なった価値観は存在しない。そこでは歌を歌うのがうまかったり、走るのが速かったり、絵を描くのが上手だったりしても、何も評価されない。できる限り高い得点をめざし素早く解いていく力をひたすら磨いていかななくてはならないのである。

数字がすべてなのである。合格するかどうか重要なのであり、そのことを除外しては何も存在しない、そういった社会である。お金至上主義の現代の写し絵である。

そのような場を教育は許さない。本来、教育はそういった一つの価値観に縛られたものとは全く反対の立場を取るものなのである。

「フーテンの寅」で有名な山田洋次監督が数年前に撮った『学校』という映画がある。その映画の中に学校とはいったい何なんだろうと夜間中学生たちが話し合う場面がある。「学校とは、幸せっていったい何なのかということを考える場所で、そしてそういったことを考えることが勉強なんだ」という答えを導き出す。

塾や予備校で合格をめざして点を取るというそのことだけのために懸命に訓練される子どもたち、僕はそういった訓練を指揮する者たちを教師とは呼ばない。僕は一つの価値観で定義され縛られる幸せの存在を認めたくないからだ。ましてやそんなところに青春なんてものがあるものか、そう思うのだ。（続く）

教師論 その3

僕は教育の世界に住む人ばかりでなく、さまざまな世界で生きている人たちと食事をしたり、お酒を飲んだりすることがよくある。

そして、そういったさまざまな世界の人たちと語り合いながら、結局、最後は、＜教育＞がテーマになっていることが多い。（かつては文学が、つまりは＜破壊＞ということがテーマになることが多かったが、このことについてはいつかこの欄で書くことがあるだろう。）

それらの人たちが抱く理想の教師像は、僕にとって随分参考になる。もっとも、僕が付き合っているその人たちはほとんど50代前後で、そのことを忘れて一般化することはやや危険であるが。

さて、彼らの思い出に残る先生は、多くの場合、やや型破りな先生である。極端に怖い先生であったとか、どんなことを聞いてもすばらしく明快な答えが瞬時に返ってくる先生とか、まるで女優のような美しさをもった先生とか、独身のため非常に不潔だったけれどだれもが慕って近づいていた先生とか、大酒飲みでいつもブンブンお酒の匂いをさせていたけれど生徒のこととなると自分の家庭も顧みずに夜中まで走り回っていた先生とか、とにかくそういった先生が彼らの話には登場する。そして、話をする彼らの表情には間違いなく不思議なあたたかさが感じられる。

昔話は美化される。時は人を許し、そしてまた、その許す人自信を優しく大きくするからだ。

しかし、彼らの思い出にある教師たちがその時間の流れの力によってのみ支えられ美化されて彼らの心に生き続けていると結論づけるのには僕には若干抵抗がある。

確かにそれらの教師たちの全人格が肯定されているわけではなく、それらの教師のほんの一部のみが彼らの心に生き続けているということなのだが、だからこそ、その一部とは何なのかと考えてみたいのである。

ただ、このことは誤解されたくないのであえて言う必要があるが、僕は型破りのための型破りを演ずる人間を評価しない。それは型破りを演ずる人間の価値観は結局は全くの通俗に敗北していると思うからである。

本題に戻ろう。僕たちが考えなければならないことは、彼らの何が教え子の心に生き続けたのかということである。

結論を急ぐならば、それは彼らの、他に抜きん出た一途さにあると思う。打ち込むものに、つまり、今、自分にとってもっとも大事なものに打ち込む＜強さ＞を彼らはさまざまな形で持っていたということではないか。（女優に似た先生の場合はどうかわからないが）

教師もまた、人間である。ということは、教師もまた＜生きている＞ということである。目の前の教師が＜確かに生きてい＞なければ、その教師の使う言葉は学ぶ者の心に届くまい。そう思うのだ。（この項、続く）

教師論 その4

かつて、『金八先生』というテレビの人気番組があった。武田鉄矢扮する熱血中学教師の物語である。かなりの話題となるまで、僕はその番組を見ていなかった。その番組が放映される時間には多くの場合、まだ帰宅していなかったからである。

ある夜、教材研究のために学校に残っていた僕に、中年のある教師が話しかけてきた。

「『金八先生』、どう思う？」

その番組を見たことのない僕には何とも答えようがなかった。その教師は続けた。

「なかなかいいんだよね、金八先生。僕がもっと若かったら、ああいうふうにごどもたちとハダカで格闘する先生でいたかったなあ。先生も見たほうがいいよ。」

その時初めて、そういった番組が人気を集めているということを知った。

それからしばらくして、僕はその『金八先生』を見た。うん、なるほどなあ、と思った。武田鉄矢が生き活きして、登場する子どもたちの内面の揺らぎがドラマチックでわかりやすい。金八先生はその一つの揺らぎに全身で向き合おうとする。確かに感動する。

おそらく当時は、多くの中学生が理想的な先生像としてあの金八先生を位置づけていたのではないだろうか。いや子どもたちだけでなく、多くの保護者もそう思ったのではないか。先生たちの中にもそうなりたいたと思った人たちが少なからずいたろう。

確かに僕も感動した。しかしその感動は、かつて『これが青春だ』とか『僕たちの旅』といったいわゆる青春ドラマを見たときの、淡く、脆く、永続性のない感動の一つであった。

一人の教育者として『金八先生』を見ると、僕はいくつかの疑問を感じざるを得ない。その中で、もっとも大きな疑問は、金八先生は毎日子どもたちの生活指導に放課後も深夜もとにかく 24 時間とっていいほど走り回って取り組むのであるが、いったいいつあしたの授業の教材研究や教案作りをしているのだろうか、というものである。記憶に自信がないが、確か彼の教える科目は国語だったのではないかと思うが、1 時間の授業を成立させるためにはその数倍の時間は一般的に言って必要になる。それはおそらくどの教科も同じだと思う。

だから、僕は思うのだ。金八先生はきっと悩んだらう、苦しんだらうと。つまり、準備不足で教壇に立ちながら、彼はきっと屈辱的な思いを抱いていたに違いない。もっと、もっと充実した授業がしたいと。

なぜなら、教師が闘う土俵はあくまでも授業という場であるからである。それぞれの科目の授業を通して、教師はいろいろなものを見つめる目や、考える力を、つまり知性を教えようとする。そして、その実践には必ず研究の支えがなくてはならないのである。（この項、続く）

教師論

その5

前号で僕は、武田鉄矢扮する熱血中学教師・金八先生を例にして、彼の純粋な熱血教師ぶりは評価するが、やはり教師が教師として存在するのはまず<教室>（僕のいう<教室>とは、いわゆる教育という行為を包む器を指しているのではなく、教える者と学ぶ者が一つのアカデミックなテーマをもとに向き合う場という意味である）においてでなければならない、そして、その教室の場をよりよく成立させるために<研究>という地味な取り組みが不可欠である、といった趣旨のことを書いた。

1時間の授業を成立させるために、教師はさまざまな準備をしなければならない。その意味で、たとえば金八先生の放課後の指導についても、教室における授業を成立させるための準備の一つであるという位置づけも可能ではある。生徒との信頼関係がなければ教育というものはなかなか成立し難く、金八先生の放課後の活躍は（結果的にはあるが）授業成立のための準備と言えなくもないからである。

しかしながら、それらの準備の中心を成すのは、教材研究等の、教えようとするものについての研究である。何のために、何を、どのように教えるか、といった準備である。それらにはもちろん、基礎研究としての、たとえば日本語教育でいえば文法の基礎理論であるとか、教授法の理論の研究であるとかが含まれることになる。それらの準備はしてし尽くすということのないものと言えよう。

もっと強調するならば、研究という背景をもたない実践は脆いということである。わかりやすくいうならば実践（すなわち授業）の効果がそれほど望めないということである。

このように書くと、あるいは誤解を受けるかもしれない。というのは、初めに研究ありき、終わりにも研究ありき、実践は二の次であるといった考えを僕が持っているように受け取られるかもしれないからである。僕は研究至上主義者ではない。研究はきわめて大切であると思うが、研究のための研究をあたかも優れたものとする輩ではない。教育という世界における研究はあくまでも教育現場のための研究でなければ意味を成さないと僕は考えるからである。

たとえば、大学や研究機関において教育学や教科教育学を研究している教員たちの存在はつまり、いわば一人の教師が教室に立つためのサポートという意味で意義があるのである。

しかしながら、たとえば多くの大学の教員たちは愚かにも誤解をしている。研究のために現場の教員たち（そして実践）があると考える風潮がはびこっているのである。日本語教育に関わるかなりの大学教員の実態は、さらに酷い。それらは日本語教育が本当の意味でステイタスを持ちえない病根そのものであるように僕には思える。さらに研究の仕方そのものにも、問題がある。（続く）

教師論 その6

日本語教育学という領域は、本当にまだまだヨチヨチ歩きの段階であると僕は思っている。それは関係する諸領域、たとえば、国語教育学、英語教育学、国語学、英語学、言語学、心理言語学、文化学、異文化間教育学などに比べて、基礎理論の視点の多面性や重層性においても、それを支える実践報告の質的量的蓄積においても十分とはいえないからである。

それは無論、止むを得ないことである。日本語教育、すなわち、日本語を母語としない学習者を対象とした教育の出現は必ずしも現在のよう形ではるか昔から予想されたものではなく、つまりこれほど多くの外国人が日本語を学習する時代が来るとは少なくともほとんどの日本人は考えていなかったからである。新しい学問領域なのである。

ゆえに、日本語教育学にかかわろうとする者にとって必要なことは、既に確立されている学問諸領域の研究成果を謙虚に学ぶ姿勢である。日本語教育が言語教育や語学教育として他の言語の教育に伍していくためには、関連諸領域の最新の研究成果を学ぶことから出発する必要がある。

しかしながら、たとえば国語教育の研究成果に関する日本語教育関係者の無知は甚だしい。日本語教育と国語教育は確かにその教育対象が異なる。そのため、その教材分析の視点も方法も、また教授法に関する理論も方法も異なるのは当然である。国語教育学になかったさまざまな視点が開拓されていくのも魅力的である。しかし、国語教育になかった視点といいながら日本語教育の関係者がその比較すべき国語教育についてどれだけ知っているかという、応えに窮する者のほうが多いだろう。日本語教育であたかも新しい教授法としてレポートされるものがずいぶん昔に国語教育の実績として報告されているといった例をさがすのはそれほど難しいことではないだろう。

新しい学問を創造していくとき、関係諸領域の成果を学ぶことから出発しなければ、他の領域が要した同じ時間が必要になる。そうした時間は多くの場合、無駄である。

今、国語教育からも多くのことが学べると述べたが、国語教育の方もまた、日本語教育から数多くのことを学び得るのは当然のことである。日本語教育の風が国語教育の世界の澱みを吹き飛ばし、新たな地平を切り開くことが期待されるのである。

ところで、関係諸領域の研究成果を大いに活用すべきと述べながら、若干気になる現象を最近感じることもある。それは、海外で日本語や日本語教育、あるいは日本文学等を研究している（あるいはその後日本に帰った）研究者の姿勢である。海外の言語学等の理論を学び、ほぼ無批判に（日本語そのものについては表面的研究のみで）日本語をそれらの理論に（都合のいい部分のみ）あてはめ、あたかも研究者として最先端を歩いているかのようなきわめて幼稚な錯覚と傲慢とである。（この稿、続く）

教師論 その7

今年は4回、日本に帰った。いずれも仕事の旅である。その度に何人かの教育者、つまり大学の教員や高校等の教員に会う。中にはそうでない人もいるのだが、多くの場合、それらの先生たちに会って話をしたあと、最近はかなり疲労感を覚えるようになってきている。

<空しさ>を感じてしまうのだ。

僕が人に会うのは、その人から何か価値のあるものを獲得したいという息苦しい思いをいつももつてのことではないが、相手が同じ教育の世界に住む人である場合にはやはり、教育の現在や未来について語り合いたいと自然に思ってしまう。

ところが、多くの場合、それは肩透かしを喰ってしまうことになる。教育者が教育について語ろうとしないのだ。

いや正確に言うと、彼らは教育の可能性について語ろうとしないのである。

彼らの口をついて出る言葉は、「現実には…」であったり、「しかたない」であったりするのである。

こういった言葉を聞きながら、僕は気になることを思い浮かべる。いわゆる<学校の塾化現象>である。たとえば、衛星放送を利用した予備校の授業を生徒に受講させる高校が日本国内では増えつつあるという。そういった高校の先生たちはテレビ画面に映る予備校講師の授業を受講する生徒たちをどんな思いで見つめているのだろうか。

もしも僕がそういった高校の教師であったなら、屈辱感ですぐにそういった<学校もどき>の学校は辞めてしまうだろう。怒りに震えることだろう。

何度も何度も発言していることなのだが、高校は大学のために存在するのではないのだ。同じく大学も一流会社への就職のために存在しているのではない。

高校教師はもっと自信を持つべきだ。大学の教師ももっと自信を持つべきだ。自分の存在をこれほどまでに馬鹿にされて黙っているのは決して知的労働者とはいえない。

高校は、高校生という年代の子どもたちでなければ学べないことを学ぶところであり、大学は学問という究めて非効率な世界にどっぷりと浸かり、その海を清々しく泳ぐことであしたの世界への夢を持つとするとところである。

<あきらめ>や<現実>の敗北者たる教育者はいない。夢や理想をためらいなく勇気を持って語れぬ教育者はいない。

「何をカッコつけてるの」といわれたら、「そう、私はカッコつけたいの」と言い返せる教育者でありたい。

<現実>という言葉は、実はその言葉を使う人間の極々限られた狭い経験から導かれたきわめて個人的な言い訳以外のなにものでもないが、その<現実>の敗北者がたとえば教師であったりすると、たとえ目の前に大吟醸の日本酒や絵皿の上にすきとおる河豚刺しがあったとしてもなかなか酔えない。

<空しさ>を感じてしまうのだ。(この稿、続く)

教師論

その8 父(1)

新年である。僕は子どもの頃、一年中で何より正月が好きだった。その頃の僕は、「もういくつ寝るとお正月……」という言葉で始まる歌をよく歌っていた。おかしなことに正月になって何日たってもこの歌を歌っているのである。

同じ時間がつながっているのに、大晦日と元旦とでは全く違って感じられた。何が違うのかというと、たとえば空気の新鮮さが、畳のにおいが、下着の柔らかさが、街を歩く人たちの顔つきが、とにかく何もかもが新しいのだった。

当時それぞれの家庭には正月のいろいろなしきたりがあったと思うが、わが家にもあった。元旦の朝、座敷に一人一人の膳が父の席を要としてコの字型に並べられる。脚の付いた漆塗りの膳には、母が年末にずいぶん時間をかけて作ったおせち料理が並んでいる。座る位置は決まっていて、末っ子の僕は父からは遠かった。

父がおもむろに座ると、「明けましておめでとうございます」と家族揃ってあいさつをする。それから一人一人その年の抱負を述べなければならなかった。たとえば僕の場合、「照幸、10歳、今年は……をしたいと思います。……に頑張ります」といった具合である。それぞれの抱負について父がコメントする。ずいぶん緊張したものだ。だれも茶化す者はいなかった。ごくごく真面目に、当たり前のこととして行われていた。

父は怖かった。大好きだったがとにかく怖かった。だから正月に限らず父の命令や言葉は絶対であった。

その父の夢を最近よく見る。父は一昨年夏死んだが、生きてるときよりも死んでからよく夢に現れるようになった。

父が危篤だという知らせを受けたのは、金曜日の夕刻だった。翌週の月曜日からは夏季講座が始まるのでとても日本に飛ぶことはできない、そう思っていると、スタッフのみんなが僕を叱りつけるように日本へ飛べと言ってくれた。先生がいない間は何とかするから、と言うのである。でも、入学式でのあいさつができなくなる、そう言うと、ビデオに撮ってそれを流そうと提案する者がいて結局そうすることにした。僕はみんなの厚意に甘えた。どうしても生きていた父に会いたかった。

飛行機の切符は翌日の土曜日のものが手配できた。その日はそれから日本からの来訪者と会食をして、夜10時に帰宅した。その時はもう父は死んでいた。日曜日、日本の父の家に着いたときはすでに灰になっていた。

その父が、夢の中では生きていたのである。臨終の床に僕は間に合うのである。あれほど厳格な父が、弱音なんか一度だって吐いたことのない父が、夢の中では僕の顔を見て、「苦しい」というのだ。涙でどうしようもなくなった僕の「もっと教育のことについて（聞きたかった）」と言う言葉の途中で目が覚めた。じっとりと寝汗をかいていた。(続く)

教師論

その9 父(2)

僕が子どもの頃、僕の家には大勢の教師たちが頻繁に出入りしていた。父の学校の教師ばかりでなく、いろいろな学校の教師たちが来ていた。

毎晩のように彼らは父と酒を飲みながらいわゆる教育論を闘わせていた。時には、大声で歌を歌い、踊ってもいた。

言わば父の青春であって僕の青春ではないのだが、今、無性にその一コマ一コマが懐かしい。

僕が小学生の頃、今もその習慣があるのかどうかははっきりしないが、家庭訪問というものがあつた。担任の先生が、自分の受け持つ児童の家を訪ねて行って、子どものことについて親と情報交換するというものである。

僕の家は、その時期になると、僕の通っている学校の先生たちの、家庭訪問を終えて寛ぐサロンと化していた。寛ぐといっても、やはり結局は学校の話であり、自分の受け持つ子どもたちの話であり、教育の在り方を巡る議論であつた。

僕は彼らの、老いも若きもであつたが、ムンムンとした熱気が好きだつた。懸命さに幼い僕も何となく興奮した。

そんなある日のことである。僕の学校の先生たちが、僕の担任の先生も含めて、家庭訪問を終えて集まり、父が帰宅したときには、5、6人の教師が母の用意した肴をつまみながら例のごとく盛んに教育を論じていた。

父の機嫌は悪かつた。そこにいた教師たちは何となくそれを察し、どうしたんですか、と聞いた。正確には覚えていないが、父の学校で何かあつたらしく、要するに最近の教師はなっていないというものであつた。ある教師がいちいち反論を始めた。父もそれに応えた。機嫌の悪い父も酒のまわつた若い教師も次第に語気が強くなっていった。

異なつた学校の教師たちが喧嘩のように、いや立派な喧嘩だつたと思うが、教育の在り方について闘う様に、僕は怖さとともに不思議な充実感を覚えていた。

しばらくして、父はこう言つた。

「自分が若い頃、教室での授業が終わつて教員室に戻ると校長が自分の部屋に來いと言う。何だろうと行つてみると、いきなり、お前は教師として失格だと校長から怒鳴られた。どうしてですかと聞くと、さっき廊下から君が教えているところを見たが、君は窓際の陽のよく当たるところにずっと立って教えていたね。今日はかなり冷え込んでいる。教師が暖かい窓際に立っているのは寒い反対側で授業を受けている学生の気持ちはわかるまい」。

父は、「その時は恥ずかしかつたよ」と言つた。聞いていた教師たちは、その父の体験にもいろいろな感想や意見を述べた。けれども、僕はもう覚えていない。

ささやかなことのようにだが、僕にはとても大切な、いろいろなものを語ってくれるもののように思える。話の内容よりも、そのことをいつまでも覚えている父の、教師としての、あろうとする姿にである。(続く)

教師論 その 10

2月に日本に出張した。一年間に三回から四回ほど仕事で日本に飛ぶ。その他にもよく飛行機に乗るが、今まで飛行機に乗って怖いというような気がしたことはなかった。緊張感といったものが全くといっていいほどなかったのだ。

けれども今回、やや体調を崩したまま飛行機に飛び乗った僕は、機内でその体調が悪化したこともあって、いろいろなくもし>を考え、飛行機の怖さを少し感じた。<もし、……ならば><もし、……したら>という仮定は、多くの場合、ネガティブである。

そのためか、いやそうでなかったとしても最近はずいぶん涙もろくなっているのだが、日本出張旅行中に見たり聞いたりしたことに何度か涙腺が緩んだ。

東京から、国立大学日本語教育研究協議会代表理事の奥田邦男広島大学教授に会って今年の夏の学会の打合せをするために広島まで新幹線に乗ったときのことである。

いつのころからか僕は、日本に帰るたびに、富士山を見るのが楽しみの一つとなった。飛行機の上から見ることもあるし、新幹線の中から見ることもある。

今回は新幹線の窓越しに見た。あいにく頂上は雲に覆われていたが、裾野は雄大だった。ちょうどその時、僕はイヤホンで新幹線の車内番組でさだまさしというシンガー・ソングライターの語りと歌を聴いていた。「関白宣言」という歌の続編の「関白失脚」という歌のところで、ほろりとなった。中年になった男の「おれはおれなりに懸命に頑張っているんだ」というきわめて浪花節的な歌である。どうしようもなく単純な歌である。しかし、その単純さが、僕をほろりとさせた。

日本からの帰りの飛行機の中では、山田洋次監督の映画『学校Ⅱ』を見た。『学校Ⅰ』は東京の夜間中学の話だったが、『Ⅱ』は北海道の特別養護学校の話だった。

様々な精神的な障害を持った子どもたちの学校である。そこで繰り広げられる教師と生徒たちの物語は、教育現場を多少なりとも知っている僕にとっては特に目新しいものではなかった。教育の現場では多かれ少なかれ、言わば<日常>として起こっている事柄である。

しかしそのごくありふれた<日常>に、僕は涙を抑えることができなかった。富士山のときは、隣の乗客に何とかわからぬようにごまかしたつもりだが、今度も何とかわからぬようにハンカチ等で隠そうとしたが、とても抑えようがなかった。

僕の涙は何だったんだろう。

<うらやましい>と思ったんだ、きっと。<日常>、ありふれた瞬間瞬間の連続、その一コマ一コマが純粹に流れていく。レトリックや策を弄することなく、裸でぶつかり会う人間関係、いやもっと言えば、<そこにいる先生>として自分を位置づけたいと思ったのだろう。

教師として、もっと単純に。(続く)

教師論 その 11

この『濫觴』が配られる 4 月 28 日は、日本語教師養成課程 Diploma 450 の第 14 期生が入学する日である。明くる 29 日はまた、Certificate 80 第 17 期生の入学式も行われる。

日本国外での日本語教師養成としてはおそらく最大の規模であろうが（日本国内と比較しても最大級と行ってよいだろう）、わたしはこの入学式や卒業式のたびに新鮮な、そして深いところから心を揺さぶられるような感動を覚える。

入学してきた学生の、実にさまざまな、けれども等しく純粋な志望の動機を聞くとき、わたしは、わたしが<生きる>ということと同意義のものとして選択した仕事<教育>というものの責任の大きさと重さを感じるのである。

<教育>というものについて語る前に、<仕事>とはなにか、ということについてどう考えているかを少し述べてみたい。

<ヒト>が<人間>となるのは、自分以外の<ヒト>との関係に自分の<存在を意味づけ>ようとするときである。つまり、いわゆる<社会的に存在する>ときである。

その存在は、<ヒト>に<働く>ということを要求する。ただ<ヒト>としての生命を維持するためにだけでなく、<人間>としての社会的存在への貢献を求めるのである。わかりやすくいえば、みんなで生きるこの世の中になんらかの役に立つことをしてもらいたいと求めるのである。

まるで、小学校の先生の言葉のようだが、このことが実は、多くの人間には、多くの良心的人間には、きわめて苦しい問題意識として、歳を取るにつれて次第にのしかかってくるのである。

自分のしている仕事は確かに社会に対してなんらかの貢献をしているということはわかるが、<喜び>がない。震えるような<感動>がない。自分は本当に<生きている>のか。<人間>として生きているのか。ただ<ヒト>として、命をつなぐためにだけ働いているのではないか。

高度化した現代において、<生きる>という日常から発せられる呻き声は、静かに、高層ビルの陰のように冷たく大きく広がっていく。

<ヒト>としてではなく<人間>として生きたい、という叫びはそして、<仕事>とはなにかという視線を厳しく変える。

<仕事>とは一体なんだろう。

たとえば、日本語を外国人に教えようとする諸君にとって、あるいは教育という領域で生きていきたいという諸君にとって、<仕事>とはなんだろう。

まずそのことから考えてみたいと思うのだ。（続く）

教師論 その 12

湖水地方に旅したときの話である。

いつものことだが、ぼくの旅は突然出発することになる。計画など立てずに、とにかく今いる場所から離れたくなって、とにかく旅立つことがメイン・テーマだ。

だから、じっくりホテルを選んだりすることはめったにない。時には、行き先がたとえ海外であろうと、その国の空港に着いてからその日泊まるホテルをさがしたりすることだってある。

それは何も一つのスタイルとしてあえてそうしているのではなく、ただただその直前まではたして旅立つことが可能かどうかわからないからである。状況的にも気持ちの上でも。

とにかくこの4月、ぼくは湖水地方に旅立った。

湖水地方にはもう何度も旅したが、だからぼくは今回はできる限りじっと動かないでぼんやり湖や山々を眺めていたかった。

泊まったホテルは、小さかった。客室が40室しかない。だからリフト（エレベーター）なんかもちろんなかった。けれども、そのホテルに足を踏み入れたときの不思議なやすらぎは新鮮だった。

レセプションの女性は自然なほほえみで、まるでずっと前から知っている間柄のように迎えてくれた。部屋まで鞆を運んでくれたボーイも清潔な印象を与える青年だった。

窓からは湖とその向こうに赤い小さな山が見えた。まさしくたとえようのないほどの美しさだった。

夕食のテーブルではネクタイをしめジャケットを着なければならぬという窮屈さも、給仕してくれるスタッフの本当に自然な、気取らずそれでいて気品のある振る舞いにいつの間にか忘れることができた。

いま<気品>と書いたが、彼らの身に付けたものが気品であると確信したのは帰りの列車の中であった。

一泊した朝、ぼくは、隣の部屋を掃除して出てくる二人の女性従業員に部屋の前で出くわした。ぼくたちはごくごく当たり前の朝のあいさつを交わした。中年の女性は隣の部屋の掃除を終え、ドアから出ようとして立ち止まり、若いほうの女性に（女の子と言った方がいいほどの年齢だったが）、掃除用具の一つを持ってくるように言った。どうやらちょっとしたゴミでも見つけたらしい。言われたその子はこれもごく自然に、不思議にさわやかな笑顔とともに、その掃除用具を持ってきた。中年の女性は、ごく自然に、いやぼくにはものすごく楽しそうに思われたが、それを使ってきれいにするとにこにこしながら若い女性とぼくの目の前を通りすぎていった。

ぼくは、このホテルに泊まってよかった、とつくづく思った。この人たちには、自分の<仕事に対する誇り>というものが、<気品>となって身に付いている、そう思ったのだ。

あとで知ったのだが、このホテルの庭に咲き乱れる水仙があのある有名なワーズワースの詩を生んだということだ。（続く）

教師論 その 13

2月に九州の福岡に行ったときのことである。研究所の説明会をする会場はアクロス福岡である。スタッフの二人とともに会場に着いた私は、会場入口のドアにセロテープでとめてある封筒を見つけた。

封筒には次のように書かれていた。

「図師先生、研究所の皆様へ。お早うございます。ホテルのほうに TEL してみたのですが、もういらっしゃいませんでした。大変申し訳ないのですが、今日、12時30分よりレッスンが入ってしまい、お手伝いすることができません。一目お目にかかりたかったんですが。次回、来られるときにお会いできることを楽しみにしています。今日は本当にすみませんでした」

表にそのように走り書きした封筒をあけてみると、中には長い手紙が入っていた。

「……………。レッスン数はかなり多く、一日平均して5~6時間あります。慣れるまでしばらく時間がかかりそうです。今は、寝て、食べて、学校に行っている以外の時間は、ほとんどレッスンの準備をしています。父や母は、私の体のことを心配しているようですが、私はなんだかとても嬉しいのです。準備で夜遅くまで起きていると、3年前にロンドンで頑張っていたころの自分を思い出すのです。……………文法に頭をひねり、辞書と格闘しながら、夜が明けていくのを見ていると、“ああ、また、あのロンドンでの生活が戻ってきたな”とつい、ニヤッと笑ってしまうのです」

「……………Teaching というのは、先生一人一人の個性が強くてますよね。早く、私らしい授業のできる教師になれるよう努力していきたいと思っています」

説明会が始まるまでのわずかな時間に、ぼくはこの手紙を読んだ。仕事の前に会場に駆けつけて、ドアにセロテープでこの手紙を張りつけていった卒業生に、ぼくはぼくのしている仕事の、ぼくのスタッフが時には涙を流しながらしている仕事の、この上ない評価をしてもらったようで、「ありがとう」と心の中でお礼を言った。

ぼくは、彼女が夜明けまで授業の準備に打ち込む様子を思い浮かべた。そして、研究所の教室で教育実習の準備のために毎日毎日深夜まで残って頑張る学生たちを思い浮かべた。

明日の授業はどうすればうまくいくか。授業の流れはこれでいいだろうか。りんごを使うとして、レアリアにしようか、それとも絵を描こうか。スミスさん、このことばの発音、大丈夫かな。もっと楽しい展開にしないといけないなあ。

みんな確かに教師の原点を生きている。学習者の顔を一人一人目に浮かべながら、<教える>ということをめざして、時を忘れ、時には自分の体力も忘れて。

つまり、生きている、ということだ。<生きる>ということは、自分以外の人間と自分のすべてで繋がるとのことだ。

福岡の鈴木緑さんは、今日も元気だろうか。

教師論

その 14

巣立つ者たちへ

先週の金曜日には Certificate 16 期の学生が、今週の火曜日には Intern-Scholarship 8 期の研究生が、それぞれ卒業した。金曜日には Diploma 12 期の学生が卒業式を迎える。

それぞれの数字が物語るように、ずいぶん多くの卒業生を送り出したことになる。不思議なことに、すべてのクラスが独自の雰囲気をもっていて、よく似たクラスに出会ったことがない。

卒業式の日には、卒業する学生が一人一人あいさつする。ぼくはそのあいさつを出願書類の動機の欄を読みながら、また、入学式の時のあいさつを思い出しながら聴く。

椅子に腰かけながらぼくは、わずか半年や一年の間にずいぶん言葉への神経が行き届くようになるものだと感じる。

卒業生が使う言葉は隅々まで配慮されていて、清々しく、そしてまた重みも感じられる。

ああ、言葉が彼らのからだの中でその存在を主張するようになったんだなあ、とささやかな喜びを覚える。

正直に告白すれば、ぼくはいつも彼らの言葉を聴きながら、必死に涙をこらえている。もっともっと一緒に勉強したり、話をしたりしようよ、といった実に幼い感傷が襲うのだ。

送り出すぼくは、間違いなく取り残される。別れはいつも見送るほうが寂しい。

見送るぼくはまた、このわずかな期間とはいえ懸命に教育という世界で闘った者たちにいったいいかほどのものを与えることができたかと不安になり、あるいは自己嫌悪に陥ることになる。未熟な自分が突きつけられる。もっともってしてやるのがあったのではという思いは、ぼくに容赦なく襲いかかる。

巣立とうとする者たちもまたしかし、これからの道に向かって大なる武者震いをしなければならない。

君たちが挑もうとする世界は、教育の世界は、既に君たちが予感することができるように、厳しくもすばらしい感動に満ちた世界だ。

ぼくには夢がある。世界のさまざまな国で、だれのものでもない君たち自身が体内から産み出したあたたかい日本語を教えるために、そう、実習準備のときと全く同じように夜遅くまで懸命に準備する。そしてその君たちによってつくりだされた授業の一時間一時間が、確かにさまざまな国の人たちをあたたかくつないでいく。

研究所はたとえ愚直であったとしても、新たな教育の創造のために一歩ずつ歩を進める。

君たちもまた、誇りを持って歩んでほしい。誇りを持ち続ける努力を惜しむことなく。

メディアの犯罪

神戸連続殺傷事件を考える

その1

戦慄は深いところで重く、そして沈殿するような形で続いている。

今回の事件は、わが子が被害者の側だけではなく加害者の側にも立ちうるという恐怖感を、しかもかなりの現実感を伴って多くの親たちに突きつけたのではないか。

私たちの愛すべき子どもたちは今、何に苛立っているのか。

何が、子どもたちをこのような修羅の場へと追い込もうとするのか。

既に多くの学者や評論家がさまざまな分析をたとえば新聞紙上に載せている。しかしながら、どの記事を読んでも救われる気持ちにならないのはどうしてだろう。

それはおそらく、それらの分析に、あるいは報道に、自己批判の視点やいわゆる<痛み>の共有が欠けているからではないか。そしてまた、明日からの日常に何らの変化ももたらさないと予感できるからではないか。そこには空しさがある。

今私は「報道に」と書いたが、今回の事件を考えてみる際に、いわゆるメディアというものについて検証してみる必要があると強く感じている。

とはいえ、数多くの識者が述べているように、残虐なシーンの多いテレビ番組がよくないとか、ビデオをもっと規制すべきだとかそういったことで今回の事件に幕を下ろそうとは思わない。

もっともっと大きな関わりを、犯罪とも言うべき関わりをしているのは、実はあたかも世の良識を代弁するかのような大新聞をはじめとしたマス・メディアの病である。マスメディアは実はきわめて本質的な病に冒されている。

容疑者が逮捕された後、ある写真週刊誌が少年容疑者の顔写真を載せた。当然のことながら、少年法の精神をふみにじる暴挙であるが、その編集責任者は、今回の事件は少年法の範囲を超えた犯罪であると判断したため載せることにしたという。昨今の一週刊誌の編集長は法が判断を下す前に法を超えて人を裁く力を持っているらしい。

この週刊誌の編集者だけの問題ではない。この写真週刊誌を批判する新聞もテレビも同様に、恐ろしいほどに品格といったものを持ち合わせていない。誤解を招かぬために断っておくが、私は表現の自由を否定し、さまざまな規制を行うべきだなどは全く考えていない。ここで下品だと言うのは、ジャーナリズムの精神をいとも簡単に捨ててしまい、ただただ<ウケ>を狙ったまるで芸能化したメディアがチンピラのようにペンをナイフのように平気で振り回しているという現象に対してである。(続く)

メディアの犯罪

神戸連続殺傷事件を考える その2

8月30日、土曜日の深夜、『水滴』（目取真俊）を読む。日野啓三はこの作品の評のなかでこの作品の舞台となった沖縄を取り上げ、「中途半端に人工化してしまった内地」においては自然と人間の営みとが繋がらなくなってしまったという自覚さえも曖昧なものとなって、ゆえに「少年の頭部切断事件に狼狽する」と言う。今回の事件は、文学の世界で呼吸する作家たちにも少なからず衝撃を与えた。それはおそらく、彼らの作家としての創造的かつ想像的空間をいとも簡単に破壊し、しかも現実化することで示して見せたことへの衝撃である。何人かの作家たちのコメントを読んだが、いずれも事件の破壊力に対する作家としての対峙力を感じさせるものではなかった。

そのなかで、おそらく現代作家のなかで最も優れた感性を持つと思われる村上龍の「寂しい国の殺人」（『文藝春秋』9月号）には共感を覚えた。

「近代化が終わったのにだれもそのことをアナウンスしないし、個人的な価値観の創出も始まっていない、だから誰もが混乱し、目標を失って寂しい人間が増えている、オウムも、女子高生の援助交際も、子どもたちのいじめもこの国の人間たちが抱える寂しさが原因で発生したことだ」

「まともな子どもたちが大勢いることは認める。しかし、残虐で、異常性を持つ＜特殊＞な生徒と、その他の＜一般的な＞生徒の＜区別＞は無効になりつつあると思う。（略）すべての子どもたちが置かれている状況に私は危機感を持っているということだ。今わたしがこの国に生きる子どもだったら、想像力の暴走を阻止する希望を見つけるのは極めてむずかしいと思う」

村上龍の言う＜寂しさ＞こそが、現代のキー・ワードであると僕は思っている。貧しい時代の＜悲しさ＞から豊かな時代の＜寂しさ＞という変化は、本来的には人間存在そのものが発する問いであると思うが、その＜寂しさ＞がいつまでも向き合うことからごまかされ続ける限り、危機感は現実のものとなって我々に襲いかかってくるであろう。

日本社会は物質文明という価値観で十分に勝者となったにもかかわらずなお、突っ走ろうとしている。そこに＜幸せ＞などないと大人たちは十分に知りながらも子どもたちに新たな価値観を語る勇気も術も持たない。

かつて僕はメディアはそのことに気付きながらも強かに商品化の波乗りに興じているのではないかと思っていたが、メディアはそれほど賢くないのかもしれないと思うようになった。メディアは真剣に、そして実に愚かに大衆の価値観を旧来のものだととらえ、あたかも世論を代表するかのような醜い陶醉感に堕ちているのではないか。

31日、早朝、ダイアナの死を知る。蠅のように群がるメディアの殺人である。（続く）

日本語の未来

日本の新聞で言えば「朝日新聞」にあたるだろうか、英国の高級紙の一つ「ガーディアン Guardian」の教育面に「Symbols of success」という大きな見出しが踊った。

英国のデヴォン州にあるタヴィストック・カレッジ (Tavistock College in Devon) は、生徒数 1900 名の大規模な中・高等学校である。その学校の year 7 と 8 (日本の中学 1 年と 2 年にあたる) で、日本語を必修科目 (compulsory) にしたというのである。

昨年、実験的に year 7 の生徒に日本語を学習させたところ、フランス語やドイツ語といった他のヨーロッパの言語よりも人気が高かったという。他の言語習得で息詰まった子どもや失語症的な子どもが、日本語を学ぶうちに、日本語の文字の持つ写実性 (象形) に興味を持つようになり、失いつつあった自信を次第に取り戻していったという教師や生徒のコメントもある。

日本語を担当する Jane 先生は、次のようにも言う。

“It seems difficult at first, but once you start there is a definite logic to it.”

“It means you can adopt quite a scientific approach to learning Japanese.”

一般に、日本語は外国人にとって難しい言葉であると思われる。この記事の前文も以下のように言う。

Believe it or not, Japanese is nowhere near as hard to learn as it looks. Even boys like it! (lead)

しかしながら、子どもたちの感想は、大人たちの偏見をいとも簡単に乗り越える。

“I find it very hard to spell and tell the words in French, but I find Japanese is much easier. The symbols are much easier to remember.”

日本語はおもしろい。難しくなんかない。そういった活きのいい言葉が子どもたちの口からどんどん飛び出してくる。

日本語教育に取り組む私たちにとってこれはとてもとても大きなニュースだ。

つい先週のことだが、17 歳の英国人女子高校生が相談にのってほしいと訪ねてきた。英国を代表する名門私立女子高等学校 St. Paul's Girls' School の 3 年生である。

大学で日本文学を専攻したい。英国のどの大学で学ぶのがいいだろうか。日本での学習も考えているのでアドバイスしてほしいというのである。

将来はどうするのかと聞くと、まだ考えていないけれど、日本という国や日本の文学というものにとっても興味を持っているので、と言う。

前述のデヴォンの学校の副校長の言葉。

“I hope our pupils' early contact with Japanese will blossom into a lifelong interest.”

メディアの犯罪 神戸連続殺傷事件を考える その3

<誤解>に似た<曲解>ということばがある。似てはいるが、この二つのことばには大きな隔りがある。

「誤解を解く」ということばがあるように、<誤解は解くことができるが、<曲解>は解くことが難しい。<曲解>とは、「相手の言おうとすることに対し、わざと素直でない解釈をすること」（『岩波国語辞典』第4版）であり、正しい認識を最初から否定しようとする立場である。

ダイアナの死について、作家の林真理子が実に悪意の文章を書いていた（『週刊文春』9月11日号）。ダイアナの来日中に開かれたパーティーに林が招待された際の体験記であるが、パーティー会場に現れたダイアナが黄色人種である日本人の群れに入っていくのがあたかも不快であるかのような表情をしたというのである。ダイアナを一人のタレントと見る見方は日本のマスコミにおいて常識化しているが、林の文章もまた、日本人読者のそういった関心を十分に意識して実に<週刊誌的>である。ダイアナが集団の中に入っていくときは子どもの頃からためらいがちな表情をとることは彼女の幼いときからの友人が明らかにしていることであるが、もちろん林はそういったことなど知らないし、知ろうともしないし、知っていてもそうはとりたくないのだ。ぼくには林真理子という作家の、作家としての貧弱な、そして卑屈な文学的想像力を垣間見たようであらう。

救われたのは、同じ週刊誌に載っていた野坂昭如の文章である。野坂の文章には彼独特の遊びとふんだんなレトリックがあったが、しかし一人の人間の死に対するあたたかなまなざしが感じられた。同じ直木賞の作家でもこれほどまでに筆力と人間に対する、あるいは生に対する洞察力のレベルが違うのかと驚いた。

しかしながらまた、売れっ子の林真理子の文章を読んで、少なからぬ人たちがダイアナに対して、必要とは思われぬ悪意を抱くことになるのだろうと思うと、メディアの恐ろしさについて考え込んでしまうのである。

最近、朝日新聞が、「教えてください」という教育問題をテーマとした連載をやっていた。

第1回は、「校長、生徒が主役です」。生徒の要求を受け入れずに制服を復活させたある高校の校長を攻撃している。実名入りである。おそらくこの報道を読んだ多くの人たちは何とひどい校長だと思うだろうな、と危惧しながらぼくの周りの人たちに感想を聞いてみると、やはり「ひどい校長だ」と言う。しかし、よく読むとその報道が極めて片寄ったものであることがわかる。

手続きや論理性といったものを無視して、学校当局が常に悪いんだとする、暴力的メディアの無責任な恫喝である。神戸の事件はこの種のメディアには何も見えない。

学校

毎朝、娘を学校まで送っていく。およそ 15 分間の娘とのコミュニケーションはいまや僕の楽しみの一つである。

「眠い、眠い」というのが娘の口癖である。そのたびに僕は、「学校、行かなくなったっていいんだよ。お休みしたら？」と優しく言うことにしている。すると、娘はにこっと笑って、それでおしまい。その日の時間割を詳しく教えてくれる。そしてその後必ず僕の一日の予定を尋ねる。

ある朝、いつものように「眠い、眠い」の言葉を聞きながら歩いていると、向こうから犬がやってきた。

「犬は学校に行くのかなあ？」と娘に聞いてみる。

「行かないよ」と娘。

「じゃあ、どうして人間は学校に行くのかなあ？」

「大学に行かなくちゃいけないからでしょ」

「大学には行かなくちゃいけないの？」

「うん」

「じゃあ、どうして大学に行くの？」

「お仕事をするため」

「じゃあ、お仕事のために大学に行くの？ 大学に行って、お仕事して、何のために？」

「幸せになるために」

「犬は幸せになりたくないのかなあ？ 犬だって幸せになるために学校に行ったらいいのにねえ」

「犬は学校には行かないよ」

「じゃあ、犬はみんな不幸せなんだね？」

「どうかなあ」

「パパはね、犬だって幸せになりたいと思っていると思うよ。だけどきっと、自分の幸せで精一杯だと思うんだ。犬のように自分や自分の家族だけを守ろうとするだけだったら、きっと、学校に行って勉強しなくなったっていいんだよ。人間が学校に行くのはね、学校に行っているいろいろな勉強をするのはね、他の人も幸せにしたいからだとパパは思うなあ。他の人を幸せにするってことは、うれしいことだよ」

「うん」

「きっとね、花ちゃんが学校に行くのはね、たくさんの人たちを少しでも幸せにするためだよ。だから人間は偉いんだよ」

「うん」

「自分のことしか考えられないんだったら、犬と一緒にだもんね」

娘の学校が見えてきた。突然、

「あっ、有り明けの月！」

と空を見上げて娘が言う。一月ほど前に教えたこの言葉が気に入ったようだ。

人間が学ぶというのは、きっと人を愛するということなんだ、愛する力をつけるために、僕たちは学校に行く。娘とのやり取りをしながら、こんなに簡単な、しかしきわめて大切なことを僕は見つけることができた。

学校、何とすばらしい空間なんだ、そう思う。人間が人間であろうとする、人と繋がろうとする空間である。

責任

深夜、居間のソファに腰かけて、お湯で割ったウイスキーを飲みながら本を読む。最近の読書は酒と同じように僕の体内に入っていくのは確かに心を揺さぶる。一つ一つの活字が、いや文字が、言葉が、なぜか不思議に愛おしいのだ。

そんなある夜、3杯めのウイスキーを飲んでいるときである。16歳の次男が自分の部屋から出てきて、ソファに座り、突然こう聞く。

「日本はどうなるの？」

「えっ？」

「だって今、日本は大変なんですよ。BBCでも、CNNでもそう言っていたよ」

「ああ、経済的にね。大変みたいだね。パパにはよくわかんないけど、今までの日本が少し、力以上に見られていたんじゃないかなあ。錯覚ってわかるよね」

「うん。Illusion」

「日本という国も日本人も、みんな自分の力を錯覚して、努力することを忘れてたり、努力する方向を間違ってしまったんだよ、きっと」

「……」

「パパも少し疲れたから、日本に帰ってどこかの大学の先生にでもなってゆっくり暮らそうかな」

本気ではなかったが、言葉にしてしまうと胃の中のウイスキーがアルコール濃度を高めたような妙な身体の反応を感じた。

ところが、その僕の言葉を聞いた次男はすかさずこう言った。

「それはだめだよ」

「どうして？」

「だって、パパには responsibility があるでしょう？ 責任が」

「えっ？」

「たくさん学生がいるでしょう、スタッフの人たちだって、それから……」

「陽君だってね」

はっとした僕は少し茶化したが、次男は笑わなかった。

<責任>。

権利や義務といった言葉と違って、責任という言葉には法的な拘束力も何もない。そのためかずいぶん軽い使われ方もされているように僕には思える。

けれども僕は次男の顔を見ながら、この言葉に、人間が生きているということに深くかかわる、言わば凄みを感じていた。

人はだれもが生きる上で逃れることのできない大きな責任を背負っている、そう感じたのだ。

それは何だろう。

おそらくそれは、まず<生きる>という、「死ぬまでは生き続けなければならない」という責任。そして、その<生きる>ということと同義としての、他の人間と<つながる>という責任。さらに、<つながる>ということと同義としての、<愛する>という責任。

それらは決して<義務>ではなく、<責任>なのだ。

日本、ニッポン。

日本に向かう飛行機の中で、僕は汗をかいた。体が熱っぽくて、皮膚の感覚がぼおーっと蕩けそうだ。咽喉はといえば恐ろしいほど乾いていて、水を飲んでもさっぱり効かない。

風邪が本格的になってきたな、そう認めたときには、立派に風邪だった。

日本滞在中はホテル生活なのだが、窓の開かない部屋は乾燥していて、ますますのどや鼻は悪化していく。

ホテルの薬局で風邪薬を買う。当然のように胃が荒れる。

ベッドに横たわりながら新聞を読む。長野オリンピックと青少年のナイフ傷害事件。憤る。と、咳がますます出る。

昼食、明治大学の教授と立正大学の教授、それに武蔵野女子大学の名誉教授が訪ねてきてくれる。

教育論で3時間の熱弁。部屋に戻る。発熱。うとうとまどろむ。

研究所のみんなは元気だろうか。

実習生は大変だろうな。

レポートにみんなちゃんと取り組んでいるかな。

いろいろな思いが全部まとまって頭の後頭部を襲う。汗。

日本の人たちと会って話をすると、ほとんどの人たちが今日本は大変ですよ、不況ですよ、と教えてくれる。タクシーの運転手さんも、ホテルのボーイさんもみんな口をそろえてそう言う。

やっぱり大変なんだな、そう口にしながら、でもホントかなと思ってしまう。レストランには人が溢れ、高級車がひしめき、ファッションナブルなカッコいい若者が歩いている。

落語家の立川談志がブラックな笑いを咄す。

ある国の先生が子どもたちに作文の題を出す。「貧乏」という題である。

まじめな子が書く。

「僕の家は貧乏です。僕のお父さんは貧乏です。僕のお母さんは貧乏です。僕の3人のお姉さんは貧乏です。僕の8人のお手伝いさんは貧乏です。僕の家3人の運転手さんは貧乏です。僕の家2人の庭師さんは貧乏です。僕の家のコックさんは貧乏です。僕はとっても貧乏です」

日本の貧しさなんてこんなものだよ、何が貧しいものか、行こうと思えばハワイにだって行けるし、しゃぶしゃぶだって食べられるんだ、こんなの貧しいとか不況なんてことばでは表さないんだよ、他の国では。

そうなんだよな、と思う。

「ざけんなよ」という言葉があるという。その言葉の後にナイフで人を刺す行為が位置づけられる。大人たちが子どもの顔色をうかがいながら電車の隅に隠れる。

オリンピックでは日の丸をバックに感動が物語になる。

僕は僕の学生に心から言いたい。

負けるな。

君たちの真摯なまなざしをほんの少しでもこういった日本のどうしようもない愚かさには霞ませてはならない。

僕は日本という国を愛する。ゆえに、激しく悲しい。

一匹の蝶

その頃の僕はあした目が覚めれば全くの新しい一日が始まるということに何らの疑いももたなかった。夜の時間をどんなに汚（けが）そうとも、必ず眩しく清楚な朝が来て僕を許してくれると信じていた。

だから、恐ろしいほどに飲んだ。小さな焼き鳥屋のビールを友人 3 人で一本残らず飲み干し、ハシゴで行ったバーで一人一本ずつのウイスキーを空にし、それからさらにいくつかの店を飲み歩いた。

いつも何かについて激しく議論をした。酒場で出会った見ず知らずの男たちとも話し込んだりした。いつもみんな僕よりずっと年上の男たちで、若い僕を徹底的に甘やかしてくれた。ある時など、着流しを着た、明らかに真実な世界とは程遠い世界で生きている中年の男に背負って貰いながら夜の町をさまよったこともある。

周りのすべてに許されながら、しかし僕は怒っていた。

胃の中に叩きつけるような痛飲も、眠りを削りながらの彷徨も、僕の怒りを抑え込むことはできなかった。

その頃の僕はわずかな眠りの中でよく夢を見た。くり返しくり返し同じ夢を見た。

白く大きな一匹の蝶が僕を追いかけてくる。僕は必死で逃げ回る。逃げても逃げても静かに蝶は追いかけてくる。白い鱗粉（りんぷん）が雪のように降ってくる。

ただそれだけである。ただそれだけの夢がその頃の僕には怖かった。

飲んで飲んで、その白い蝶は追いかけてきた。どんなに激しく体や神経を麻痺させても静かにその蝶は現れた。

僕の怒りはその蝶からの逃避が成就しないことにあった。だから僕はますます飲まなければならなかった。眠らないように努力しなければならなかった。

当時の僕の手帳には、一文字もはや書き込む余地がないほどスケジュールが埋まっている。土曜日も日曜日も隙間を作ることが恐ろしかった。飲んでいないときは働いた。勉強をし、研究発表に明け暮れた。ある学会で発表をしたときは朝まで飲んでその足で会場に駆けつけた。何にも怖いものなんて僕にはない、どうだ、若いからといって馬鹿にしてくれるな、お前たちに負けてなんかいないぞ、徹底的に討論してみようではないか、権威が何だ、権力が何だ、僕はいつも心の中でそう吠えていた。

吠えながら震えていた。

僕が闘おうとしているのは、そういった権威や権力でないということをよく知っていたからだ。

闘わなければならないものは、蝶である。白い一匹の蝶である。静かにどこまでも追いかけてくる蝶である。

しかし、いつの頃からかその蝶が消えた。

ガリガリに痩せていた僕の体にはいつの間にか醜い脂肪がつきはじめ、偏屈で傲慢で愛敬のなかったまなざしにも不思議な油がついた。そしてそのころから僕の蝶はいなくなってしまった。酒の量は極端に減った。吠えようとして犬を真似て四つ足になってもどう吠えたらよいのかわからない。

もう一度、今度は僕が蝶を捜す旅を始めなければならない。

プライド

大阪のホテルに突然、ある国立大学の学長が訪ねてきた。同じ大学の教授たちも一緒である。

大阪で開かれた学会に参加した帰りに会いに来てくれたというわけである。僕が日本に帰ってきていることを、そしてそのスケジュールをどこからか聞いたらしい。

たまたま僕がその前のアポイントを終えてホテルの部屋に戻り、次のアポイントの準備をしていたときでよかったが、数分ずれるとわざわざ訪ねてきてもらったのに会うことができなかったかもしれない。

僕は予定を変更して彼らと夕食を共にすることにした。わずか2時間程度であったが、楽しい一時であった。その日学会発表をした教授もいて、僕はその内容についてつい突っ込んで質問したりもした。学長はかつての僕の師であり、彼の前に立つと僕はいつも必要以上に青年になってしまう。挑もうとするのだ。

図師 「先生、最近の大学生はいかがですか」

A教授 「何となく覇気がなくて……。残念ながら」

図師 「教師になりたくてなるとか、教育愛に燃えているとか……」

B教授 「そういう学生はほとんどいないですねえ」

図師 「でも4年間も大学に通っているんですからねえ、責任は先生方にもありますね。学生にとっての4年間が、教育というものとまっすぐに向き合う時間でなければ」

B教授 「耳が痛いなあ」

図師 「先生、学長自らが学生一人一人に語りかけたらどうでしょう。教育についていろいろと話してみても」

A教授 「学長はものすごく忙しいから」

図師 「他の仕事は皆さんができる限り支えて」

学長 「うん、うん」

図師 「私のところの学生は、本当に懸命に打ち込むんです。見ていると生きるということはどういうことなんだと、こっちが教えられるんです」

学長 「なるほど」

図師 「教育っていいなあ、と心から思います。人間は学ぼうとするときに、つまり自分を成長させようとするときに生きているんだと思います」

A教授 「図師先生は昔とちっとも変わってないねえ（笑い）」

図師 「死ななきゃ治らないという病気なんですよ」

学長 「僕も図師君のようなことがやりたいよ。図師君の学校に一度行ってみたいな」

全国の学会の（いい意味で）ドンと言われる学長に僕は、「ウチの学生はすごいんだ」と繰り返した。

親馬鹿という言葉があるが、きっと周囲の者たちはそういった印象を受けたに違いない。しかしいつもこうなってしまう。これが外部の人たちと話すときの僕のワンパターンである。

空回りしたっていい。本当に心からそう思っているのだから。僕の学生たちはどこの学生にも負けない、そう信じている。だからつい自慢したくなる。僕が自慢しないでだれがするのか、とさえ思ってしまう。

無論、うちの学生が完璧だとは思っていない。未熟であることは相当未熟だ。しかし、その未熟をよく認識している。そして、今できるすべてをかけて少しでも成長しようと真摯に努力している。そして何より、人間の生きる呼吸を感じるのだ。

この僕の思いはきっと関係ない者たちには鼻につく類いのものだろう。

でもいい。この思いが、僕のプライドである。僕の学生に対する思いこそが僕の誇りであり、僕がまさに生きるということであるのだから。

卒業

小学生の僕は、いつも<良い子>でありたいと思っていた。そしてまた、<良い子>になりたいと願っていた。小学校の図書館の本棚に『良い子になるには』という本を見つけて、早速借りた。そのことが同級生の知るところとなり、僕はみんなから囃（はや）された。どうして<良い子>になろうとしたらいけないのだろうか、僕にはわからなかった。ただ何となく恥ずかしさを覚えた。

けれども僕は<良い子>になりたかった。小学校からの帰り道、大きな樹があり、日差しを浴びて陰を作っている。その陰を踏みながら、この陰を出たところで、僕は<良い子>になろう、そういった、今思うと不思議な決意を、不思議な真剣さで、したものであった。

つまり、僕は自分が<良い子>ではないと自己分析していたのである。その良い子の座標軸を当時の僕はどこに引いていたのだろうか。

父も母も教育者で、極めて厳格な家庭環境であった。いつもいつも自分を分析していたような気がする。息苦しさのようなものはなかったが、そこには確かに、<ネバナラナイ>という自己規制があった。

<ネバナラナイ>、この囃きは今でも僕の耳に聞こえてくる。それを嫌ってはいないが、聞こえてくるものを次の瞬間、目の前の愛すべき者たちに囃いてはいないか、強制してはいないか、僕は最近、時々そう思うようになった。

僕は常に<卒業>を欲した。小学生のころは早く中学生になりたかった。中学生も2年生になると高校生になる日を夢見た。高校生になるや否や早くくだらぬ勉強から逃れて大学で呼吸をしたかった。「論理の通じるところに行きたい」というのが、小学生の頃からの口癖になっていた。理屈の通じない社会を嫌悪した。今自分のいる社会から逃れたかった。

<卒業>、僕はどれほどその瞬間を待ち焦がれたことか。

<良い子>でありたいと願った僕は、常に<今の自分>を分析し、否定していた。今を否定したい僕は、<卒業>するしかなかった。

しかしそれは、『良い子になるには』という本を図書館から借りて、一人の部屋で姿勢を正して読んでいる少年の世界の瘦せた想像力の所産に過ぎなかった。

<卒業>が意味するものは、たとえば跳び箱に挑むときの確かな踏み台である。息を矯（た）めて、じっとねらいを定めて、助走にその第一歩を踏み出し、一步一步に確かな力を込めて踏み台までたどり着き、助走のすべてを踏み台を踏む両足に集中させて未知の世界に飛ぼうとする。そこに必要なものは、それまでの助走に対する自信であり、誇りであり、信頼である。

そして何より、未知の世界への期待であり、希望であり、理想であり、夢であり、同じく信頼である。

私たちの研究所を巣立つ諸君、今まさに諸君は毎日の確かな助走から踏み台にたどり着き、力強い跳躍を試みんとしている。君たちは自らの助走を胸を張って誇るがいい。自信を持つがいい。打ち込んだ自分を信ずるがいい。

そして、あしたからの世界に大いなる希望を持ち、夢を語り、自らを強く信じながら生きていってほしい。

『地球が舞台』の人

長い会議が終わり、会議机が食卓に変わり、みなでお疲れ様の乾杯をしていると、電話のベルが鳴った。

電話をとったMさんが僕のところに来て、

「H先生があした日本人学校の補習校の前でピラ配りをしているか、ということなのですが」

「えっ、ピラって何？」

「母国語教室の生徒募集をしたいって言うておられるんですけど」

「だれが配るの？」

「H先生がご自分で、それにO先生も誘って一緒に考えていらっしゃるようなんですけど」

激しい会議の後であり、僕はかなりの疲労感を感じていた。しかしこの電話は僕を、僕の体中を大きく揺さぶった。

H先生には30年近くの中・高等学校における教職経験があり、その後、研究所のDiploma課程に入学され、Diploma課程修了後は研究所のインターン・スカラシップ研究生として一年間精力的な研究をされた。卒業後はEBSヨーロッパ経営大学にて講師をされるとともに、研究所の母国語教室の講師研究員として子どもたちに日本語を教えておられた。

僕はMさんに言った。

「何をしてもらってもいいよ。H先生の思われるようにしてもらいなさい」

そして、その場にいた他の所員に言った。

「完敗だね、僕は」

「どういうことですか」

「完璧に負けたということだよ。H先生はね、30年近くも教壇に立っていた先生なんだよね。その先生が、補習校の門の前でピラ配りをしようというんだよ」

僕は体の中に大きなものが蠢くのを感じていた。

「H先生はね、母国語教室の研究会の度に何とか母国語教室の生徒数を増やしたい、こんなにみんなすばらしい授業をしているのだし、みんなに認めてもらいたい、いつもそう言っていてね、頼みもしないのにいろいろな調査をしてくれてね、有難いなあ、といつも思っただけだね」

H先生が補習校の校門前でピラを配る場面を想像する。

「30年近くも学校の先生だったんだよ、補習校の若い先生の前でピラを配るって言うているんだよ、みんなわかるかい？」

先生と呼ばれる人間の不思議な傲慢さを僕はよく知っている。理屈では反発を感じながら、僕自身そういった傲慢さを体に染み込ませている。

H先生は僕などとても敵わない大きな大きなプライドを持って教育というものに打ち込んでいる。本当の教育をしようというのに恥ずかしさや表面的なプライドなんか何になる、H先生の清々しい行動は、さあ、頑張りなさい、と僕を揺さぶり続けている。

そのH先生が本を出した。『地球が舞台』。あたたかい教育愛と研究所愛にあふれた体験記である。

塹江美沙子（ほりえみさこ）、この偉大なる教育者はまだまだ動きを止めようとしなさい。

普遍的であること

スティーブン・スピルバーグの新しい作品「Saving Private Ryan」（米国）を観る。映画が始まって数十分間、観客は第2次世界大戦の激しい戦場に引き摺り込まれる。確かに画面に映っているのは人間なのだが、そのあまりの悲惨さに、そこでのたうちまわっているのは別の動物ではないかと思いたくなるほどである。

被弾して片腕を瞬時に吹き飛ばされた兵士がその片腕を捜してもう一方の手で拾い上げる様子や、内臓が露出した兵士や死にゆく兵士たちの「マーム! (mum=mother)」という叫びには、手に持ったコーラやポップコーンを二度と口にできなくさせる、恐ろしい、しかし本当にそういったことがあったのだと感じさせる迫力がある。

生と死の境をさ迷うとき人間は、人間らしさを少しずつ捨ててはならなくなる。たとえば芥川龍之介の小説『羅生門』にあるのは善と悪の葛藤ではなく、生か死かといったぎりぎりの状況の中でただただ生きがために選択する人間性喪失の黒洞々たる夜への疾走である。

そういった極限状況は大岡昇平の『野火』や武田泰淳の『ひかりごけ』等にも散見することができる。

この「Saving Private Ryan」という作品では、4人兄弟の3人までもが戦死したことを知った軍の司令官から、残りの一人・末弟を捜し出し親元に帰すようにとの命令が下る。(大国のこの種の思いやりには大いに興味を持った。)

ある部隊がその任に当たる。その兵士 Ryan を救うために激戦地を命がけで進む兵士たち。そこには当然のことながらわだかまりが生ずる。その男一人を故郷に帰すために死んでいく仲間がいるのだから。

しかし次第に、兵士たちはその Ryan を守ろうとし始める。Ryan を親元に帰すことが、ぼろぼろになった自分の人間性を唯一取り戻す拠り所でもあるかのように。

人間はやはり人間として死にたい。

映画が終わる。多くの観客が目頭に指を運ぶ。

こういった感動には普遍性がある。英国人も日本人もドイツ人も、みんな同じ涙を浮かべることだろう。つまりそれは等しく皆幸せを欲するということである。

どんな肌の色をしている人も、どんな言葉話す人も、どんな宗教をもつ人も、みんな等しく幸せになりたいと願う。

このきわめて単純なことを、我々は繰り返し繰り返し思い出さなくてはならない。

たとえば外国語としての日本語を学ぼうという人たちに我々が教えようとするものは、日本語という言葉であるとともに、日本語のもつ、人間を暖かく包み込もうとする豊かさでなければならない。日本語を学ぼうとする人たちの幸せにつながる言葉でなければならない。

ということはつまり、日本語に、人間の幸せにつながる普遍性がなければならない。僕たちの日本語という言葉の分析にはその普遍性についての座標軸がいつも引かれていなければならない。

日本語は、ゆえに試練のときを迎えている。

学校という空間

最近、深夜、毎晩のように不思議な汗をたっぷりと掻く。その汗で僕は必ず目を覚まさなくてはならない。目を覚ました僕が思うのは汗の正体ではなく、深い静寂の中に潜み、息を殺しながらじっと僕を見つめるもう一人の僕の存在だ。

数日前の夜のことである。眠ろうとした僕は、その瞬間、あの「寅さん」映画の監督の顔を思い浮かべた。しかし、どうしても彼の名前が思い出せない。「山田」まで浮かぶのだが、そこから先がなかなか思い出せないのだ。日本の映画監督の中では最も好きな監督であるはずなのに、どうしたわけか焦れば焦るほど思い出せない。その日僕は、眠る前にもじっと汗を掻いた。

3週間に及ぶ日本出張で疲れていた僕は、帰英の前日の午後、数時間だけスケジュールを空けてもらって、その日に封切られる映画「学校 3」を見に、映画館（有楽町マリオン）に出かけた。山田洋次監督の最新作である。

初日ということで、山田監督、大竹しのぶ、小林稔侍、ケーシー高峰、それから名前は知らないが映画の中で大竹しのぶの子ども役を演ずる青年の、舞台での挨拶も見ることができた。

この「学校」シリーズの第1作は夜間中学が舞台だった。昼間の中学校に通いながら複雑な家庭事情も影響して学ぶことに疑問を持ち、登校することができなくなっていたある女子生徒がその夜間中学で学ぶようになる。学ぶということや学校の意味がわかりかけてきたその女子生徒が、卒業が近くなってきたある日、「私はやはり高校に行って、大学に進み、それからこの中学校の先生として戻ってきたい」と担任の教師（西田敏行）に言うラストシーンには涙を押さえることができなかった。僕はその生徒の言葉をその夜間中学生の先生として、つまり映画の中の西田敏行になって聞いていた。教師にとってその女子生徒の言葉は他のなにものにも代えがたい、〈あなたの生き方を私もしてみたい〉という意味の勲章であるのだ。

第2作は養護学校であった。養護学校における教師と生徒たちとの格闘は無論、その場で闘った者でないとなかなかわかるものではないだろう。だから誤解を招きそうで怖い、あえて言うなら、僕は養護学校で働くあの若い教師たちに嫉妬を覚えた。彼ら教師もまた子どもたちによって生かされている。人は成長しようともがく姿が一番美しい、心からそう思う。つまり、教師たちもまた子どもたちとともに確かな生を生きているのだ。そのことに気付く教師たちは残念だがまだまだ少ない。

そしてこの最新第3作は、職業訓練校である。そこには今極めて切実な、リストラ等で職を失った大人たちが複雑な挫折感を持ちながら集まってくる。

話は大竹しのぶと小林稔侍のやや中年の苦（にが）さを感じさせる恋を軸として進むのだが、山田洋次監督が描こうとしたのは単なる恋物語ではない。それは、その職業訓練校という「学校」が持つ、社会という空間で疲れきった人間に、人間にとってかけがえの無いものが何であったのかを思い出させ、見つめさせ、いとおいしいものとして育もうとする、そういった空間の描写である。あるいは、そういった空間であってほしいという願いである。

「学校」とは本来そういうところではないのか、山田洋次はそう問いかける。

「学校」とは人間が人間として生きるということがどういうことなのかを、つまり人間にとって幸せとは何なのかを学ぶところなのではないかと、必死に、しかも静かに、そしてあたたかく語りかけてくる。

恥ずかしい話だが、映画館の窮屈なシートで僕はあふれる涙をこらえることができなかった。

僕が、もしも心の内を素直にそのまま言うことが許されるならば、命をかけて作ろうとする「学校」もそういった空間であってほしいと、震えるような思いに揺さぶられたのだ。

スクリーンで展開されるドラマに僕は、僕たちの学校を重ねながら見ていた。

握手の後で

西洋の習慣のひとつに、握手というものがある。

よく言われることだが、われわれ日本人は初めての人と会った場合、まずは警戒し、親しくなるのには時間がかかる。しかしながら一旦親しくなると、やや煩わしいほどに相手の懐（ふところ）の奥深いところにまで入っていく。

一方、西洋の人たちは、まずにこやかな微笑とともに握手を交わし、（日本人から見れば）一見親しそうな雰囲気があるところには漂う。ところが、その距離はあくまでほどほどの距離であって、時間が経ってもなかなか縮まろうとはしない。東洋と西洋のコミュニケーションのスタートのかたちはかなり異なったものなのである。

ところでこの握手であるが、よく観察してみると、右利きの人も左利きの人もまずほとんどは右手でしているようだ。左利きの人は左ですするというものではない。もっとも、自分が左利きであったとしても、相手が右利きなら右を出さなければ握手にはならない。そして今のところ右利きの人のほうが左利きの人より多数を占めているようなのである。

このことはつまり、ぼくが右の手を出して相手と握手をしようとするということが、相手に自分と同じ右の手を出すことの強要となっているということでもある。これはずいぶん面白いこととしてぼくには感じられる。

握手という習慣（あるいは文化）はつまり、相手と向かい合って、相手に自分と同じ立場をとるよう強要することなのである。視点を変えれば、相手と同じ立場で自分もまた向かい合っているということを示しているのである。心配しなくても私はあなたに危害を与えるような武器はほらご覧のように手に持っていないし、あなたと同じ立場で向き合っているのですよ、といったことの意志表示でもある。

そして、その握手は極めて静的な行為であるともいえる。握手をしているときにはじっと相手と見詰め合うしかない。握手をしたまま動こうとすると、くるくると二人してその場で回転しなければならなくなる。ダンスでもするように。

つまり、握手はその場で見詰め合ったり、ダンスをしたりして時間をつぶすには適しているが、一緒にどこかに移動しようとするには都合が悪い。一旦握手は解除されなければならない。もし握手の後でも手をつなぎ、たとえば仲良くひとつの方向に向かって進んでいこうとするなら、ぼくが右の手を出すときには相手は左の手を出さなくてはならなくなる。今度は握手の場合と反対で、必ず異なったほうの手をつながなければならない。

人間のコミュニケーションのあり方も実は、握手（相手と向き合うこと）からはじまり、その後でその握手した手をもう一方の手におきかえるときにはじめて前向きになる。相手に求めるものが自分と同じ種類のものだけでは、向かい合ってお互いを確かめ合ったり味わったりすることはできるが、ともに何かに向かって進むことはできない。前に進むとすれば、相手の、自分とは異なった個性と手をつながなければならない。

幸せを見つけながら

1

朝、14歳の娘は必ず僕のところに走ってきて、キスをして、行ってきます、と言い、それから、迎えに来たフローレンスという友達と家を出ていく。そのとき僕が髭を剃っていたりすると、シェービング・フォームが口の周りについているので、娘のキスは省略される。僕はなんだか大変な損をしたような気がしながら、研究所へと向かう地下鉄の中でそのことを思い出したりする。

2

リージェンツ・パークの入り口あたりで、研究所の学生が急ぎ足でキャンパスに向かっていく。僕もつられて急ぎ足になるが、到底追いつかない。あの学生は遅刻しないかな、間に合うかな、と少し心配する。春の訪れを確かに告げるように、水仙が芝生の間に顔を見せている。足を止めて、軽く深呼吸する。

3

休み時間、学生の間を縫うように教員室に向かう。途中、学生たちと「おはよう」や「こんにちは」を交換する。廊下にはたくさんのあいさつがあふれている。みんな笑顔で、しかも充実したまなざしを向けてくる。

4

講義を終えて部屋に戻ると、入れたばかりのお茶が待っている。

5

「先生、もう帰るの？」と明日の教育実習の準備の為に教室に残っている学生が言う。「私たちと一緒にもう少し残ってくださいよ」とも笑いながら言う。ケチャップのついたポテトを頬張りながらそうおどけて言う学生たちは深夜になっても輝いている。

6

日本に行って大学で日本語の勉強をしてきましたが、この研究所の日本語の教え方が一番いいですよ、と日本から帰ってきてまた研究所で学び始めた英国人が言う。

7

日本から送ってきた書籍の間に、梅干が入っている。

8

深夜、コンピューターに向かって仕事をしていると、体を壊すから早く寝なきゃだめだよ、と自分も起きて勉強している次男が僕に忠告する。

9

私が作ったんです、少しですけど、と学生がおむすびを持ってきてくれる。スタッフで分けて食べる。

幸せというものが、もしも青い色を持っているとするなら、僕はおそらく青の世界で呼吸をしている。幸せというものが、もしもかすかな花の香りを持っているならば、僕はその香りに満たされている。幸せは自ら作っていくものではあるが、静かに周りを見渡すと、たくさんの幸せの中に自分がいることが分かる。幸せはまた、見つけていくものなのだ。

ぼくたちの明日

早朝の 4 時前に起きたぼくはベッドの中で伸びをする。シャワーを浴びて、それから朝の空気を吸う。ここ一年ばかり前から時々襲ってくる胃の痛みが、朝の空気がしみたせいかな、やや鋭い。

ぼくの頭はすぐに働き始めて、いや正確に言えば、眠っているときも考えていたような連続性のある思考の疲れがあるのだが、とにかく数多くのことが襲いかかってくる。

日本語の文法のこと、今年の夏の学会について、巣立っていく学生たちともっと触れ合うことができたならよかったのだがという申し訳ない気持ち、新しい講師を含む講師陣のこと、今日からフランスに行って一週間ほど勉強してくるという次男のこと、児童英語教育のセミナーがうまくいかなあという不安、などなど。

朝ぼくに襲いかかるのはそのほとんどが不安や心配事である。

少し、つらい。

不思議なほど毎日正確に生えてくる髭を剃りながら（髪の毛もこんなに誠実に生えてくれればよいのだけれど）、ガンバルノダ、などと口に出してみる。

万歩計をズボンのベルトに差し込んで地下鉄の駅まで歩く。近所の小学校に登校する子どもたちといつものようにすれ違う。

車で送ってきたダディやマミィと別れ際にキスをする子どもたち。学校に走りこむ子ども。その子どもを見守る親たち。

この風景には確かな明日がある。明日が必ずやってくることを信じて疑わない子どもたちの、実に平和なまなざしがある。

ぼくはそういった子どもたちの豊かさを吸い込みながら、地下の駅にもぐりこむ。

そしてもう一度地上に顔を出すとき、ぼくはもう子どもたちに負けない明日を持っている。

ぼくの明日！

ぼくの明日は、ぼくたちの明日との言い換えが可能である。

ぼくの毎日は、はっきり感覚できるほどに向き合う学生やスタッフの仲間、友人、家族、そういった者たちとの関わりの中で間違いなく過ぎていく。

だから、ぼくの呼吸は多くの仲間たちの呼吸を無視しては成立しない。

教育の二文字に関わるぼくは、この二文字を共有する仲間たちといたいどんな明日を迎えようか。どんな明日を夢見ようか。

まずなによりその二文字が、人間の幸せに関わるものでなければならない。

ぼくたちはそのことをぼくたちのキャンパスで自ら努力することで感得することができた。

これから巣立つ者たちを前にぼくは、このすばらしい仲間たちとの大いなる明日という夢を見ている。

新しい権威

1.

勧められて、えたいの知れないワインを飲む。まずい。マスターに聞くと、出来立てのワインだと言う。なるほど、と思う。

どうしても会って欲しいと言うので、気のすすまぬ人と会う。会っている間はそれでも真摯に向かい合う。激しい疲労感が襲う。

後味の悪さでもいうのだろうか、そういった夜はなかなか寝つけず、しかも早々と目が覚めていっそう虚しさがつ

のる。
いずれも身から出た錆である。それはよくわかっているのだが、蟻地獄のごとくなかなか抜け出すことができない。僕の価値観の中にそういった時間や嗜好を完全には打ち消し得ぬ何かがある。

2.

どの世界にも権威と言われる人たちがいる。

それぞれの世界で功成り名を遂げた人たちである。

しかも、多くの場合それらの人たちはそれぞれの世界における政治力も持ち合わせている。

さらに、その政治力をどのように使ったらより効果的かについても熟知し、秀でている。

そして悲しいことに、それらの権威と呼ばれる人たちの中にはそういった政治力の行使によってもっぱら晩年を送る人たちもいる。

権威に手の届かぬ者たちは、手っ取り早い成功の方法としてそれらの権威（の政治力）を利用しようとする。

それは一種の＜商い＞である。

けれども権威にはその言葉の響きはそぐわない。

そぐわないが権威によって生活を始めた者は実は極めてその＜商い＞に積極的でもある。

その権威を利用しようとする者たちは、これは＜商い＞ではないと表向きは説明し権威のプライドを傷つけないように配慮しながらも、最大限にその政治力を利用しようとする。しかし、もしもその権威に政治力がないとわかると潮がひくように遠ざかっていく。

権威のほうは何とかその政治力を示そうと躍起になるが、そうすればそうするほどその権威は失墜し始めることになる。

その後味の悪さは、例えようのないものである。

3.

野球選手がこう言ったそうだ、昨日のホームランで今日の試合に勝つことはできない、と。

4.

もはや既成の権威には魅力を感じない。十分過ぎるほどその権威の表と裏を見た今、僕たちは自らの新しい権威を産み出すために、できうる限り爽やかに歩んでいこうと思う。

もう一度

小学生だった頃、ぼくは作文に「先生になりたい」と書いた。
父も母も教育者だった。通っていた小学校の校長先生は伯父だった。
家には大勢の、そしてさまざまな学校の先生たちがやってきた。
ぼくはその人たちが好きだった。
彼らのする話は面白かった。
彼らの話の中にはいろいろな生徒たちの名前が出てきた。
むろん誰一人としてその生徒たちにぼくは会ったことはなかったが、まるであたかも知っているかのような錯覚を覚えた。
それほど、彼らの話には臨場感があった。
彼らは自分が教えている生徒たちのことを話しながら酒を飲んだ。
ときに笑い、ときに深刻に考え込んだ。
激しい怒りを口にする教師もいた。
父はいつもそういった彼らの中心にいた。
父もまた、笑い、目に涙を浮かべ、そして怒った。
殴り合いになるようなことさえあった。
ああ、この人たちはどうしてこんなに激しいんだ、とぼくは大人の迫力に怖ささえ感じた。
我が家で繰り広げられる勉強会とも研究会ともとれるような、しかし不思議な熱気にあふれた連夜の宴会は子どもの頃のぼくの懐かしい風景である。
そういった彼らに対して父が繰り返し言っていた言葉がある。
なかなかまじめな生活を送ることができないいわゆる問題児について（こういった子どものほうが当然と言えば当然であるが話題に上るのである）、父は若い教師たちに言った。
「もういっぺん、信じてやることだよ」
「もう一回、話を聞いてやるんだよ」
「もう一度」
だれよりも激しい怒りに震えていた父はしかし、そう言うのだった。
その頃のぼくには、よくわからなかった。
繰り返し繰り返し裏切る生徒をもう一度信じてやれ、というのである。
父はまさに 24 時間教育に打ち込む男だった。
たまの休みには、早朝から釣りに出かけた。
母の申し出で、ぼくも連れて行ってもらえることがあった。
一日中釣り糸をたらしながら父は、ぼくに話しかけることはなかった。
黙って繰り返し繰り返し餌をつけてはさおをしならせた。
ぼくたち人間が生きているということはつまり、相手を信じるということではないか、父が静かに若い教師に言った言葉をぼくはぼくに父から言って欲しかった、もしもぼくがそのとき大人であったなら。
そして、教育の基本は、この「もう一度、信じよう」とする姿勢にあるようにようやくぼくにも思えるようになってきたのである。

知らない自分まだある

昨年 12 月 9 日の朝日新聞にサッカーのスター選手である三浦知良さんのインタビュー記事が載っていた。

恥ずかしいことに、ぼくはサッカーのルールについてはまったく知らない。ぼくの子どもの頃のスポーツと言えば野球だった。

だから、何年か前、日本サッカー協会の役員の方に招いていただいて、ウェンブリー・スタジアムで日本と英国のナショナルチームの試合を見たときは、とんでもないところで喜んだりして周りから笑われ、居心地が悪かった。

そんなサッカー音痴のぼくでも三浦さんの名前は知っていた。

屈辱的経験から立ち直るということは凡人にとっても大変なことであるが、三浦さんのようなスター選手にとってはより一層の苦しみがある。

W杯でメンバーからはずされた三浦さんはしかし、「自分がやってきた結果だから、すべてを受け入れた。そうすることで自信を持ちつづけられたし、ポジティブな気持ちで前に進んでこられた」と言う。

そして、その不屈の精神の原動力として、「自分の知らない自分がまだあるんじゃないか、という気がする」「ぼくはまだサッカーがうまくなれると思っている。今の自分より、何かが良くなるんじゃないかって」と言うのである。

「自分の知らない自分」。その未知の自分を探し求める旅が生きているということではないかと三浦さんは言うのである。

そして、「みんながイメージするカズは、ドリブルでも二人でも三人でも抜ける、点も入れる、センタリングもする。でもそういうことはもうできない」「気づいてみると年齢は三十を超えている。悲しい現実だね、それは」と語りながら、でも、「ぼくはまだサッカーがうまくなれる」と言うのである。

三浦さんによって、サッカーの世界が豊かなものに思えてくる。スポーツの世界が大きなものに思えてくる。

そして、なんとすばらしい言葉ではないかと思う、「知らない自分がまだある」とは。

今の自分で諦めてはならない、それは自分に対して失礼だ、自分の中の未知の可能性を信じて、それとの出会いを信じて努力していこう。

ぼくたちはまだまだ人間としてうまくなることができるのだ。

みうら・かずよし

1967年静岡県生まれ。高校一年のとき、プロサッカー選手を目指して単身ブラジルへ渡る。

1986年サントスFCにてプロデビュー。

1990年帰国。日本リーグ一部の読売SC（現ヴェルディ川崎）に入団。

1993年チーム優勝。最優秀選手賞獲得。

1994年イタリアプロ1部リーグのジェノアに移籍。

1995年から98年までは再び川崎でプレー。96年にはJリーグ得点王。

1999年1月にクロアチア・ザグレブに移る。8月に京都パープルサンガに入る。

1990年から日本代表に選ばれる。

1998年のW杯フランス大会では、最終合宿でメンバーからはずされる。

1999年、日本代表候補に復帰。

学習する力

日本から帰ったばかりのぼくは、おそらく日本でもらってきたのだろうが、体が熱っぽく、いわゆる風邪を引いてしまったようだ。

日本出張は、いつもそうなのだが、かなりハードなスケジュールだった。東京に入り、札幌、東京、福岡、大阪、長崎、広島、東京、名古屋、東京と日本全国を飛行機や新幹線で飛びまわった。

研究所の講座の説明会や公開講義、あるいは国際教育についての教育講演といった仕事に加え、さまざまな大学の教授たちとの会議等で一時間刻みのアポイントラッシュであった。次の約束の教授をロビーで待たせ、今会っている教授との会議が終わると同時に紹介したりと、数珠繋ぎの毎日だった。

深夜、ホテルの部屋に戻ると、たくさんはいつている fax や E-mail、それにボイス・メールの処理に追われる。

深夜でないとはぼくがつかまらぬと知って、11時や12時に電話をかけてくる者もいる。

そういった多忙な時間も、研究所を離れているため、日常とは異なった時間であることには違いない。日常を離れてみないとよく見えないことは確かにある。

名古屋での話である。名古屋の国際センターでの講座説明会には50名を越す人たちがやってきてくれた。20~30名だろうと予想していたぼくたちは慌てた。準備は当然忙しくなる。いつもはぼくは公開講義の準備に専念するのだが、その時はみんな忙しそうだったので展示等を手伝った。あのブルータックというものを使って英国の旗を壁に貼ろうとした。

公開講義中に壁に貼られたいろいろな展示物が落ちてくることがあったので、ブルータックは多めに使うよう指示しておいたが、自分で貼っていくうち、何箇所にもブルータックを使ってもしばらくするとはがれてくる現象に出くわした。

どうしてだろうと確かめてみて、わかった。

ブルータックの粘りが消えているのだ。何度も使ううちに壁のさまざまなゴミやほこり、その他のものをとりこんでしまい、本来の粘着力を劣化させていたのである。手でよく揉んだり、あるいは新しいものと代えてもらったりしてぼくは何とかその作業を済ませた。

もしもぼくが自分でその作業を試みなかったら、ぼくにはおそらくそういったことはわからなかったに違いない。そうか、そうなのだ、とぼくは一人頷いた。

3月号の月刊『文藝春秋』において、永六輔が「風にあたった人と、風が吹いたことを知識として知っている人には差があります」と言っている。「60年安保」に関する発言である。

「安保」については、今回の出張中に酒を飲みながら何度か話題になり、話題にした。当時青春を送った人たちにとって、「安保」は肌が覚えている体験である。

われわれは大小さまざまな経験や体験を積み重ねて生きている。その一つ一つから多くのことを学ぶことができるのだが、全く同じ経験をして、すべての人が等しく同じことを学ぶわけではない。

経験から学ぶためには力が要る。学習するための力が要るのである。いまこれを学習力と呼ぶことにしよう。学力は学習した結果獲得された力であり、学習力は学習するために備えられた力である。つまり、学習力がなければ学力はつかない。

ならば、学習力とは何か。おそらく二つの成分からなるものであろう。一つは知識等の学力である。もう一つは、学ぼうという意欲や、学ぶ際の謙虚さである。成長しようという素直な向上心と言ってもよい。

粘着力を失ったブルータックをいくらたくさんくっつけても貼り物は落ちるだろう。ヘルメットをかぶり、角材を振り回した経験もそのまま封印される体験となることだってある。

風を感じる力が必要なのである。

思い出と

次男の陽（よう）は17歳である。身長は190センチに届かんとする。ひょろっと瘠せている。

心優しい彼は、家の中に飛び込んできた虫をそっと本の上に乗せて窓から外へ逃がしてやる。雑誌で打ち落とそうとすると本気になって怒る、「かわいそうじゃないか」と。

キングス・クロス駅でケンブリッジ行きの列車を一緒に待っていると、そこにホームレスの男が近づいてきた。

「20ペンスを持っていないか」

「いや、ない」

今度は、陽に向かって尋ねる。

「20ペンスを持っていないかね」

「えっ、ああ、多分持っていると思う、ちょっと待って」

といいながら、財布の中を捜す。彼がその男に渡したのは1ポンド硬貨だった。男は驚き、陽に握手を求め、名を聞いた。

男がその場を去り、ぼくは陽に尋ねた。

「どうして1ポンドをあげたの」

「20ペンスがなかったから」

「そうか」

そう言えば、かつてこんなことがあった。10年近く前のことである。日本から訪ねてきた教え子をつれてソーホーの中華街に出かけた。食事を終えてレストランを出たところにホームレスの男が立ちはだかった。

「小銭を持っていないか」

「いや、ない」

すると、3人の子どもたちがそろって自分の小銭入れからコインを差し出した。

家に帰り、ぼくは子どもたちに言った。

「自分で努力して作ったお金でもないのに恵んでやって良いことをしたつもりになってはいけない。恵んでやりたくても自分にはまだまだ力がないと思わなければ」

陽にとっていまだにその状況は変わらない。まだまだ学生の身分の陽は、ぼくのすねをかじっている。

しかし、ぼくはもう忠告はしない。10年前のぼくの考え方が間違っていたとは思わないが、陽の優しさにも筋金が入っていた。

ぼくははっとしたのだ。ぼくの言ったことは論理にすぎない。そしてそれはおそらく論理的には正しいだろう。しかし、ぼくたちは論理を主食にして生きているのではない。

その陽が数ヶ月前からギターを始めた。全くの独学で少しずつうまくなっている。自分で書いた詩に曲をつけて、歌っている。ボブ・ディランが好きで、おそらくボブ・ディランにでもなったつもりなのだろう、同時にハーモニカをくわえたりもする。

彼のいないとき、彼の部屋に残されたギターに触る。アルペジオで音を出してみる。指が痛い。ぼくも大学生時代にギターに触れたことがある。自分の詩や中原中也や立原道造の詩に曲をつけて歌った。

右左と交互に足を動かして前に歩みつづけるぼくはしかし、歩むために歩んでいるのではない。かつて犀星や白秋、道造や辰雄がいた軽井沢や追分を詩を誦んじながら歩きまわったぼくは、もう一度背伸びをして、たくさんの空気を吸い込み、大地の鼓動を聞いてみたいと思う。

青春はまだ手放してはいないのだから。

死ぬということ

庭の枝垂桜の下でぼくは、人間が死ぬということについて考えていた。

見事な桜の花の下で、親族は記念写真を取っている。

義父の葬式が滞りなく終わり、誰ともなく桜の花の下に集まってきたのである。

ぼくはその桜の美しさにことばなく驚嘆した。

今まで見た桜の中で、これほどまでに美しい桜はなかったように思えた。

義父の葬式はまるで方程式に放り込まれた数字のように機械的に処理されて、そして終わった。

その夜、ぼくは骨と化して小さな箱に納まった義父とともにまんじりもしないであくる朝を迎えた。

その義父が逝去する 10 日ぐらい前、ぼくは英国から日本のその病室に電話をかけた。

電話口で義父は言った。

「凶師君、わしは懸命に生きたよ、本当に一生懸命に生きたよ」

それが義父がぼくに言った最後のことばである。

しばらくして彼は意識を失う。

それからは、いわゆる医学の力によって「生かされる」ことになる。

義母や義弟、そして妻たちはなすすべもなくただ病床の義父のそばで彼を見守るのである。

ぼくもまた、ぼくの父や母が死んだとき、ともに命を削っているような思いで病院に詰めたことがある。

意識がなくなり、病室に備えられた機械がひとり、彼のかすかな命の存在を証明する。

そこにいる者たちはいったい何を待っているのだろうか。

回復の見込みのない命は、科学の力によってか細く、しかし確かに生かされ続ける。

そこにいる者たちが待ち続けるのは、横たわる者の死ではないか、ぼくははっと気づくのだ。

その時が来ると誰もが泣き崩れるのであるが、しかし、その時を待ち続けたのも彼ら自身である。

ぼくにはそのことがひどく悲しいことに思える。

愛する者と別れたくないという思いの純粹さに対して、科学の力はその別れの瞬間を延期してくれる。

一秒でも長く生きてほしい、そう願う気持ちがそこで叶えられる。

しかしながら、その一秒は一日や一週間となって、当初願った一秒の生とは異なった生が突きつけられる。

そして、次第に待つようになる。

その死の瞬間を。

無論、それは意識されることはないが、心のどこかにそういった思いがあったことに、ぼくたちはたとえば葬式の機械的なプロセスを通して思い至るのではないか。

それは本当にひどく悲しい邂逅である。

かつては、つまり医学がそれほど発達していないころ、人はもっと自然に死んでいった。

何とか一秒でも長く生かすことはできないものか、生きてほしい、そう思う気持ちに包まれながら、人は死んでいった。

ぼくたちは文明の進歩とともに、複雑な感情や感性を要求され突きつけられるようになっている。

このことをぼくたちはしっかりと認識していなくてはならない。

ぼくたちはもはや、人の生き死にといった極めて原初的なことに対しても不思議で不可解な状況に追い込まれ、それらに対応することを要求されるようになっているのである。

桜の花はしかし、いつものように散ろうとしている。

ぼくたちの挑戦

ぼくは、すぐに酔ってしまう。

たとえば、である。

ひとりの青年が突然来訪する。

大学卒業後およそ 7 年間、北海道の高校で国語教師をしていたその青年は、行詰りを感じて大学院に進学する。大学院を修了し、ロンドンにやってくる英語を学びながら、教育について彼は考えを深める。

彼はこう言う、

「私は申し訳なかったと思うんです、当時の生徒たちに。当時、私には力がなかった、だから逃げ出した」と。

そして、続ける。

「日本に帰ってもう一度教師になります。そして頑張ってみたいと思います」と。

読んでもらおうと思って手紙を書いてきました、と彼はぼくに一通の封書を手渡した。

彼と別れてぼくはその手紙を読んだ。

丁寧な手書きの文字でぎっしり書き込まれたその手紙を読みながら、ぼくは体に熱を感じた。

教育に対する真摯な、そして清々しい情熱がそこにはあった。

そしてまた、たとえば、である。

日本の大学の教師をしている男が e-mail をよこす。

「ぼくは教師として失格なのではないか、そう思ったりするんです」。

あえぎ、苦しみ、もがく。

大学の教師として懸命に学生と向かい合う彼はしかし、教育者としての自分を誰よりも厳しく見つめようとする。

昨日彼から届いたばかりのメールには、ナスとピーマンとインゲンと枝豆、そして大根を植えました、とあった。

自分をいろいろな角度から見つめながら磨いていこうとしている。

さらにまた、たとえば、である。

ぼくの詩を読んでください、と現役の学生が訪れる。

時間を見つけて、何篇かの詩をぼくは丁寧に読む。

その学生を呼んで、いくつか指導する。

学生は一つ一つをそのまま、砂地に水が染み込むように聞く。

しばらくしてまた、やって来る。

書き直された詩と新しい詩。

あれっ、これは、という顔をすると、先生の詩を参考にしました、と恥ずかしそうに言う。

彼のまなざしは清々しく澄んでいる。

最後に、たとえば、である。

卒業して日本に帰るある学生と約束した。

彼女の涙ながらの決意の話を聞いたぼくは、まず支えてくれた人たちに感謝することから始めることだ、と言った。

日本に帰った彼女から手紙が届く。

「日本に帰って、父親と母親に約束通りきちんとお礼を言いました。けれども、まだまだ足りません。どうしたら私を愛してくれ、支えてくれる親に報いることができるか、今そう考えています」

ぼくは、すぐに酔ってしまう。

弱い人間が少しずつ強くなろうとする。

しかもその求めようとする強さは、ただただ自己本位のわがままなものではない。

そのあたたかく清々しい思いにぼくは、どうしようもなく酔ってしまい、彼らと一緒にもう一步、明日を信じて挑戦してみようと思うのである。

手前味噌

総選挙が終わった。どの政党が「勝った」といえるのかはっきりしない、つまり極めて日本的な結論が下されたように思うが、その選挙戦において今回も、教育問題が争点の一つとなっていた。

青少年のさまざまな犯罪や学級崩壊や学校崩壊といわれる教育現場の状況が取り上げられ、このままではいけないという国民の思いに訴えようという選挙対策としての戦略である。

教育基本法を改定しようという動きもあり、確かに今までの取り組みとは違ってやや具体的な展開が予想される。

しかしながら、何か肝心な点が欠けているように思う。

5月から6月にかけてぼくは日本に出張した。3週間ほど滞在したが、その間に東京と福岡で講演をした。2002年に改訂実施される新学習指導要領によって始まる総合的な学習の時間、その柱の一つである国際理解教育についてぼくは話した。聴衆はほとんどが現場の教師たちである。

会場の一人一人の顔を見ながらぼくは話したのだが、なかにはこういった表情の人が子どもたちに向かい合う教師なのかといった実に生気のない人たちがいた。

ぼくは思わず言った。先生である皆さん自身が変わらなければ、教育は変わらないのです、そのための勇気が皆さんには必要です、と。

さまざまな教育改革のアイデアが出されても、面倒くさそうに、なにかの処理でもするかのように教育に向き合っていく教師たちがいたのでは、子どもたちにとって豊かな状況など生まれるはずはない。

親は確かにもはや親ではなく、まわりを見渡せば子どもと何らかわりのない歳をとっただけの未熟な大人たちが行き来していて、こんな状況で子どもたちにまともに育てというほうが無理だとは確かに思うけれども、それでもしかし教師はプロフェッショナルでなくてはならない。

教師が変わることで、子どもたちはかなり変わり得るとぼくはそう信じている。

夢を語る教師、理想に向かっていく教師、その教師たちのまなざしに触れる子どもたちは人間がいきるといことの意味を体感するに違いないのだ。

そのことを実は、ぼくは研究所の学生である君たちから学んだ。

君たちの研究や実習に打ち込む姿は本当に尊いと思う。

明日の実習のために寝ないで準備をしていく君たちを見てみると、人間はこんなにも一つのことを懸命になることができるのだと思う。

しかも、いくらだって手を抜くことはできるのだ。

こうすればあの学習者は喜んでくれるだろうか、この方法でわかってくれるだろうか、やっぱりこのほうがいいのか、などと考えられる限りのことを一つ一つ克服していこうとする君たちの姿は、本当にすばらしい。

もしも君たちが、日本語教師というだけでなく学校の教師であつたらどんなに子どもたちは幸せだろう、ぼくはついそう思ってしまう。

君たちの教育にかける情熱が活かせる場を何とか広げていかなければと心からそう思う。

こういうことを手前味噌というのだが、そう言われて結構、ぼくは君たちのまなざしや取り組む姿勢に自信を持っている。

こんなにもすばらしい者たちがまずはことばの教育から豊かな世界を創り出そうとしているぞ、とぼくはもっともつと大きな声で言いつづけなければならない。

オリンピック

もうすぐ、シドニーオリンピックである。

オリンピックの思い出といえば、やはりなんと言っても東京オリンピックだ。

いや、東京オリンピックで僕のオリンピックに対する関心はほぼ終わったとっていい。

そこにはバレーボールの東洋の魔女がいて、重量挙げの三宅兄弟がいた。日本選手の体操における活躍も、そして柔道のヘーシングの恐ろしいほどの強さもすべてが昨日のこつことのようによみがえる。

しかし、東京オリンピックにはもうひとつ忘れられない重い思い出がある。

マラソンである。

マラソンという競技はオリンピックの中でも最も注目を集める競技のひとつであるが、東京オリンピックでも、あの裸足の王者アベベがいた。東京では靴をはいて走ったが、その哲人のような走りは歓声を送るその声を沈黙に変える静かな怒りさえ感じさせる迫力があつた。

そんな中で円谷幸吉は、日本中の期待を背負いながらスタジアムに姿をあらわし、見事銅メダルを獲得する。

歓喜する日本の応援団を背に、まもなくして彼は、銃を使って自殺する。「もう走れない、申し訳ない」という遺書を残して。

彼は明らかに「日本」という国のために走った。

そこにはある種の美学があつた。

と同時に、切ない悲劇があつたのだ。

円谷とともに東京オリンピックで走った選手には寺沢や君原がいた。

君原健二。

いつも彼は苦しそうに首を振りながら走った。

見ていると今にも立ち止まりそうなのだが、いつもきちんと完走するのである。

東京に続くメキシコ大会で銀メダルを獲得した彼には、有名な逸話が残っている。

銀メダルを獲得したその夜、君原はメダルの返上を申し出る。

レース中に腹痛のためトイレに駆け込んだ自分にはメダルを受け取る資格がないというのである。

ルールを犯しているわけでは無論ないが、君原のマラソンの美学として、その走りは美しくないというのである。

マラソンはそのプロセスこそが命であると考えた彼にとって、銀メダルはむしろ重荷であつた。

君原は出場したすべてのマラソンで完走している、たとえ順位が下位となつても。

君原は言う、「練習場はアトリエ、レースは展覧会場、ランナーは芸術作品」と。

さて、われわれの教育の世界、君原流の美学はあるか。

アトリエに充滿する絵の具のにおい、それと等しく教材分析や授業の準備に汗する姿があるか。

展覧会場に漂う期待感、学習者と教師との出会いの場である教室に張りつめているか。

芸術作品としての完成度を教師やその授業は志向しているか。

「教材研究や授業準備がアトリエ、教室は展覧会場、教師や授業は芸術作品」、そう言いたいものである。

ことばの責任

ぼくが子どもの頃は、日本という敗戦国が国づくりにもう一度大変な努力をしている頃であった。その頃、ぼくたちはアメリカという国を強く意識した。学校では教師たちがアメリカという国のすばらしさを教えてくれた。外国はすなわちアメリカであった。ぼくたちは数多くの偉人たちの中からアメリカのリンカーンやまだ生きていたケネディを読んだ。アメリカのお菓子はなぜかおいしかった。アメリカについてさまざまな自主研究が課せられた。友達が発表するアメリカはどれもこれもがすばらしかった。教師は言った、「アメリカ人は、思ったことをはっきりと発言する。言いたいことは遠慮しないではっきりと言うのがこれからの人間に求められている」と。学級会では、はきはきとした発言が評価された。そして、カッコよかった。みんなどんどん発言するようになった。日本語教育に従事している今、日本語には含みというものがあるとか、言外の言というものがあるとかと学んでいるが、そういった日本語の形が少しずつ変わってきているように思う。今までの日本語ではなかなか言えなかったことが、あるいは言い方が、ためらいなく言われるようになってきているような気がする。男は女に「愛している」とはなかなか言えなかった。だからといって愛していなかったわけではない。むしろ昨今のように「愛している」と気軽に言う形よりももっと愛していたのではないか、そんな気もする。こんなことを書くと、おじさん扱いをされそうだが、正直に言ってそう思うのだ。「愛してる？」と聞かれて、「馬鹿だなあ」としか言えない男は、「愛している」ということばでは表せぬ思いを、表しきれぬ思いを、持っていたりするのだ。それでもなお、「愛している」ということばを聞きたいという思いは確かにあるだろう。それはそれでいい。いいのだが、そういったなんとも表しにくい思いとことばとの関係については知っていてもいいと思う。日本人はかなり変わったと思う。ことばとの関係が最も変わったのではないかと思う。つまり、日本人の精神性や文化の根幹に座る価値観が大きく変わってしまった。平気で他人の攻撃をする。友達同士でも公的にでもである。確かであるかどうかかわからないうちに、つまりいいかげんな情報で気安くことばによる攻撃をしてしまう。新聞や雑誌、テレビやラジオ等のメディアに関わる者たちの無責任な報道姿勢はほとんど狂気といってい。それが間違っていると指摘されると、そんなつもりではなかったと逃げようとする。発言の自由や報道の自由は守られなければならないが、それと等しく、発言したことについて重い責任が伴うということを、西洋について学ぶとき忘れていなかったか、そういう気がしてならない。西洋では、ことばの責任をたとえば名誉毀損等の訴えによって裁判で裁くというのが日常的である。

くに

仕事が忙しくなって、人に会うのはほとんど外である。どこかの会議室であったり、レストランであったり、ホテルのラウンジであったり。

昔はひとの家に招かれたり、招いたりということがよくあったように覚えている。

それでもたまに、イギリス人の家庭に招かれたりすることがある。

招かれて楽しいときをすごすことができるのは、なんといってもピーターとメアリーの家である。

ピーターとメアリーはぼくのイギリスの父と母とっていい。もう隠居の身分のおじいちゃんとおばあちゃんだが、気のいい、しかし頑固な人たちだ。

「英語はもはや世界の言語なのだから何も日本語なんか英国人が勉強する必要なんかないよ」とか、「だいたい外国人が英国にどんどんやってくるから英国がおかしくなってしまうんだ」などとぼくの前でぬけぬけと言う。

ピーターがそう言うと、メアリーが何てこと言うの、と怒る。

しかし、ピーターに言われるとなんとなく、「そうだよなあ」と彼の前で彼の家のソファに寝転びながらそう思ったりする。

ぼくの顔をみると必ず説教をするピーターは、「テリー（ぼくのこと）、人生は短いんだ、どうしてそんなに働くんだ、もっとゆっくり人生を楽しんだらどうだ」というのが口癖だ。

ぼくはこのことばをこの14年間にいったい何度聞いたことか。

そのたびにぼくはピーターのことが好きになる。

何か飲むかと聞くので、じゃあ、ウイスキーをと答えると、クレージーだ、ウイスキーなんか飲むなんて、と言いながらグラスに注いでくれる。

会員制のジェントルマン・クラブにはじめて連れて行ってくれたのもピーターで、そこでぼくにスヌーカーを教えてくれた。

実は彼も猛烈に仕事をこなす男だった。それをぼくはちゃんと知っている。

現役の頃は休みにもコンピューターに向かって仕事をしている姿をぼくはちゃんと覚えている。

ぼくに隠れて日本語を勉強しようとしたことだって知っている。これは志半ばでギブ・アップしたようだが。

彼の家はいつもきちんと整理されている。

上品な色合いでコーディネートされ、必要なもの以外は何もないが、しかし必要なものはきちんとそろっているといった具合の、なんとも心地よい空間である。

そうか、一つ要らないものがある、いやいる。

猫である。キャンディーという名前で、ぼくのひざにすぐ乗ってくるのだが、ぼくは動物は苦手だ。

メアリーの料理はいわゆるイギリス料理なのだが、実にうまい。いつもおなかいっぱい食べることになる。

ただ、最初の頃、すなわち14年前にメアリー手製のアップル・パイをおいしいと言ったばかりに、いつも必ずデザートの一つはアップル・パイが用意されていて、ぼくはそれ以外のものに手をつけることができない。

そうすると、テリーは本当にアップル・パイが好きだねえ、となって、ますます他のデザートに手を伸ばすことができなくなっている。

この人たちはたった14年前からの知り合いである。

しかし、ぼくは彼らになんともいえない懐かしいものを感じてしまう。

ぼくの愛する日本という国を遠くはなれて、ぼくはしかしもう一つの母なる空間を手にしつつあるような気がする。

ぼくの子どもたちはもっとそうだろう。

ぼくの子どもたちは、彼らの人生のほとんどを、少なくとも今までは英国で送ってきた。

しかし、やはり日本人ではあるのだ。

彼らにとっては英語ということばが最も親しみのある言語で、とすると、彼らにとっての国とはいったいどんな意味を持つことになるのだろうか。

キャンディーの背をなでながら、考えている。

確かに生きたということ

長い日本出張から帰って、ぼくはやや体調を壊した。

ぼぼひと月間、一日の休みもなかったのだから、体が疲れているのは当然だが、この気持ちの悪い感触は一体なんだ。とうとうこの前の日曜日にはベッドから抜け出すことができなかった。

旅に出ると、<生きる>ということについて考える。

いやむしろ<生きざま>について考える。

そこでぼくは、ぼく自身をじっと見つめて、嫌になるのである。

自分を否定し始めると、これはしつこい。四六時中、あらゆる場でその思いが襲いかかってくる。

ぼくはぼくの納得のいく生きかたをしてはいない、そういう思いがぼくを責めるのだ。

ぼくがぼく自身を納得させる生き方というものがあるかのようなものであるかについては、ようやく少しずつ見えてきたような気がする。しかし、現実のぼくとそれとのギャップがつまりは明らかになり、ゆえにぼくは苦しむことになる。

ベッドの中でぼくは、不規則な呼吸をしながら、ベッドサイドに積まれた雑多な書物の山に手を伸ばす。

手にしたのは、月刊『文藝春秋』の2月号である。

第2特集として、「20世紀を彩った60人に捧げられた鎮魂歌」として、さまざまな「弔辞」が編まれている。

司馬遼太郎へ田辺聖子、手塚治虫へ加藤芳郎、遠藤周作へ安岡章太郎、石原裕次郎へ勝新太郎、芥川竜之介へ菊池寛、小林秀雄へ永井龍男、田村隆一へ佐々木幹郎、美空ひばりへ中村メイコ、三船敏郎へ黒沢明、市川房江へ藤田たき、尾崎士郎へ川端康成、円谷幸吉へ三宅義信、星新一へ筒井康隆、江戸川乱歩へ松本清張、小津安二郎へ里見弴、武満徹へ河毛二郎、壇一雄へ尾崎一雄、青田昇へ長嶋茂雄、中上健次へ柄谷行人、フランキー堺へ小沢昭一、杉村春子へ新藤兼人、谷崎潤一郎へ丹羽文雄、太宰治へ井伏鱒二、江藤淳へ石原慎太郎、開高健へ司馬遼太郎、……。

いずれも葬儀の場で読まれた、まさに別れのことばである。肉声である。

「いつも電話で最後になると<お前、幸せか>って聞いてくれたんだけど、もうそんなふうにいってこないのかなあと思うと本当に寂しいよ、お兄ちゃん」（渥美清へ倍賞千恵子）

「<張さん、どうしてもホームラン王を取りたいんだ。苦勞をかけたお袋と家族を幸せにしてやりたいんだ>君は言ったな。俺は、何を言うか、取りたいんじゃないんだ、取るんだ。そして最後の本当の最後のゲームで君がホームランを打った瞬間、泣きながら、ベースを一周してきたなあ。かつてそんな純情な野球選手がおっただろうか。帰ってきて、大きな体でわたしにだきついて、互いのユニフォームがぐしゃぐしゃになるまで泣いたもんだなあ」（大杉勝男へ張本勲）

「本当に惜しい。本当に残念。けれども美千代さんの嗚咽を背中で聞き乍らガーゼをめくると実に、金子さん、あんたの平穏な美しい貌があった。これは死んだんじゃない。昼寝だ。永遠に昼寝にはいったんだと思ひました。それにしても月桂樹の葉つば位、その眠りの額におきたいな、ともふと思つたのですが、そんなものない方があんたらしくサツパリしてゐていいナ、とも思つたのです。嗚呼」（金子光晴へ草野心平）

これらのさまざまな人たちの<生きた>という重みを、<確かな生>を、微熱があるのか体中に汗をかきながら、そしてまた、どうこらえても浮かんでくる涙を、ぼくの具合を心配してときどき優しいことばをかけにやってくる娘に気づかれないようにしながら、ぼくは貪り読んだ。

「ぼくもそろそろぼくの人生の重さについて考えなくちゃいけないな」、少しおどけて声に出してみる。とすぐに、また体中にじっとりと汗をかく。

ぼくが確かにぼくとして生きるということとは一体何なのか、そして、そのぼくの生がぼく以外の人間にとってどのような意味を持つことになるのか、ぼくはぬれた下着を替えながら、「うん、そうだな」とある一つの思いに至るのである。

つな 繋がるとうとする力

新しい世紀が歩みを始めてはや3ヶ月が過ぎようとしている。

しかし、ぼくにはその感慨がさほどなかった。

20世紀と21世紀がどのような違いを持たなければならないかについて、ぼくは興味を持ってはいなかった。

というよりむしろ、さまざまな新世紀を迎えるセレモニーに対してなんとなく違和感を持ったほどである。

けれども、あしたについてはよく考える。

あしたはあさつてをうみだし、つまりは人類の未来へとつながる。

教育は人間の幸せについて考えようとするシステムであるから、あしたの人間の幸せとはなんだろうといつも無意識にもといていいほど考えつづけている。

しかし、なかなか分からない。

見えてこない。

ぼくは一日にいろいろな本を読む。

ある夜、なかなか眠ることを許してくれない不快な疲れを例のごとくさまざまな書物の乱読と強いアルコールとで紛らわしながら、眠りの訪れを根気よく待っていた。

どうした拍子だったか、なぜ今ボランティア活動に関心を持つ人や老人介護を志す若者が増えているのだろう、とそう考え始めた。

ウイスキーのストレートの怒るような熱さがのどから胃へ降りていく。

ぼくは目を瞑った。

そうするうちに少しとうとうとしていたようだ。

ソファから立ち上がり、眠れそうだなと思いながらボトルを元の棚に置こうとしたとき、ぼくに不思議な思いが走った。

そうか、そうなんだ。

21世紀のキー・ワードは、「繋がるとうすること」だ。

20世紀の幸せは「モノやカネ」であった。

ほぼそれらを手にした人間はそれらで満たされることのない空腹感をどうやって満たしたらよいかと悩むようになった。

コンピューター・ゲームもしばらく遊ぶと飽きて新しいものが欲しくなる。

次から次へと新しいゲームを買い込み、しかしやはり飽きてしまう。

そういった感覚が生活のすべてに蔓延する。

もはや「モノとカネ」とでは満たされなくなってしまった人間は、気持ちの悪い空腹感と苛立ちに襲われることになる。

「モノもカネ」も手にしたとたん完結してしまうのだが、その完結してしまう感触が寂しい。

終わらないものはないのか。

ずっと静かに体内に残りつづけるような、そういったものが欲しい。

それは、自分以外の人間と「繋がる」ということであった。

ぼくたちの幸せはもはや「モノとカネ」とによっては得られない。

そのことに気づき始めた人間は、どうすれば周りの人間たちとあたたかく繋がることのできるかと考え始めた。

それは、ささやかな行為であった。

たとえば、バスの中で老人に席を譲ったときの不思議な喜びであり、被災地の人たちを手伝ったときのそれである。

あるいは、父親の肩を揉んでやったときの触感であったり、食事の後片付けの手伝いであったりする。

そういった当たり前のふれあいをぼくたちはずいぶん長い間忘れていたのではないだろうか。

そしてまたたとえば、外国のことばを覚えてその人のことばで「ありがとう」と言いたい、「ごめんなさい」と言いたい、という思いである。

ぼくたちが関わろうというたとえば日本語の教育や英語の教育はつまり、新しい世紀の幸せの真中に座る「繋がる」という思いを具現化していく喜びにあふれた仕事であるのだ。

ふたたび、教師論

その1

明るいということ

学生たちが卒業していくと、Diploma や Certificate 授与のための判定会議が開かれる。

学科の成績や教育実習の成績、学習態度や姿勢、それに出席率等が報告される。また、自主的に提出されたレポート等も検討の対象になる。

そのさまざまな観点から一人一人の卒業生について審査判定するのである。

そのため、その会議はかなりの長時間となる。

そこでは科学的・客観的な分析審査とともに、判定会議の委員の先生方の主観的といおうか、それぞれの教育観、教師観といったものも現れてくる。

それらはいずれも真摯なもので、ぼくはいつも会議の後、心からのお礼を委員の先生方に申し上げるのである。

はじめてその会議の委員となった方はいつも、その会議の持つ厳密さや教育に対する真摯さや愛情に驚かれる。

その会議の際、毎回話題となるのが、教師の「明るさ」についてである。

「Aさんはとにかく明るいんです。その明るさが教育実習の授業の際に学習者から好感を持たれて、実に楽しい授業になっていました」

「Bさんはグループ学習の際のトラブルを持ち前の明るさでまとめていました」

以前にもこの『濫觴』で書いたことがあったと記憶しているが、人間には誰にでも苦しみや悩みといったものがあるものだ。

しかし、その苦しみや悩みがあるにもかかわらず、いつも笑顔を絶やさぬ人がいる。

ぼくはそういう人に強く魅かれる。美しいと感じる。

逆に、いつも暗い雰囲気^①を漂わせている人のことは心配になり何とかしてやりたいとは思いますが、美しいと感じたり、魅^②かれたりはしない。

教師もまた、その明るさが必要だと、判定会議の委員のすべての先生方がそう言われる。

いつもネガティブな雰囲気を漂わせていては学習者の学習意欲を引き出し伸ばすことはできない。

にもかかわらず、いつも不満ばかりを口にする学生がいる。友達のことやステイ先のこと、イギリスのこと、すべてが気に入らないようにさえ見える。

しかし、話を聞いてみるとそれほど強く不満をもっているわけではないのだが、なんとなくそういう表現をしようようだ。

正当で必要な分析力と批評する力、批判する力は大切である。

しかし、大した根拠のない暗さには、正直言っとうんざりしてしまう。

いや、きちんとした理由のある場合だって、それに打ち勝つていこうとする明るさには心打たれ、そういう人には傍にいて欲しいと願う、それが本音である。

教師は、人に愛される存在でありたい。

学習者は愛する人から学びたい、そう願うからである。

明るさは、愛される必要条件である。

明るさは、教師が教えようとする土俵を守る必要条件である。

その明るい表情は、幸いなことにいつからでも始めることができる。先天的に暗い人間なんて絶対にいないのだ。

まず、あしたを信じようとする事。

そして、目の前の人や状況にあきらめようとしないう事。

日本を代表するある大学の教授が言った、「自分の大学の学生の受講態度があまりに悪かったので、言ってやったんです。俺だって教えたくて教えてるんじゃないんだ、とね」

教えたくて教えていない教師の授業はつまらないに違いない。

わたしはこんなにも教えることが好きなんだというような教師の明るさに学習者はどれだけ学ぶ喜びを感じるのか。

マイクを向ける者よ、 あなたもまた、 いやあなたこそが犯罪者である。

6月8日午前10時過ぎに、大阪府池田市の大阪教育大学付属池田小学校に男が乱入し、小学1、2年の児童8人を刺殺、教諭2人を含む23人に重軽傷を負わせた。

インターネットでそのニュースを読んだぼくは、滅びへとひた走る日本に悲しみを覚えた。

しかし、その悲しみは、翌日の朝日新聞を読んだとき激しい憤りへと変化した。

むしろ第一面のトップニュースとして扱われたこの事件は、記事報道とともに数多くの報道写真が掲載されていた。その中のひとつの写真を見たとき、ぼくは驚きに声をあげた。

なんだ、これは！

「友だち」というキャプション（写真の下につけられた説明文字）のつけられたその写真は、一人の幼い女子児童を報道陣が取り囲み、数多くのマイクを突きつけているものだった。おびえた表情のその少女に無残に突きつけられたそれらのマイクに、ぼくは子どもたちの命を奪った凶器と同じ匂いを嗅いだ。

その少女から何を聞こうというのか。

どんな言葉を期待しているのか。

その朝日新聞の社説は、「異常な事件に言葉を失う」と題したものであった。

冗談じゃない。新聞は言葉でもってものを伝えるものだ。そしてそれを売って、つまりビジネスにしてその社説を担当する者も生計を立てているのである。言葉を用いるプロではないか。その新聞記者が「言葉を失う」と堂々と言っている事態なのに、どうしてその当事者の幼い子どもたちにマイクを向けるのだ。自らは言葉を失うといいながら、言葉を失って当然の幼い子どもに何を語らせようとするのか。

この写真の載った新聞を手にして、まるでぼく自身もその新聞を読むことでそのマイクを少女に突きつけている者たちの仲間の一員であるかのような錯覚を覚え、後ろめたさと戸惑いを覚えた。

何もかもお金儲けにしてしまう日本のマス・メディアの本質がこの写真にある。

そうなのだ、新聞はひとつの商品に過ぎない。新聞社はメーカーであり、新聞記者は商品を作る工場の工具であり、セールスマンである。ゆえに、その商品にはコストをカットするための巧みな工夫も、人工着色料も人工甘味料もありとあらゆるものが混ぜられている。売らんがための誇張や虚偽は日常茶飯事であり、繰返される誤報や曲解による報道はたまたま起きた事故やミスではなく確信犯である。

しかし、大衆にはそれを見抜く力が不足している。テレビはさすがにあまりに馬鹿馬鹿しいものを流し続けたので、「そのすべてが本当であると信じてはいけぬ」というような感覚になりつつある。週刊誌を読んでその多くが信ずるに値しないという思いをだれもが持っているのと同じ感覚である。

しかし、新聞はまだそういった厳しいまなざしから何とかうまく逃れている。

まず、文字が大衆に信頼感を与えるのである。音声や画像は文字ほどには言葉の重みがないのである。そしてまた、新聞のあの紙質が不思議な信頼感を与える。あの紙質がツルツルの高級紙であったら、その商業主義が表面に出る。しかしながら、最近のカラー化や文字の拡大化は徐々に新聞を週刊誌的なあるいはテレビ的な媒体へとそのイメージを変えていくであろう。

もちろんそれはいいことである。なぜならそれが本質なのであるから。新聞は決して権威あるものとして読まれてはならない。新聞記者は決して権力者ではないのである。もしも、記者の中にそういった勘違いを漂わせている者がいたら、その記者はジャーナリストの名に値しない三流記者に過ぎぬ。

読者もそのことをよく認識するだけの知性が必要である。

メディアは華やかでついつい擦り寄っていかようとする者が多いが、そのことがメディアの暴走を許していることに気づかなければならないのだ。

この少女にマイクを突きつける者たちが、浮ついた日本の民主主義をはびこらせ社会を腐らせてきたのであり、人間の尊厳を商品化してはぎ落としてきたのである。

受験戦争を批判しながら売らんがために大学入試の高校別成績ランキングを特集する新聞社系週刊誌、一面の下に位置する看板コラムの内容の間違いを指摘されると謝罪する代わりに他の問題とすりかえようとする卑劣さ、一面連載の特集記事はほとんどまるごと他紙からの盗用であることが指摘されるとその謝罪がだれも読まないような面の隅にわずかな面積で載せられ処理される新聞社の精神、こういった姿勢はことごとく新聞ジャーナリズムの死滅を意味しているのである。

そして、その上でも尚、彼らはこの社会を蝕みつつける、正義の仮面をつけながら。

彼らにとっては、少女の壊れそうな小さな心を守ろうとするよりも、その少女を傷つけながらもお金儲けの材料にすることのほうが大事なのである。

もしぼくがその場にいたら叫びたい、「帰れ、おまえたちなんか、消えてしまえっ」と。

落ちてきたら 今度は もっと高く

息子の大学の卒業式に参列した。

式が行われる会場に入るためにはチケットが必要で、参列する親たちに対する服装のチェックも厳しい。携帯電話の電源を切られるのはもちろん、カメラやビデオで我が子の晴れ姿を撮影することも禁じられている。式は全てラテン語で進められ、卒業する学生は椅子に腰掛けた学長の前に一人ひとり進み出て跪き、学長から言葉をもらう。

厳かな式には一切音楽も拍手もない。マントを纏った者たちの晴れやかな、誇り高い表情が主旋律である。伴奏はいらない。

驚くことに、式場の外には卒業成績が張り出されている。だれがどんな成績で卒業したかが一目瞭然である。しかし、人だかりはない。

式が終わると、卒業する者たちは開放感に溢れ、芝の上でさまざまな記念写真に興ずる。友との別れを惜しみ、親への感謝を言葉にし、グラスを片手に教授たちと語り合う。

ぼくはその一つ一つにぼくの研究所の学生たちの旅立ちを重ね合わせていた。

研究所の学生たちも、この学生たちに負けず大変な努力を重ねてきた。研究所の学生たちが纏う心のマントはいったいどんなものなのだろうか。

人は人生のうちで幾度も旅立ちの瞬間を迎える。

たとえば、ぼくもいくつもの区切り目があった。

晴れがましいステージでいくつもの賛辞を浴びての旅立ち、下唇をかみ締めながら「負けてたまるか」と心の中でひとり叫んだ旅立ち、それぞれの瞬間を思い出しながら、「ああ、ここまで来てしまったんだな」と思う。

しかし、「ここ」とはいったいどこだろう。いかなる座標か。

そして、明日からの歩みはどちらへ向かって進めていこうというのか。

ぼくの歩みにはかつて、激しく怒りがあった。なぜかいつもなものか怒っていた。こんなことではいけないんだ、そうじゃないんだ、変えなければ、と心の中で叫んでいた。

しかし、それが何に対してのものなのかが思い出せない。社会に対して、大人に対して、政治に対して、それらはあらゆるものに向けられたが、ひとつとして満足できる回答は得られなかった。

それはひとつ、しかもあらゆるものの基盤となるものをごまかしていたからである。ぼくがもっとも怒りを感じていたのはぼく自身に対してであることを、なにものかに置き換えながらごまかしながら頬かむりをしていたのである。

ぼくはぼくを認めることができないまま、ここまできたのである。

ゆえに、その怒りは恐ろしいほどの大きさに膨らんでいる。

詩人の萩原朔太郎は、その精神分析によると、常人とは異なっていた、つまり病んでいたと言われている。彼のエピソードの中に、こういったものがある。

朔太郎は、家を出て、右に行かなければ目的地に着かないということがわかっている、どうしても左へ曲がってしまうことがあったという。

ぼくにもある。

この目の前のコーヒーに砂糖を五杯も六杯も入れては飲めなくなるとわかっている、それがいかに愚かしいことであると思われても、どうしても入れてしまいたいという欲望がそうさせてしまうのだ。飲めなくなったコーヒーを眺めながらぼくは、不思議な充実感と疲労感に満たされている。

おそらくこういった感覚は、朔太郎やぼくに限られたことではないのではないか、と思う。

人はときに自分の感覚を否定したくなるのである。

なぜだろうか。

黒田三郎に、「紙風船」という詩がある。

「落ちてきたら／今度は／もっと高く／もっとも高く／何度でも／打ち上げよう／美しい／願いごとのように」
もっとももっとと願いながら、ぼくたちは常に旅立つ瞬間に生きている。

原点へ

自殺を図った姉が父とともに家に戻ってきたとき、ぼくは姉に向かって何も言えなかった。新婚間もない姉は突然の事故で夫を失う。出産のため入院していた姉はそのショックで胎内の子どもを流産してしまう。生きること絶望した姉は家を出て遠く離れた地のホテルで死のうとする。幸い発見が早く何とか一命を取り留めた。

ぼくはその時中学一年生になったばかりだった。姉の無事な顔を見た瞬間、ぼくはことばでは表せない感覚に襲われた。ぼくはそういったときの自分の気持ちをことばで受け止める年齢にまだその時達していなかった。恥ずかしいような不思議な表情をしたぼくに、母はどうしたの、と聞いた。

ことばの、あるいは表現するというのもどかしさをぼくはその時鮮烈な形で知らされた。ぼくはやはり何らかのことばを用いて姉をいたわってやりたかった。

*

人間は自分以外の人間とつながることでようやく人間になりうる。そして、その中心に座るものはことばに違いない。ぼくはそのことばの教育にかかわりながら、しかしいつももがいている。

たとえば、日本語教師の養成に関して思うのは、この目の前の学生たちが教師になって巣立っていくとき、確かにことばというものをあたたかく見つめながら、あるいは教育というものを厳しく愛しながら生きていってくれるだろうかということである。いや、もっと直截的な表現をするならば、この者たちは「センセイ」と呼ばれるに値するかどうかということである。

日本語ということばを文法や語彙や意味などといったさまざまな角度から分析し、研究し、その教授法を学び、教育実習を体験して研究所のコースは終了する。これまではそれでまずよしという思いがあった。さまざまな教育機関から高い評価を受け、英国の大学や中・高等学校やその他の学校からの採用も広がっている。むしろ英国以外の国においてもありがたいことに順調である。しかし、そうであったとしてもぼくは、卒業生をくり返し送り出しながら、何か忘れ物をしているような思いにとらわれるようになった。何か足りない、何かを遣り残している、ぼくはその思いにいつもとらわれていた。

そしてまた一方、社会における語学教師の位置付けにも不満を持っていた。すばらしい知識と教授能力を持ちながら、語学教師にはいわゆる「語学屋」といった烙印が押され、なんとなく社会の傍流といった印象がある。社会で生きていくための一つのツールを提供してくれるもの、といった位置付けである。

卒業生たちの毎日の努力を見ていると、もっと胸を張らしてやりたいと思うのだ。彼らをもっと大切に取り扱ってほしいと願うのだ。

ではそのためにぼくには何ができるのか。

**

養成課程における学習が工場における生産過程のようなものになっていないか、とぼくは自分に問うようになった。知識や技術というものはむしろ必要だが、それらを支えるものがしっかりしていないと、たとえばおいしい食事を創出する刃物が人を殺めることに使われることもあるように、学習者を傷つけていく危険性もある。

それは、ことばによるコミュニケーションを支える、「コミュニケーションとは本来何なのか」という原点とも言うべき視点であった。

人とのつながりの大切さやそこでのことばの重さをよく認識している教師を育てたい、ぼくは次第にそう欲するようになった。そしてそのことが、きっと彼らのプライドとなり、社会からはもっともっと認知されることになるだろう。

どんなに知識が豊富で、教育技術に優れていても、つまり、日本語の授業でいくら巧みに教えることができようとも、その教師自身が、「ありがとう」の一言を素直に言えなかったり、「ごめんなさい」ということばが口から出てこなかったり、とそういうことであれば、おそらく学習者の言語能力は次第に後退していくに違いない。なぜなら、その教師から学びたいというモチベーションが減少するからである。

研究所の教員養成には、その心を注入しよう。人と繋がるとは一体どういうことか、という原点をこの英国でなければできないモデルとして完成させよう、ぼくはいま、高まる思いの中にいる。

今を越えて、明日を創造していく教師を育てたい、と心から思う。

良い教師とは

「明日から、空手を始めることにしたよ」と娘が言う。17歳である。

またどうせ続かないだろうと冷やかしながら、いろいろとやろうとすることはいいことだとも思う。

フルート、クラシック・バレエ、……、娘が挑んだ世界は多い。その中で珍しくずっと続けていた声楽（コーラス）を一年前にやめた。世界レベルのコンクールで優勝したりしていたコーラスをやめることになったのには、ややほろ苦い思い出がある。

さまざまなコンクールやリサイタルで国を超えて活動してきたこのコーラス・グループは、あるベテラン教師によって指導されていた。

ぼくはコンサートに出かけたり、遠征旅行から帰る娘を迎えに行ったりした。そのたびにその教師を垣間見た。言葉遣いを、まなざしを。

そしてなんとなく違和感を覚えていた。それは同じ教育の世界で生きる者としての直感ともいうようなものだ。この人には教育者としての空気が感じられない。しかし、そのことは娘には黙っていた。

時がたつにつれて、娘の表情に不思議な疲労感が漂うようになった。苛立ちも感じた。何より楽しくないという感じなのだ。

ぼくは言った、「やめようか」と。

「うん」、それだけしか娘は言わなかった。

娘の明るさが戻った。

「どんな教師を良い教師というのですか」という問いに一言で答える無謀が許されるならば、ぼくはこう答えるだろう。

「自分の子どもをね、預けられるかどうかだね」と。

きちんとした専門性を持ち、教授法に長けている先生が良い。しかし、それだけで、たとえば娘を預けられるかといえば、そうではない。その教師との人間的なふれあひが多かれ少なかれおこるのだから、その教師の人間性は特に気にかかる。

いやむしろ、まずは人間性である。いくらたとえば語学の力が優れており、その教え方がうまいとしても、その教師が醸し出すものに問題を感じたらぼくは、娘の教師としては認めたくない。なぜなら、たとえばその教師の屈折した考え方が娘の人生にとって大変な影響を及ぼし、ひいては娘自体が屈折した考え方を持つことになるかもしれないからである。

恐ろしいことに、世の中を斜めにしか見ることができない者、人を信じる力のない者、平気で人を攻撃することや傷つけることのできる者、人を悪く言うことでしか自分を支えられない者、そういった者たちと多くの時間を共有するようになると、いつのまにか気付かぬうちに自らもそういった者と同じようなまなざしを持つようになり、そして顔の表情もゆがんでいく。

そういった屈折したものに打ち克つ力は、知性に他ならない。知性があれば、前をまっすぐに見ることができ、ポジティブに生きることができるようになる。ポジティブということは、明日の可能性を信じ、自らその可能性を見つけ、あるいは創り出していこうという姿勢である。

この人は自分の大切な人を預けられる人かどうか、この基準は単純だけれど教師の良し悪しの判別にはきわめて有効であると信じている。

あるいは、この人は自分の同僚として一緒に仕事をしたい人かどうかという基準も、その人を自分は本心ではどう見ているかということを確認するのに役に立つ。

さらにこういう考えも成り立つだろう。もしも自分がたとえばその人を教師として雇用するとすると、その人を雇いたいと思うかどうか。

われわれの心の内を覗くには、時にこういった単純な問いが役に立つ。

これは教師について考える場合に限らない。友人として付き合う場合、ああこの人はいざとなったら自分のことしか考えないだろうな、と感じたら、友達にはなれない。にもかかわらず、なんとなく友達のように振舞っていると、とんでもないしっぺ返しを食うことになる。

逆に、自分は本当にこの人のことを考えているかと問うてみるのもよい。相手のことを考えているようでいて、実は身勝手な考えが支配している場合もよくあるものだ。

繰り返そう。われわれが、たとえば日本語教師を目指そうとする場合、その理想とするよい教師とは、自分が習いたいと思ったり、自分の大切な人を預けることのできる教師のことである。

研究所が志向する教師像とはつまりはそういうものだ。

もういくつ寝ると

濫觴の第13号でも書いたが、ぼくの年末の持ち歌は「もういくつ寝るとお正月……」というあの歌だった。
こどもの頃の話である。

父が大勢の先生たちを連れて帰宅し、いつものように宴会が始まると、ぼくは決まってそのにぎやかな場に引っ張り出され、時に父の大きな胡座の上に抱かれながら、「もういくつ寝ると……」と歌った。

この思い出が、ぼくはとても好きだ。

酒臭い父の匂いも、ドンチャン騒ぎを繰り返しながら実に温かい眼差しで話しかけてきたりぼくの頭をなでたりする先生たちも、そしてまたその人たちを優しく見守る母も、みんな幸せで、真面目だった。

その頃の日本はまだ、決して豊かな日本ではなかった。

しかし、近所のおじさんもおばさんも、ときどき訪ねて来る父の教え子たちも、みんな同じように真面目で明るく、そして安心できる人たちで、こどもの頃のぼくには大人の世界の豊かさが感じられた。

そして今、ぼくももうどうやら大人である。

大人のぼくは、子どもたちに何をしてやっただろうか。

ずいぶん前のことだが、妻がぼくにこう詰め寄ったことがある。

「パパは、自分の子どもと学生と一体どっちが大切なの」

土曜も日曜もなく仕事をし、たまの休みに家族旅行をすれば仕事の夢でうなされたり、眠れなくなって体調を壊したり、学生に何か問題があれば真夜中であろうが旅先であろうが、旅先からでも家族を残して駆けつけたりするぼくに、父親としての温かさを求めたのだろう。

論文の締め切りに追われ、執筆に打ち込むために家族を実家に帰したこともあった。

高熱が続き苦しむ娘を残して、学生のSOSに駆けつけたこともあった。

思い出せばいくつもいろいろなことが浮かんでくる。

震えてしまいそうなほどすまないという思い出もいくつかある。

なんという父親だろう、とぼくは自分を責めずにはおられなくなる。

だから、もしも今父が生きていたら、とつい、そう思ってしまう。

あの頃、父はどうだったのだろうか。

まさに仕事の鬼として、徹底的に教育に打ち込む父は、何を考えていたのだろうか。

いや、その答えはわかっている。

死ぬ直前まで教育の尊さや厳しさについて語ってくれた父もまたきっと、繰り返し繰り返し自らを責めていたことだろう。

彼もまた、教育という世界で死んでいった。

<せんせい>という人のまま死んでいった。

ぼくにとって、教育という仕事は、大変な化け物として膨らみ、ぼくを飲み込むほどになっている。いや、疾うの昔に飲み込まれている。

しかしぼくは、この飲み込まれた世界がとても好きだ。

喜びは大きな苦しみの隙間にほんの少しずつ顔を覗かせる程度だが、しかしこの教育という世界の大きさと深さ、温かさと真面目さに身を委ねていると、ああ、ぼくはここから生まれてきたんだなあ、というような、胎内の音楽に身を任せているような安心感を覚えるのだ。

ぼくは仕事としては教育の世界しか知らない。ずっとこの世界で呼吸をしてきたが、まだまだ大きな世界を数歩歩いたに過ぎない。未熟だと思う。

ゆえに、明日からのこの歩みを楽しみながら味わっていかうと思うのだ。

「もういくつ寝るとお正月……」

長男が今、先生一年生として七転八倒している様を横目で見ながら、ぼくは小さく口ずさんでいる。

昨日、今日、明日。

小澤征爾の指揮するウィーン・フィルの新春コンサートから、ぼくの2002年は始まった。

小澤の踊るような、そしておどけるような指揮に、世界でも最高の演奏技術を持つウィーン・フィルの団員たちが柔らかなまなざしをおくりながら融けあっている。いかにも楽しそうに、そしてあたたかく演奏しているのだ。

ぼくは激しく心を揺さぶられた。

ナイジェル・ケネディやヨー・ヨーマのコンサートでもそれを強く感じたが、一流と評される者たちのだれもが、そこに楽しさとあたたかさを漂わせている。

あたたかさは美しさである。

そして、その美しさは確かな努力に裏打ちされている。

日常の厳しい自己管理と練習によって獲得した力に関する自信が美しい顔を創り、あたたかいまなざしを産むのだ。

おそらくそこには明日というものを信じることのできる強い知性があるに違いない。

昨日よりも今日、今日よりも明日と、少しずつ成長していこうとする、そしてその自分の尽きることない成長を信じようとする意志の力である。

人類の明日の可能性を信じようとする力はしかし、昨年9月に起きたNYのテロ行為などによって揺らぎ、あるいは狂牛病などの新しい病の出現によって衰え始める。

今、未来に対する不安を口にする者たちが暗いため息をつく光景があちこちで見られる。

そんな中で、私はある学者の言葉を思い浮かべる。

講演等でも何度か紹介したコロンビア大学のエドワード・サイド教授の発言である。2000年1月3日、つまりテロの起こる8ヶ月前のものだ。（朝日新聞「新世紀を語る」）

彼は言う。

「過去にない大きな変動の時代だと私は考えています。重要なのは国境を越えて地球を一つにする大きな力が働いていることです」

「深刻な問題は、グローバル化の波がわれわれをどこに連れていくのか、不安が広がっていることです」

「民族や文化がまざりあう中で、自分はだれなのかという自画像がゆらいでいる」

「私が心配しているのは民族主義、ナショナリズムは自己愛と自己陶醉におちいりやすいということです。自己愛が行きすぎると、どうなると思いますか」

「集団的な愛国心や民族主義も、行きすぎると国や民族のためには何をしてもいいということになってしまう」

「コソボの人たちやパレスチナ人の自己主張は正当なものです。ただ、民族自決の主張も、実現のためにはどんな犠牲を払ってもいいというものではない。他の共同体を破壊したり、他の民族を滅ぼしたりする権利はだれにもないので」

しかし、テロは起こってしまった。サイド教授の指摘は悲しいことに現実のものとなった。米国の対応にも「不当な自己主張」のにおいがある。

だが、サイド教授はこう続ける。

「一番大切なことは、決してあきらめないことです。困難を前に運命だとあきらめ、自分にできることを何もしない。それが最悪の選択です」

「いかに現状が凍りついたように見えても、そこからもっと違った未来を想像する。歴史も未来も、人間の力でつくられるのです」

たとえため息をつくような今が自分を苦しめていても、その昨日や今日を自分自身が導いたように、明るい明日もまた自分の力で創造することができるのだ。

その明日の可能性を信じようとする、力強くあたたかい知性をつけたい。

縮む

全てが縮んでいこうとしているのではないか、ぼくはそういった思いに今、沈んでいる。

日本に戻り、たとえばテレビで国会中継をみる。そこで交わされる論戦はとも一つを代表する者たちが国民の未来の幸福についてする種類のものではなく、極めて幼稚である。

街を歩けば、明らかに知性とは程遠い若者たちが漂っている。

ことばを交わせば、ねじれた感性と澱んだまなざしに吐き気をさえ覚えてしまう。

いったいどうしたのだ、と叫びたくなるのだ。

いったいどうしたのだ！

人の悪口に喜びを感じる者たち、人の幸福を妬む者たち、自分の劣等意識を隠すためにひたすら他者に責任転嫁を図る者たち。

ありがとうが言えない者、ごめんなさいが言えない者。

お金のためならどんなことだってやる者、やせ我慢なんかとっくに忘れてしまった者たち。

ああ、とため息をつきながらぼくは、できればしばらくは人間と会うのはよしたいなあ、とできもしない願いを口にしたりしてみる。

男たちは自信を失い、うつろに時間を消費している。筋肉が衰えてしまっているのだ。

女たちは愚かな、薄っぺらな知性をひけらかし、さまざまな厚化粧に果てしない執着を示す。柔らかな、豊かな脂肪を捨ててしまったのだ。

おかしいぞ、おかしいぞ。

大学というところに通う学生と呼ばれる者たちは勉強をする代わりに、いや代わりのものが何もないのだ。何もしない。どんどん澱んだまなざしを身に付けていき、しかし自分だけを守るための稚拙なのだが狡猾な知恵だけは身につけていく。自分の幸せを考えて何が悪いんだよ、と幸せについて考えたこともなくせして偉そうにしかも激しい口調でたたまるのだ。

彼らの学費なんて大学を運営する費用、つまり彼らを学生として預かるためのコストの一部にしかならず、大変な額の税金で補われているということを彼らは、彼らの軽すぎる脳みそは知らない。みんなが懸命に働いて、このみんなの中には彼らよりも若い労働者だっているのだが、そういった者たちから税金が徴収されて、それが彼らの無駄な学生生活を支えている。

ある大学から講演を頼まれてぼくは言った、君たちは道路の真中を偉そうに歩いたりしてはいけない、申し訳なさそうに端っこを歩け、と。

大学生に限らない、世の中の全ての者たちから、品位と知性が消えつつある。

かつては本音と建前という言葉があり揶揄されたが、いまや建前なんてモノはすっかり消えうせ、居直った、醜い、低レベルの、卑しい、腐ってしまった本音ばかりが闊歩している。

教育に関わる者たちもまたすっかりだめになってしまい、こんな者たちに愛する者をあずけたりするものかと言いたくなるような輩が、こちら本音が人間らしさであるというような動物的低次元の論理にもならない屁理屈でもって武装して、教壇に立っている。

斜めにしかモノをみることのできない者たちに先生がつとまるものか！

みんなみんな、小さく醜く縮んでいく。

日本だけの現象ではないのだ。

世界中の人間たちが縮みつつある。

数字でしかモノを対象化できない者たち、お金が全ての座標軸。

このままだと、本当に気持ちの悪い世界になっちゃうぞ。

もっと伸びやかに、さわやかに、人を信頼し、信じあい、あたたかく抱きしめる、そんな社会をみんなで作らなくちゃあ、とどこなのか判らないがたくさんの人が集まっているところでぼくは声を高めた。そのとたん、目が覚めた。

飛行機の中の座席に横たわりながら、ぼくはびしょりと汗をかいていた。

みえないもの

日曜日、日本の友人が送ってきてくれたビデオを見る。

山田洋次監督の学校シリーズの一つで「十五歳」と題された作品である。一人の不登校の中学生が東京から屋久島の縄文杉を見に行こうと家出をする。そこにたどり着く過程で彼は、〈学校〉とはいったい何だろうと問いつづける。

なぜ子どもは学校に行かなければならないのか、学校で学ぶことなんか役に立つとは思えない、大人は一人前になれって言うけれど一人前って何なんだよ、と出会う人間たちに片っ端から少年の搾り出されるような問いが激しくぶつけられる。

そしてまたそれらは、次第に人間存在そのものについての問いへと深化していく。樹齢 3000 年を超える縄文杉は静かに佇むばかりであるが、人間はわずかな生に喘いでいる。ふとしたことから少年が身を寄せることになった老人は大戦の生き残りである。勇ましく荒々しい彼はしかし、歳には勝てず失禁するようになり、そのことで苦しむことになる。恥ずかしい、と思うのだ。

人は誰もが年老いていく。老いていくことに何の恥ずかしさがあるろう。少年は息苦しいほどの生の喘ぎやもがきを目の前に突きつけられ驚き、戸惑いながら、しかし人間たちの確かな肉声の中に学ぶことの意味を見つけることになる。

少年は自己存在の意味を問い、そしてその答えとなるべきものが彼自身の内部にあるのではないかと感覚する。

少年の眼差しは、見ているぼくを繰り返し繰り返し直撃した。

涙が溢れた。

見ている途中に 17 歳の娘がやってきた。ソファに横になって見ていたぼくは娘にわからぬように涙をぬぐった。

*

ドイツ初期ロマン派を代表する詩人ノヴァーリスは言う、「すべてのみえるものは、みえないものにさわっている。きこえるものは、きこえないものにさわっている。感じられるものは、感じられないものにさわっている。おそらく、考えられるものは、考えられないものにさわっているのだろう」と。

見えるもの、聞こえるもの、そういったものばかりを求めてぼくたちは、ついあくせくしてしまう。

少年の問いは幼さゆえに本質をえぐることになったのだろう。

*

ぼくは染色家志村ふくみさんを思う。彼女によれば、あの桜の花の桜色を染めようとして、桜の花弁ばかりを集めてみても桜色には染まらない。うす緑色に染まるのだそうだ。桜色に染めるには、桜の花弁ではなく、桜の木の幹で染めなければならないという。志村さんの言葉を借りれば、「桜が花を咲かすために樹全体に宿している命」と向きあわなければならないのである。

「本当のものは、みえるものの奥にあって、物や形にとどめておくことの出来ない領域のもの」なのだろう。

ぼくたちは教育という仕事に従事しながら、少年が搾り出すように発するこの本質的な問いの前に佇むことがあるだろうか。みえるものばかりを追いかけようとしてはいけないか。樹に宿された命を見据える、あるいはその命に思いをはせる力があるだろうか。

表面的な言葉の形にのみとられようとはしていないか。

言葉が人間にとってどのような意味を持つものなのかと問う力を持っているか。人と人がつながるということについて、表面的な安易さの中でしか捉えることが出来なくなっているのではないか。

教師として旅立つ者たちを前にしながら、そう自問している。

残効

断章 1～7

1

<ヒト>という動物が<人間>という社会的存在に進化したその日からぼくたちは、常に歩み続けなければならないようになった。これはとても辛いことだ。

確かにヒトは進化した。

ほかのどの動物よりも速く、はるか彼方の目的地まで移動することができるし、空高く飛び上がることもできる。記憶力を補うためにコンピューターのような機械も創った。

時に立ち止まることがあったとしても、それもまた次に歩き出すためのつかの間の休息にすぎない。

2

ぼくは小学校を卒業したそのあくる日、遊んでいて頭を強打し、気がついたときは病院のベッドに横たわっていた。

その日からぼくを襲う不安は始まった。

ぼくはいったいつから<ぼく>なのだ。どんなに記憶を遡っていてもその始まりを思い出すことができない。そしてまた、ぼくの明日の重なりに行き着くところがわからない。仮にそれが<死>というものであったとして、その死をどのように位置付けたらよいのかがぼくにはわからない。

十代のぼくはいったい幾度、その果てしない闇の中で震えたことか。

昨日と明日の間（はざま）で呼吸するぼくは、歳を重ねていくうちにしだいにその不安にいくつかの意味付けをするようになる。それらの多くは詭弁に過ぎない。昨日と明日を同質のペンキで塗り込めつけようとする行為に過ぎない。解答と呼ぶには程遠いものだ。

ぼくはつまり座標軸を持たぬ空間に浮かんでいる。

3

感覚は無意識を限りある意識の中で解釈しているに過ぎない。

ぼくはその限界を無理やり無限の世界に置き換えようとしている、そんな気がする。少なくとも、ぼくの日常はそういった矛盾する意識が支配し、あるいは支配されたかのように振舞うぼくがいる。

4

だから、ぼくはぼくを否定しながら、朝を迎える。

5

コンピューター画面で手前に近づいては消える正方形のパターンを2秒間ずつ、60回繰り返した直後に一定の音量の音を聞くと、その音はだんだん小さくなるように聞こえる、という。反対に画面の奥へ遠ざかる正方形を見た場合、音が大きくなるように聞こえる。

ある方向の動くものを見つめていて、動きが急に止まると、それまでとは反対の方向に物が動いているように見えることがある。<残効>と呼ばれる現象である。

6

立ち止まったとき、そのときぼくたちは立ち止まることができない。

7

たとえば<愛する>ということも、常に歩みつづけない限り、立ち止まった瞬間、後ろへ向かって壊れ始めるということである。

離陸

そのとき、ぼくはまだ10代だった。

突然思い立ち、家を飛び出して夜汽車を乗り継ぎ、まだ夜の明けきらない長崎にたどり着いた。早朝の駅の構内でぼくは、全身に疲れを感じた。のどの渴きを覚えた。そしてベンチにもたれながら、疲れた、とため息混じりにそうつぶやいた。

「生意気言うんじゃないよ」

いつの間に近づいていたのか、ホームレスの老いた男が立っていた。

「生意気言うんじゃないよ、何歳だよ、疲れたなんて言葉は、もっとちゃんと生きてきたモンが使う言葉だよ」

ぼくはその男の言葉に素直になつた。

「はい」

大声でしかりつけたわけでもない男の言葉はしかし、疲れからか少し熱を持ったぼくの体と不安感さえ感じずに空虚に漂っている心に静かにしみた。

それから男は何かつぶやくといつの間にかいなくなっていた。

そのとき、ぼくはいったい何のためにそこにいたのか。

*

ぼくはいったい何のために、そのときそこにいたのか。

ぼくはいったい何のために、今ここにいるのか。

*

風景の中心には常に<自分>がいる。そのことから逃れられないと知ったときぼくは、時の流れもまた恣意的なものに過ぎぬのだなど不思議な安心感を覚え、と同時に、果てしない来し方と行く末に鈍く重い疲れを感じるのだった。

纏わりつくような<自分>という意識は、ゆえに疎ましい。

にもかかわらず、その<自分>が<他者を認めながら存在する>ということに偽善的ないやらしさを感じていた。

*

土を触るのが苦手だったぼくは最近、たまの休みには好んで庭いじりをするようになった。虫の嫌いなぼくの指の間を、土の中から這い出してきた名も知らぬ茶色い虫がすり抜けていく。その虫の這っていく先をゆっくり目で追いながら、ああ、ぼくは何かを求めているんだな、と思う。

変わりたいと思っているんだな、今の自分とは違う自分を見つけようとしているんだな、と刈り取った芝を箒を使わず手で掻き集めながら、そう考えるのだ。

*

なぜだろう。

疲れたのか。

いや、まだまだちゃんと生きてきたとは言えない。

自分の今が嫌いなのか。

そうかもしれないなあ。

では、どう変わりたいのか。

*

幼い男の子が、さっきからじっと見つめている。

なんとか登ったのはいいが降りられなくなった樹の股に腰かけ、固い表情で下を見つめている。

男の子の鼻は膨らみ、口はへの字だ。

*

飛べ。

勇気を出して飛ぶんだよ。

けがをしたっていいじゃないか。

痛くたっていいじゃないか。

今飛ばないと君はずっと飛べなくなる。

大地を蹴り、地球を蹴り、昨日を蹴り、自分を蹴ってみろ。

そしてもう一度、ぼくたちは何のために今ここにいるのかを考えてみよう。

コミュニケーション原論から

赤池清隆先生に招かれて6月14日、研究所のチャールトン・ハウス・キャンパス内のグランドサロン（講義室）に向かう。日本語教師養成課程のD28期の学生が取り組んだ「コミュニケーション原論」における個人リサーチのプレゼンテーションが行われるのだ。

榎田由紀さんは「難民のための英語クラスでのコミュニケーション」と題して発表した。さまざまな困難と向き合う難民たちの second language となるべき英語の獲得に取り組む姿にあたたかいまなざしを向ける榎田さんの報告は「ことば」と「生きるということ」との密接な関わりを再認識させるとともに、ことばの教育に従事する者たちの責任の大きさとその教育の可能性を感じさせるものだった。たとえば日本語教育は難民教育に関して何ができるだろう、とそう思いながら発表を聞いた。

瀧達さんの発表は「メキシコの問題を通してみたコミュニケーション」というものだった。メキシコ生活の経験のある瀧さんはメキシコの子どもたちの貧しい学習環境に関心を寄せ、ロンドンのメキシコ社会にアプローチする。

「言葉を主体としないコミュニケーションの可能性」と題して発表したのは村上知子さん。村上さんは障害を持った子どもたちの学校や老人ホームに通い、折り紙を使ってのコミュニケーションに挑んだ。頑なな表情の子どもたちが次第に心を開いていく様子が村上さんの熱のこもった語り口から窺える。

「コミュニケーションにおける積極性」というテーマを掲げて自分自身の消極性を克服したかったと語るのは飯尾聡太郎さんである。飯尾さんは教師として生きていくためには積極性が必要なのではないかと考え、Tai Chi のグループに加わったり、英国の現地の小学校に出かけ日本語や日本文化を教えようとする。自分を成長させたいという飯尾さんの思いとそれが少しずつ実を結んでいく過程は彼の周囲の仲間たちの協力とともに感動的である。

最後に発表したのは小森千佳江さんである。「日本語の歌による発音指導の試み」というのがそのタイトルだ。日本語の促音や長音、あるいは撥音といった特殊音節の発音を歌を使って教えられないかという実践である。録画されたビデオには実に楽しそうに小森さんの授業を受ける子どもたちの姿があった。「子どもたちの素敵な笑顔と接することで、忘れかけていた<人と人との繋がり>を肌で感じ、心で感じるができるすばらしい経験となった」と、小森さんは感想を綴っている。

よかった、本当によかった、とぼくは発表した5人に、そして同じように懸命に個人リサーチに取り組んだD28期の学生諸君に心の中で感謝した。

「コミュニケーション原論」という科目を半ば強引にカリキュラムに盛り込んだぼくは、その方向性には自信を持っていたが、果たして学生諸君が本当にまっすぐに取り組んでくれるだろうかとは実は心配していた。

指導する先生たちはもちろん、この新しい取り組みをどのように取り扱うかについては研究所のスタッフも含めて何日も何日も深夜に及ぶまで激しい議論を重ねた。

ことばを教えようとする人間に何が必要なのか、日本語を外国の学習者に教えるということは、あるいは外国語としての日本語を学ぶということは、それぞれ教師に、あるいは学習者にどんな意味があるのか。そもそもコミュニケーションとは何か、人と人とが繋がるとは何か。

ぼくはこれからの日本語教師や英語の教師たちにぜひとももう一度原点に立ち戻って考えてもらいたかった。単なる技術では教えられないものがあるということや先生と呼ばれるものに求められる基本的なまなざしを体感してもらいたかった。

学生諸君やスタッフの皆さんの大変な努力によってそれらは力強く歩みを始めた。しかし、まだまだよちよち歩きである。<触れ合い>が確かな<繋がり>となるための<静かな努力の蓄積>が明日からの課題である。常に原点から教育を見つめようとする力ある教師として明日を生きるために。

失くしたもの

最近、食べたいと思う食べ物が思い浮かばなくなった。そしてまた、どうしても手に入れたいというものもなくなった。

食事時になっても、「ああ、あれが食べたいなあ」といった思いになかなかならない。「何か食べておかないといけないなあ」とつい義務的になってしまう。

何かを買いにお店に行っても買わずに帰ってくることもある。「まあ、いいか」と買うのをやめてしまうのである。つまりは買う必要がないのである。にもかかわらず買ってしまおうと、そういうものはいつの間にか失念されてほこりをかぶることになる。

求める思いが弱いとそのことが達成されたときの喜びが上質ではない。

まだ 20 代のときの論文でぼくは、「涙とともに食べて初めてパンの味がわかるのである」という先人の名言を引用し、「それは間違っている。笑顔で食べて初めて、パンの味が、おいしさがわかるのである」と否定して、比喩的に教育論を展開したことがある。しかし、時が経ち、その涙の意味が少しずつわかってきた。

*

1960 年に作られた教育番組をつい最近ビデオで見た。田舎と都会のそれぞれの小学校の風景である。そしてその頃、ぼくもまた少年だった。

田舎の、山深い小学校の分校で学ぶ子どもたち。貧農といってもいいその集落で、子どもたちの学習意欲は極端に低かった。

その学校で教えるのは年老いた先生夫婦の二人だけである。この集落の子どもたちに何とか学習意欲を持たせたいとその夫婦は懸命にさまざまな工夫を試みる。

その一つにまだ珍しくて高価な存在であったテレビを、大変な努力を重ね、やっとの思いで手に入れる。

ある日、番組では弦楽器の音色を特集していた。見たこともない楽器が演奏される映像を食い入るように見つめながら子どもたちは、思わず演奏者の指を真似ている。

ぼくは、はっとした。

ある少年の強いまなざしと、真似て自然に動く指先。

あのまなざしをぼくは、そしてぼくたちは忘れてはいなかったか。

失くしてはこなかったか。

番組が終わるとテレビに向かって手を振り、拍手をし、頭を下げる子どもたち。

そういえばそうだったなあ。

映画館で映画が終わったときもその頃はみんな拍手をした。

体育館で幻灯機を見た後もやはり拍手をした。

ぼくたちは食い入るように画面を見、スクリーンを見つめた。

*

同じ 1960 年の映像が都会の子どもたちを映し出す。

受験戦争の激化が子どもたちを塾に追い立て、家庭教師を生む。まるですでに将来がわかっているかのような子どもたちの言葉を聞きながら、今の子どもたちとぜんぜん変わらない風景にため息が出る。

こんなにまで異なった田舎と都会の子どもたちのまなざしは時が経つに連れて都会の子どもたちのそれに統一されていく。

学ぶ風景は競争論理に支配され、学びから発見や喜びが消えていく。

*

ぼくたちは本当に進歩したのだろうか。

確かに多くのものを生み出した。しかしぼくたちは多くのものを失ってもきたことにしばし思いを寄せるべきではないか。

ぼくたちが失くしたのものには、しっかりと抱きしめて離してはならなかったものがあるような気がしてならない。

教育というものの形と理念についてももう一度静かに振り返ってみたいと思う。

醜い日本人

テレビの画面では、若者たちが汚い言葉で怒鳴っている。
ぼく感覚ではそれらの言葉を使う者たちは、たとえ普通の身なりをしていたとしてもチンピラ以外の何者でもない。
怒鳴られているのは背広を着た中年男性で、ひたすら頭を
下げている。

テレビドラマではなく、ニュース番組である。

北海道のあるスーパーマーケットが表示とは異なった牛肉を販売していたことが発覚した。お詫びするため、その店はレシートがなくても返金することを決め、実施したところ、販売した額の何倍もの請求が殺到した。しかもその返金を求めて並んだ者たちはほとんどが若者で、日ごろそのスーパーマーケットでは見かけない者たちであった。二度並んだ者までいたという。あそこに行けばお金が貰えると聞いてはるばる遠方からやって来た者もいた。

吐き気を催すほど醜い者たちである。

確かにその店のやった行為は、つまり偽りの販売行為は許しがたいものであるが、それに乗じて群がる者たちの気持ちの悪さは、現代の日本人の素顔の一面に思えて愕然とするのだ。

しかも、それに対して、たとえばあの久米宏はまったくコメントしないのである。自らが主役の番組でニュースとしては報道しながら、一言も語らないのだ。

どうして、「みっともない」の一言が言えないのだろう。

かつて「恥の文化」がさまざまな優れた日本人論や日本文化論で指摘された。

今やそのような美意識はなくなってきている。

ある調査によれば、日本人の恥の意識は、たとえば他の人たちが持っている物を自分が持っていないことへの思いであり、人としてとか大人としてといったものではないという。

そういえばかつて揶揄された<本音と建前>などというものすら消えうせた。本音ばかりがお日様の下であろうが闊歩している。

若者に限らない。

社会的な立場を持つ大人たちも、きわめて気持ちが悪いのだ。

国民の公僕たる官僚たちは自分の出世のことしか考えず、また官僚になりたかったがなれなかった特殊法人の者たちは役人でないのに役人風をふかせ、自らの劣等感をごまかそうとしている。

社会のためとか人間の幸せのためなどという理念は書き表された説明書の中でほとんど息絶えようとしている。

恥ずかしくないのか！

いったいどうしたのだろう。

少なくともぼくたちの父親たちはもっと美しかった。

東京の町を歩くと、おじさんたちの身なりがずいぶんとこざれいになったことに驚くが、その顔つきやまなざしの下品さには身震いを覚えてしまうのだ。

おーい、みんなどうしちゃったんだよッ。

ある政党の党首に自分の番組に出てくれないかと出演依頼をしたが断られたからと、「あんな政党つぶれてしまえ」とテレビの生番組で叫ぶ田原総一朗という似非ジャーナリスト、何を勘違いしたかタレント大学教授をやめて比例区から立候補して政治家になり、その政党のことはあまり知らなかったからとその政党を離れたにもかかわらず議員辞職しない厚顔の田嶋陽子、そのおろかさにはとっくに気付いていながら、つまりは心の中では馬鹿にしているくせにエヘラエヘラと笑いながら付き合っている政治家や大学教授や評論家たち。

ぼくは激しい怒りの中で、しかしながら顔を赤らめてもしまうのだ。

そういった現実やニセモノの権威といったものにぼくもいつしか取り込まれてきてはいないかと。

もう一度、じっくり足下を見つめてみよう、ささやかでもさわやかな呼吸をするために。

プライドの在処^{ありか}

北に住むぼくは、毎朝 5時半に起きる。家を 6時 20分に出て、キャンパスに着くのは大体 8時頃である。

駅に降りて、なだらかな坂を登っていくと、Charlton House が迎えてくれる。ぼくはこの朝の清新な空気が好きだ。春の初々しい若葉も、夏の力強い青葉も、秋の紅く燃えた葉も、そして身を硬くした冬の裸の木々も、ぼくは好きだ。新しく生まれた朝の中で、ぼくもまたもう一度生き返ることができるのだ。随ちていくような疲れた夜の闇の中から戻ってくることでできた喜びである。

その朝もまたぼくは Charlton House の前庭にたどり着くと、大きく深呼吸をした。すると傍らに座り込んでいる一人の学生に気付いた。

「やあ、おはよう。どうかしたの？」

「おはようございます。ここにこの前せっかく植えた球根が掘り起こされているものですから」

見ると、黒い土の上に球根が露出している。つい先日、MADD (Make A Difference Day) という日に学生の有志の皆さんが植えたばかりの球根である。このことは地元の新新聞などに、大きく写真入りで報じられた。

「大風が吹いたためか、あるいは栗鼠のせいかもしれません」

「そうだねえ」

頷きながらぼくは、とても温かい思いに包まれた。派手なイベントの後、忘れ去られたようになっている庭の花壇をこの学生は何度か見に来ていたのだろう。植えた後の成長を見守り続けていたのだ。だからその変化に気付くことができた。一人静かに球根を植えなおすその学生の姿にぼくは、つぶやいた。

「教育もおんなじなんだよね」

＊

11月 23日、土曜日。朝 9時から D29 期の学生の「コミュニケーション原論」の「個人演習研究発表会」に参加した。午前中は二つのクラスに分かれて行われたので発表のすべてを聞くことはできず残念だったが、いずれも意欲的で真っ直ぐな姿勢の感じられる気持ちの良い発表だった。それぞれの発表に確かな触感が感じられた。

直接手で触り、相手の温もりを感じて始めてわかるものがある。相手の目を見、声を聞く。そうした営みは、ぼくたち人間という動物が＜他者と共に生きる＞というときの最も基本的なコミュニケーションの形だと思う。コンピュータを核とした通信媒体がめまぐるしいスピードで進んでいくが、それらは決してぼくたち人間が互いに繋がろうとするときの媒体の中心に座るものではなく、また中心に座ってはいけないものだと思っている。

教育の世界も大変な勢いでコンピュータ化が進んでいる。あるいは国際化が進んでいる。それらの持つ特性は認めるが、なんだか表面の華やかなものばかりに目が奪われていて、確かな質感を伴わないモノや人間たちばかりが闊歩していて、ぼくには愚かな現象に思えてならない。

教師たちのまなざしも変わった。キーボードを打つ指先は鍛えられたが、心の陰影をわかろうとするまなざしや意欲ははるかに劣化した。

人が人を育てる。この偉大なる場に立ち会う者は、触れたものの温もりを、悲しみや喜びや怒りを、絶望や希望をしっかり抱きとめようとしなければならない。

コミュニケーション原論の発表会がぼくたちに教えてくれたことは、そういった場から何を学んだかということだけでなく、そういった場から学ぼうとした、その姿勢の尊さである。

＊

球根は大丈夫だろうか。もうすぐまた、卒業の季節である。君たちは誇るがいい。君たちには君たちのプライドがいったいどこに存在するのかということへの確信があるのだから。

夢、そして祈り。

新しい年である。

2002年の終わりは風邪を引き、全身が不快な熱に包まれてぼくは、一息ひと息、確かめるような呼吸をして横たわっていた。

横たわりながら、いろいろなことを考えた。

2002年、夏、ぼくの長兄が死んだ。死ぬ直前に彼は、ぼくに長い手紙をよこした。「まだ死ぬわけにはいかないんだ、会いたい」と書いた彼はしかし、まもなく死んだ。

人は死ぬのだ。

ぼくだけは死なないと強く思っていたぼくが、いつからだろう、死んでもいいな、と思うようになったのは。

そう思うようになってからぼくは、ぼくが死んだ後のことを考えるようになった。

ぼくが死んだ後、ぼくとかわりのあった人たちがみんな幸せであつたらいいな、ぼくは静かな気持ちでそう思う。

そしてまた、死を迎えるまでの間、つまり生きている間にぼくがしようとする事とはいったいなんだろうと考える。生きている間にどうしてもしたいこととはなんだろう。

そのことを仮に夢と呼ぶことにすると、ぼくの夢とはなんだろう。

夢。

夢を持ち、理想を掲げ、それらについててらうことなく語ることができ、それらを懸命に追い求める人間であつてほしいと、ぼくは学生たちに説いてきた。

しかし、そのぼくの、ぼく自身の夢とはなんだろう。

*

学校に通うようになると次第に目の輝きを失っていく日本の子どもたちの教育を変えたい、先生と呼ばれる人たちが本当に教育の力や可能性といったものを信じていることができるような、そんな豊かな教育の世界を創ってみたい、言葉の力を持った詩で満たされた詩集を出したい、人間存在の意味を問うような小説が書きたい、などなどと思いつかべながら、それらがぼくにとって夢というべきものなのか、そう問う時ぼくは、少し違うな、と思ってしまうのだ。

ぼくが求めようとしているものはもっと得体の知れない異質のものではないか。

それは闇の中に隠れていて、もがいてももがいてもぼくには見えない。

そこに潜むものはあるいは恐ろしいほど危険なものではないか、と不安さえ覚えてしまうのだ。

その不安は、ぼくが生きているということは何なのかといったものに通じている。

あるいは、ぼくはどこから来たのかということや、ぼくはどこへ行くのかといったことについての解くことのできない問いに対する苛立ちでもある。

*

そしてまた、さらに思うのだ。

もし仮にぼくの夢といえるものが見つかったとして、ぼくは果たしてその夢というものの実現のためにいったい何に祈るのだろうか。

祈り。

宗教的な響きを持つが、それはまた信ずる心と言い換えてもいいだろう。

ぼくは何を信じることで夢を追うことができるのだろうか。

いや、ぼくには何かを信じる力があるのだろうか。

そもそもぼくは何かを本当に心から信じようとするのか。

*

新しい年が来た。

窓の外では、静かに雪が降っている。降り積もる雪を眺めながら、子どもの頃ぼくは何を夢見ていたのだろうかと思う。いつの間にか大人になってしまったぼくが、けれどもまだ佇んでいる姿は、きっと幼く、滑稽だろう。

しかしなおぼくは、時にじっとりとした汗をかきながら、求めながらなかなかその姿を現さない夢を想い続けている。

丹田

感動するとはなにか

さてよ、と思うのだ。

ぼくたち人間はさまざまなことに感動する。たとえば名古屋を発ち東京に戻る新幹線から見えた大きな大きな富士山にぼくはじっと見とれた。海外で永く暮らしているせいかな、こういった日本の質感は涙腺を緩ませる。

D29期生の渡辺未知さんが写したホスピスのおばあさんの笑顔は、日常に汚れたぼくを洗浄する。

そういった心打たれる思いをぼくはいつまでも大切にしたいと願うが、直後に起こる下世話な諸事にすぐにそういった感動は蒸発してしまう。

感動したことは確かなのだが、その感動をいつまでも確かなものとして心の中に抱きしめておくことができないのだ。できているような錯覚はあるのだけれども、それはほとんどニセモノだ。得られた感動を貧しい言葉と卑しい智恵によって形あるものとして整理し、納得し、そこからやや道徳的な教訓を導き出し、そして安心している。そんな気がするのだ。

そういうとき、ぼくの心のどこかが、「なにか違うな」と呟き、かすかに自分自身をあざ笑っているような不思議な感覚を覚え、ぼくは考え込むのである。

そしておそろしいほどの寂しさが襲う。

日本に出張しているおおよそ3週間は無機質のホテルの部屋の天井を毎日早朝、睨み続ける。ああ、たまらなく寂しいと思う。ロンドンの朝も同じで、通勤の車窓がぼくを慰めてくれたりはめったにしない。

激しい感動が、人という動物を確かに充実させ、成長させ、安心させるならば、ぼくはその感動を求めて彷徨しよう。

がしかし、もはや薄っぺらな感動はいらない。感動ごっこはぼくの貧弱でかつ尊大な精神をよりいっそう蝕んでいく。言葉もまた、表層を滑っていくような、そんな気持ちの悪い戯れには訣別しよう。

ぼくが今欲しいと思う激しさは、たとえば丹田のあたりが、あるいは胸の奥深くがいきなりわしづかみされるような、つまりはぼくが生きるということに本当に確かに絡み付いてくるような、そんなものなのだ。表面的な智恵で構成された仕込まれた感動などいらない。

いや、かすかな感動を、あるいは表面的な感動と思われるものを、確かなしっかりとしたものにて育てていくという取り組みもまた必要かもしれない。

努力するということだ。

学生諸君の学習に組み込んだコミュニケーション原論は、その発表会で見聞きする限り感動にあふれている。いずれもさまざまな出会いや活動を通して得られた感動が「人と人とが繋がるとはなにか」という視点から報告されている。

発表を聞きながらぼくもまた心が動くのを感じる。

しかし本当の学びはそこにとどまってはならない。本物の感動に出会った者は必ずや成長をするのだ。

たとえば、年老いた人たちの世話をしたり子どもたちの真っ直ぐなまなざしと出会うことで感動したと報告する者には街を歩く人々に対するまなざしの変化が表れてくるだろう。老人ホームやホスピスの人々にはやさしく接することができた者が電車の中では席を譲ることも思いつかないとしたらなにをかいわんやである。

人と人とのつながりについてさまざまな活動を通して学び感動したという者が傍らの同級生や先生たちに対する思いやりを欠いた言動をするなら、そんな感動なんかまったくのニセモノなのである。

こういったことについてよく考えてみる必要がある。

イベントや他人が見ているときでなければゴミを拾うことができない人間や、活動の一つとしてホームを訪れたときにしか老人たちに微笑むことのできない者たち、人と人とのつながりに感動したと言いながら日常生活では挨拶一つ満足にできない者たち、言葉遣いが乱暴で相手に対する配慮のない者たち、そういった者たちはつまり、本物の感動なんかしてはいないし、本物の感動に出会う力もない者たちなのだ。

猫

少し強い酒が飲みたいとウイスキーのボトルの封を切り、そのままストレートで味わいながら、Can the Japanese change their education system? (Goodman & Phillips) を読む。

ソファからずり落ちるように床に座り込み、時折辞書を引きながら、少しずつアルコールに侵されていく感触を楽しむ。

深夜、ぼくは自分の感覚が遠くへ旅立つように必死になっている。置き去りにされ、抜け殻となる自分を求めている。しかしぼくの小さな精神はそれを許さない。旅立とうとする精神を解放する勇気がないのである。

Andrea Bocelli の *Aria* を流す。盲目のオペラ歌手の声に青い匂いを嗅ぐ。

ぼくのなにかを壊さなくては、とそう思ったとき、窓の外から猫がのぞく、「ミャアアオーウ」と。近所の住人が引越す際に無情にも置き去りにしていったようで、野良猫になってしまったのである。

ぼくは猫が苦手である。

その猫はいつからか、まずは庭に面した食堂にやってきた。庭の芝の上に上品に座った彼女(?) は、食堂のガラス戸越しに食事をするぼくをじっと見つめている。そして時折、「ミャアアオーウ」となにか話しかけてくるのだ。ぼくは家人に「おなかすいているのではないかな」と話しかけるのだが、といて、だからなにかやりなさいとまでは言わない。

だが、次第にみんなで食べ物を与えるようになる。「そんなことをすると、習慣になって、あの猫はいつもやってくることになるのじゃないか」と、ぼくは冷たく忠告する。

その猫には好き嫌いがあるという。いわゆる残飯などは一切食べない。

食べ物を与えられることに慣れた猫は、空腹のとき以外も訪れてくるようになる。絶対に家の中に入れてはいけないよ、だってどんな病原菌を持っているかわからないのだからね、というぼくに娘が、「パパ、猫が怖いんじゃないの」とからかいの言葉を投げつける。

馬鹿な、猫なんか怖いはずじゃないか、と娘を睨むぼくは、実は怖いのだ。いや猫に限らず、犬もネズミも、鳥だって、生き物はすべて怖い。

食堂のガラス戸を引っかきながら「ミャアアオーウ」と訴えるのに負けた心優しい次男は、食堂以外には行かせないし、彼女(?) がいる間はぼくが一緒にいて悪さはさせないからとその猫を家の中にととうとう入れてしまった。ぼくはその間、食堂には入らない、入れない。

今日も来たのか、食べ物はあったのか、気がつくについそんなふうに見ている自分に気付く。それどころか、ワインを買いに行ったついでにキャットフードを買ってきて、娘に鼻の辺りで笑われる。いや、たまたま傍にあったから買ったまでだ、と必要のない言い訳を行ったりする、だが酒屋にはキャットフードはない。

しかし、ぼくは未だにその猫と目を合わせることができない。怖いのだ。目を合わせてはいけない、なぜかそう思っていた。

だからその夜、居間の窓越しに訪れた彼女の「ミャアアオーウ」というささやきについ目を合わせてしまったぼくは、そのまま彼女と果てしない会話をするようになってしまった。合ってしまった視線をはずす勇気がなかったのである、怖くて。

「君はどうして猫なんだ？」

「あなたはどうして人間なの？」

「一人で彷徨う君は寂しくないかい？」

「あなたは寂しくないの？」

ぼくはウイスキーと論文と Bocelli の混ざった頭で猫との会話を続けた。彼女(?) は能弁で、時にぼくの論理を論破した。しかも彼女(?) のまなざしには少しのいやらしさもなかった。それがなんとも心地よく、ぼくは彼女を真似て四本の足で部屋の中を歩いてみたりもした。

気が付くと彼女(?) はいなくなっていた。ぼくは短い旅を終えた。

駅

1

寄り道をしたため、いつもより遅い列車に乗る。Charing Cross から研究所の本部のある Charlton へは 20 分程度である。ぼくはほぼ毎日、この Charing Cross から出かけて、同じ Charing Cross に戻ってくる。当たり前じゃないかと思われるかもしれないが、そのことが今日はどうしたわけか気にかかる。

2

駅は出発の地であるとともに、到着地でもある。始まるところが終わりの地でもあるということだ。見送る人がいて、出迎える人がいる。

3

ロンドンには Charing Cross 以外にいくつかの大きな駅がある。Euston, Paddington, King's Cross, London Bridge, Waterloo, Victoria 等、いずれも東西南北に列車が発着する。平地でドームになったこれらの駅の佇まいがぼくは好きだ。まるでデパートの中にいるような日本の駅とは根本的に違う。そこには永い歳月が埃や煤の形で積もっている。そしてそれらの埃や煤が、始まりと終わりの地であるそれぞれの駅に、そこで生まれては消えていく人間の夥しい数のドラマの劇場としての風格を与えている。

4

この春、日本の小学校ではたくさんの新小学一年生が真新しいランドセルを背負って登校したことだろう。「行って来ます」と言って家を出た子どもたちは必ず、「ただいま」と戻ってくる。もともと「行って来ます」という言葉は「行」き、そして「来る」のだから当然である。

5

人は<帰って来る>ために<出かけて行く>のだ。けれども、出かけて行ったまま帰ることのない旅立ちというものもある。

6

嫁ぐ日の花嫁は、「お世話になりました」と家を出て行く。その娘が「ただいま」と帰って来たのでは親としては困るのである。

7

戻って来ることを拒否した旅立ちが、時にぼくを誘う。

たとえば、こうだ。英国でも日本でも大学その他の機関の日本語教育の関係者や英語教育の関係者たち、あるいはその他のいわゆる先生たちに会うことが多いのだが、会う者の中には、会って話をしているうちに、あまつまらななあ、とそう思わせる者たちが少なからずいる。斜めにしかものが見られない連中はいつも愚痴ってばかりいる。汚臭のするため息をつき、そのくせ極めて打算的で<今>に迎合しながら苦笑いをしている。「現実」という言葉や「世の中」というものは」といった言葉でもって明日という可能性を封じ込めようとする者たちである。旧来の権威にしがみつき、そこでしか呼吸のできない者たちである。教育者だけではない。国という虎の威を借りて小ずるく動き回る役人や半役人たちにはむしろこの種の人間が多い。

そういう者たちと会っていると、「さようなら」とつい言いそうになる。しかし、こういった連中と時を過ごすぼくはつまり、同じ穴の貉というわけで、格好をつけてたまに遠くへ出かけて行ったとしても、結局黄昏時になるときちんと戻ってきて、そういった連中と同じ空気を吸っているのだ。そう思えて息苦しくなるのである。

早く「さようなら」を言わなければ、明日も同じ駅からぼくは偽りの旅に出かけるだろう。そういった時に必ず掻く気持ちの悪い汗から、きっぱりと訣別したいのだ。

8

ぼくは戻らぬ旅に出よう。たどり着いた駅を新しい基点と定めてさらに新たな旅に出る。駅はいつも出発する場所である。

表現するということ

今、ぼくは日本にいる。日本に戻ってからもうすぐ3週間になるというのに、午前2時前に眠ることがない。時差の影響もあるが、徹底的な仕事ラッシュである。忙しいのはいい。ぼくはもともと仕事が好きなのだから。

仕事が好きだということは、恵まれたことだと思う。もしも好きでやっているのではないならば、きっと苦しいんだろうなあ、と思う。

つまり、ぼくは幸いなことに好きになれる仕事とめぐり合ったということだ。けれども、仕事をしながら全く苦しいことがないというわけではない。いやむしろ苦しいことのほうがはるかに多い。しかしぼくは教育という仕事の持つ<喜び>というものを知っている。

その<喜び>をどのように言葉で言い表すかといえ、なかなか難しい。喜びや悲しみといった感情を表す言葉はいつも不十分なのである。不十分であるということは、それを言葉で表そうとするときに、ある程度の妥協を迫られることを意味する。実際の感情と表された言葉の意味世界とのギャップに対する妥協である。妥協することが嫌ならば詩的言語を用いるか、あっさり言葉での表現をあきらめ、他の表現方法を選択するかしなくてはならない。

たとえば、こうである。ある人を愛し、その思いを表現しようとする。「愛している」という言葉は確かにある程度の思いを表現するであろう。しかしこの言葉一言ですべてを表しうるほど恋をする者たちの思いは単純ではない。それを表そうとするには、恋する者は詩人になるしかないのである。「愛している」と言う代わりに「君の視線の先に何があるのかが気になってきよるきよろしていたから、喫茶店で飲んだのがコーヒーだったか紅茶だったか覚えていないよ」と愛のひとつの思いを伝えようとするのにも大変なエネルギーを費やす。その恋する者が突然、ハイネやボードレールに変身したからなのだ。いわゆる現代詩の表現が、藤村や道造、あるいは啄木といった近代詩と比べて難解だと言われるのは、複雑になった現代人の苦悩の表現にはより抽象性を帯びた象徴性が求められ、強まるからである。いずれにしても古今東西の詩人たちがその作品を表すことで闘ったのは、言葉の可能性への挑戦であり、安易な言語表現に妥協することへの拒絶であった。裏返せば、あくまで言葉の力を信じようとしたのである。だから言葉にこだわったのだ。しかし、言葉の力を信じようとし、言語表現の可能性を信じようすると、挫折が繰り返され、裏切られることになる。けれどもなお、あくまで言葉による表現に挑戦しようとするのである。いつだったか、ロンドンにやってきた谷川俊太郎が「ぼくはもう詩は書かない。現代にはもう書くものがなくなったから」とまるで現代社会のせいでの詩的表現が不可能になったかのように言っていたが、なかに、谷川には書けなくなったというだけのことである。詩人としての力が、まなざしが消えたということだ。

他方、言葉の力に頼らない方法とは、愛する者を抱きしめ、接吻するなどといった<行為>によるものである。触感的にお互いの思いを確かめることができるだろう。けれども、そういった<行為>に不純なものが含まれないかと言えば、否、大いに危険なのである。

言葉による表現に見られる妥協や作為をそれらの<行為>にたやすく見出せるような現代である。つまりはウソの思いがよりはっきりとした<行為>という表現方法によって表されることによって、ウソをカムフラージュしていこうとするのである。哀しく、寂しく、醜い。

こうしてみても、われわれ人間の表現はいつも充たされていない。しかし、そのことを嘆く必要はない。言葉も行為もそれが確かな思いにつながってさえいれば、すべては象徴性を帯びて<伝わる>からである。言葉も行為も十全たるものではない。それは言葉そのものが本質的に象徴的な、比喩的な存在であるということの意味する。<行為>も同様である。もっと言えば、われわれの<生>そのものが象徴的存在であり、時に抽象的でさえあったりするのである。だからこそ、表面的なものについてできうる限りの厳密さを求めるとともに、それが伝えようとするもの自体についてより確かなまなざしを向ける努力が必要だろう。

予感

人には予感する力がある。

ものごとが芽生え、始まろうとする予感、あるいは、こわれ、くずれ、終わろうとする予感、そういったものを人は感じることができる。

平家物語の言葉を借りずとも、すべてのものごとがいつまでも同じ形でとどまることができないことをぼくたちは識っている。

どんなに美しい人も時とともに顔には皺を刻み、髪は白くなり、老いてゆく。植物も動物も、いや命のあるなしに限らず、時は変化を義務付ける。

そしてその変化の兆しを人は感じ取ることができる、そう思うのだ。

予感する、とはそういうことだ。

人を愛するというのもその予感から始まる。「私はこの人を愛することになるのかもしれない」という無意識の認識が起きる。それは素直な笑顔となって現れることもあれば、まったく逆の表情となって現れることだってある。嫌いという感情は好きという感情と同じ座標軸の上に位置するといえるからである。

あたかも自然に湧いてきたかのような恋情は、もしかしたらという予感とそれを現実のものにしようとする意志によって生み出されたものなのである。

その意志もまた、自覚される場合とされない場合とがある。愛そうとする意志の存在は、ただなんとなく愛というものが漂うがごとく存在していると考えような若者にはわかりにくいものである。

まったくなんらの努力もないところには愛というものは存在し得ない。そこにあたかもあるかのように漂っているものは予感なのである。愛の予感なのであり、愛ではない。

その予感を意志が確かなものに変えていく。その意志には、その者の知性や人格などといったその人間のすべての力（ぼくはそれを人間力と呼んでいるが）が作用する。

言葉を換えて言うならば、愚かな者は愛することができないということである。

始まりが心地よい予感であるとするなら、終わりは不安といった穏やかならぬ思いである。

恋愛の喩えで続けるならば、心がすれ違いうまくいかなかったとき、人はその恋の終わりを予感する。別れたくないという思いはしかし、別れることになるのではないかというおそれと同義である。

まずは予感すなわち不安との闘いが始まる。多くの場合その予感は当たるのである。始まるときも終わるときもそれらの予感にはそれぞれ根拠というものがあるからである。

つまり、予感を生み出したのは他ならぬ自分であり、自分たちなのである。

予感しかし、予感に過ぎない。始まりが予感と意志によって始まるとするならば、終わりもまた同じく予感を意志の力によって現実のものにする。

終わろうとして終わるのである。

このことはしかし、愚かな者たちにはわからない。自然にそのようになったとしかとらえられないのである。人間力のなにかが足りないのである。

もしも終わりたくないならば、予感に克つ意志力を持つことだ。予感の根拠を一つずつ克服していこうとする意志力を持つことである。

始まるのも終わるのも自らの選択なのである。始まるのではなく始めるのであり、終わるのではなく終えるのである。

予感することのできる人間はしかし、その予感に支配される必要はない。予感を希望の思いに変える力こそが、その人間の人間力なのである。

変化を避けることはできない。その変化を予感し、好ましくない変化であるならば、その予感に縛られず予感を希望に変える意志を持つことだ。望ましい形に変えていくことだ。

学ぶということは、そのための力をつけようということであり、予感という呪縛から解き放たれんとすることなのである。

形式的桎梏、あるいは権威

深夜、読書とウイスキーを楽しみながら居間で寛いでいると、長男がやってきて目の前のソファに腰を下ろす。
飲むか、と聞く。

いや、もう寝るから。

そうか、もう寝るか。

パパ、これ、すごくいい詩だよ。

なんだね。

ボードレール。

そうか、ボードレールを読んでいたのか。

彼が手渡した一枚の用紙には左右対照の形でフランス語と英語の詩がタイプされていた。

パパもね、ずいぶん昔だけでもね、そう、高校生になったばかりの頃、ボードレールの詩集を買ってね、読んだことがあるよ。

*

高校生だったぼくは毎日のように本屋に立ち寄った。文芸書、文庫本、雑誌、学習参考書・問題集とあらゆるコーナーを見て回った。図書館もいいが、本屋には新鮮な<今>という時代の息遣いが感じられた。

ある日ぼくは詩集を集めたコーナーで、ほぼ正方形をした本を手にとった。

開いたページを読む。飛び込んできた言葉に、ぼくは顔が赤らむのを覚え、すぐに周りを窺った。再び開く。次のページも、そしてその次も。

ボードレール Charles-Pierre Baudelaire という詩人と出会った瞬間である。手にした詩集は『悪の華』 Les Fleurs du Mal。

真っ赤な顔をしながらも購入したその詩集を家に持ち帰り、自分の部屋でこっそりと読み耽った、そういった日々が今、たまらなく懐かしい。そしてそれには父の本棚から持ち出したモーパッサンの『女の一生』をある種のたかまりとともに読んだ記憶も含まれる。

*

朔太郎（「新しき欲情」。引用は、漢字表記を除き原文のまま）は言う。

「阿片喫食者の夢にみる月光のやうに、いつも蒼ざめた病魔の影に夢遊して居たボドレエルのやうな人が、その反面の人格に於て、あんなにも明徹な、白日のやうな理性を隠してゐたといふことは、推察するだにも痛ましい近代の悲哀である」

「その理知的な映像は、到底また一つの最も切実な情緒<永遠への郷愁>を慰めることができない」

「この<自ら信じない幻像の实在>に向つて、たえず靈魂の悲しい羽ばたきをした人」

「真の近代的な神秘詩人」

これらはそのまま、かく言う朔太郎自身に当てはまる。

*

産業革命はイギリスからフランスへ。それまでの貴族に代わってブルジョワジーが台頭する。労働と節約、勤勉と堅実、家族・健全・平穩、すなわちあらゆる過激さを退けてほどほどの「中庸」を重んじるのが彼らのモラルであった。

その時代に生きたボードレールは、そのモラルに反逆し、現代人が無縁ではありえない「悪」の諸相を描こうとする。淫蕩、嗜虐、同性愛、病的倦怠といったテーマが取り上げられ、1857年6月に刊行された『悪の華』は当局により告発され、「公衆道徳良俗紊乱」という理由で裁かれ、有罪となる。

しかしそこに貫かれ希求されていたものは、絶望的なまでの<理想>であった。<死>である。

*

朔太郎の一つ一つの詩作を推敲過程研究という形で追いかけた若い頃のぼくはいつしか、朔太郎やボードレールのまなざしを身に纏うようになっていたのかもしれない。冷たいほど研ぎ澄まされた論理と破壊的な情念、それらを追いかけてきたような気もする。

ゆえに今のぼくは、日常的なる形式的桎梏、あるいは陳腐な権威を前にして、いつも歯噛みして疲れてしまっているのではないかと、息子が去った居間で独り、考え込むのだった。

苛立ちや焦りが自らに起因することはとうにわかっていたが、まさに「守ろう」として「縮んでいる」だけなのだろう。

もう一度、闘ってみるか。

偽りのコミュニケーション能力

先週は三つの日本の大学から教授たちがやって来た。それぞれの大学から履修単位に関する提携等の相談を受けた。会議が終わり、最近の日本における教育事情について雑談をしていたとき、実に不思議かつ不愉快な話を聞いた。

ある小学校に外国人の ALT (Assistant Language Teacher) が派遣された。ところが、その学校の校長はすぐに教育委員会に抗議の連絡をした。「外国人教師を派遣してくれると聞いて期待していたが、なんと黒人ではないか」と。

どうやら、たとえばイギリス人というものが、あるいはアメリカ人というものが、白い肌をした人間だけでなく黒い肌の人も黄色い肌の人もいろいろな肌の色の人たちでもって構成されているということをこの校長先生はご存知ないらしい。

国際人養成を謳い文句にしている幼稚園の園長が自分の娘の留学先のホームステイの大家が黒人だということでカンカンになって抗議してきたという話もかつて聞いた。

国際理解教育の一環として導入された外国語教育 (英語教育) であるが、そこで教育されようとする<国際理解>や<言語コミュニケーション能力>とはいったいどのようなものなのか。私は寒々とした思いを抱くのだ。

*

日本人は白人になりたいのである。

英語を話す力は、白人に少しでも近づこうとする日本人にとって必須のツールなのだ。

アメリカのような強い国になりたい日本は、いやアメリカの弟分を気取ったりアメリカの一番の子分になりたかったりする日本は、日本国民に、とりわけ子どもたちに英語を習得させて、なんとか「私たちはあなたたちアメリカの人たちに極めて近い国民ですよ」と言いたいのである。

日本では「アメリカ」という言葉と「外国」という言葉とは多くの場合、同義である。また同様に、「外国人」とは「白人」のことであって、それ以外は「外国人」という言葉の範疇にはすんなりとは入れようとしないのである。自らの皮膚の色が黄色いということを忘れて、いや忘れようとしているのである。

*

英語は、言葉は、そのために習得されるべきものとして位置づけられ、その教育は、国際理解教育なんて意識は、たとえあったとしてもそれは少なくとも表面的なものであって、まったくどうでもいいのである。

英語帝国主義という言葉がある。英語が世界を征服していくのである。英語という言葉や英語人的価値観や発想が何よりも正しいこととして位置づけられていく。

そして、日本という国や日本人はその帝国主義の植民地化を進んで受け入れ、自ら支配されることを望んでいるのである。支配されることを自分が欧米人になることと錯覚しているのである。肌の色が少しずつ白くなっていく、との愚かな妄想の中でたにたと気持ちの悪い笑い顔を浮かべている。

*

そのような価値観の中で、国際教育の一環と位置づけられた外国語教育が、いや英語教育が始まっていく。21 世紀は国際社会であり、国際人にならなくてはというわけで、コミュニケーション能力としての英語力をつけようと騒いでいるのである。

騒いでいる者たちのコミュニケーション能力とは何かといえば、つまりは白人社会におもねる力である。裏返せば、白人社会の一員に加えてもらい、その他の社会、たとえば有色人種の世界を見下す優越感を得たいということである。

*

コミュニケーションしようというのは、相手をおもねるということではなければならない。その愛する対象は自分とは異なった、しかし自分と同じ尊い生命をもった存在である。異なったものの存在を正確に理解し、相手を同化させようとすることなく愛そうとする、つまり異なる存在を認めようとする、そのための能力こそがコミュニケーション能力と呼ばれるべきものではないか、ぼくはそう思っている。

そして、その能力をつけるための教育の一つが外国語教育、たとえば英語教育なのである。日本語教育もちろんそうだ。

ぼくたちは偽りのコミュニケーション能力やそれを養成しようとする教育の幼稚な暴力性に打算的な迎合をしてはならない。

旅館に泊まる

ブーンという羽音で目覚める。

蚊である。

眠れなくなったのだが、真夜中の暗い部屋でぼくは枕元の明かりをつけて、ああ、いいなあ、と呟く。

今回の日本出張では、旅館に宿泊したいという前々からの願いが叶えられた。

数ヶ月前、ぼくの友人が家族でロンドンにやってきた。東京の大学の教授である彼とは15年近く前から親交がある。彼らと食事をしながらいつもの口癖でぼくは、「もう無機質のホテルはうんざりだ。どこかいい旅館はないかなあ」と彼に言った。

「じゃ、ほら、例の旅館に泊まらない？」と彼のおばさんが経営する旅館をすすめてくれた。

「例の旅館」とは特別な旅館で、いわゆる「ものかき旅館」といわれている。作家たちが小説や脚本等を書くために泊まりこむ旅館である。

ぼくがその旅館に泊まりこむ前日まで、映画監督の山田洋次がそこで書いていた。彼の「寅さん」シリーズや「学校」あるいは「たそがれ清兵衛」といった作品群はここで生まれた。野坂昭如もここで搾り出すようにモノを書き、その小説の出来上りを待って隣の部屋でつめている出版者の社員にはいまや人気作家となった村松友視などもいた。伊集院静もあるいはアニメーションで世界的作家となった宮崎駿もここで執筆する。NHKの朝のドラマや大河ドラマもここから生まれた。ぼくの隣の部屋はNHK御用達作家専用の部屋である。ここで執筆のためカンヅメにされるということとはつまり一流の作家として認められたということで、玄関で感極まって泣き出した作家もいたという。

東京の神楽坂の象徴のようにしつとりと佇むその旅館は、女優の小暮実千代（故人）が実妹に始めさせたもので、利用者は華やかである。高倉健や吉永小百合が訪ねてきたりするのである。

ふすまで仕切られた部屋は5部屋程度しかなく、よって一般には公開していない。ひっそりと隠れ家のように佇み、その内部ではモノを書く人間たちの頭を掻き筆りながらの闘いが繰り広げられている。

設備等はまったく質素で、前回まで使っていたホテルと比べるとはるかに不便である。メールも使えない。部屋には洗面所もお風呂もなくすべて共用。小さなお風呂に入っていると、間違っただけの人が入ってくるのだってある。

「明日の朝食は何時にいたしましょうか」と聞かれたので、「8時にしてください」とあんまり早いと悪いからと遠慮がちに、それでも遅めの時間のつもりでお願いする。何日かはそれですんだが、なんとなくぼくだけが早い時間から活動している気配を感じる。

それで一応、「あの一、もっと遅くてもいいんですけど」と言ってみる。

すると、「あ、そうですか。じゃ、10時にしましょうか」と返ってきた。

なるほど、友人のその教授からは「朝食は遅ければ遅いほどいい、たとえば12時ごろとか」と聞かされていた。作家たちは夜行性で、朝は寝ているのである。

確かにいろいろと不便ではある。しかし、それはたとえば日本とイギリスの違いのようなものである。日本という国はとにかく便利な国である。朝も昼も夜もはや時間によってできないというようなものはない。いつでも何でもできる。区切りのない社会である。昼も夜も、大人と子どもも、女と男も、先生と学生も、親と子の区切りも何もかもなくなってしまった。お金さえあればそんな区切りは楽に取り除くことができるのだ。

街はおそらく世界一清潔だろう。地下鉄も新幹線もすべて時間通りにやってくる。

それに比べロンドンでは、大人の社会では子どもの発言権はない。先生は敬われ、敬われる存在として厳しく教育される。街ははっきりと線が引かれ、ごみだらけの街があれば、おとぎの国のような地域もある。地下鉄や電車が時間通りに来なくても客はまったく驚かない。

日本に比べればロンドンは本当に不便なところである。

しかしぼくは、そのロンドンの不便さがそれほど嫌いではない。頭にくることはしばしばだが、それほどストレスにはならない。便利だと思っているものがなくなっても実はそれほど不便ではない、そんな気がするからである。

豊かな緑や重厚な歴史に囲まれて厚みのある文化を味わっていると、便利さは多少我慢してもいいかといった思いになるのである。

旅館の方が、玄関で靴をはいているぼくのそばに正座して、今日はいいい天気になってようございましたね、と言葉をかける。そして出かけるぼくに三つ指突いて、行ってらっしゃいませ、と送り出してくれる。

この風景は懐かしい。母の姿である。

墓前に立つ

日本出張の際、時間を割くことができれば、できる限りぼくは父と母の永眠の故郷を訪れる。
墓の前でぼくは語りかける。

*

ぼくは今、さまざまな闘いの中にいます。そのいずれもぼくにあいまいな対応を許さない極めて厳しいものです。
お二人が生きていてくれたらと思うと、ロンドンで電車に乗っているときでさえ涙が浮かんでくることがあります。
生きていてくれたらと思いつつ、しかしもし生きていてくれても、ぼくはきっとあなたたちに何も語らないだろう
なとも思います。

ぼくはお二人が活着しているときも結局、ぼく個人の苦しみや悩みについては直接的には何も話さなかったように思
います。

そしてまた、お二人からも尋ねられなかったように思っています。

話したことといえば、「自衛隊は違憲かどうか」、「安保は必要なのか」、「地域開発のどこが問題なのか」、「筆
はどうやって持つのか」、「円切り上げをどう解釈するのか」、「学校の先生が考えなくてはならないこととは何か」、
「いま自分が何を考え、何をしなければならぬか、それだけを考えていなさい、後は自分で決めることだ」。

お父さんとの会話で思い出すのはこの程度ですべてです。社会情勢以外のことは抽象的な短い言葉を貰っただけで、
たとえば大学を卒業するとき、まだ大学に残って研究を続けたいというときも、結婚するというときも、「わかった」
で終わりました。

お母さん、あなたとはたくさんのお話を話したような気がしますが、ほとんど覚えていません。

お嬢さん育ちでお手伝いさんたちにいろいろお世話をしてもらって育った頃の思い出話や、まだみんなが下駄をは
いて学校に通っていた頃に、一人だけ革靴で登校していたという話をするときのまるで少女のような表情が思い出されま
す。

しかしぼくは、ぼくの悩みや苦しみといったものは話さなかったのです。

そのことがごく当たり前の親子関係なのかどうか、ぼくにはわかりません。きっと、みんなそうなんだろうな、とい
う気がします。

そしてそのことが悲しかったり、残念だったりはいしません。言葉によるコミュニケーションは、特に寡黙だったお父
さんとはあまりしなかったけれども、たくさんのお話が、たとえばモノの見方や生き方といった、そういうものが体中
にしみこんでいるという気がします。

親父もぼくのこの歳の頃、激しい不安感や苛立ちと闘っていたんだろうな、きっとあの頃、とぼくが若い頃垣間見た
お父さんの表情を思い出したりしています。

とにかく優しくお母さんの、しかし強い愛情は、優しさの強さというものをしっかりと教えてくれたように思
います。

こうやって墓の前に立ち、あなたたちに語りかけるぼくは、実はまだまだ甘えん坊の、泣き虫の、幼い子ども以外の
何者でもない、そんな気がします。

けれどもまた、ぼくの子どもたちはすでに大人になり、そのうち子どもを持つようになるかもしれません。

つながっていく命は、一本の線ではなく、それぞれの生が終わるたびに途切れる一点鎖線のようなもので、その一点
が前の生を生き残った者と後の生を生きる者とのメッセージのやり取りであるように思えます。

親が子に残すものは結局、私たちはどのように生きてきたかというメッセージではないかと思えます。そのメッセ
ージをどう受けとめるかは、子どもの責任であって、親の責任ではありません。一人の人間の生は、あくまでその人間
のものであって、その人間の中で、一点鎖線のように完結し、途切れていくものであると考えるからです。

ぼくは教育者夫婦のお父さんとお母さんのメッセージをぼくの勝手な解釈で引き継ぎ、ぼくの子どもたちや教え子
たちにつなげたいな、と思っています。

もう空港に行かなくてはならない時間になりました。ロンドンに戻ります。

またいつか、いろいろと話を聞いてもらうために、戻ってまいります。

明日を信じる力

教師の必要な力について考える (1)

1

ある程度の年齢になると、若者の言動に対していろいろと愚痴を言いたくなるものらしい。

「最近の若いやつはなっていない」とか、「世の中ってものがわかっていない」とかの類である。

この者たちにとっては、自分が経験した事柄が世の中の全てであり、常識である。

彼らは「終わった人間」として、その狭い世界と限られた経験から、「これからの人間」の未来の可能性を矮小化するるのである。

先生と呼ばれる者たちにも結構この種の輩がいる。

たとえば学校教育の場において、教師たちは勉強の成績でもって児童生徒を序列化し、その人間の評価を固定化する。教室にはただ一つの観点を根拠に、できる子とできない子が生み出される。

できる子は勉強することで成績が上がり、いわゆる成長する人間として認められるのだが、できない子は勉強しても成長しない人種として位置づけられることになる。

こうなると学校なんて面白いはずはないから、できない子とレッテルの貼られた子どもたちは大人たちへの反逆を企てることになる。

本当に学ぶことができれば成長しない人間などいない。

にもかかわらず、いわゆるできない子は、限られた世界しか知らない大人によって未来の可能性を摘み取られることになるのである。

2

子どもたちはいったい何のために学校に行くのだろう。

あるいはまた、人間はなぜ学ぼうとするのだろう。

それは、変わろうとするのである。

変わりたいのである。

昨日までの自分を変えようとするために人は学ぼうとするのである。

少しでも成長したいと願うのである。

それはつまり、学ぶことで自分は変わることができる、成長することができると思っているということである。

だからこそ学ぼうとするのである。

さらに換言すれば、学ぼうとする者には、あるいは学ぼうとする姿勢には、明日を信じようという希望のまなざしがあるということである。

このことを先生と呼ばれ、教えようとする者たちはよく認識していなければならない。

今教えようとするとき、目の前の学習者の全てが等しく、自分が成長することを、新しい明日を信じていることを。

そしてそのためには、教師自らが、成長を続けなくてはならない。

自らの成長を信じることでできる人間でなければならない。

そうでなければ、学ぶ者たちのまなざしをうけとめることはできないだろう。

残念ながら、にもかかわらず、先生と呼ばれる者たちの貧しく、ひたすら立ち尽くす姿のなんと多いことか。

明日を信じられずに佇む者たちは、ため息をつき、異なった価値観や論理で明日をもっと豊かにすがすがしく生きようという者たちの目の輝きがまぶしすぎて、ゆえにその視界を狭めようとするのである。

現実はその甘くはないよ、という言葉の腐臭に気付かぬ者はいない。

世の中というものは、と始められた長々とした言い訳の卑屈なコンプレックスに心から頷く者はいない。

それでもなお同調する者たちはすでに、明日を信ずることができなくなった者たちである。

明日を信じることができない者はゆえに、今日の終わりが怖くなる。

その恐怖感を紛らわすために、愚痴るのである。

「世の中というものは、……」

「現実、……」

と。

論理と情

教師の必要な力について考える (2)

I

ほぼ 3 週間に及ぶ日本出張を終えて、帰英のためぼくは成田空港にいた。空港内の寿司屋のカウンターに腰かけたぼくに、その愛すべき男はこう言った。

「先生は、やっぱり理系なんですね」

「ウン、そうかもしれないねえ」

ぼくはその男が言わんとしたことがよくわかった。だから、その場はそれで終えた。

「先生はなんでもかんでも論理的に整理しようとするけれども、人間の世界はもっと情というものの方が重要なのではないか」と彼は言いたかったのだろう。

そして彼がなぜそう言いたかったのかも、ぼくにはよくわかっていた。

II

理系であるか文系であるかといった分類法にはぼくはあまり与しようとは思わないが、一般に言われているように、学校の成績でどの科目が良いか悪いかといったことで片付けるなら、確かにぼくは数学や物理が得意だった。

だから、周りの者は理系の学部に進学するのだらうと思っていたらしく、ぼくが教育学部の文系を選択すると、不思議な顔をした。学校の先生も理系の学部を勧めた。しかし、教育者になりたいというのは小学生の頃からの夢だった。

数学や物理は好きだったが、それよりももっと国語に魅かれた。受験勉強はまったくしなかったが、国語の成績はいつも安定して高かった。模擬試験の設問はその出題意図までわかった。古文も漢文も何度か読むと自然に意味が取れた。辞書は好んで用いたが、学習参考書は要らなかった。漢字の勉強などはまったくしなかった。ただ、小説や詩はかなり読んだ。下宿先の部屋の中をうろうろと歩き回りながら道造や中也、朔太郎の詩を、あるいは漢詩を心を込めて朗読した。

数学や物理の論理に遊びながら、詩歌や文学の世界に酔った。

ぼくの中ではそれらのごく自然に共存していた。

だからぼくは、理系でも文系でもない。

III

三好達治に、「雪」という二行詩がある（『測量船』）。

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

小学校の教科書にも、中学校、高校の教科書にも登場するという珍しい詩である。

この詩の解釈には諸説がある。たとえば、この太郎や次郎を眠らせるのはいったい誰（何）かというものであり、この太郎と次郎は兄弟なのか、そうではないのか、などといったものである。

これらについては「詩的言語の詩教育理論」といった拙稿にまとめており、ここでは触れないが、その論旨は、この詩の言語構造にそれらの解釈のふくらみ（多様性）を産み出す要因があるというものであった。

文学の解釈・鑑賞に論理的アプローチを試みたのである。

そうすることで、作品理解の深部に近づくことができると思ったのである。

IV

しかし、論理は、あくまで論理である。

ぼくは論理の絶対を謳おうとは思わない。人間社会のすべてが論理によって説明し尽くせるなどとは全く思っていない。ゆえに、哲学の論理性は楽しいと好んでいるが、しかしそれは、文学の宇宙の一部に過ぎないとも思っている。

けれどもまた、論理を蔑ろにする輩には、どうしても違和感を覚えてしまう。

情は、あるいは心というものは、いい加減な曖昧さや、低レベルの論理性によって支えられてはならないと信じるからである。

ぎりぎりまで、考えられる限り、整理できるものは整理して、その後そういったものを超えた世界、すなわち心の世界でつながりたいと思うのである。たとえば、愛するということは、そういうことではないかと思うのだ。

情に甘えて、自らの情の質を貶めるような、つまり論理性の否定は、ぼくにはできない。

臍の緒

教師の必要な力について考える (3)

I

研究所の Diploma 課程 32 期の学生たちの教育実習の指導に当たる。学生たちが懸命に準備したことが、作られた教材からだけでなくその顔の表情からもよくわかる。Certificate 課程 35 期のクラスの学生たちも同様だろう。

授業中は必死だ。学習者 (learner) のあたたかい眼差しに誠実に応えようと、実習生 (学生) たちは汗をかく。真摯な緊張感から唇や指の先が震える。

「頑張れよ」と心の中で励ます。

授業 (実習) の準備にはいくら打ち込んでも完璧という終わりはない。どうすればあのやや飲み込みの悪い〇〇さんに理解してもらえるか、どうすればもっと楽しくみんなに発話をしてもらえるか等々、工夫をしようと思えばいくらでも課題が見つかる。寝る時間を削って、練習をする、絵教材を作る。

一人実習までのグループによる授業の準備も大変だ。一人一人の個性や考え方は当然ながら異なる。その異なるものをみんなで話し合いながらどのようにまとめて、一人ではできない充実した学びの場を産み出すか。異なるものと向き合うということはつまり、自分自身と対峙することを意味する。自分という人間を見つめざるを得なくなる。自分の対人観や授業に対する姿勢、教育観を検証しなくてはならなくなる。それらは時に辛い。今まで生きてきた自分を、部分的にせよ否定されているような苦しさを覚えることもある。どうしてわかってくれないんだと泣きたくもなる。

そんなふうな毎日がしかし、あっという間に過ぎていく。

そこで見えてくるものは、厳しいほどの、激しいほどの人と人との繋がりでありようである。

同級生に向き合うということ、学習者に向き合うということ、先生との繋がり、すべてがコミュニケーションとは何を求めて存在するのかということの具体的な事例である。

II

ぼくはよく考える。ぼくはどこから来たのだろう、と。

ぼくは母親から生まれたのだという。今やぼくは、強い自我によって、自分の意識から逃れることは到底できないが、いつかぼくはぼくになったのかがわからない。

とはいえ、ぼくは母親の胎内にある期間いたことになっている。

そのときのことである。

ぼくは胎内で、母親の栄養分や酸素といったものをいわゆる臍の緒を通じて搾取し、そればかりか要らなくなったものや汚れたもの、あるいは二酸化炭素といったものを母親の血液の中に捨て続け、じっと外に出る機会を窺っていた。時折聞こえる声は母親の優しい声であり、父親の厳格な声であった。時折兄や姉の笑い声も聞こえてきた。

ぼくは胎内で母親の命を食べながら息を凝らしていたのである。

臍の緒は、ぼくのわがままな思いをかなえる通路であった。一方的に自分に必要なものを求めるだけ求めて、不要になった老廃物を捨てるための通路でもあった。

悲しいコミュニケーションである。

その悲しみをしかし、母という存在は喜びとして受け止めるのである。

そしてまた、その母も母の母から生まれた。

III

人は繋がりとうとする。繋がることで生きようとする。

そのコミュニケーションはさまざまな形をもって存在する。

たとえば、教育という世界では、授業の場における教師と学習者とのコミュニケーション。その授業を生み出すための仲間とのコミュニケーション。学習者同士のコミュニケーション。

そこで用いられる言葉は、いったいどのようなものを運んでいるのだろう。どのような思いを運んでいるのだろう。

そして、ぼくたちが教えようとする彼らにとっての外国語である日本語は、彼らの何を運ぶのであろう。

臍の緒は命の不条理を運んだが、しかしそこには確かな愛があった。

満点の星

教師の必要な力について考える (4)

「図師くん」とその老人はぼくを呼んだ。

深夜、宿泊施設の門限を破り、森歩きを始めたぼくたちは連歌に倣った連詩に遊び、それに疲れるとそれぞれ勝手に散らばった。どんどん遠くへ行ってしまふ者やその場に座り込んで持ち出した酒を静かに飲んでいる者。

広い草原を見つけたぼくは草に寝て満天の星を仰いでいた。

「図師くん、こっちに来ないかね」

老人は、近づいたぼくに言った。

「地面に耳をあててみなさい」

「えっ？」

「耳をあてると地球が動く音が聞こえるから」

言われたとおりにしたぼくに老人は

「どう、聞こえるかね？」と聞いた。

「いえ、聞こえませんが」

「そうか、聞こえないか。どうしても聞こえないか」

「はい、やはり聞こえませんが」

「そうか、聞こえないか。うん、それでいい、それでいい」

大学で英文学を講ずる彼は、うれしそうに笑った。

彼の主宰する同人誌と別の同人誌の詩人たちが集まって開催された三日間の合同合宿勉強会は、初日から深夜に及んだ。お互いの作品を批評し合い、また朗読をする。

その数年前、一度も会ったことのないぼくに、彼は突然電話をかけてきた。

「Sという者です。あなたはどこかの同人になっていますか」

「いえ、私はどこにも所属していません」

「じゃ、一緒にやりませんか」

彼の主宰する詩誌の同人にならないかという誘いである。

「あなたの詩は読みました。どうですか、一緒にやりませんか」

その数日前、ぼくの詩はある団体の年間最優秀作品賞を受賞していた。彼はそれを読んだようだ。

けれどもぼくは、そのSと名の詩人の詩を読んだことがなかった。ずいぶん乱暴な話である。

しかしなぜかぼくは、はい、と返事をしていた。

Sとはそれからたびたび会うことになる。同人の集まり以外にもぼくたちは差しで飲んだ。ずいぶん年上の彼は、ニコニコしながらぼくの青臭い詩論や芸術論をだまて聞いていた。彼の右手にはいつも盃があった。

世界の著名な文学者たちが集まって開かれたあるホテルでの平和会議になぜか招かれたぼくは、まわりはみんなコーヒーや紅茶であったが、会議中からSと二人で日本酒を飲んだ。その日のテレビの全国ニュースではしっかりそれが放映されていた。別のところに出張中で、その日その場にいるはずのないぼくはテレビカメラから顔を隠したつもりだったが、しっかり映っていた。

そのことを後でSに話すと、ははは、といかにも愉快そうに彼は笑った。

ある日いつものように彼と二人で飲んでいて。

「実は話がある」

彼が真面目な顔で話し始めた。

「図師くん、ぼくが死んだ後は、君がやれ」

「先生はまだまだお元気ですよ」

「いや、死んだらという、仮定の話だよ」

詩の世界のさまざまな役職にも就いていた彼は、しかしいつもひとりの朴訥な詩人だった。昔話をたっぷり聞かされた。絶対に自分からも帰ろうなどとは言わず、放っておけば朝までも飲み歩くような彼から初めて自分が死んだらという話を聞いた。

「わかりました」と応え、喜んでくれた彼に、しばらくしてぼくは英国に行くことになったと伝えた。

「そうか」と頷いた後、もう一度頷いて彼は、「飲もうや」と酒を勧めてくれた。それから、彼の知り合いの英国人の英文学者の名前をメモ用紙に書いて渡してくれた。

その酒の数日後、ぼくは彼の通夜の席にいた。

青春、か

教師の必要な力について考える (5)

昨日 (5月19日) のテレビ・ニュースが国語学者・金田一春彦先生のご逝去を報じた。

あれはずいぶん昔のことだ。そのころ、ぼくはまだ20代の青年だった。岩手県盛岡市である学会が開かれたのだが、そのときの会長が金田一先生で、記念講演は詩人の石垣りん氏だった。

ぼくはその講演を会場の最前列の中央、すなわち石垣りん氏と向き合う形で聴いた。りん氏は完璧なまでに準備された原稿を下に、まったく隙のない講演をした。無駄な表現など一言もなかった。それはまるで氏の詩作品そのもので、 unnecessaryな女性的媚などもまったく存在しなかった。

上質のワインを一滴も残さず飲んだ後の充実感に似た快さを覚えながらぼくは、その後の研究発表から抜け出すと、盛岡城址へと向かった。

城跡には観光客がほどこどにいたが、かまわずぼくは、地面に横たわった。そして真っ青な空を仰いだ。「空に吸われし十五の心」と歌った啄木を真似てみたのである。観光客はヒッピーでも見るように、視線でぼくを露骨に非難した。

それからぼくはローカル線で洪民村へと向かった。啄木一家が「石をもて」追われた啄木のふるさとである。啄木がかつて教員をしていた小学校の木造校舎の二階に上がり、詩集をバッグから取り出して、年月を経てゆがんだ床にぼくは座り込んだ。

その小さな校舎は啄木の記念館の一部となっている。誰もいなかったその校舎に突然大勢の足音が響くと、おじいさんやおばあさんの集団がやってきた。観光バスが着いたのである。

人の群れを避けるため、レンタ・サイクル (自転車) を借りると、村をゆっくりと走り回った。北上川河畔の啄木の歌碑もめぐった。すると突然、空が暗黒にその色を変えた。そしていきなり大粒の雨が落ちてきた。

雑貨屋の軒を借りてしばらく雨宿りをしていたが、激しく地面をたたきつけるその雨に誘われるようにぼくは外に飛び出した。

自転車をこぐ。激しい雨の中をゆっくりと進む。全身がびしょりと重くなっていく。

<もっと、もっと、恐ろしいほどにたたきつけてくれ>とつぶやきながら進む。

ぼくはそのとき、<自分>を否定しようとしていた。

嫌いだったのだ、<自分>が。

教育者としての肩書きで生活を支え、詩人としての自分に陶醉し、いずれにおいてもきわめて未熟だったぼくはしかし、実力とはかけ離れた評価を得、その偽りの評価を誇示し、ゆえに恐れおののいていた。

たしかに呼吸がしたいと願いながら、自ら進んで潜めるような呼吸の世界に身をゆだねていた。

ホテルに戻り、シャワーを浴びて、空腹を酒で満たす。

頭が痛い。割れるように痛い。

雨にぬれたズボンとシャツは、ハンガーに掛けられて、いやなにおいを放っている。

*

もがき、喘ぐような青春は、いつも自己否定と同居している。その自己否定はしかし、他者のまなざしを意識しながらの陶醉によっていつも美しく飾られている。

なあに、つまりは遊んでいるだけなんだよ、と齢を重ねた常識人がつぶやく。

青春だけでなく、人間の存在そのものが遊びということなのだ。生きているということはいつも未熟で、闘っても闘っても、傍から見ればじゃれあっているようなものだ。

たしかにそうかもしれない。いやきっとそうだろう。

けれどもぼくは、もう少し闘おうと思う。

それは遊びに過ぎない稚拙なものであるかもしれないが、人のまなざしなんか耐えられなくたってかまわないけれど、自分のどうしようもない怒りや悲しみ、喜びや寂しさ、そのようなものにひとつひとつ向き合っ、雨に打たれながら走り回って、泣いて、笑って、のた打ち回って、転んで、立ち止まって、そして、もう一度、もう一度と一歩前に歩いていこうと思う。

ストップウォッチ

教師の必要な力について考える (6)

成田を飛び立った飛行機が漸くヒースロー空港へと高度を下げ始める。ぼくはヘッドフォンを耳からはずして、レンガと緑の配色を楽しもうと窓から下を覗き込んだ。

ひと月に及ぶ日本出張はさすがにぼくを疲れさせた。いつものように機内の落語を楽しむ気力もなく、静かな音楽を聴きながらさまざまな思いの中でうとうととしては汗をかき、その気持ちの悪さに耐えていた。

その気持ちの悪さの一つに、小学 6 年生の女の子が同級生を殺害した事件があった。例のごとくマスメディアは刺激的に大きく報じた。教育学者やタレントたちが眉をひそめながら事の重大さとその分析を語った。

多発する少年少女犯罪に大人たちは戸惑うふりを見せながら、しかし日常は何も変わっていないとはしない。

*

日本に滞在していたある土曜日の朝、落語家・桂文珍が司会をするテレビのワイドショーをぼくは見ていた。

広島県のある公立小学校の校長の教育方法について特集したその番組でその校長は、「カリスマ校長」と呼ばれていた。カリスマが開発したという算数の「百ます計算」は全国の保護者たちに支持され、その練習帳はベストセラーになった。

そのことはロンドンで生活をしながらでも新聞等で知っていたが、その実際の授業風景を見て驚いた。

ストップウォッチを手にしたカリスマの掛け声で子どもたちは一斉に計算問題に取り掛かる。できた子どもが「できました」と手を上げると、彼がたとえば「5 分 24 秒」などとその子どもが計算を終えるのにかかった時間をストップウォッチで読み上げるのである。

カリスマは言う、「2 週間後には半分の時間で同じ計算ができるようになるぞ」と。

言われた子どもたちは、懸命に練習する。そして 2 週間後には、半分の時間で計算できた子どもたちが誇らしげに次々と手を上げていく。

番組は言う、「すばらしい」と（文珍は揶揄していたが）。

カリスマに批判的だった教師も次第にストップウォッチを手にするようになっていく。

有名中学入試に出題された難問（つまりは奇問・悪問・愚問）を持ってきて子どもたちに解かせたカリスマは、何人かが正解を答えると、こんなに効果があると胸を張る。

そんなのは思考力や応用力をつけることにはならないといった当然予想される批判に対してもカリスマはちゃんと反論を準備している。「応用力とか思考力とか創造力とかいったものは、こういった基礎力がついてから後でつけていけばよい」と。

最近の子どもたちの学力が落ちたと嘆く輩にはとても頼もしい論理（もどき）である。

保護者たちにとってこのカリスマはわかりやすく、現実的で、頼もしい。保護者たちに応援団を形成してもらったカリスマは、戸惑いを見せる教師たちを蹴散らして前へ前へと進んでいく。

子どもたちも、そうか、勉強って、ストップウォッチでする競争なんだと思い込むようになり、ストップウォッチがなければ思考が開始しなくなる。

「でもね」などと考え込むような子どもは、「お前、そんなこと言ってるから 3 分を切れないんだぜ」と馬鹿にされるようになり、じっくり考えることはできなくなる。

答えが一つしかないものが大切にされ、いろいろな角度から考えたり、回り道をして考えたりすることは愚かなこととして位置づけられる。

どこかでそんな単純な教育もどきが重宝される場面があったなと考えていたら、あった、あった、町中にいくらでも転がっている稚拙な塾の教育である。優れた学習塾も中にはあるが、多くは保護者や愚かなメディア、単一の価値観に縛られた社会におもねった教育そのものなのである。

そういった塾の普通の教師が公立小学校に現れたから、カリスマになっただけである。少しも新鮮ではない。

子供たちを追いやり、愚かな大人に媚を売る教育者もどきたちがストップウォッチで囁くのだ、「ほら、もっと速く、考え込んじゃだめだよ、負けるよ」。

殺した少女も殺された少女も、カリスマたちが滅ぼした。

稚拙なる論理の汚臭

教師の必要な力について考える (7)

今年の日本の夏は記録的な暑さで、死者まででていくという。暑さの苦手なぼくは、日本にいないで良かったなあと心底思う。

どうやらぼくは大変な暑がりらしく、日本に出張すると春や秋でさえ、研究所日本事務局のエア・コンを強冷房にして鬨蹙（ひんしゅく）を買う。ぼくが事務局に到着すると、スタッフは上着を羽織り始めるのだ。

ハンカチはいつも二枚持つことにしている。二十代までは、ほかの人がどんなに汗をかいていても涼しい顔をして驚かれたものだが、三十歳を越えたあたりから、汗が噴出すようになった。おそらく体内に余計なものが住み始めたからだろう。

アルコールである。アル中でないことは一月（ひとつき）の間完璧に飲むことをやめてもまったく苦しくもなんともないのだから証明済みだが、体内のどこかに安心してアルコールの一味が暮らしているのだろう。

なにしろお酒を飲まなくても、何かを体内に入れるとすぐに発酵して顔が赤くなるのだ。寒いのは我慢できるのだが、とにかく暑いのはだめだ。

そのぼくがしかし、たとえばスペインやポルトガル、あるいは南フランスあたりの海岸で真っ裸になって日光浴をすることを愛するのだから、話はややこしい。

砂浜でしばらく強い日差しを浴びていると、突然何も考えられなくなる。「ああ、軽い日射病だな、これは」と思いながら、けれどもぼくは動かない。「考える」ということから逃れることができた喜びに浸るのである。

ぼくはいつから考え続けているのだろう。

いつもいつも分析する対象を探し、論理という道具でそれらを味わってきた。ぼくは論理絶対主義者ではまったくくないが、論理を軽んずる者は嫌いだ。

論理を軽んずる者は、いや正確に言えば論理的思考のできない者はしばしば、「この世の中は理屈だけでは割り切れない」などのたまう。「論理ではなく大切なのは心だ」と陶醉気味に主張する。

その通りだよ。

論理がすべてでなんかあるものか。

しかし、論理的思考のできない者が、逃げ道として「心」や「情」といったものを振りかざすのは、みっともない。

「心」や「情」といったものはもっとも大切で、いい加減な整理しかできない者が振りかざすことばではけっしてない。

ぎりぎりまで論理や理屈で突き詰めて、そしてじっと沈黙の時間が流れた跡に、突然天空に浮遊するがごとく（そう、ふあーっと）、「論理なんてものくそ食らえ」というようになってはじめて、「心」や「情」が見えてくる、そういうもんだ。

「心」や「情」や「感動」を甘く見てはいけなげ。

だからといって、論理的思考も稚拙なくせに、いかにも論理的にものを言っているかのように物申す輩にも閉口する。そういう者たちは多くの場合、大きな錯覚をしており、自分が論理的に考えることができると信じている。

もっとも、それはそれほど悪いことではない。

が、はなはだ困ったことに、論理的に破綻した際の謙虚さがないと、まわりの者は後味の悪い疲労感を、徒労感を覚えてしまうのである。

それが、期待すべき人物や仲間である場合の周囲の後遺症は深刻である。論理的思考ができ、しかも論理と情との位置づけができるはずの人間だと信じていた者が、あっさりと稚拙な論理に墮していくのはさみしい。

論理的な物言いでおおうとしたその内容ではなく、そのレベルでものを言ってもいいだろうという傲慢さが、醜いのである。

その醜さは、成長を止めた者の醜さである。

ゆえにさみしいのである。

ぼくも未熟で稚拙であるが、不毛な、稚拙な、論理もどきに甘えようとは決して思わない。

さらに、非論理の塊みたいな者が、人から何か言われるとすぐにとんでもなく見当はずれのことを言い訳がましくべちやくちやくと、しかも長々と話すのを聞かされるとぼくは、その空間を共有していることすら恥ずかしくなるのだ。

狐

教師の必要な力について考える (8)

1

深夜帰宅するぼくの目の前に突然現れたのは、一匹の狐である。

狐！

道の中央に立ち、ぼくをじっと見つめている。

ぼくもまた立ち止まり、狐の目を凝視する。

2

学生時代に原文で読んだ D.H.ロレンス (David Herbert Lawrence 1885-1930) の The Fox は、濃密な妖しい雰囲気漂わせる小説である。

さまざまな詩人たちの作品を読み耽っていたその頃のぼくは、この作品に登場する女たちの殺したような息づかいに魅かれた。

ロレンスの作品世界の虚構はそれゆえに、そしてしかしながら極めて生々しくリアルであった。

3

狐は深夜、猫を狩猛にしたような声で鳴き、吼える。

その哀しい声を聞きながら、なかなか眠りに落ちることのできない頭が、痩せていた若い頃を想う。

学生運動はもはや下火であったが、住んでいるアパートにも時折激しい足音がして、誰かが官憲に追われ逃げ込んだのだと思わせる夜があった。

逃げ込んだ輩もまた痩せていたに違いない。

その頃は、みんな痩せていた。

学生も教官も、町も田舎も、文化も文明も、昨日もあしたも、みんな痩せていた。

だから、皮膚に感じたものがすぐに毛細血管に伝わり、絡みつく神経細胞を震わせた。

痛いという感触があり、浮遊するような快感があった。

4

ぼくはウイスキーのボトルや日本酒の一升瓶を部屋に置いて、群れることなく一人で飲んだ。

酒の味などわからなかったが、酔うことはできた。

飲んで横たわった畳の床が、遊園地の乗り物のように激しく揺れることもあった。

畳が斜面となり滑り落ちそうに思えて、畳にしがみついた。

ぼくの痩せて麻痺をした精神が仮想の斜面の上でのた打ち回っていたのである。

5

狐を見つめたぼくは狐に見つめられていた。

6

あれからぼくは少し歳をとった。

痩せた体には贅肉がつき、こけていた頬に丸い肉がついた。

近視は進み、手許が見えなくなった。

髪は抜け、残った義理堅い髪はしかし、白くなってきた。

声は太くなり、走ろうと思っても無理をするなという声ですぐ自らを押しとどめる。

7

だが、とぼくは路上に立ち尽くしながら狐に語りかける。

ぼくは、狐よ、ようやくその頃感じた痛みというものの正体や、震えるような快感の純情や欺瞞や偽りを静かに、そして確かに受け止めることができそうに思えるのだ。

痩せたぼくが感じた痛みや喜びは、驚くべきことに今もまだぼくの細胞に絡み付いているのだよ。

その頃つかむことができなかつたある種の痛みは、油断すると時に<絶望>ということばで括られたり、<墮落>ということばの器に入れられたりする。

したり顔した<納得>である。

それで終わりにしようという汚臭のする<溜息>だ。

そしてそういった愚かなく知恵を今ぼくは、全身を震わせながら、そうお前のように四本足になって高く吼えながら脱ぎ捨てようとしているのだ。

8

狐よ。

ぼくの疾走についてくるがいい。

ぼくはほら、ぼくは今もぼくの感性で呼吸をしている。

繊毛のような神経細胞を持ったお前に、伸びやかでたくましく、そして豊かな、眩しい疾走を見せてやろう。

石を投げる

教師の必要な力について考える (9)

1

中学1年の途中で転校したぼくは、革靴を履いて通学を始めた。
父親が買ってくれたのである。
しかも一足ではなかった。
周りはみんな運動靴のようなものを履いている中でピカピカ光る茶や黒の革靴を毎日履き替えて登校するぼくに、新しい学校のあまり柄の良くない連中が話しかけてくるようになる。
このあたりを案内してやろう、とぼくを誘った。
ぼくは彼らの誘いに乗り、放課後はいろいろなところを見て回った。
時々彼らはぼくに聞いた、「君はどんなものが好きか」と。
好きな食べ物を言うと、あくる日にはそれを持ってきてくれた。
読みたい本の名を告げると、しばらくしてそれを貸してくれた。
彼らはぼくに対して不思議に丁寧な言葉を遣った。
顔を赤らめながら話す彼らに、ああ、緊張しているんだな、とぼくは思った。
ぼくが彼らによく仲間意識を持ち始めた頃、ぼくは学校の先生に呼びだされた。
君はAやBたちと放課後遊んでいるようだけれど、やめたほうがいい、との忠告だった。
どうやらぼくだけではなく、彼らにも注意がなされたようだ、「図師君を巻き込むな」と。
彼らがぼくを誘うことがなくなった。
柄はいかにも良くなかったが、いつも彼らは親切で、優しくかった。
そして何より、真面目だった。
彼らは時に自分の夢を語った。
恥ずかしそうに、しかし本気で自分の将来を語った。

2

先生から注意された翌日からぼくは革靴を脱ぎ、みんなと同じ運動靴に変えた。

3

ぼくは自分のことは何も語らなかつた。
転校する前のことやこれからのこと、聞かれたことに最小限答えるだけであつた。
勉強はつまらなかつた。
授業は真面目に受けていたから成績はまずまずだったが、少しも面白いとは思わなかつた。
けれどもぼくは真面目な良い子として先生たちにかわいがられた。
クラスや生徒会の役員に選ばれ、バレーボール部のキャプテンでもあつた。
生徒会新聞をガリ版で作っているときや、隠れて詩を書いているときがぼくの大切な時間だつた。

4

そのころ、ぼくはよく一人で近くの河原に行った。
そこでつぶやきながら石を投げるのである。
30分も1時間も投げ続けるのである。
ぼくはぼくの心の中に突如芽生えた得体の知れないものを石を投げ続けることで沈めようとした。
怒つたようにぼくは石を投げた。

5

あるとき、父が言った、「河原で石を投げているんだってね」と。
「はい」
「そうか、石を投げると気持ちいいか」
「はい」
「そうか、そうか」
父にはぼくの心の中に芽生えた得体の知れないものの正体がわかっているように思え、ぼくは顔を赤らめた。

6

ぼくが沈めようとした思いは、しかしながらずっと消えないで生き続けた。
それはときに大きく膨らみ、ぼくを苦しめた。
そしてある日、投げた石は切ない音をたてて砕けた。

美しい人

教師の必要な力について考える (10)

1

プラットフォームで電車を待つ間、久しぶりに晴れた朝の空を仰ぐ。淡い青の上にかすかな白い雲が掃かれたように組み合わされていて上品だ。

ぼくは晩秋の高い空に心を吸われながら、静かに深呼吸をする。

<もう一度、始めなくては>

2

自分自身の未熟さや醜さといったものに押しつぶされそうになりながら、それでもなお<もう一度>とつぶやく。つぶやかなければ、転がり落ちていくような不安な思いに襲われる。

そんなぼくは今、自分のことを棚に上げて、<美しい人>と一緒にいたいと強く思う。

3

十数年前から書き始めた長詩のタイトルは「ヨーロッパの神々たち—ぼくはもっと美しかった」というもので、今は休筆中である。ロンドンの地下鉄の汚れた線路の隙間を動き回る鼠やポルトガルの寂しい村の公園の水道を使い暗いまなざしで一日中洗濯をしている幼い子どもたち、そういった風景の中にあるかすかな光を見つけようとした。

気が付くとぼくこそが鼠となって、埃とゴミを食しながら動き回っていた。

4

毎日のように決意をする。

毎朝のように決心する。

もっと美しくならなければ、と。

そして、重い気持ちを引き摺りながら帰ってくる。

5

優しい人。

どんな痛みを加えられようが、微笑む力のある人。

痛みを加えようとする者を抱きしめようとする人。

相手の痛みを自らの痛みとして受け止めることができる人。

人の幸せや喜びを心から喜べる人。

妬まぬ人。

疑わぬ人。

信じることのできる人。

信じようとする人。

美しいものを美しいと思える人。

ごまかさぬ人。

間違いを犯したとき、心から謝ることができる人。

間違いを犯したあと、今度は間違いを犯さぬように努力する人。

間違いが間違いであるとわかる人。

驕らぬ人。

優れた力というものが人を威圧するものではないということがわかっている人。

優れた力というものが人を暖かく抱きしめようとするものであるということがわかっている人。

幸せになりたいと思っている人。

幸せを見つけることができる人。

幸せを自らの手で創ろうとする人。

昨日より確かに1センチ身長が伸びている人。

6

簡単なことだ。

愛することだ。

7

<美しい人>と時間をともにしながら、自らも美しくなろうとする。

そんな時間がぼくには今、とても恋しい。

8

晴れた空に飛行機が飛んでいる。

背伸びをする。

生まれたばかりの朝の空気がぼくを押して、ホームに滑り込んできた電車に乗せる。

<もう一度>とつぶやく。

記憶の中の微笑

生きるという旅、あるいは<そのころのぼく>

(1) 3歳で行った小学校

1

幼稚園に行きたがらないぼくを家まで迎えに来た先生は「おっはよっ」と元氣よく話しかけると大きな手でぼくの手を握り、大股で幼稚園へと連れて行った。

そうか、思い出してみると、ぼくは小学校時代だけでなく幼稚園児のときも登校拒否をしていたのだ。

そして、そのころがぼくの思い出が始まる最初である。

2

記憶のその場に再び立つことはできないが、今に至るそれらの思い出を大切に抱きしめ、守りたいと思う。幼く稚拙な時代の思い出には時に赤面さえしてしまうが、未熟なりに懸命で純粋なまなざしを今の価値観で醜く否定してしまおうとは決して思わない。

あのころ、と語り始める思い出は、やさしく、美しいものでありたい。そのころ口にした理想や夢がたとえ現在の状況と異なっていたとしても、ぼくはそのころの思い出を汚したくない。

そのころは確かに、そのころの空気を吸い込み、吐き出していた。

3

大学時代にはほとんど毎日日記をつけた。その日記は今も大切にとってあるが、積み重ねられた日記を今、燃やしてしまおうかとぼくは逡巡している。ぼくの大切な青春の思いを連ねたそれらの日記が、今のぼくを苦しめるからである。

大切に守りたい<そのころのぼく>が、知らぬ間に汚されていっている、そう感じるのである。<あのころは理想的なことばかり言っていたのに>という声が聞こえてくる。醜くゆがんだ声である。

<今のぼく>をあざ笑うために、<そのころのぼく>が貶められるとすれば、ぼくはもっともっと遠くへと逃げなくてはならない。遡らなくてはならない。けれども、貶めようとする執拗な追っ手はさらに追いかけてきて、生まれたときからの、つまりは幼稚園時代からのぼくの人間性を否定しようとする。いや、それにとどまらない。ぼくを産んだ母や父の遺伝子さえもその攻撃の対象となり、徹底的なぼくの抹殺を図ろうとするのだ。

4

逃れることができないならば、と居直ることにしよう。ぼくはそのとき確かに笑い、泣き、呼吸をしていた。園児のころからつい最近までの<そのころのぼく>をかかって書いた事柄と重複することもあるが、しばらくは書いてみようと思う。

5

6人兄弟の末っ子として生まれたぼくは体の大きな子どもだった。姉が一人の五男である。すでに両親と長兄は逝った。

すぐ上の兄が小学1年生のときだったと思う。兄はぼくより3歳年上だから、ぼくは3歳か4歳ぐらいだったのだろう。ある日、小学校に登校する兄についていったぼくは、兄の席の隣に並んで座った。二人机である。小学生でもないぼくは兄と一緒に授業を受けた。不思議なことに、そのぼくを先生が受け入れてくれたのである。給食の時間になると、ぼくは興奮した。何しろ初めての経験である。パンは落とす、おかずはこぼす、しかし兄は文句も言わずやさしくそれを拾い、汚れを拭いてくれた。

数年前、その兄と酒を飲んだ。そのときのことをぼくが話すと、彼もよく覚えていた。昨日のこのように、笑いながら兄はそのときのことを語った。

歳の近い彼にはよく泣かされた。頭がよく、ゆえにいたずらを次から次へと考案する彼はよく親に怒られた。それを見て育ったぼくはいわゆるよい子で、つまりは今のぼくがあまり好まぬタイプの子もだった。いたずらっ子の兄はぼくに絡んだ。ぼくは泣くことで、親やもっと年上の兄たちを味方にした。

中学生になったぼくはすでに兄より背が高くなり、知らぬ間に筋肉もついていた。ちょっとしたことで喧嘩になり、気がつくと兄を倒していた。そのときのショックは忘れられない。取り返しのつかないとんでもないことをした、とぼくは自分を責めた。兄を倒したのはそれが初めてで最後だった。

<そのころのぼく>が手にしていた兄とのじゃれ合いが今、とても懐かしい。

記憶の中の微笑

生きるという旅、あるいは<そのころのぼく>

(2) 音楽の匂い

1

学校の放課後には朝とは違ったもう一つの始まりがある。教室からは子どもたちが勢いよく飛び出していく。これから子どもたちのわくわくするような一日の始まりなのである。

小学校の土のグラウンドにズック靴の踵で丸い円を描くと、相撲が始まる。若ノ花や大鵬が何人も名乗りを上げる。若秩父や明武谷も控えている。

グラウンドの隅をホームベースにして野球が始まる。長嶋や王、柴田や国松がいる。どうしたわけか金田や杉浦の制球はもう一つである。

ゴム跳びをする女の子たちはちらちらと男の子たちを見ている。

突然、先生が呼び止める。「放課後、先生のところにちょっと来なさい」と。

ぼくには予定がある、今日は長嶋になることになっているのに。

「実はね」、優しい声で音楽の先生が話し始める。ぼくは男の先生の、この柔らかい口調が苦手だ。

「君に鼓笛隊のソウシキ（総指揮）をやってもらおうと思うのだけれど、ね」

「えっ、ソウシキ（葬式）ですか？」

「ウン、ソウシキ（総指揮）」

「はあ、……？」

「やってくれるね」

「はい、……？」

またある日、呼び止められる。「この歌を大きな声で歌ってごらん」

「うん、いい。じゃあ、合唱団のメンバーに入れておくからね」

またまた呼び止められる。窓の外から、柏戸や朝潮が不安そうにのぞいている。今日は一緒に遊べないのかと。

「これ、持ってごらん。弾いてごらん」

「はい、……？」

「コントラバス。やるね」

2

たまたま背が高く、少し目立っていただけで、ぼくは音楽の世界に引きずり込まれた。その練習のために、学校帰りに土手で格闘する喜びが奪われた。力道山になれなくなった。長嶋になれなくなった。

音楽室に集められ、選ばれた者たちはなんとなく「ぼくは選ばれました」といった顔をしている。「私、選ばれたんです」という澄ました顔である。後年、「思い出まくら」という曲をヒットさせた小坂恭子もいる。

ぼくは自分に音楽の才能がないことをよく自覚していたので、それらの練習はきわめて苦痛であった。何しろ音痴である。ああ、早く時間が過ぎていかないかなあ、といつも願っていた。

人の前で歌うことが恥ずかしかった。その頃ぼくはいろいろな役員をさせられ、人前に立つことが多かったが、それでもいつも緊張した。

高校生になって、芸術科目は書道、音楽、美術の中から選択することになり、ぼくは迷わず美術を選んだ。

3

初めて就職した日、新任歓迎パーティーが開かれたホテルの華やかなステージで歌を歌うように求められたぼくは困った。仕方なく、100名を越す教職員を前にして与謝野鉄幹の「人を恋ふる歌」を歌った。カラオケなんかない歌である。歌い終えてトイレに行くと、音楽の先生がいた。並んで用を足しながらその先生は、「気持ちのいい歌い方だねえ。うまいねえ」と褒めてくれた。詩を棒読みしたような、そして怒鳴るような歌い振りを褒められて、ぼくはしかし、うれしかった。いや、その先生の口調が朴訥だったからである。こんな音楽の先生もいるんだと思った。

4

子どものぼくは大人の匂いに敏感だった。ものごころついたころからずっと、「先生」と呼ばれる多くの大人たちに囲まれて育ったぼくには、大人を見分ける、先生の質を見分ける嗅覚が普通の環境に育った人たちよりも多少発達していたようである。

＜「ゆとり教育」批判＞を批判する 学力低下を嘆く者たちの狡猾 学校は死ぬのか

机の上にある一冊の書物にぼくはため息をつきながら、しかし怒りにも似た思いが沸き起こるのを感じている。

「Education at a Glance, OECD INDICATORS 2004」という分厚いそのレポートはいまや日本の教育を大きく揺さぶり、そして破壊しようとしている。

日本の子どもたちの学力が低下し、このままでは日本が危ういと言うのである。

レポート自体がそう言うのではなく、それらのレポートのデータを根拠にして大臣を始めとした日本の政治家や教育学者たち、そして一部の現場教師が騒いでいるのである。

愚かで、下品で、ジャーナリズム精神などはとっくの昔に捨ててしまい、商業主義一辺倒の無恥と権威主義の汚臭を放つ新聞や雑誌、テレビがそれらを煽（あお）っている。

そして、そのように日本の子どもたちの学力が低下したのは「ゆとり教育」が原因だとみんなが声をそろえて合唱しているのである。週5日制なんて早くやめてしまい、土曜日の学習を復活しなければ大変なことになると慌ててみせる。

とにかく暗誦させることが大切だとある大学教授が言うと猫も杓子も「つれづれなるままに……」となる。

ストップウォッチで計算競争をさせるある小学校の校長が作ったといういかにも貧しい算数ドリル（かつては流行らない小さな学習塾でよく見かけた代物）がベストセラーになり、母親たちが競って本屋に買いに走る。

とにかく基礎力をつけねばと詰め込み教育の復活を主張する者たちがしたり顔をブラウン管に曝（さら）す。

訓練が何より大切なので、ゆとり教育や個性重視などといった悠長なことを言っていたのでは日本はアジアの諸国にも追い越されるぞ、とまるで右翼の宣伝車から流される大音響のようながさつな声で教育評論家たちが眉をひそめる。

＊

なるほど、残念ながら確かに日本という国は滅びるだろう。日本人は決して誇るに足らぬ民族となっていくことだろう。

なぜなら、これらの教育における迷走は尋常ではない。

知性も品格も何もない。

「何とか様」といった韓国の男優を追いかける日本の婦人たちのあられもない姿をテレビで見ながら、この人たちはもうしばらくするとどんなモノを追いかけようと厚化粧をするのだろう、メディアによって操作誘導され、どんなモノを追いかけさせられるのだろうと哀れに思ったが、日本という国自体がまさにこれと一緒に、いつもその時の権力者がある意図を持って作った＜旬あるいはブーム＞に右往左往させられている。いつもみんな一緒に駆けっこなのである。

日本という国にはいつもブームというものが用意されていて、それを追いかけているうちにたとえば憲法問題といったような大きな問題は見えなくなってしまう。

そういう＜可愛い国民＞は、政（まつりごと）を担当する者や情報という名の凶器で大衆を支配するメディアという権力者にとっては頗（すこぶ）る都合がいいのである。

そして、そういった愚かな国民にしてしまった者たちが今度はさらにもっと愚かな国民、すなわち笛を吹けばどのような方向に向かっても何もためらうことなく素直に走り出す国民をつくろうと最後の仕上げにかかった。

若者の学力が低下して大変だぞ、アジアの国々に負けるぞ、と喉（けしか）けている。日本人にとってアメリカやヨーロッパの国々に負けるのはなんともないが、アジアの国の後塵を拝するのは我慢できない。その不思議な優越感すなわち劣等感を巧みに利用して、笛を吹けばすぐ走り出す国民を作らんと、詰め込み教育つまり考えさせない教育の復活が正当化されていく。

熟考する人間や疑問を抱き考え込むような人間は国際競争力を強めたい日本株式会社には要らない。一部の人間が支配していくようなシステムには、ごく一部の者たち、いわゆるエリートを生産する特別な教育と素直に黙ってついてくる大衆を生産する単純詰め込み教育とが都合いいのである。

「ゆとり教育」の象徴としてたとえば「総合的な学習の時間」が創設されたが、こういった、考えて自ら課題を発見設定して学ぼうとするような学習は権力を守り拡大したい者たちにとっては甚だ迷惑なのである。だからやめることにするというのである。そして「ゆとり教育」も全部やめようというのである。

＊

学校とは人間の幸せについて考えるところである。

その学校を今、大人社会の権力構造にとって都合のよい人間を生産する工場にしようとしているのである。

「ゆとり教育」が求めようとした方向性は正しい。その理念達成のための環境整備を意図的に怠った行政や大人社会にこそ非はある。このままでは、学校は死ぬ。（続く）

＜「ゆとり教育」批判＞を批判する 学力低下を嘆く者たちの狡猾 続・学校は死ぬのか

全国の小学5年～中学3年の約45万1千人を対象として実施された2003年度学力調査の結果が公表された。

今や日本の子どもたちの学力低下の元凶とされる「ゆとり教育」導入後初めての学力調査の結果は、それ以前の教育のもとで行なわれたものを上回った。学習意欲に関する調査においても改善された。

単純に解釈すれば、「ゆとり教育」が成果を挙げたことになる。

確かに、たとえば朝日新聞（2005年4月23日1面）が「解説」するように、「＜ゆとり＞が学力低下につながっていないかどうかは1回りの学力調査で判断できるものではない。国際的な調査や自治体独自の学力テストも踏まえ、時間をかけた冷静な分析と判断が必要だ」。

文部科学省も今回の調査結果を受けて「ゆとり教育」の見直しを躊躇しようとはしない。

朝日は同日の「社説」でも「額面通りに受け取るわけにはいかない」と主張する。

中山文部科学相も「手綱を引き締めて取り組む」と「ゆとり教育」からの脱却を突き進むと宣言する。

*

詰め込み教育や受験競争を批判してきた朝日などの新聞を始めとしたメディアはいまや「学力低下」を嘆く者たちの先頭を切り、「ゆとり教育」を批判する。そのいやらしい不節操にぼくは嘔吐感を覚える。報告されるそれぞれの学力調査の位置付けの身勝手さにも呆れてしまう。

*

大学教授や教育現場の教師たち、教育行政に携わる者たちの間で問題になっている「学力低下」について考えるために、もう一度＜学力＞とはいったいいかなるものであるか整理してみる必要がある。

＜学力＞はまず、「学習した結果、獲得した力」（学力Ⅰ）と定義される。計算能力などはこの範疇に入る。

次に、最近声高に主張されるところの「学習する力」（学力Ⅱ）としての＜学力＞がある。基礎知識・基礎技術としての＜学力＞で、＜学力Ⅰ＞の計算能力は、その計算能力を用いて次の学習をする際はこの＜学力Ⅱ＞に位置付けられる。

この＜学力Ⅱ＞が貧弱になってきているというのが最近の「学力低下」論なのである。

確かに、計算能力や漢字力、あるいは語彙力は数十年前に比べてかなり劣ってきているだろう。学生たちと話したり、日本から届く手紙などに誤字や用語法の誤りを見つけることは日常茶飯事である。

しかしながら、数十年前の学力は、たとえばそれらの漢字力を比べてみてそのさらに数十年前と比べると劣っていたのではないか。

明治や大正の時代におけるある程度の層の教養や文章力は、今「学力低下」を叫んでいる有名大学の教授たちのそれと比べるとはるかに優れているだろう。漢文教育が重視された時代とコンピュータ社会で学ぶものたちの時代とが、ほとんど変わらぬ物差しでその＜学力＞を論じようとする愚かしさになぜか気付こうとしない。

前回も書いたが、今回の「学力低下」論に基づく教育システムの見直しは、国と国民、あるいは国民と平和といった観点からもきわめて危険である。

「学力」の定義にはもう一つ重要な視点がある。「学力」は確かに学ぶことによって獲得される。その学ぶための基礎能力としての力は、有無を言わず叩き込まねばというのが今主流となりつつある＜学力Ⅱ＞であるが、どんなに叩き込もうとしても自ら飲もうとしない馬に水を飲ませることはできない。

＜学力Ⅱ＞には、＜学ぼうとする意欲＞が位置付けられなければならない。詰め込み教育を否定し「ゆとり教育」が導入された背景には、詰め込み教育の殺伐とした枯れた学びの場への反省があったからではなかったか。

＜学ぼう＞ということは、人間にとって何を意味するのか、ぼくたちはもう一度真摯に考えてみなければならない。＜なぜ学ぼうとするのか＞＜学校は何のためにあるのか＞等々、まずは大人たちが汚臭のする打算的なまなざしを捨てて討論する必要がある。

＜学びたい＞という思いはもちろん、「何とか計算」などといった競争意識のみを煽るような方法では育たない。それらをもし、＜意欲＞などと誤解して評価するようになれば、まさに日本の知的水準は低下するだろう。（続く）

＜「ゆとり教育」批判＞を批判する 学力低下を嘆く者たちの狡猾 続々・学校は死ぬのか

暑いな、とつぶやいてぼくはポケットからハンカチを取り出し吹き出る額の汗を拭いた。
中国・上海の空港は大きく新しかった。ぼくを出迎えた二人の中国人は車の後部座席のぼくに時々話しかけた。
「こんな馬鹿でかい空港や高速道路をどんどん作って、本当に将来どうなることやら」
「今はいいけれど、将来が不安で」
周りの景色に見入りながらぼくは彼らのことばを聞いていた。

*

上海は都市開発計画の15周年を迎え、活気があった。
東京の副都心・新宿にひけをとらない高層ビルが林立し、ヴィトンやシャネルといったブランド店が立ち並ぶ華やかな空間も見られた。
高級ホテルのラウンジにはファッションナブルなたくさんの中国人が屯し、酒を飲みながら歓談していた。
街を歩く若者たちの中には日本やロンドンの若者たちと同じようにおへそを出している者たちも見られた。
アメリカの大統領だったクリントンが食事をしたという高級中華料理店に案内されご馳走になったぼくは、その食事の代金が上海の普通の人の月収の半分以上を優に超えていることに驚いた。そしてそこもお客はいっぱいだった。

*

けれどもホームレスは増え続けているという。
いわゆる貧富の差が拡大しているのである。
上海に滞在中、お世話いただいた車の運転手の方に聞いた。
「新しい経済体制はあなたたちを幸せにしましたか」
「かつて私たちは党（中国共産党）の指示に従って与えられた仕事をしていればそれでよかったです。明日についての不安はなかった。しかし今は、不安でいっぱいです。あしたは自分で作らなければなりません」

*

ぼくたちはいったいどこへ向かって走っているのだろう。
科学や文明の発達は確かに、目に見えるものを華やかにし、便利にし、そして豊かにした。
けれども人はゆえに、常に走り続けなければならなくなった。
立ち止まり、ゆっくり辺りを見回し、考え込んだりすることが許されなくなったのである。
そんなことをしていると取り残され、負けてしまうのである。

*

けれども、いったい何に負けるというのだ。
そして、勝つというのはどういうことなのだ。
上海の高層ホテルで深夜、ぼくは夜景を眺めながら自問した。

*

ぼくたちは何か大きなものを忘れたまま、必死で走り続けているのではないか。
ただその走るための脚力をつけようと懸命なのではないか。
走るというただそのことを目的にしているのではないか。
たとえば子どもたちの学力を考えると、その学力が子どもたちにどんな幸せをもたらすのかといった、そういう基本的な問いを避けてただただ走らせようとしてはいけないか。
子どもたちはなぜ学ばなくてはならないのだろう。
ヒトはなぜ学ぼうとするのだろう。
何を学ばばいいのだろう。
学校にはなぜ行かなくてはならないのだろう。
こういった問いに、子どもたちだけでなくまずは学校の先生たちがどう応えるのか、ぼくは聞いてみたい。
そしてまた、教育行政を担当している文部科学省の大臣や官僚たち、地方の教育委員会の人たちに一人ひとり訊ねてみたい。
もちろん子どもたちの親にも聞きたい、あなたはなぜ自分の子どもを学校に送るのかと。
そういった問いにきちんと応えることができ初めて、きちんと応えようとして初めて、ぼくたち大人や教育者は子どもの学力について論じることができるのではないか。
走れ、と言われた子どもがふりむいて、どこへと聞いた時に大人はどう応えるのか。
走るためのテクニックや筋力は方法であって目的ではない。
見据えられたぼくたちが子どもたちに何を語るか、それこそが今、論じられなくてはならない。

記憶の中の微笑

学力低下を嘆く者たちの狡猾生きるという旅、あるいは<そのころのぼく>

(3) 母

1

参観日の朝には運動会や学芸会の朝とも共通する一種独特の緊張感があった。

小学校の参観日に父が来ることはなかった。父親参観日というのは確かそのころにはなかったように思うが、たとえあったとしても父が自分の子どもの参観日にやってくることはなかっただろう。

いつも母が来た。そして、母はいつも和服を着ていた。ぼくは華やかな和服を着た母が好きだった。

だから、参観日は好きだった。

時に登校拒否に陥るぼくはしかし、優等生の一人であった。参観日の授業時間に他の保護者とともに教室の後ろに立つ母のまなざしが心地よかった。授業中、ぼくはまっすぐに挙げた右手の指先まで母の視線を感じた。

授業が終わり母に駆け寄り抱きついたぼくは母の着物に柔らかな匂いをかいだ。母は優しく微笑んで抱きしめてくれた。

中学、高校と進み、母は PTA の役員等を引き受け、卒業式などで挨拶をするようになった。そんな母のことを疎ましく思ったことは一度もない。母が整理された美しい日本語で挨拶するその姿をごくごく自然にほほえましく見ていた。

2

小学 1 年生の頃は幼馴染の久美子ちゃんと一緒に登校した。すぐに他の子たちから囃されるようになり、母は久美子ちゃんの母親と相談して少しだけ登校時間を早くしてぼくたちを送り出してくれた。母はそんな朝ぼくを起す時にいつもぼくのおでこにキスをした。ぼくはずっとそれを内緒にしていた。なんとなく恥ずかしかったのである。

きれいな字が書けるようにと母はぼくに字を書く練習をさせた。母が物差しで線を引きこしらえてくれたマスの中に一文字一文字ぼくは丁寧に書き込んでいった。ああ、上手だねえ、という母の褒めことばがぼくを喜ばせた。ぼくは母より数等きれいに書くことができるようになったが、母のような素直な文章でこまめに手紙を書くことはいまだにできない。

小学校に入学する前にはプロの画家の個人指導も受けさせてくれた。ぼくはよく植物の絵を書いて、母にプレゼントした。

合奏団にいたぼくのコンサートにはいつもやってきてくれたが、ただ静かにそばに微笑んでいて、よかったよというだけで決していわゆる批評はしなかった。

いつもやわらかくぼくを抱きしめてくれていた。

3

その母を、ぼくは蹴ったのだ。

中学一年が終わろうとする頃のある日、ぼくは不思議な苛立ちの中にいた。何が原因だったか覚えていないが、ぼくはぼくの半分ぐらいしかない小柄な母を足で蹴ったのだ。

母は怒らなかった。

ごめんね、と母は言った。

蹴られた母がぼくに謝った。

このことは誰も知らない。

もしそのとき父や兄姉が知るようになったら、ぼくはきっと恐ろしいほど厳しく叱られただろう。いや、ただ叱られるだけではすまなかっただろう。

良い子のぼくは母を蹴ったのである。

反抗期における苛立ちがさせたことなのかもしれないが、とてもそういった都合のいい解説が慰めをくれる程度の事件ではなかった。

ぼくは家を飛び出し、近くの河原まで走った。河原につくと、川に向かってしゃにむに石を投げた。投げた石が河原の石にぶつかり、割れる。投げた石が川の水に突き刺さるように消える。

ぼくは自分を生まれて初めて激しく否定した。

ぼくはぼくを憎んだ。

日が暮れて家に戻ったぼくに母はもう一度、ごめんね、と言った。

4

ぼくのこの傷については初めて文字にする。文字にすることで傷の疼きがなくなるわけではないが、ぼくという人間のどうしようもないほどの愚かさや醜さを記しておくべきだと思うようになったのである。

母は 18 年前のぼくのロンドン行き直前、突然逝った。68 歳であった。

涙の意味

生の在処と比喩>

1

女優の竹下景子さんから手紙が届く。中にワープロ打ちされた芝居の分厚い脚本（戯曲）が入っており、読んで感想を聞かせてくれないか、この脚本を芝居にすることができるだろうかというのである。

休みの日、一気に読んで返事を書く。

読み終えたばくは、竹下さんへの手紙の中で、その作品（David Hare「Permanent Way」）における<metaphor（比喩）>について少し触れた。

描かれるものは具体的な現象（たとえば、ある事故や事件）であるが、観客はその具象からいったん抽象（こういう<状況・場面>ではこの種の喜びや悲しみが生まれるという思い込みや一種の錯覚やイメージなどといったことがら）というプロセスを経て自らの具象（<私>の問題）へと戻っていく。そのプロセスは多くの場合、意識されない。観客は次第に芝居の中の人物に同化していくとよく言われるが、実はそうではない。観客がたとえば芝居のある場面に涙するのは、登場人物と一体化して、つまり登場人物になりきり、その境遇や状況に涙しているのではない。あくまで観客は自分という存在のどこかにその状況を結び付けて、喜び、悲しみ、涙しているのである。ゆえに、描かれる世界はむしろ、自分の日常と遠い世界のほうがその比喩性が高まり、普遍性が生まれてくる。ピカソの抽象画がそうであるように。

そういった思いでばくは感想を記（しる）した。

竹下さんからは、「実際の事故について、先入観を持たないほうが、正しい観客になり得るといふ御意見は目からウロコでした。後押ししてもらったようで、意を強くしました」といったお礼の返事もらった。

しかし、ばくはそれから考え続けることになる。

2

なぜ涙が出るのだろうか。

整理したはずの論理が何か大切なものを見落としているような、そういった気持ち悪さを感じ始めたのである。

ある日、ばくは仕事を終わるとホテルのバーでお酒を飲みながら時間を潰していた。次男がシンガー・ソングライターとして出演する会場のすぐ近くのホテルである。

時間になりその会場に行くと、いつもとは違った、つまりはファッションナブルなロンドンっ子たちとは異なった連中が集まり始める。若者たちも少しはいたが、そのほとんどは優しくも鋭い目つきをした中年の男たちである、いや女性もいた。

いつもは何組かのグループが演奏し、コンサートは進んでいくが、その夜は違った。

次から次へと詩人たちが前に立ち、自作の詩を読み上げていく。アイルランドから来たという詩人は有名らしく、彼の番になると期待するような心地よい緊張感があたりに漂った。いわゆる詩人たちの集まりである。次男もまた詩を書き続けているが、彼はその夜、ゲストとして自作の歌を歌った。ことばの一つ一つがギター之音とともにマイクを通さない肉声で響いた。

残り少なくなったウイスキーのグラスを見つめながらばくは、日本で詩を書いていたころのことを思い出していた。

そして、それはいわゆる普通の人たちの日常とはかけ離れた思い出であった。激しく、切なく、暗く、閃光のような輝きと黒濁々たる闇を感じさせる世界だった。

しかし、いや、だからこそ、そこでばくは生きていた。

3

芝居を観、音楽を聴き、絵を鑑賞して、体が揺さぶられるような感動を覚えるのはどうしてだろう。

それらの中にこそ人間の生につながる真実があるからではないか。

それらは確かに比喩的で、象徴的であるが、確かな生の姿を瞬間であるにせよ、比喩的であるにせよ、象徴的であるにせよ、見せてくれるのではないか、突きつけてくるのではないか。

それに比して日常の何がより具象的で実感できるというのか。

ぼくたちは日常という繰り返しや惰性の中で、むしろ実感できない戯れ、すなわち嘘の世界を彷徨ってはいないか。

日常こそが嘘ではないのか。

あるいは嘘であるからこそ安息できるのではないか。

それらを無理やり実感できるものとして受け入れようとしているのではないか。

そして、あるとき、芸術などが持つ生の裸の姿に触れたとき、慄（おのの）くのだ。

その姿にあこがれ、怖れ、そして涙するのではないか。

4

今は、確かにあるのだろうか。

そして、ばくは確かに生きているか。

記憶の中の微笑

生きるという旅、あるいは<そのころのぼく>

(4) どうして、苦しいと、もっと生きたいと言わなかったのですか

先週の半ばから、しつこい風邪に悩まされている。咽喉に激しい痛みを覚え、薬も咽喉を通らない。熱のせいか、大変な汗をかいて夜なかなか眠れない。

しかし、そのわずかな眠りの中でぼくは、夥しい数の夢を見た。それらの夢のほとんどはフィクションではなく、実際に経験したことが断片的に表れた息苦しいものだった。

*

父が死ぬ前だ。

「会いたいので、できれば帰ってこないか」という父には似つかわしくない誘いのことばに従ってぼくはロンドンから帰国した。

末期の癌に父は淡々と向き合っていた。

病院は嫌だというので、大きな機械を運ばせて自分の部屋で横になっていた彼は、ぼくが帰ると部屋から出てきて、ぼくが買ってきたスコッチ・ウイスキーをストレートで口にした。

うまい、ありがとう、と言うとまた部屋に戻って横になった。

病人にウイスキーなんか買ってきて、と兄姉からは盛んに責められた。ぼくにはそれらのことばは耳に入らず、わざわざ起き上がりウイスキーを口にした父の横顔が目にしみた。

ロンドンに戻るぼくを、父は門の外まで送ってくれた。握手をしたぼくに彼は、これでさよならだ、と言った。

にっこり微笑み彼は、頑張れと言った。

それが最後だった。ロンドンに戻ったぼくを父の危篤の報が追いかけ、その数時間後には訃報が届いた。

医者によれば、全身に転移した癌によって相当な痛みがあったはずだという。

しかし彼は、痛みを訴えることをしなかった。

*

父が死ぬ直前、ぼくは父との静かな時間を持った。

そのとき、ぼくは衝撃的な話を聞かされた。

ぼくが幼稚園児だったころ、京都に住む伯父が亡くなったというので母に連れられて通夜に駆けつけた。そのときのことは少し覚えてはいたが、なぜ伯父が死んだのかは知らなかった。

あの時、伯父さんは自殺したんだよ、父は静かに語り始めた。伯父が学校長を務めていた学校の教員が不祥事を起こした。その責任を取って、伯父は死んだというのだ。京都・左京区の哲学の道の傍らに住んでいた伯父は、その丘に登り、辞世の句を詠んで自決した。

教育というのはね、そして責任を取るというのはね、厳しいものなんだ、父はそう言うのと、またベッドに横になった。

*

江戸時代、先祖に凶師慈円という人がいた。彼は寿命が尽きるまさにそのとき、枕元に家人を集めるところ言った。

私は今まさに死なんとしている。私が死ぬとき家を継ぐ者もそれを支えんとする者も決して見苦しいことがあってはならぬ。今、脚のところが死んだ。腰が死んだ。胸が死のうとしている。

そして、別れを継げると死んでいった。

*

長兄が長い手紙をよこしてきたのは彼が死ぬ数ヶ月前である。癌に侵された彼は、会いたい、ということばでその手紙を結んだ。

ロンドンから東京の病院に駆けつけたぼくの顔を見て、兄は泣いた。

ぼくが病室を出た後、兄は義姉に、まだ死にたくない、と言ったという。

英国に戻り、ケンブリッジ大学で仕事をしているとき、彼の死が知らされる。

*

痛みをのみこみ、耐え、背筋を伸ばしたまま死を迎える姿は確かに美しい。悲しいほどに美しい。けれども、その美しさは何なのだ。

人は愛する者たちと別れねばならなくなったとき、涙し、苦しい、死にたくないと呼びたくなるのではないか。

いや、その瞬間、もう一度、あるいは初めて、本当に人を愛そうとして、背筋を伸ばし、微笑んで、さようならと言おうとするのかも知れない。

Hunger is the best sauce

吉朝とカズ生きる

年に数回、日本に出張する。滞在期間はいつもおおよそ三週間前後である。日本滞在中は土曜や日曜日も仕事で、つまりは一日も休みがない。おまけに、昼間は日本時間で働き、夕刻からは英国時間に切り換えて働くことになる。時差のいたずらで、日本が休もうとする頃、英国は目覚めるのだ。ゆえに日本出張中のぼくは、一日を 48 時間生きることになる。

むろん、疲れる。

毎朝自分を叱咤激励してベッドから抜け出す。天井を見つめながら声に出して言うのだ、「がんばれ」と。

自分の好きな仕事を、自分のしたいようにしているのだからぼくは幸せなのであるが、それでも疲れを感じる時がある。贅沢な疲れであることはわかっている。

*

日本滞在中の仕事のわずかな隙間を利用してぼくは寄席に出かける。大体は「新宿・末広亭」である。かつて好んでいた漫談や漫才は最近あまり好まなくなってきた。面白くないのだ。落語が良い。特に古典落語が面白い。同じ演目をいろいろな落語家が演じるのを聞くと落語家の味や力量の違いが感じられて楽しめるのだ。しかしながら、寄席の落語は時間がもう一步十分でない。短いのだ。じっくりたっぷり聞くには独演会が良い。

談志の独演会に行きたいが、なかなか機会がない。ようやく手に入れたチケットを仕事のためにフイにしたときはしばらくの間立ち直れなかった。談志の落語をかぶりつきでたっぷり聴きたい。早くしないと彼もこの世からいなくなってしまうようなのだ。

*

吉朝が死んだ。関西落語家の桂吉朝である。50 歳の若さで彼は癌に倒れ、11 月にこの世を去った。ぼくの最も好きな落語家の一人だった。数年前、東京の国立演芸場での彼の独演会にも駆けつけた。CD や DVD も何度も何度も聴いている。話の切れ味は秀逸で、だからといって小朝のような薄っぺらさはない。これからどんどんうまくなり、どんな味を重ねていくのだろうと楽しみにしていた。

入院していた病室では周りが寝静まった深夜稽古に打ち込み、その病院から最後の高座となった大阪・文楽劇場に駆けつけた。彼はまさに命を削るように演じ、アンコールの拍手も聞こえぬまま酸素マスクとともに消えたという。

死ぬことを悟った彼は残りの時間をさらに芸を磨くことにあてた。そのことで彼はあるいは死期を早めたかもしれないが、間違いなく最後の最後まで落語家・吉朝として生きたのである。

*

1 月 20 日付の朝日新聞を読むと、あのサッカーの三浦知良（カズ）が J2 横浜 FC の選手兼監督補佐に就任したという。前もこのコラムで書いたが、ぼくはサッカーには興味はない。しかしこのカズと呼ばれる男は無視できない。

十代半ばから日本のサッカー界のスターとして君臨した男の W 杯フランス大会代表漏れに始まる挫折の中での苦闘は、人が何のためにどう生きるのかといった問いに対する一つの答えのようなものにぼくには思えるのだ。

代表に選ばれなかった彼は、しかし黙々とサッカーを続ける。「ぼくはかつてのように華やかなプレーはできないだろう。しかし、ぼくはまだまだサッカーがうまくなれる」「ぼくはまだぼく自身の知らないぼくを追い求めなくてはならない」

カズの挑戦は、J1 から二軍に当る J2 の選手に格下げになっても続いている。

*

吉朝やカズにとって<仕事>とは何なのだろう。

会社帰りに居酒屋で、上司の悪口や仕事の愚痴をこぼす輩にとっての<仕事>の位置付けとはずいぶん異なっているように感じられる。生活の糧として、あるいはただただお金儲けのためとして<仕事>に従事する者たちとははるかな隔たりを感じる。

吉朝もカズも、彼らは<仕事>を自分の<生>（生きるということ。自分が生きているということの証し）と重ねるのだ。そしてその<生>はいつも飢えている。

<空腹>なのである。

何かを獲得して喜びを感じた瞬間、そのまなざしはもう次の獲物へと向けられている。彼らの<生の胃袋>は満たされることはない。<空腹>であればそこに飛び込んできた食物はいつもおいしい。どんなにおいしいと評される、たとえばミシュランの星の付くようなフランス料理であったとしても満腹であつたりすると味わえない。

彼らはいつも自らを<空腹>にすることができるのだ。もっと、もっと、と彼らは成長する自分を、あしたを見つめようとする。

あしたを信じようとする。

照ちゃんが来てくれたよッ！

空港のターン・テーブルから大きな鞆を取り上げるとぼくは、出迎えた宣幸兄の車に乗った。日本出張中の一日を故郷の墓参りに当てたぼくは、日本到着後の激しいスケジュールにやや疲れを感じていた。

前回の出張時にも故郷まで足を伸ばしたが、ようやく墓に着いたときはすでに陽は落ち、真っ暗だった。最近故郷も仕事の場と化し、テレビやラジオへの出演、あるいは講演等を頼まれることが多くなり、私的な時間をとることが困難になった。

墓に眠る両親や長兄(靖幸)とゆっくり語り合いたい、そう思い、今回の帰省は兄妹以外には知らせなかった。

ぼくより 3 歳年上の宣幸兄はいつも空港まで出迎えてくれる。帰省するたびに彼や義姉の時間を奪ってしまい申し訳ないと思うが、つい甘えてしまう。建築設計事務所を営む彼は、時間の都合はつけられるからと、ぼくの頼みを断ったことがない。

車に乗り込むと、「お昼、まだだろ？」と彼が聞いた。

「ウン、途中でうどんか何か食べようか」

途中の民芸調のお店に立ち寄り、ぼくたちはその大きなお店の奥の畳の上に座った。

「なかなかいいお店だね。ここには来たことがあるの？」

「ああ、ちょっと前にね。実はね、そのとき、ここで順ちゃんに会ったんだよ、偶然」

「えっ、順ちゃんて、誰？」

「ヒロちゃんのお姉さんの。ここでパートで働いているんだって。家がこのすぐ近くらしくて」

「えっ、……。そうか、困ったなあ、会うのつらいなあ。まいったなあ」

「でも、仕事、毎日ではないらしいから、今日いるとは限らないしね」

「そうか、……。でも、まいったなあ」

メニューを見ているぼくたちのテーブルに注文をとるためにお店の方が近づいてきた。

その女性は兄を見るとすぐに笑顔で挨拶した。

複雑な顔つきになった兄が、ぼくの表情を伺いながら彼女に言った。

「テルだよ」

「えっ、テル、ちゃん？」

彼女は数十年ぶりのぼくを見つめると顔をくしゃくしゃにした。目にはすぐに涙があふれた。

「照幸です。ごめんなさい。本当にごめんなさい」

「テルちゃん。テルちゃんなの？」

ぼくも涙をおさえることができなかった。

*

ぼくの幼馴染の高橋弘は 5 年前に突然この世を去った。

彼が死ぬ一月ぐらい前に、ぼくたちは会って子供の頃の昔話をした。彼とぼくとは小学生時代、ほとんど一緒にいた。

「次に日本に戻ってくるときに、昔の仲間たちに会いたいなあ」とぼくが言うと、「ぼくが幹事をしてみんなを集めるよ」と彼は言ってくれた。

「ヒロちゃんは体でどこか悪いところはあるの」と尋ねたぼくに、彼は明るく、「まったくどこも悪いところがないよ」と胸を張った。

ロンドンに戻り、講義のため教室に向かおうとしていたぼくに、彼の訃報が届いた。たった一日で、突然彼はこの世を去った。心臓発作と聞いた。

我慢をしながら教壇に立ったぼくは、しかし講義の途中、こみ上げるものを抑えることができず嗚咽した。

所長室に戻り、ぼくは手紙を書いた。彼の母親に何か書いて送らねばと書き始めたぼくは、にじむ文字に最後までそれを書き進めることができなかった。

それから何度も故郷に戻ったぼくは、しかし彼の霊前に立つことができなかった。

彼の前に立つことが怖かったのだ。彼の母親や姉に会うことが怖かったのである。

何が怖いというのだろうか？

*

そのお店からぼくは、ヒロちゃんのお母さんが彼のお姉さんと一緒に住む家へと向かった。

玄関のドアが開き、年老いた彼の母はぼくを見つめた。

「テル、ちゃん、来てくれたのね」

「おばさん、ごめんね」

額縁に納まったヒロちゃんに手を合わせるぼくの背後から、彼の母は叫んだ。

「ヒロッ、テルちゃんが来てくれたよ、テルちゃんだよ、来てくれたんだよ、ヒロッ。一番待っていたテルちゃんだよッ」

まるでたった今息子を失ったかのように、彼の母は叫び、泣き崩れた。

ぼくは 5 年も経って、やっとここに立つことができた。

「ごめんね」

迷走する知性

(1)外国語教育論争の軽薄

小学校からの英語教育についての論争が盛んである。文部科学相の諮問機関・中央教育審議会の外国語専門部会が、小学5年から週1時間程度の英語を必修化する必要があると答申したのである。

ぼくは日本で、このテーマについて幾度も講演し、あるいはパネルディスカッション等で日本の大学教授たちと討論し、考えを述べた。

早期外国語教育については賛成である。小学校から英語教育などの外国語教育を取り入れるのはいいことだと思っている。幼児教育に取り入れられてもいいとさえ思っている。

けれども今、日本の早期英語教育論者たちが主張するその論理には与しない。与しないというよりも反対の立場である。

たとえば、中教審・外国語専門部会主査で国際教養大学長（元東京外国語大学学長）の中嶋嶺雄は次のように言う。

「開国か鎖国か。それに近い激論が起こる要素が、この問題にはある。子供たちを鎖国時代的な状況に閉じこめておいていいのか。英語優位はいかんともし難い。国家百年の計と思う。英語の必修化は、日本が国際文化国家として生きていくために不可欠な、国家のあり方にかかわる問題だ」（朝日新聞 2006.4.24）

早く手を打たなければ、他の国に遅れをとるぞと警告するのである。開国か鎖国か、などと中嶋のまなざしには国を背負った意気込みがある。

このような力瘤はどこから生まれるのだろうか。

バブルがはじけて慌てた日本の大人たちはこのままでは国際競争に勝てなくなると叫び始めた。国際競争力とはつまり、国際経済競争力のことである。

早期IT教育も早期英語教育もすべてはそこから発想された。国際経済競争力のツールとしてのIT技術であり、英語力なのだ。

ついでに言えば、昨今の百マス計算や朗読ブームなども、そのような不安感に乗じて声高に叫ばれ始めた学力低下論だけではなく、国家意識の高揚政策とも巧みに連鎖している。いやむしろ、国家意識の高揚にこそ狙いがあるようにも思えるのだ。

いま、〈国家〉が旬なのである。とても品格というものとは無縁の者たちが、好んで「国家の品格」を語るのである。ここで取り上げられる〈品格〉とは、人間としてのそれではなく、日本人（日本国民）としての品格である。ゆえに、時にそれらが他の国の人たちに理解しがたいものであったとしてもかまわない。日本という国にとっての品格であり、国際社会にとっての品格ではない。

しかし、そうでありながら、たとえば中嶋に見られるように、一見国際社会を意識しているかのような衣をまとい、それらは語られていく。「グローバル・スタンダード（地球標準）」などという言葉をも都合よく歪曲化して利用する。

われわれの子どもたちが、これからの国際社会においてどのように生きていくのか。どのような教育が子どもたちを幸せにするのか。

まるで武器のように設定された英語力やIT技術が本当に子どもたちを幸せにするのだろうか。

英語を教える力のない教員に無理やり押し付けて、「さあ、やれ」と命令する、それらはまるで、戦闘機を竹槍で叩き落そうとした戦争当時の愚かさには似てはいないか。

いや、まさにそうなのである。中嶋のように、今、小学校英語を必修化しようと躍起になっている者たちは、〈戦争感覚〉の中にいるのである。負けてはならぬと身構える彼らこそが、それゆえ国際社会の孤児として彷徨っているのである。

ぼくが早期外国語教育を推進したいと思うのは、皮肉なことだが、子どもたちを、彼らのようにはしたくないからである。

早期であるかないかという議論の前に、なぜ子どもたちに外国の言葉を学ばせようとするのか、ぼくたちはもっともってそこから議論を積み重ねなくてはならない。

日本の知性は迷走している。

勝つか負けるかといった極めて単純で稚拙な座標軸のもとで狂奔している。

ぼくは、日本の教育が忘れてしまっているものが、外国語教育によって取り戻せるのではないかと期待する。

そこで得られるものは、〈価値の多様性の認識〉である。

一人ひとりがそれぞれ異なった存在であり、それゆえ等しく尊いといったことを学ばせたいと思うのである。

一人ひとり異なっているんだから余計なお世話だなどとは、いまや不良の高校生だって生意気に口にする。

異なるということや尊重するということがまったくわかっていないのであるが、なぜそれが間違っているかについては誰も教えてはくれない。（敬称略。この稿続く）

小学校英語は何のために

迷走する知性 (2)

小学校からの英語教育導入に関する賛否両論の論点は、概ね以下のように整理することができる。

- ① グローバル化した世界において日本が対応し勝ち抜いていくためには、国際共通語としての英語力が必要である。その英語力の養成のためには従来の中学校からの文法中心の英語教育ではなく、「話す」・「聞く」といったコミュニケーション能力をつけるような小学校からの英語教育を行わないと間に合わない。
〔導入賛成派〕
- ② 小学校からの英語教育導入は日本人の母語である日本語力（国語力）の習得への悪影響が危惧される。また、早期英語教育が英語力をつけるのに効果があるという科学的根拠はない。〔導入反対派〕

*

前号においても述べたが、ぼくは早期外国語教育導入については賛成である。小学校から英語教育などの外国語教育を取り入れるのはいいことだと思っている。もっと早めて幼児教育に取り入れられてもいいとさえ思っている。

けれども、日本の早期英語教育論者たちが主張するその論拠には与しない。与しないというよりもむしろ反対の立場である。そしてまた、それと同時に反対派の論拠にも与しない。

*

子どもたちの教育について論じるにはまず、その教育が子どもたちにとって、子どもたちの未来にとってどのような意味を持つのかといった視点から出発しなければならない。

外国語を学ぶということは人間（子どもたちも含めたすべての人間）にとってどのような意味を持つのだろうか、と考えるのである。

世界にはまだ、生まれた土地（たとえば、ムラ）を一步も出ることなく死んでいく者たちがたくさんいる。その者たちはそこで食べ、働き、寝て、愛し、子どもを育て、そして死んでいくのである。その者たちにとってソトの世界は「絶対に知らなければならない世界」ではない。異なった文化や異なったことばはなくとも、彼らは、笑い、泣き、怒り、許し、喜び、生きていくのである。

その者たちにもなお、外国語や異文化を学ぶ意味があるだろうか。もしも彼らにおいてその意味が見出せないとするのなら、おそらくすべての者たちにとって、その意味などはありはしないのだ。

結果的に、限られた者たちの〈わがままな生（欲望）〉を満足させるためだけの〈学習（習得）〉はないほうがいい。限られた者たちの経済力や軍事力等の僕（しもべ）となるためにぼくたちは生まれてくるのではないのだから。

*

すべての者が異文化を学ぶべきだ、とぼくは考えている。

また、異なった文化を学ぶには、つまりその方法であるが、文化を産み、あるいはその文化によって産み出されたことば（その人たちのことば・外国語）を学ぶのがいい。

ことばにはそれを使う者たちの〈呼吸としてのまなざし〉が実に正直にしみ込んでいる。したり顔した文化論や文明批評よりはるかに迫力があり、正直で、何より新鮮だ。

そして、そこで獲得することのできるまなざしは、ときに衣や食や住に匹敵するほど価値あるものである。

ぼくたちは一人では生きられない。

一人で生きていくことのできないぼくたちは〈社会〉というものを形成する。それは大きいものも小さいものもあるが、いずれにしてもぼくたちはそこで〈自分以外の者と関わる〉ということである。

残念ながら、〈自分以外の者と関わる〉ということは、いつも楽しく喜びにあふれていることとは限らない。ときに苦しいことであったり、悲しいことであったりする。〈相手〉を好きになったり嫌いになったりするのである。

どんなに努力をしても、ぼくたちは自分の目でしかまわりを、つまり〈関わる他者〉を見ることができない。自分の目で見、眺めて、見つめて、そして判断するのである。

自分の目が、まなざしが、「嫌い」と断じたらそれは絶対であり、なかなか「好き」には転じない。学校に行き、勉強して、大人になっていくにつれて、「好き」よりも「嫌い」がどうしたわけか増えていく。自分の周囲に気に食わぬ者が増えていくのである。

それは不幸だ、とぼくは思うのだ。

ぼくたちは嫌いな者たちに囲まれて生きていくよりも、愛する者たちと一緒に生きていきたい。貧しい価値観やまなざしは多くの「嫌い」を産む。自分の目でしか他者を見つめることのできないぼくたちは、その自分の目を、まなざしのありかを豊かなものに変えていくことでしか、「好き」を増やすことはできない。

〈異なる〉を学ぶということはそれを育もうということだ。外国語教育はそこに基点を持つのである。（この稿、続く）

小学校に教科なんかいない

迷走する知性 (3)

小学校からの英語教育導入について考えるとき、ぼくはいつも自分が子どもだった頃のことを思い出す。

*

ぼくの通った小学校は、お城の中にあった。いくつもの大きな石を積み重ねて作られた城壁は、その、たとえば大手門をくぐるとき、学校のウチとソトに確かな境界を作った。

学校は家とは違った。町とは違った。

だから学校に、家で母親に甘えるぼくはいなかった。町の本屋で立ち読みするぼくも、学校にはいなかった。

父も母も教育者だったが、ぼくが通う学校の先生はその父や母とはどこか違った。

学校は特別だった。

幼稚園を卒園し小学生になったぼくは、突然ずいぶん大きくなったような気がした。

配られた教科書はすごかった。本屋さんで時々買ってもらっていた学習雑誌とはまったく異なっていた。薄いそれらはなんだか気取っていた。汚してはいけないように思えた。並んでいる文字は一頁一頁に丁寧にそっとおかれているといった感じだった。挿絵は雑誌などとは比べ物にならないくらいおとなしかった。だから、真面目さを感じ、ぼくは成長したように感じたのだった。

国語や算数という教科は不思議だった。算数の問題にも文章で書かれたものがあり、しかしその文章に出てくる太郎君や花子さんは国語の太郎君や花子さんとは異なって怒ったり喜んだりはしなかった。だから太郎君は一郎君であっても明君であってもよかった。

次第にぼくは考え込むようになった。ぼくが知りたいことや隣の席の久美子ちゃんが知りたいこととは違った事柄が教科書の中にはたくさん詰め込んである。

そして授業も、アメリカのことを勉強したかと思ったら休憩時間の後は顕微鏡をのぞかされた。給食が終わると、もうとっくに知っていたけれど初めて習うような顔をして漢字の練習をした。それにしても教科書の文字は大きかった。ぼくは本を読むのが好きだったから、教科書の文字を見たとき、スーパーマーケットなんかで見かける広告の文字を見ているようで、なんだか読むというより見るというような感じがした。

小学生になってやっぱり一番緊張したのはこれらの、社会、理科、国語という名前の付いた区切られた授業だ。時間割があって、先生はほとんど同じ先生なのだけれど、くるくるとその中身が変わる。

さっきのアメリカの大統領のケネディとかいう人のことについてもっと知りたいなあと思っていると、先生は病院のお医者さんが着るような白い服を羽織って現れるんだ。へえー、葉っぱってこんなふうになっているのかと驚いていると配られた紙にそれを描き写さなければならない。よし、きれいに描こうと描き始めるとどうやらいろいろと覚えなければならないようだ、それぞれの部分の名前を。マ、ちょうど聞きたいと思っていたところだからいいけれど。他の葉っぱも顕微鏡でのぞいてみたいなあと思うのだがどうやらもう時間ようだ。

*

小学校で英語を教える計画がどんどん進められていく。まずは「必修化」が実現し、そして「教科化」へといくのだろう。

「必修化」とは、まだ教科としては位置付けないが英語についていろいろな活動を通して学ばせようという段階である。評価等はしないのでのびのびと、しかしきちんと時間割の中には位置付けようというものである。

それに対して「教科化」とは、いわゆる国語や算数、理科、社会といった教科の一つとして英語科を小学校に位置付けようというものだ。

繰り返して言ってきたようにぼくは早期外国語教育（英語とは限らなくていい）には賛成である。しかしそれはおそらく為政者の発想にあるような英会話力をつけさせるためのものではない。さまざまな角度からものを見、考えることができるような人間の育成のためにはできる限り早い時期から異文化や外国語について学ばせるのがいいと思っている。「英語がぺらぺら話せる人間」は鳥飼玖美子立教大学教授が言っているように中学校からの教育でも十分なのだ。（中学校からの英語教育については別の機会に述べる）

今盛んに取りざたされている小学校英語の教科化には反対だ。いや、もしも現在の小学校における教科という枠組み自体が見直されるということならば積極的に賛成する。

小学校には中学や高校と同じ国語や理科といった枠組みとしての教科は必要ない。もっと大きく、たとえば、「ことば」とか、「つながる（コミュニケーション）」とか、そのような枠組みの中で、子どもたちの知的好奇心を育てるようになるといいだろう。それを新しく「教科」と呼ぶならば、それはきっと豊かな果実を結ぶに違いない。（続く）

壊れたままの玩具^{おもちゃ} 迷走する知性 (4)

女の子がお人形さんで遊ぶとき、ぼくたちはミニチュアの戦車や車、あるいはロボットを手にしていて、買って貰ったばかりのしばらくの間は、それらは大切に大切に扱われるのだが、その遊びに慣れ、やや飽きてくると、ぼくたちは次第にそれらの玩具がどうして動くのかとか、どうして走るのかといったことが気になりだすのだった。

分解された玩具はしかし、元の形に戻ることはなかった。どうしようもない悲しさを覚えながら立ち尽くすことしかできなかった。

玩具をばらばらに分解するとき、元に戻せるかどうかといった心配は子どもの心には生じない。ひたすら奥へ奥へとまなざしは向かうのだ。

そして、知る。部分となったものはそのままでは走ることができないということ。

＊

小学校英語の是非について交わされる意見を見聞きするとき、子どもたちのくまなざし>といった視点が皆無であることに驚いている。子どもたちの知的世界への誘(いざな)いがずいぶん乱暴な形で取り扱われているようで心配なのだ。

英語を学ばせることが、子どもたちの何を豊かにするのが問われぬまま、大人たちは大人社会の表面的な損得で教育を弄んでいる。

学力低下論が跋扈し、「学力をつけてやる」と上から押し付けようとするような強引で稚拙な教育手法が復活しつつある。「百マス計算」のもてはやし方がその一例であり、象徴である。

外国で暮らしながら眺めていると、日本社会の意識構造が根本から大きく変わりつつあるように思えてならない。問答無用で突っ走る小泉首相への圧倒的な支持率(民意なのだろうか、本当に)は、日本という国が戻ってはならない価値観へ、たとえば「国家の品格」などと化粧をしながら実に巧みに、そして急速に歩んでいることの現れである。

日本という国は、大変な選択の時を迎えている。

そういう時、教育者も含めた識者たちはいったい何をしているのだろうか。

＊

小学校での英語教育を充実させるために、AET(Assistant English Teacher. ALT=Assistant Language Teacher ともいうことがあるが、ほとんどは英語教師)の数を増やそうと文部科学省は計画し、来年度の概算要求に約 38 億円を盛り込んだそうだが、ぼくにはとても奇異に感じられる。

なぜなら、この AET となって日本にやって来る者たちは、(小学校)教育の専門家でもなければ英語教育の専門家でもないのだ。ただ英語圏の出身者(強い訛りのある英語話者も含めて)であり、ほどほどの教育を受けてきた者たちに過ぎない。教育に対する情熱も言葉に対する姿勢も皆無といった者たちが、日本の子どもたちの大切な教育の場で不思議に重用されている。

教育における専門性とはいったい何なのだろうか。

そしてまた、この国の教育を預かる者たちは本当に本気で子どもたちの未来について考えようとしているのだろうか。彼らは、表面的に目に見える実績を上げれば、自分の仕事は終わったと思おうとしているのではないか。

実はそうなのだ。

この国は今、稚拙で自分のことしか考えない気持ちの悪い大人たちによって、次第に貧相で見せ掛けだけの社会になろうとしている。

たとえばあの「学力低下論」も、「学力とは何かについては考えていないが、低下している」といった奇妙な公言をする東大教授たちによってプロパガンダされている。学力とは何かについて定義しないまま学力低下を主張することの愚かしさをこれらの者たちは気付いてもいない。

こういった者たちが今、懸命に、子どもたちの教育を壊そうとしている。いや、すでに壊してきたのである。

今仮に日本の教育に問題があるとすれば、それは今の大人たちの責任であり、その張本人の大人たちに改革の力はない。

＊

小学校英語の必修化、ましてや教科化の導入は間違いなく失敗する。

この国の根本的な骨組み(モノの考え方)を変えない限り、恐ろしい結果が現れるだろう。そのとき、いったい誰が責任を取るのだろうか。

＊

壊れた玩具を見つめながら佇む子どものそばで、愚かな親・大人が囁くのだ、「大丈夫だよ、また新しいのを買ってやるよ」と。(続く)

小学校英語と児童英語

迷走する知性 (5)

昨今話題を集め、もはやその必修化が現実視されていた小学校における英語教育について、安倍内閣の伊吹文明文部科学大臣はその就任会見の席上、消極的な見解を述べた。国語や算数の力をつけるのが第一であり、英語教育については余裕があればといった程度でよいというのである。

「ゆとり教育」の見直しの際もそうであったが、日本という国の教育行政には理念というものが欠落しており、ゆえにその政策や方法は極めて表面的、刹那的、かつ打算的である。(ぼくは今でも「ゆとり教育」が学力低下を招いたとは思っていない、念のため)

小学校現場では、教師たちのさまざまな努力がまたもや徒労となりかねない。無論、そこで翻弄されるのは何より子どもたちである。

伊吹大臣の見解が具体的な政策としてどのように展開していくかについては注目していきたいが、その見解がどのような根拠や経過で構築されたかをまず問いたい。

*

文科省がどのように動くかはともかく、小学校における英語教育についての私見を以下、まとめることにする。

まず前提として、「小学校英語」と「児童英語」という二つの言葉について整理しておきたい。これらの言葉の混用が、この問題をわかりにくくしているように思われるからである。

「小学校英語」とは、あくまで「小学校において取り扱われる英語」のことである。

そこでは、学校教育である初等教育において、英語という外国語の学習がどのような目的を持つものであるかが明確にされなければならない。

そして、その目的が達成されたとき、子どもたちの何が変わり、子どもたちの未来にどう影響し、子どもたちの幸せにどう関わるかといったことがらについて整理されていなければならない。

その教育を担当するのは当然ながら、その小学校の先生たちでなければならない。現状の AET・ALT (Assistant English Teacher/Assistant Language Teacher) や英会話学校等の外部教師の力を前提とした教育は不安定かつ無責任であり、教育現場に少なからぬ混乱をもたらしている。昨今の教育現場への社会人の登用にみられる安易な教育改革には強い危惧を抱いている。教育には専門性が必要なのである。

また、この小学校英語教育は中等教育(特に中学校英語)にどのように引き継がれ、発展していくかについての一貫したコースデザインも必要となる。

次に「児童英語」であるが、これは学校教育の枠に関係なく、「小学校の学齢の子どもたちが学ぶ英語」である。

町の英会話教室や英語塾が中心的な役割を担うであろう。従来、英語を学ぶ子どもたちは少なからずいたが、「国際社会の到来」というメディアの喧伝で、その数は倍加している。英語に劣等感を抱く母親たちがこのブームを後押しする。

*

この二つの言葉やその概念が小学校英語教育の是非論においてしばしば混用されてきたように思う、時に意図的に。

「小学校といった早い時期から英語を学ばせれば将来英語の話せる人間になれる」というのが小学校英語教育導入推進派の論理であるが、小学校から英語を学ばせることによって英語コミュニケーション能力が飛躍的につくという科学的根拠はない。その量や質についての精査が必要である。

また、日本という国がその生活環境において、日本語以外の言葉を必要としないといったことを無視して、多言語社会の外国における言語習得の例を引用しても説得力に欠ける。

加えて、仮に英語の必修化が導入されたとして、誰が教えるかとなるとことはもっと厄介である。小学校英語に、町の英会話教室や英語塾がやっているような英会話力をつけるための教育をイメージしても意味がなく、それは無理なのである。ところが現状は、小学校の先生たちが、英会話教室でやっているゲームや歌を用いた指導の研修に走り回っている。小学校英語の場に児童英語を持ち込もうというのである。

では、中学校英語を早送りさせるということはどうか。これも小学校の先生にはできない相談だ。従来の中学校で行なわれてきた英語教育を小学校の先生たちができるはずもないし、そのための教員養成や研修だけでも恐ろしいほどの時間と資金が必要となるだろう。そして何より、ますます子どもたちの英語嫌いを増やすだろう。

*

小学校英語が目指すべきはそういったことではない。

それはあくまで、小学校でなければならないし、他の誰でもなく複数の教科を教える小学校の先生でなければならない、そんな豊かな教育であってほしいと思う。たとえば、〈まなざしの教育〉ともいうべきものである。(続く)

続・小学校英語と児童英語 迷走する知性 (6)

小学校英語教育と児童英語教育といった二つの言葉については、それぞれの意味するところを明確に定義し、使い分ける必要があると前号で書いた。

「小学校英語」とは、あくまで「小学校において取り扱われる英語」のことである。そこでは、学校教育である初等教育において、英語という外国語の学習がどのような目的を持つものであるかが明確にされなければならない。そして、その目的が達成されたとき、子どもたちの何が変化し、子どもたちの未来にどう影響し、子どもたちの幸せにどう関わるかといったことがらについて整理されていなければならない。その教育を担当するのは当然ながら、その小学校の先生たちでなければならない。現状の AET・ALT (Assistant English Teacher/Assistant Language Teacher) や英会話学校等の外部教師の力を前提とした教育は不安定かつ無責任であり、教育現場に少なからぬ混乱をもたらしている。昨今の教育現場への社会人の登用にみられる安易な教育改革には強い危惧を抱いている。教育には専門性が必要なのである。また、この小学校英語教育には中等教育 (特に中学校英語) にどのように引き継がれ、発展していくかについての一貫したコース・デザインも必要となる。

次に「児童英語」であるが、これは学校教育の枠に関係なく、「小学校の学齢の子どもたちが学ぶ英語」である。町の英会話教室や英語塾が中心的な役割を担うであろう。そこでは、発音指導や英会話能力重視のより特化した英語教育が行なわれればよい。従来、英語を学ぶ子どもたちは少なからずいたが、「国際社会の到来」というメディアの喧伝で、その数は倍加している。英語に劣等感を抱く母親たちがこのブームを後押しする。

あるいは広義の「児童英語」の中に「小学校英語」を位置づける形であってもかまわないが、要するに「小学校英語」については学校教育の枠の中に位置づけられたものとして、その意識化、すなわち小学校教育における英語教育といった明確な目的や方法等についての理論化を図る必要がある。

*

小学校英語を考えるためには、小学校教育のありかたについて考えることから始めなければならない。いろいろな場で繰り返し述べてきたことだが、小学校における教科は中・高校のそのように国語・算数 (数学) ・理科・社会等である必要はない。子どもたちが初めて体系的な学習を始めるそのときに、すでに分化された教科は知的好奇心を矮小化する。

ことばの学習については、母語である国語・日本語のきちんとした教育がまず必要である。「きちんとした教育」とは、<ことばへの意識>を持たせる教育のことである。

ことばがわれわれ人間にとってどのような意味を持つのかを具体的な言語運用の一つ一つの事例によって学ばせたい。すなわち、コミュニケーションといったものが、われわれ人間にとって何なのかについて子どもたちに考えさせるのである。その学習においては、当然ながら日本語以外のことばを母語とし、異なった文化を持つ人たちとのコミュニケーションというものについても関心や興味が広がるであろう。それらの関心や興味が向けられる方向は、大人たちが想像だにできない事柄についてのものかもしれない。しかしそれらは、子どもたちの知的好奇心を圧倒的なエネルギーを持って満たすことになるだろう。そしてそのとき、アカデミックに整理された思考が始まる。知識は必要なものが選択され、選択された知識が次の興味や関心を呼び起こし、より大きな知的空間を産み出していく。

英語が仮に子どもたちの未来に大きく関わるとするならば、子どもたちはその英語が自分の知りたいことに絡み付いているということに直接触れる必要がある。それは大人が大人の論理で適当に見繕った幕の内弁当のような、あるいは子どもの誰もが振り向きもしなくなった安っぽいブランコやジャングル・ジムが配された小さな公園のような、そのような英語教育ではだめなのだ。一見楽しそうに見えるゲームや歌に終始しているうちに子どもたちはずっと向こうに離れていってしまうことだろう。

*

「英語を通して『人となつていく力』を子どもたちにつける、世界の国々、外国の人々に興味を持たせ、考えさせ、調べ学習をして発表する、そこに実践活動が加わればさらによいのですが、そのような国際理解教育を取り入れたテーマ別学習を推進したいと思っています。これは平和教育にもつながっていくものだと思います。子ども一人ひとりの人生がより豊かになり幸せになる、……」と、東洋学園大学の坂本ひとみ教授から手紙が届く。同封されていた論文原稿「国際理解教育としての小学校英語活動の可能性」は大学の研究紀要に載せる予定だという。そこには、「小学校英語」の位置づけとその可能性が豊かな具体的提案とともに示されている。

小学校英語に平和教育の可能性をも位置づけるような豊かな坂本教授のまなざしが本道ではないかとぼくは思っている。

はずされる視線 濫觴 100号

きのう、日本に戻る。

眠れないので、薬の力を借りる。そのためか、今日は一日、気だるい。ホテルの近くのうどん専門店で昼食をとる。ああ、うまいなあ。

店を出て、ホテルまで歩く。歩きながら、何か違和感を覚える。変だなと思う。うどん屋さんでも同じものを感じた。電車に乗っても、薬屋さんでも。

すれ違うのだ。

合った視線が瞬間的に外される。視線は、たとえばお店で、店員のそれと確かに合っているのだが、その人の視ているものはぼくではない。

二人連れや三人連れの者たちはお互いのコミュニケーションにおいては饒舌だが、それらはそれら自身で完結し、閉ざされている。まなざしは内側に終始する。

ぼくたちはわずかな時間で地球の反対側に行くことができる。インターネットはイギリスにいながら瀬戸内海の連絡船の今日の運行状況を教えてくれる。一度も会ったことがない人と毎日のように E-mail で交信する者もいるという。コミュニケーションはダイナミックに拡大しているように見える。

けれども、それらに触感はない。距離や時間を飛び越えるということはそこに確かに存在しているはずの座標を否定することであり、つまりは仮想のものを受容である。

ものやものごとは、時間や位置を持たないで存在することはできないのだ。それらを意識せずに、それらの存在を感じることはできない。

テレビの画面に映る戦地の子どもたちの暗いまなざしや涙を、ぼくたちは知り、理解したように思っていないか。

コタツにはいってあたたまりながら、かわいそうにねえと言ひ、同時に、このみかん甘いわねとも言えるのだ。もしも、その場に、つまり戦地にいたら、子どもたちと同じ煙硝のにおいをかきながら、みかんの甘さを語ることなどはできないのだ。

隣に腰掛けため息をつく老人も転んで泣き出した子どもも、たとえそれが目の前で起きている現象であったとしても、関係ないこととして見えなくなっていないか。いや見ようとはしなくなっていないか。視線を外そうとはしていないか。

街行く者たちはそれぞれがそれぞれにとって単なる物体に過ぎず、はずみで視線が合ったりするとそれに戸惑い、瞬時にその視線を外そうとする。

家族関係も同様に、お互いの視線がしっかりと合い、一緒に何かについて考えたり、喜んだり、悲しんだりといった関係が薄れていき、それぞれがお互いの視線を外しているのではないか。

ぼくたちは急速に縮んでいきつつある。文明はぼくたちの表面的な、あるいは物理的な空間的移動を飛躍的に拡大し、あたかもそれによって多くの者たちとのコミュニケーションや共生といったものが可能になったかのような錯覚を覚えさせる。

しかし、そうではないのだ。ぼくたちが触り、視ているのは、ただただコンピュータのキーボードにすぎない。それがつながる世界の表面的な知識に過ぎない。知識はそれ自体暖かくも硬くもないのだ。

外される視線は、ぼくたちの生が次第に非人間的なものに変質化していくことを表している。ぼくたちは自分以外の者たちとどう関わるかということから目をそらし始めたのである。それは、ヒトという動物が人間という社会的な存在となった歴史の否定である。皮肉なことだ。なぜなら、人間が他の動物との差別化をはかろうとした方法としての文明が、逆にヒトへの回帰をもたらしつつあるのだから。

*

濫觴が 100号を迎えた。この拙文も何とか書き続けることができた。いろいろな活動が増えていくにつれ学生たちとの接点が少なくなることが寂しくなったぼくは、学生への発信をこういう形で始めた。学生の中には入学前にバック・ナンバーをすべて、しかもことばそのものまで覚えるぐらい読み込んでくる者もいるようになった。日本の大学教授を含む教員たち、企業の幹部たち、あるいは市長さんや新聞記者も読んでくれる。ありがたい。

この拙文は、ぼくのそのときの心のすがたを映している。読み直してみても、そう思う。だから、面はゆくもある。

けれども、こうやって生きていこうと思う。できうる限り自分の生を見つめながら、検証しながら生きていこうと思う。

この濫觴が 100号を迎えることができたのは多くの人たちの支えがあつてのことだ。とくに、いつも裏方として大変な働きをした所長補佐の松本直子先生には感謝したい。早く原稿を書いて欲しいとほとんど毎号ぼくを責めた。だからこそ書き続けられた。続けることには大変な意志の力が必要である。彼女の濫觴への、研究所への愛情がなければ、100号を迎えられなかっただろう。心から感謝したい。

拙文は今年、出版する予定である。

馬鹿に付ける薬

1) 子どもをダメにする親

政治家たちが声高に教育再生を叫んでいる。そこには彼らの貧相な知性といったものが透けて見えて醜悪である。いや政治家のみならず、それらを支えようとする御用学者や経済人たちの稚拙な論理にも驚くばかりである。さらに、リベラルな、あるいはやや革新のオーデオロンをまとった似非知識人たちの無責任な傍観者的言動、加えてどうしようもなく呆けてしまった親たち、プロフェッショナルとしてのプライドなんかとっくの昔に捨ててしまった教師たち、みんなみんな揃いに揃って馬鹿者たちが今、「気持ちの悪い国・日本」を創ろうとしている。

■馬鹿親

1. 子どもが風邪で学校を休む。あくる日その子どもの親から担任に電話がかかる。「給食費を払っているんだから、子どもが学校を休んだら給食を家までどうしてとどけないんだ」
2. 親が学校に怒鳴り込んで来て、言う。「この教科書はうちの子どもにはあわない。すぐ変えろッ」
3. 授業中に居眠りをしていた子どもを注意した教師に親が抗議の電話をかけてくる。「せっかく休んでいるのにどうしてそっとしてやってくれないんだ、塾で疲れているんだぞッ」

こういう親を放し飼いにしているはいけない。こういった親たちに育てられる子どもたちの将来は暗澹たるものである。そういった子どもたちが大人になった社会には健全な人間は住めなくなる。こういう馬鹿親たちに市民権を与えてはいけない。こういったことは犯罪以外のなにものでもないのだから、即刻逮捕し、「親鑑別所」に入れる必要がある。「美しい国」を創りたいのなら、こういった輩に人権を与えてはならないのである。親鑑別所では、ひたすら地道な作業をさせる。たとえば農業がいい。未開の地を開拓させて、少なくとも5年間は隔離し、農作物の生産に従事させる。その間、子どもたちには安心して、まっとうな考えの下で生活できる環境を提供する。

それにしてもひどすぎる親たちが跋扈している。不思議なのは、どうしてそういった輩をのさばらせておくのかということである。暴力団にも似た親のわがままな恫喝によって小学校の校長や教員が自殺したり、病気になったりしている。

この親たちが子どものころ受けてきた教育は、いわゆる「詰め込み教育」であって、今盛んに批判される「ゆとり教育」ではない。受験戦争に勝ち抜いた先には一流企業や官僚といった勝ち組の仲間入りが保障されるなどと踊らされた者たちである。高給を得る者が立派な人間であり、お金という数字にひれ伏してきた者たちである。教養や品格などはほど遠い者たちである。

けれどもまさに末期的かつ喜劇的なのは、今教育再生を叫ぶ者たちの価値観はどっぷりとそれらの数字崇拜におかされている。百マス計算をはじめとした恐ろしいほど気持ちの悪い幼稚な訓練教育は何だろう。そういったブームを演出するメディアの連中も、同じ穴のムジナである。

つまり、日本社会は間違いなくもっとも悪くなるのである。理屈が通らないのに殴られたり、計算のスピードが少し遅いからといって馬鹿にされ一生ダメな人間として扱われたり、教室で居眠りしようが、携帯電話をかけようが、注意されることはなくなり、まじめに勉強したい子どもたちも次第に無気力となっていくのである。

高校卒業に必要とされた科目の未履修の問題も、結局は文部科学省を中心とした気持ちの悪い大人たちが適当なごまかし方を率先して教えてくれた。まじめに学習しなくても、受験のためなら許されるんだといった大人の論理を国をあげて教えたのである。どうして、一年ぐらい足踏みをさせる力が大人になくなってしまったのだろう。いけないものはいけないんだと教えることができなくなってしまったのだろう。

気持ち悪くないのか。

少なくとも親は、自分の子どもの幸せについて真剣に考えなくてはならない。たとえ国や社会がどのように推移しようとも体を張って子どもの幸せについて闘わなければならない。たとえば、戦争がはじまったら子どもを戦争のない国に逃がすのだ。非国民といわれようが、命を守ろうとしなければならない。殺されず、殺さぬ人間として、心も守らなければならないのだ。

親は、本当の幸せについて毎日毎日考え闘わなければならないのだ。子どもの、そして自分の幸せとは何だろうか。と。(続く)

続・子どもをダメにする親 馬鹿につける薬 (2)

万葉の歌人・山上憶良の歌に次のようなものがある。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして俣はゆ いづくより 来りしものぞ
まなかひに もとなかかりて 安眠しなさぬ

銀も金も玉もなにせむにまされる宝子にしかめやも

「子らを思ふ歌」という題のある長歌と、その反歌である。

親の子を思う愛情ははるかな昔より変わらない。「安眠しなさぬ」その子の幸せについて、片時も忘れることはない。いや、子を虐待したり、子どもを自分のアクセサリーぐらいにしか思っていないような昨今の愚かな親たちを見てみると、「親」という語のもつ意味的世界が変化したのではないかとさえ思えてくる。

*

親の子に対する愛情について考える時、ぼくはいつも Roberto Benigni 監督・主演のイタリア映画「Life is Beautiful」を思い出す。この映画で描かれる父親像こそが、ぼくたちの理想とすべき親の姿ではないかと思うのだ。

この映画の父親は幼い子とともにナチスのユダヤ収容所に連行されたのちも、ただ子どもの命を守ろうとするだけでなく、子どもの心さえも守ろうとするのである。親が、例えば戦時中に子どもの命を守ろうとするのは当たり前だが、彼は厳しい状況の中でも子どもたちの心やまなざしをゆがめないように努力するのである。むしろそのためには大変な力が親には要求される。それを知性と呼んでもよい。

「どうせこの世の中はお金次第なのだから」とか、「一流企業に入らないと幸せになれないわよ」などと平気な顔で子どもたちを叱咤する親たちはこの映画の中の父親とは対極に位置する。

これらの馬鹿親たちは確かに今、不幸なのである。

「給料の高い、いわゆる一流会社に入らないと幸せになれない」と思っている馬鹿親は、たとえそれが叶って一流会社に入れたとしても、そのことによって幸せといったものが保証なんかされないということについて知らない。あるいは知らないふりをする。

人間の幸せなどということについて、もはや考える能力さえ持たないのである。

おそらくは、自分のことしか考えることのできない者たちなのである。これらの馬鹿親たちはまず自分の見栄を第一に大切にしようとする。参観日があれば、自分が何を着ていくかが最も大切である。子どもは自分に恥をかかせることなく参観授業を終えてくれればいい。できれば手を挙げて素晴らしい答えをしてくれたらいいが、そうでなかったってかまわない。いい中学校や高校、そして一流大学に進学してほしい。さもないと、井戸端会議などで、世間体が悪いのだ。子どもがどんなものに興味を持っているかとか、どのような職業に就きたいと思っているかなどということはそれほど重要ではない。とにかく世間体のいい会社というのが好ましい。名の通った一流と呼ばれる会社がいい。あるいは公務員だ。安定した生活は魅力的だ。

いや本当はそんなことはどうだっていい。そんなことより、自分のことだ。母親だって一人の人間として人権を持っているのだし、カレーライスを作るのにいろいろと時間をかけるんだったら、袋を温めてご飯にかけるだけのものでもいい。何ら変わりはないし、私が作るよりは数等うまいのだから、そんなことに時間をかける必要はない、何しろ人権を持っているのだから。野菜サラダだって、すでに切ってあって袋から出すだけのものと自分で切ったりするものどどこが変わるといふのか、そんな時間があつたら教養講座に通ったり、英会話を習ったり、そう、もっと自分をブラッシュ・アップしなくちゃ、何しろ人権を持っているのだから。

こういう輩の身につける教養なんてたかが知れている。いや、身に付いたりもしない。つけようとしているものは表面的な知識であり、それをひけらかす機会である。

本当に、親がいなくなった、いるのは親という肩書を持つバカばかりである。「銀も金も玉」に目のくらんだ大馬鹿者ばかりである。

子どもの幸せって何なんだ。子どもにとっての幸せは、まずは、本当に心豊かで優しく、その優しさの奥深くに強靱な強さを持った親との出会いではないだろうか。日常の打算や迎合、虚飾や偽善といったものにはびくともしない、そんな清々しいまなざしを持った親の存在ではないか。(続く)

ぼくもまた、馬鹿親だった 馬鹿につける薬 (3)

ぼくもまた、「馬鹿親」だった。いや、今もまだ「馬鹿親」のまま成長していないような気がする。

*

ちょうど 20 年前の春、ぼくは英国に渡った。

それは衝動的と表現してもよいほど、唐突な選択であった。

教育や研究に関する仕事に従事しながら、あるいは詩人気取りで夜の街を徘徊しながら、闇へ闇へと沈んでいく自分を感じていた。極端に少ない睡眠時間の中でも、苛立ち続けた精神は安らかな眠りにぼくを誘ってはくれなかった。

(今) から脱出しなければ、と思っていた。

そのころのぼくは、全力で教育に打ち込み、全力で研究に没頭し、全力で詩を書いた。つまり、ぼくは 300 パーセントの世界に住んでいた。しかし、ぼくにはもう一つの全力が欠けていた。

*

「馬鹿親」とは「あるべき親として存在せず、なすべき親の務めを果たさぬ者」のことである。「自分のことをまずは大切にし、子どもの本当の幸せについては二の次にするような身勝手な者」のことである。

*

英国に出発する前の晩までぼくは仕事に追われた。家には、締め切りを過ぎた原稿を取るために編集者がやってきた。

英国の通貨に換金する時間もなかったため、英国に到着した時ぼくは、1 ポンドも持っていなかった。

当時、日本と英国を結ぶ飛行機に直行便はなく、アンカレッジを経由した。ヒースロー空港には早朝、午前 6 時ごろだったか、到着した。前もって日本から送っていた書籍以外にも大量の書籍 (段ボールの箱で数十箱はあったか) を飛行機には積み込んでいた。入国審査も通過した覚えがほとんどなく、飛行機の出口まで出迎えた担当者に従って車に乗る

妻と三人の子どもたちも一緒にそのまま職場に直行し、学食で朝食をとる。家族はあらかじめ予約しておいたホテルに行かせ、ぼくは早速会議に入る。

夜まで働いたぼくはようやくホテルに向かう。

ホテルでは子どもたちが言葉のわからないテレビを見ている。

その子どもたちを呼び、ぼくは言った。

「君たちももっときちんと挨拶が出来なくちゃあ、だめだ。なんだ、今朝のみっともなさば」

2 歳の娘、5 歳と 6 歳の息子が横一列に立って並び、ぼくの厳しい言葉に身を縮こまらせている。

「もういい、やすみなさい」と解き放たれた子どもたちはベッドのある部屋に行き、ベッドに顔を埋めて泣いた。大きな声を出して泣いてはさらに怒られると思ったのだろうか。

ぼくの傷である。償うことのできぬ罪である。

このときのことをもう何十回思い出しただろう。外国に着いたその日の夜なのである。未熟で、身勝手に、しかも偉そうにふるまう男の醜さをぼくはいくたび恥じただろう。

息子二人はすぐに現地校に入れられる。アルファベットの存在も知らなかった子どもたちは、英語だけの世界で泳ぎは始める。泳ぎ方も知らなかった彼らはしかし、自己流で手足を必死に動かし、もがきながら泳ぎはじめた。そうしないと溺れてしまう。

2 歳の娘はすぐに高熱をだして何日も寝込んだ。その時、父親は妻にすべてを押し付けて、仕事の都合で職場に泊まり込んでいた。

*

数年経って長男は学校で作文 (英語) にこう書いた。

「どうしてイギリスという知らない国にぼくたちは行かなくてはならないのだろう。友だちと遊ぶこともできなくなるし、言葉なんか何もわからない。ぼくは飛行機の中で悲しくて涙が出そうだった。けれどもぼくが泣いたら弟や妹が不安になる。我慢しなければと、そのとき思った」

*

子どもたちはもう大人になった。

3 人も自分の道を求めて模索している。徹夜を繰り返しながら、研究や学習に打ち込んでいる。その徹底した取り組みにぼくは、時に苦笑いをする。

今年のぼくの誕生日に娘がくれたカードの中には、一つの書類が入っていた。アフリカの貧しい教師たちの研修のためにぼくの名で寄付をした証明だった。「パパが喜ぶと思って」と娘ははにかんだ。

次男は自作自演の英語の曲の中で、「もう晩くなったよ、早く帰ってきてゆっくりお休みよ」とうたった。

カレッジで教えてもいる長男は、書き上げたばかりの授業構成についての論文のコピーをくれた。(続く)

学力低下は親のほうだ

馬鹿につける薬 (4)

子どもたちの学力低下については、その科学的検証がなされないまま、今やだれもが信じて疑わない。そこで導き出されるのは、かつてのように詰め込み教育に戻せという本音だ。東京大学大学院教育学部の有名教授などは「私は学力とは何かといった定義はしないが、学力は確かに低下した」と恐ろしいほど愚かな発言をし、ぼくがその稚拙さを指摘すると、「私は教育の専門家ではないので」と逃げる始末である。

ここではそういった子どもの学力については述べないが、親の学力、すなわち（親力）について考えてみたい。

ずいぶん昔のことになるが、ぼくはかつて中高一貫の私学で教師をしたことがある。男子だけのいわゆる名門進学校で、9年間そこで教えた。

高校3年のあるクラスを担当した時のことである。

*

Kという生徒がいた。ホームルームの時間だったか、彼は立ち上がり、こう言った。

「勉強も大切だけれど、ぼくたちは他にも色々考えるべきことがあるんじゃないだろうか。ぼくたちの周りには平和運動をする人もいれば、環境について活動している人だっている」

しかし、彼の発言は応えのないまま空しく消えていった。

Kは同級生より一つ歳が上だった。中学時代に野球部にいた彼は甲子園にあこがれ、野球で有名な高校に入学する。しかしその学校には、彼のレベルをはるかに超えた者たちが全国から集まっており、3年間で正選手になれるとはとても思えなかった。考えが甘かった、井の中の蛙だった、と悟った彼は、勉強をしなければ、と方向転換をしようとする。

「高校に入りなおしたい」という彼に、父親は「わかった。しかし、今の学校に通いながら受験勉強をするのではだめだ。今の学校はすぐ辞めなさい。受験に失敗しても今の学校があるなんて考えたらだめだ。そして、下宿で一人で頑張りなさい。家には戻ってくるな」と言ったという。

父の指示通りKは学校を辞め、一人下宿で受験勉強に打ち込む。そして、合格する。

大学進学を控え、彼がやってきた。

「親が一校しか受験してはならない、もし落ちたら働けと言うのです。一校しか受けるなどというのはいいのですが、ぼくはどうしても大学に行きたいので、落ちたら浪人をしたいと思っています。親は支えないというので、自分でやっていくしかありません。もし落ちたら新聞の取次店に住み込んで新聞配達をしながら予備校に通おうと思っています。ただ、それには保証人が必要です。先生がなくなっていただけませんか」

三者懇談の際、ぼくは母親に聞いた。

「一校しか受けてはならない、落ちたら働け、とお父さんがおっしゃっておられるようですが」

「はい。主人の考えが正しいと思います」とKの前で母親はきっぱりと答えた。

Kに部屋の外に出てもらい、再度ぼくは母親に尋ねた。

「本当にお母さんもお父さんと同じ考えですか」

母親は泣き崩れた。

「Kが可愛そうなのですが、主人の言うことは正しいと思います。でも、辛くて、……」

母親の涙について、ぼくはその時Kには話さなかった。

受験に失敗したKは、一人で下宿を引き払い、ぼくにあいさつに来ると、実家にも帰らずそのまま新聞取次店へと旅立った。

それから1年が経とうというある日、Kから大学に出願するために必要書類を送ってほしいとの連絡があった。しばらく経ち、受験を終えた彼が訪ねてきた。新聞配達の休みを貯めて受験に行ってきた帰りである。

行きつけの寿司屋に彼を誘い、酒を飲みながら語り合った。彼は今年も一校のみを受験した。

この一年、彼はひとりで生きた。

「君は親を怨んでいるか」

「いえ、親は正しかったと思っています」

「もし今年もダメだったら、どうするつもりだ」

「もう一年頑張ります」

「これから、家に帰るのか」

「いや、合格しないと、帰れません」

ぼくは一年前の母親の涙について話した。Kは泣いた。寿司屋のおやじは暖簾をしまい、静かに酒を継ぎ足してくれた。

それからしばらくして、Kから電話がかかる。

「先生、合格しましたッ」

「今どこから電話してるんだ」

「親と一緒に、家です。父が泣いています」

親が親であって、子が子になる。愛するということには力がある。(続く)

子どもの心と親 馬鹿につける薬 (5)

これもずいぶん昔のことである。男子だけの中高一貫の名門私学で9年間教師をしていた、その頃のことである。

*

家に戻り、寛いでいたぼくに電話がかかった。Tという生徒からである。

「先生、ぼくは悔しいんです」とTは話し始めた。Tは高校からの入学生である。中高一貫校であるが、高校からの入学も一部認めていた。高校から入学してくるには相当な受験戦争を勝ち抜いてこななければならない。また、中学から入学してきた生徒たちは勉強の仕方の要領がよく、成績も上位を占めた。その要領のよさに溺れて結局下位を占めるのも中学からの生徒たちだった。高校からの生徒たちは彼らに挟まれる形で中位に座る。高校からの入学生はどちらかといえば質実剛健で、中学からの生徒に比べて地味だった。

Tの同級生にHという中学からの生徒がいた。成績は常に上位で、スポーツも抜群だった。小柄ではあったがハンサムでもあった。彼はあるグループの中心で、そのグループのメンバーが良からぬことをして教員に注意されることはあっても、不思議にHだけはすり抜けていた。

その日、Hのグループに呼び出されたTは、ジュースを買ってこいと命令された。そういったことは常態化していたようである。嫌々ながらTは命令に従った。しかし、買ってきたジュースを見て、これじゃないとHが怒った。そしてそのジュースをTの顔めがけて投げつけた。Tはメガネを飛ばすとともに、ジュースで顔を濡らした。Hのグループの者たちはその様をはやしたてた。

Tの電話を切るとすぐ、ぼくはHの家に電話をかけた。電話を取ったHにTの話が本当かどうかを確認すると、Hは素直に認めた。大したことはないでしょう、といったニュアンスが感じられた。

「ふざけるな」と激しく注意したぼくは、自分が向き合っているものの根深さを何となく感じていた。

「父親がいるか。かわりなさい」

「父は仕事に行って、家にはいません。」

Hの父は薬局を経営していた。Hが医学部に進学し、医者になるというのが親の願いであった。

「お父さんの薬局の電話番号を教えなさい」

「先生、勘弁してください。親には言わないでください」

Hは必死で頼んだ。無理やり聞きだした父親への連絡先にぼくは電話をし、今からぼくの家子どもを連れて来いと言った。

「先生、もう夜分でもありますし、ご迷惑でしょうから。先生の言われることはよくわかりましたから。息子には厳しく言うておきますから」

「いや、すぐ来てください。夜であろうがなかろうが、そういったことは気にしませんから」

しぶしぶ訪ねてきた父子を書斎に通した。妻が紅茶を運んできた。

「先生、学校にN先生がおられるでしょう。N先生と私はこの学校の同期なんですよ」

自分もこの学校の卒業生(OB)であり、同期には管理職のN先生がいるので、今回のところは穏便にというのが父親の言わんとすることのようだ。ぼくには、その不思議な笑みがたまらなく不快であった。

「ええ、N先生はいらっしゃいます。とても立派な先生で、尊敬しています」

ほっとしたような父親から目を外し、ぼくはHに言った。

「ぼくは今からこの紅茶を君のお父さんの顔にぶっかけるつもりだ。いいね」

Hは驚いた。父親はのけぞった。

「いいか、君のしたことは大変なことなんだ。人間の尊厳を傷つけることなんだ。そういうことに慣れてはいけない」

ぼくは子を叱り、父親を諭した。

あくる朝学校に行くと、N先生がぼくを手招きした。

「昨日の夜、随分派手にやったようだなあ」

「えっ、もう聞かれましたか」

「うん、電話があつてね。心配しないでガンガンやれよ」

*

担任教師に気持ちの悪いネゴシエートをする父を目の当たりにして、Hは何を思っただろう。本当に子どもを愛する親であるならば、まずは子どもの心について考えたい。清々しい人間として子どもに向き合いたい。

*

日本に戻り、福岡に出張したぼくは、公開講義が終わると会場から静かに立ち去る男を見た。時が流れ、中年になったTがぼくの顔を見るためだけに新幹線に乗ってやってきたという。追いついたぼくにTは抱きつくように手を取って、「ありがとうございました」と言った。(続く)

寂しくて、空しくて、怖くて 馬鹿につける薬 (6)

ぼくは教師以外の仕事をしたことがない。

教師になりたくて教師になり、今は数多くの教師を育てている。

人間社会における教育の意味や意義について、そしてその可能性について心の奥深くから信じていたぼくは、しかし最近、考え込んでしまうのだ。

人間には人間を育てる力があるのかと。

*

ぼくの周りは先生だらけで、だからよく学生たちについて話したり、教育論について語り合ったりするのだが、そしてかつてはそのことが楽しかったのだが、最近時々、違和感を覚えることがあるのだ。

なぜそうなったかは明らかである。

ぼくはぼくを認めることができないのだ。

ぼくは他の人よりことばに関する感性は優れていると自負している。

話しことばも書きことばもコントロールする力はある方だろう。

しかしそれも大したことではない。

ましてや<生きる>ということなどについて発言する自分は、いったい何をしているのだろうと、もう一人の自分が嘲笑うのだ。

*

人は自分が生きるということだけで精いっぱいなのに、どうして他の人間の生のありようにまで口を挟もうとするのか。

もしもそういう行為が先生というものの仕事であるとするならば、これは大変だ。

大変なんだ、ぼくたちは！

本当に幼い子どもたちから大人に至るまで、いつの間にか手にした命をどういうふうに取り扱おうかと試行錯誤する者たちにぼくたちは、したり顔で、ほぼ既製品のことばを使って、何かを言わなければならない。

話しているうちに、なるほどそうなんだと自分でも納得を始める。

陶酔さえ、し始めるのである。

*

研究大会等でも、ほんの少し物知りの人間が、あたかもすべてのことを熟知したように話しはじめると、ぼくはもう同じ空間にいることさえも息苦しくなってしまう。

くだらぬ、と断ずる自分がある。

そして時に、そのくだらぬと断じられる者の一人に自分がいたりもする。

恥ずかしいのだ。

*

いつからだろう、こんな思いを抱くようになったのは。

自分という人間がいかにも未熟で、つまらぬ存在であるかといったことが少しずつ、おかしいことに自信をもってわかり始めてからに違いない。

その未熟なぼくが、学生たちに説くのである。

説いた後に必ずと言っていいほどぼくは、もっと寂しく、もっと空しく、もっと怖くなるのである。

*

まるでネガティブなことばかりを書いているようだが、他の教師といわれる者たちにも聞いてみたいと思っている。

あなたたちはいつも教師でいて苦しくないかと。

ぼくたちは未熟なのだ。

まずそのことに謙虚にならなくてはならないと思う。

そこから次に、教師には何ができるのだろうと考えるのだ。

人が人に教えるとはどんなことなのだろうと悩むのだ。

知識や技術はもちろん大切だが、それでもなおそれらは大したことではない。

ぼくたちが知っていることは、知らないことと比べるとゼロに近い。

知っていることが偉く、知らないことが劣っているのではないのだ。

わずかばかり知っていることが大いなる未知の世界の存在を感じさせる、そのことを感じる力があるかどうかが大切なのだ。

教師はそういうことをとっくの昔に忘れてしまって、みんなみんな愚かな知識競争の下僕と墮してしまっただけではないか。

点を取らせるためにとか、受験に勝つためにとか、教授になるためにとか、偉そうに思われるためにとか。

助けてくれ一っと逃げ出したいくなるのだが、もう少し、寂しくて、空しくて、怖い思いに身をさらしてみるかと教室に向かうのだ。(続く)

再生会議と中教審の稚拙

馬鹿につける薬（7）

あの子は学校の成績はよくないけれど、優しいのよ」とか、「成績抜群だけれど自分のことしか考えない身勝手なやつさ」とかいったことを耳にすることがある。

ぼくは自分が子どもであったころから不思議に思っていた。変だなと疑問だった。

小さい子どもに向かって大人はこう言う、「一所懸命勉強して立派な人間になりなさい」と。

学校に通い、あるいは塾などにも通って一所懸命勉強すると、立派な人間になれるのである。野球やゲームや友だちとのおしゃべりを我慢して一所懸命勉強するのは嫌でも、立派な人間になりたくない子どもなんかはいない。

一所懸命勉強した子どもは試験などで評価され、良い成績を取る。だから、良い成績を取った者は「立派な人間」である、はずなのだ。そして、「立派な人間」であるのだから、だれよりも他人に対する思いやりがあり、優しいはずだ。

にもかかわらずである。成績の良い連中が優しくなかったり、わがままだったり、人を傷つけたりするというのはおかしくないか。勉強に打ち込まなかった者が優しく、思いやりがあるというのも変だ。

*

研究所が実施した小学生作文コンクールで最終選考に残った子どもの作品を読んでいて、次のような文章に出会った。

「私は戦争が嫌いです。私の友だちもみんな戦争はいけない、嫌いだと言っています。どの国の子どもたちも同じだと思います。でも、いつもどこかで戦争が起きています。大人になるとどうして、戦争をすることができるようになるのでしょうか」

戦争にかかわり、戦争をすると決定し、攻撃をし、多くの死傷者を生み出すのは、どの国においてもその国の最も優れた立派な人間たちで、学校の成績もトップクラスのとびぬけた秀才たちである。一所懸命勉強した者たちである。

つまり、一所懸命勉強したことによって、人を殺すことについての正当性を身につけた者たちである。

*

つまり、子どもたちは学校や塾に通いながら、自分の幸せのことばかりを考える力や方法を身に付ける。他人を押しつけ、他人の上に立つ人間になるために切磋琢磨する。一所懸命がんばるのである。

そういったシステムこそが見直されなければならない。

だが、教育再生会議や中央教育審議会が次々と出す改革案を見ていると、いずれも刹那的なもので、とても再生などできるものかと思ってしまうのだ。

たとえば、新聞各紙で大きく報じられた小学校高学年（5・6年）における英語活動の必修化である。

このコラムでも繰り返し述べてきたことだが、ぼくは国際理解教育の一環としての外国語教育を幼いころから取り入れることには賛成である。小学校の1年生から導入してもよいとまで思っている。

けれども、そのためには現在の小学校教育における教科の改編が必要である。国語・算数・理科……といった組み立てはいい。「ことば」（言語コミュニケーションとことば文化）とか、「みる・きく・しらべる」（科学）といった名称等での新しい教科構成を提案したい。ここではそれらについては述べないが、ともかく今の教科の概念では子どもたちの学びに対するモチベーションを上げることなどできない。

小学校の高学年で英語を取り扱うとして一体誰が教えるのか。小学校教諭の研修体制を整え、教えられるようにすることだが、大人になって、ちょっと研修を受ければ教えることができるほどの英語力が身に付くならば、何も焦って小学校から導入する必要はないということになる。自ら矛盾することを証明しているようなものだ。

この稚拙な論理性があらゆる提案や方策において、教育行政を担当する者たちに蔓延していて恐ろしく滑稽だ。喜劇であり、悲劇であり、暴力的である。

小学校における英語という外国語を取り扱った授業は、まったく新しい概念の中に位置づけるようにすべきである。そのためには、子どもたちは英語を学ぶことによって何を獲得することになるのか、そもそも小学校教育とは何のためにあるのか、といったところからもう一度議論を始める必要があるのだ。

一所懸命学び、良い評価を得た者こそが、誰よりも優しく、他人の幸せについて考えることができるような、そういった学びのシステムと内容を作るのが大人の責任である。それは道徳のおしつけや国際経済競争力を付けるための英語学習などとはまったく異なったレベルの問題である。

そしてもし、稚拙な教育行政しか繰り返されられないのならばいっそ、公教育における国の関与をやめてしまったらどうか。（続く）

挑戦する夕暮れ

冬時間になった。

夕暮れが早くなり、いつの間にか街に明かりが灯る。陽が落ちる直前、空は薄い青と灰色とが上品に混ざり合い、遠く、高く離れていき、戸惑うような表情を見せる。

ぼくはその空が好きだ。それは少年の日の空だ。もの悲しくなるような、切ない思い出に満たされた、けれども明日を信じることのできた少年の頃の空だ。

*

夕暮れはしかし、いつも心を不安にする。

ぼくの夕暮れはぼくに問い続ける。

おまえはいつ、おまえになるのだ、と。おまえにとって生きるとは何か、と責めるのだ。

確かにぼくは今、<生きる>ということについて考えている。<生きかた>というものについてである。

ぼくはまだ青年時代を生きているつもりだが、50代の今のぼくと20代や30代の頃の<青年>の意味とには大きな隔りがある。

それは<青年>の<青>の問題である。

ぼくの<青>は、若い頃の<青>に比べ劣化したとは思わない。むしろ若い頃よりもはるかに、純粋にものを見つめようとする思いが強くなった。若い頃のぼくは、若くはなかったのだ。

若い頃のぼくはただ若かっただけであり、<青>を意識することなどなかった。あるいは時に、愚かな思いこみから、格好をつけた<青>を演じることはあったようにも思う。

ぼくは今、<青>を演じたりはしない。

けれども、体内の<青>との闘いに、毎日のエネルギーのほとんどを費やしている。

闘いは、振り上げた拳をもう一方の手で押さえつけようとするようなもので、ゆえに激しい葛藤がある。

*

かつて、若い頃のぼくには怖いものはなかった。傲慢な表現であるが、まさに傲慢不遜な人間だったように思う。今振り返っても赤面してしまうほどであるが、と同時に懐かしくもある。

その懐かしさには危険な要素も含まれているが、そういった腕力によって切り拓いてきたものが少なからずあったように思うのだ。

そして、その腕力への懐疑が結果的に非力な今を導いたのではないか、そういう思いにとらわれたりする。

*

もう少し具体的に書こう。

ぼくはかつて、相手がたとえ公的な機関であろうが、社会的権威をもっていようと、やくざであろうが、どんなものに対しても言いたいことを言い、闘ってきた。

既成の権威におもねることはしなかった。

だから、そういったものに媚を売る輩が嫌いだった。陰でこそこそ噂話や悪口を言う者には反吐が出た。そういった者と連帯する者たちの愚かしさが不思議だった。

何でもかんでも人のせいにする者を軽蔑した。努力不足を隠すために、いろいろな理由を考え出すことで言い訳をし、世の中を渡っていく者たち、社会人にも学生にもうようよいる、そういう者たちを侮蔑した。そういう者は一人で立つことができないから、周りに仲間を増やそうと卑しい画策をするのが常である。

学校には時々生息するが、自分の所属する学校や組織の悪口を言って、ぼくだけは君たちの味方だよ、などと学生の人気取りを陰でする教師など最低だと切り捨てた。そういう教師は間違いなく会議等では権威に媚を売って、改善のための建設的な提案などはしない。学生のために自分を犠牲にして発言したり、行動したりするようなことはまずない。なぜなら、そういう者たちにとっては学生のことなどは実はどうでもよく、その時の自分の心持が良ければいいのだから。

つまり、その頃のぼくの<青>は<怒り>であった。あるいは既成の権威などに対する挑戦でもあった。

そして今ぼくは、その<怒り>を自分自身に向けている。

挑戦する姿勢を捨て、<怒り>をあいまいにごまかしながら生きているのではないかと疑っているのだ。自分に対して、たまらなく憤っているのだ。

*

夕暮れの中で、ぼくはもう一度青年に戻ろう。少し衰えつつある肉体もまだまだ大丈夫だろう。新しい<青>をしっかりと抱いて、挑戦していくことにしよう。その不器用さゆえに折れて朽ちることになってもいい。許せぬ者には怒りをもち、挑戦する心を持ちながら、歩んでいこうと思う。

2007年、断章。

タクシーに乗った途端、運転手に訊かれた。

「あなたはプロフェッサーか？」

それから次々と質問されることになる。ぼくは疲れているのに。

「日本人か？」

「何年ロンドンに住んでいるのか？」

「この国での生活は気に入っているか？」

そういうあなたは、どうだね。

この国の人ではないだろうか？

どこから来たの？

この国、気に入ってる？

イスラエル出身の彼は、30年もロンドンで暮らしているという。

英国はいい国だという彼は、突然こう言った。

「日本が戦争を始めたんだ。どうしてパールハーバーを攻撃したんだ？」

この質問はかつてレストランで突然、投げつけられたことがある。

戦争はね、いい国も悪い国もないんだよ。

「しかし、日本が始めなければ戦争にはならなかったんだ。それともナチズムを肯定するのか？」

どうしてタクシーの運転手とこんな話をしなければならないんだ、とため息をつきながら、ぼくはやむなく彼の話を聞いた。

「天皇が戦争を命じたんだろ？」

「日本はドイツやイタリアと組んでとんでもないことをやろうとした」

運転手の乱暴な言葉を聞きながら、いわゆる不快感を覚える。そして、こう言った。

日本という国も日本人も確かに間違いを犯したことはあるが、このイギリスもアメリカもすべての国が同じく愚かな過ちを犯してきたんだよ。人間はそういう過ちを犯す生き物なんだよ。だからいろいろなことを学ばなければいけないんだ。

そうなのだ。

人間は過ちを犯す生き物なのだ。

*

2007年が終わろうとする。今年も驚くべき速さで時は過ぎた。

今年も多くの新しい出会いや再会があった。不覚にも涙が浮かんでくるような再会もあった。再会は、今の自分がかつての自分とは異なった人間になったのだということを見せてくれる。また、自分の置かれている環境もかつてのそれとは大きく違っている。それはぼくを、時につらく、切ない気持にする。もちろん、過去が美しく、現在が認められないということではない。少なくとも、今のぼくのほうがぼくは好きだ。歳をとり、昔のように全力で走ったりするようなことは出来なくなったが、その走りを楽しんだり、かみしめたりは出来るようになった。ものごとに対して、できる限り純粹でいたいと願う気持ちも強くなった。

新しい出会いの中には、新しい生命の誕生もあった。研究所所員の甥の肇（ただし）には「新（あらた）」という男の子が生まれた。肇の赤ん坊の時の表情にそっくりで、つまりはぼくにもよく似ている。

そして、ぼくの長男の空（そら）にも第1子が誕生した。10月23日に生まれた彼は、「秋（あき）」と命名された。空は早速親バカになり、自分がそうされたように赤ん坊の時から美術館に連れて行ったり、本物の音楽を聴かせたり、書物のおいのする部屋で育てると宣言している。

別れもあった。

長い間心の中で生き続けていた親友が、突然死んだ。もう一度ゆっくりと子どもの頃の思い出話をしながら酒を飲みたかった。お互いの生きてきた道を静かに語り合いたかった。これから生きていくということをどのように受け止めているかを聞いたかった。一日生きるということは一日死に近づくということであり、その一日がいとおいしいものに見えるようになった。

恩師の奥さんもこの世を去った。静かで、あたたかく、剛速球しか投げられぬ教育者を支え続けた。恩師の墓の前に佇みながら来る日も来る日も墓の下に眠る夫に話しかけていた彼女は、漸く夫の待つところへ旅立った。

「照ちゃん、したいことをするのよ。照ちゃんが信じることを一所懸命にするのよ」

彼女もまた、ぼくの大切で、敬愛する先生だった。

2007年が逝こうとする。この年、自ら決意しなければならない別れもあった。

夢の途中

新しい年になった。

ぼくはお正月が好きだ。子どもの頃、元旦には、母がそろえた真新しい下着を身につけた。するとぼくは、新しいぼくになるのだ。もう一度、ぼくはぼくを始めることができるのだ。たいていは「よい子」になろうと思った。二日には書き初めをした。墨を磨ると、その放たれるにおいを吸い込んだ。ぼくは背筋を伸ばして、筆を執った。

*

けれども、ぼくはもう子供ではない。知らなかったことを知り、知りたくなかったことも知った。できなかったことができるようになり、できないほうがいいこともできるようになった。

ときにぼくは、「もう一度」と口ずさむ。もう一度、新しいぼくを始めたい、そう思うのだ。

*

いや、まだだ。

ぼくはふりかえるよりも前に、今のぼくと対峙しなくてはならない。避けたり、ごまかしたり、逃げたりしてはいけない。もっとも今このぼくを見つめなくてはならない。そして自ら今のぼくに語りかけなくてはならない。君は今、何をしようとしているのか。

*

周りを見回す。

たとえば、研究所の所員、先生たち。こんなに善良で、こんなに学生たちのために、教育のために、研究所のために打ち込む者たちはまずいない。絶対に、と言っていいほど、この者たちは特別な存在だ。表でも、陰でも、等しく純粋だ。ぼくのわがままを受け入れ、一日中、学生たちの教育について話し合う、たとえ夜中になろうとも。深夜 2 時に突然招集され、教育に対してこんな程度の打ち込み方でいいのかと怒鳴るぼくに、真剣なまなざしをまっすぐに向けてくる連中なのだ。

研究所の学生たちは、ほとんどの者たちが無遅刻、無欠席。授業中に眠ったりする者なんか一人もいない。土曜も日曜も、深夜まで文献にあたり、論文を書き、教育実習のための教材を作り、涙を浮かべながら、歯をくいしばって、「いい先生」になるために打ち込む。ヨーロッパの日本語学習者の表情に一喜一憂し、卒業式には謙虚に、そして誇らしげに自分を振り返る。一人ひとりの挨拶の言葉は涙で時々聞こえなくなる。

*

日本語の教員の養成を始めたのはもう 20 年近く前だ。その頃、英国にはきちんとした養成課程がなかった。

ある日、日本の政府機関から人がやってきて、日本語の教員養成に取り組んでくれないかと要請された。日本という国の絶頂期（いわゆるバブル前夜ともいうべき時期）で、日本文化や日本語に興味を持つ英国人が急増していた。しかし、教える力を持った日本人がほとんどいない。その頃すでに教えていた人たちは手探りで、ゆえに悩んでいた。なんと「サイタ、サイタ、スクラガサイタ」などと教えている人もいたのである。

ロンドン大学の SOAS が企画に加わり、ぼくが主幹としてコースをデザインし、教師養成講座を開講。始めたのは、パートタイムのコースで、だれでも気楽に教えられる、といったコースだった。英国人と結婚した在英婦人たちが主な学生だった。

次いで、朝日新聞社の朝日カルチャーセンターがロンドンに進出し、日本語教師養成講座をやりたいので作ってくれないかと要請され、始めた。こちらもほぼ同様のパートタイムのコースである。

もっと本格的な教員養成が必要だと思ったぼくは、当時ケンブリッジ大学で仕事をしていたことから、ケンブリッジ大学が認定する教師養成課程を創設した。これが現在の Diploma 課程や Certificate 課程、あるいは MA 課程の前身である。

つまり、その頃ぼくは、三つの日本語の教員養成課程の代表を務めていたのである。

教える」ということの意味について、あるいは「ことばの力」について、「異文化を学ぶ」ということについて、真剣に考える「先生」を養成したいと、ぼくはより確かな日本語教師の養成に取り組もうと考えるようになった。

そのため、そのカリキュラムは密度を濃くすることとなり、レベルを高めた。しかし入学してくる学生たちのほとんどが小学生のまなざしよりも純粋に、大学生のそれよりも迫力をもって学習に取り組んだ。

この者たちが教育現場で先生として動けば、日本語教育だけではなく、あらゆる教育を根底から変えることができるのではないかと、ぼくは口癖のようにそう言うようになった。

けれども、まだまだ夢の途中である。（続く）

続・夢の途中

「あ、夢か」

目覚めたぼくは全身にびっしょりと汗をかいている。まだ夜が明けるには時間がある。すぐにシャワーを浴びたいという思いを引きとどめ、もう一度その夢の中へ誘おうとするなにものがそこにはいる。そのものと闘いながら、ベッドの中でぼくは呟くのだ、「寂しい」と。

かつて繰り返し見た蝶の夢は最近全く見なくなった。白い蝶に追いかけられる、怖く苦しい夢である。手をバタバタさせて空を浮遊する夢も、そういえば最近見ていない。

眠っている間にみるぼくの夢には、どうやら2種あるようだ。「散文としての夢」と「詩（韻文あるいは比喩）としての夢」である。蝶や浮遊の夢は後者である。

最近見る夢の多くは散文夢である。「夢現（ゆめうつ）」という言葉があるが、この夢は極めて現（うつ）に近く、ゆえに、目覚めた後にそれが夢であるのかどうかについて判断を下すのにしばらく時間が必要だ。

多くの場合、すでにこの世を去った者が登場したり、もうとっくに年老いているはずの者が何十年も前の姿で現れたり、日本にいるはずの者がロンドンで生活していたり、とそういった矛盾に満たされてはいるが、しかしそこで展開するトピックやテーマは極めて現実的なのだ。活き活きとして、ぼくを責め続ける。

夢の中のぼくはいつも孤独である。甘えた表現であるが、正直に書くならば、狂おしいほどに孤独なのだ。しかもその孤独にはいつも確かな根拠があり、ゆえにぼくはその孤独から逃れることができない。その根拠を巧みに設定しているのもまた、ぼく自身である。つまり、ぼくはぼく自身を責めることに執着し、目覚めた時から疲れている。

目覚めたぼくは、ベッドの中で目を閉じたまま分析を試みる。散文夢が映し出すものはぼくの現（うつ）の生きざまに相違ない。ぼくは目を覚まし、明るい日差しの中で呼吸をしながらも、自分を滅ぼすことに懸命なのだ。滅びを前提とした生を生きているように感じるのである。

*

もう一つ、夢という言葉は、「理想」という言葉とともに用いられることがある。夢や理想、将来の夢、といった表現がなされたりする。こうなりたいとか、こうでありたいとかいった意味合いで用いられたりする。

その場合の夢として語られるものは、実現不可能なものや不可能に近いものである。あこがれ、といったものであろうか。

ぼくは小学生のころ、「先生になりたい」と作文に書いた。その夢は叶えられたのだが、「先生」と呼ばれるようになってみると、その「先生」というものがどのようなものなのか、未だよくわからないのである。

けれども、少しだけわかりかけてきたものがあるにはある。それは、夢を見続けることのできる人間でなければならない、ということだ。

よく講演などで話すことだが、人が学ぼうとするのは今までの自分にはなかったものを身につけて変わろうとすることである。つまり、学ぶことによって自分は変わらうと信じているということであり、明日の可能性を信じているということである。そういった学習者に向き合う教師は、未来や将来といったものをネガティブにとらえたり、限定したりしてはならない。あらゆる可能性にあたたかいまなざしを向けることのできる、そういう人間でなければならない。

*

ところで、日本語教育を担う教師たちの養成・育成をしながら、ぼくが抱いている夢とは何だろう。

日本国内の大学でも日本語教員の養成が行われているが、そして昨今はこのロンドンにも日本からいくつかの日本語教師養成講座を開講する機関が現れたが、どういった理念でそれがなされているか。

日本の政府系機関もまた、このロンドンでさまざまな活動を展開するようになったが、日本語や日本文化を取り扱うその取扱い方には、あるいは日本語教師を支えるべきそういった機関としての活動の仕方を考えると、多くの疑問を感じざるを得ない。

少しそれらのことについて検証しながら、ぼくの日本語教育における夢について考えてみたいと思っている。

まずは、日本語教育は何のためにあるのかといった視点から考えてみよう。世界的にはまだまだマイナーな日本語をなぜ外国人は学ぼうとするのか。たとえば、今や世界語となった英語を母語とする英国人がなぜ日本語を学ぼうとするのか。どのような価値があると考えられるか。そして、それらに応えることのできる日本語教育となっているか。(続く)

続・夢の途中

■1

小学生のころ、ぼくの通っていた学校はお城だった。正確に言えば、お城の跡地に建てられた小学校で、大きな石垣や大手門などはそのまま残っていた。

その小学校の近くに小村寿太郎記念館という立派な建物が建てられた。数年前、ぼくはその記念館での講演を頼まれた。生誕 150 年記念の行事の一つだった。

講演を終え、市長や教育長たちとお茶を飲んで語り合っているところに一人の老婦人が現れた。市役所の課長さんが連れてきたのだ。

「照ちゃん、大きくなって、……」

ぼくはもう 50 代であり、大きくなったのは当然なのだが、その老婦人の知るぼくは小学生だったのである。

その老婦人の顔を見つめた。

「あ、おばさんッ！」

「覚えてくれるの？」

ぼくが幼いころ、近所に住んでいた人だった。ぼくは小学校までしかそこでは暮らさなかったが、子どもの頃の思い出は鮮やかだった。近所の同世代の者たちはお互いに何でも知っていた。おじさんやおばさんだって同じで、みんなが大きな家族のようだった。

季節の行事もみんなで楽しんだ。お正月もお盆もいつもみんなが当たり前のように一緒にいた。

しかし、そういった風景は随分遠くなった。

ぼくはもうそういったところには住んではいない。

*

中学時代をともに送った者たち数名とその時以来の再会をした。ぼくたちは酒を飲み、少し語り合った。ぼくは懐かしそうな顔をしていただろう。確かに、胸にこみ上げるものがあった。

彼らはそのままだった。その頃のおいさをふんぷんさせていた。その土地に住み、いろいろな苦労はあるのだろうが、ぼくの持つ曖昧さや虚ろさは彼らには感じられなかった。うらやましくはなかったが、大きな違いを感じた。

ぼくは遠くへ来てしまった。ぼくはもう彼らと同じところには住んではいない。

*

帰りたい、と思うことがある。涙が浮かんで、不意に嗚咽さえしてしまいそうな時がある。

しかし、どこへ帰ろうというのか。

どんな時間へ戻りたいというのか。

戻る価値のある時間があつたか、ぼくに。

いや、何かを失くしたように思うのだ、確かに。

そして、それはとても大切なものであつたように思うのだ。

それはきっと、今のぼくが最も欲しいと願うものであるように思えるのだ。

それを追いかけて。

追いかけて、そしてもう一度それを静かに、丁寧に、ゆっくりと抱きしめよう。

夢の途中で、ぼくは夢を忘れてはいけないのだと思うのだ。

■2

「学ぶ」ということは本当に人間を成長させることなのだろうか、ぼくはときどきそういった疑いを抱くのだ。

ぼくは怒っていて、それを押し殺しながら生きている。

人間は多くの知識や知恵を身につけて、結局は醜くなっていくのではないか。

*

日本語教師の養成を英国・ロンドンで始める。それまで、ロンドンには体系的な養成のシステムがなく、ぼくが始めたのが最初とっていいだろう。JETRO（当時の名称は日本貿易振興会）という通産省系列の機関から日本語の教員を養成してくれないかと依頼されたのだ。ロンドン大学の SOAS が加わり、ぼくが代表となって開講した。JETRO の目的は日英の貿易をはじめとした望ましい友好関係を作ることにあり、そのため「ビジネス日本語教師養成講座」と名前が付けられた。

その頃、おもしろいことを経験する。SOAS の代表と JETRO とぼくとの三者会議の場で、SOAS の英国人代表が、こう言ったのだ。

「ビジネスは SOAS がやるので、図師先生はアカデミックを担当してくれませんか」

同席していた SOAS のドクターがとっさに叫んだ。

「そんなことを言って、恥ずかしくないんですか。SOAS は大学じゃないんですか」

ぼくはなるほどと思ったのだ。そのとき、SOAS の代表は涼しい顔をしていた。(続く)

森田ミツの意味 遠藤周作と神

■1

「夏の花」の作家・原民喜の遺族からの法事の招待状を受け取ったぼくは会場となっていた寺に出かけ、そこで遠藤周作に会った。

「僕は堪えよ、静けさに堪えよ。幻に堪えよ。生の深みに堪えよ。堪えて堪えて堪えてゆくことに堪えよ。一つの嘆きに堪えよ。無数の嘆きに堪えよ。嘆きよ、嘆きよ、僕をつらぬけ。還るところを失った僕をつらぬけ。突き離された世界の僕をつらぬけ」「世の中にまだ朝が存在しているのを僕は知った」（「鎮魂歌」と書いた原は、「三田文学」で育てた後輩の遠藤に「これが最後の手紙です。去年の春はたのしかったね。では元気で。」という短い遺書を残して、1951年3月13日に国鉄中央線の線路に身を横たえ、自殺する。

原は前年の1950年の春、遠藤らと多摩川を散策し、空を見上げながら「ヒバリになっていつか空に行きます」とつぶやいた。遠藤は原を兄のように慕っていた。

遠藤はクリスチャンであり、法事では数珠を持たず、ただ手を合わせてこうべを垂れた。彼に続いたぼくも仏教徒ではなく、遠藤に倣った。法事に呼ばれた者たちの数は少なかったが、周りにはテレビカメラや新聞記者たちがいた。

法事の読経がすむと、遠藤らとともにマイクロバスに乗って原の詩碑を訪ねた。

遠藤はすでにそのとき、病に侵され瘦せていた。背の高い彼はそれをより感じさせた。

■2

小説『わたしが・棄てた・女』は遠藤周作の1963年の作品である。遠藤は40歳だった。この小説について、不思議なことに、同時期に日本に住む二人の友人からメールが届いた。全くの偶然である。

一人は遠藤と同じく敬虔なキリスト教徒であり、臨床薬学の世界で真摯な取り組みを続けている。もう一人は、臨床心理学の研究者で、幅広くカウンセリングの実践を行っている。

この作品を読んでいなかったぼくは日本から取り寄せて読んだ。講談社文庫に収められていた。その文庫のカバーには次のようである。

「二度目のデイトルの時、裏通りの連込旅館で軀を奪われたミツは、その後その青年に誘われることもなかった。青年が他の女性に熱を上げ、いよいよ結婚が近づいた頃、ミツの軀に変調が起った。癩の症状である。……冷酷な運命に弄ばれながらも、崇高な愛に生きる無知な田舎娘の短い生涯を、斬新な手法で描く。」

これではこの作品は浮かばれまい。主人公の森田ミツの人生が「冷酷な運命に弄ばれ」、しかしながら「崇高な愛に生き」たといった図式化は、なるほど多くの読者にはわかりやすいものであるかも知れないが、ぼくは違和感を覚える。

町工場の事務員である森田ミツは大学生であった吉岡努に恋をする。ともに貧しく、戦後のすさんだ空気の中で生きている。吉岡はミツを犯し、棄てる。棄てられたという自覚のないままミツは、さまざまな苦しみや悲しみを抱えた人たちを支えながら生きていく。会社員となって幸せの階段をのぼりはじめた吉岡への恋心をミツは持ち続けるが、吉岡とは対照的に社会のどん底へと転がっていく。そしてある日、癩病と診断され、絶望の中で隔離された病院に入ることになる。誤診と分かるがミツはそこにとどまり、病人の世話に献身的に打ち込む。ある日、その病院の仕事で外出したミツは、車にはねられ、死ぬ。

吉岡は「犬ころのように棄ててしまった」ミツのことを、「理想の女というものが現代にあるとは誰も信じないが、ぼくは今あの女を聖女だと思っている」と振り返る。

多くの読者がミツに同情し、吉岡をなじるのだろう。あるいは、同じキリスト教徒はミツにあこがれるのかもしれない。ミツのように、他者の悲しみや苦しみを自分のものとして受け入れ、愛することのできる存在でありたいと。

ミツの死を吉岡に知らせた修道女は言う、「もし神が私に、どういう人間になりたいかと言われれば、私は即座に答えるでしょう、ミツちゃんのような人にと」。

確かに、ミツは優れて心清らかな人間であり、慈愛に満ちている。それに比べ吉岡は極めて自己本位であり、汚（け）がれているといえる。

しかしこの小説は、そのような対比から、森田ミツといった女性のキリスト教的な崇高な愛といったものを際立たせようとするものなのだろうか。

ぼくはそうは読まない。

ミツを棄てた吉岡は、そのミツを「聖女」というのだ。ミツの何が、ミツの生に明確な形で対峙する吉岡にそう思わせるのか。そしてさらに、もっと考えなければならないのは、物語の最後でその吉岡が佇み、感じる「寂しさ」である。その「寂しさ」は一体どこから来るのか。吉岡の内部の深いところに巣くい、彼を見つめるものは何なのか。

切支丹弾圧下の長崎に潜入した宣教師が棄教するまでの心の動きを描いた『沈黙』という作品の中で遠藤は、「罪とは人がもう一人の人間の人生の上を通過しながら、自分がそこに残した痕跡を忘れること」とであるという。この作品の中でも、同じ言葉を繰り返す。

「生きる」ということが他者との交わりの上に成り立つものであるとするなら、ぼくたちは常に何らかの「痕跡」を他者に残しながら生きていくことになる。その生を遠く高いところから、静かに、まっすぐに見つめている森田ミツがいる。遠藤はそのまなざしを神というのか。（「夢の途中」は次号から再開）

原点の風景 夢の途中（4）

■1

そうか、昨日は「子どもの日」だったのだ。日本を離れて久しく、子どもたちが大人になってしまったために、今は亡き母が送ってくれた武者人形や鯉のぼりはロンドンの貸倉庫に眠っている。

子どものころ、ぼくは「良い子」になりたかった。「良い子」になれば父や母は喜ぶし、学校の先生も褒めてくれる。蟬が喧（かまびす）しく鳴く下校路に、まだ高い太陽が大きな木の影を黒くくっきりと映している。ランドセルを背負ったぼくは思うのだった、（あの影を出たところでぼくは、新しいぼくになる。良い子のぼくになる）と。

けれどもそれは秘め事だった。決して他の者には言ってはならないことのようにぼくには思えた。「良い子」になりたいという思いを持っていることが他の者に知れたら笑われるような気がしていたのである。どうしてなのかがわからないままぼくは、ぼくの心の中にその思いを閉じ込めた。

大きくなるにつれて、大人の言う「良い子」の意味がどんどんわからなくなっていく。掃除を懸命にやる子は確かに先生に褒められる「良い子」なのだが、算数のできる「良い子」とはなんとなく違う種類の「良い子」であるようだ。そして学年が進むにつれ、次第に後者の方に価値の大きさが移行していくのだった。

勉強だってそうだ。

ぼくが小学生のころ、先生や周りの大人たちはみんなこう言った、「一生懸命勉強して、良い子になりなさい。良い子になって、みんなのことが考えられる思いやりのある子になりなさい」と。

たしかに学校ではウサギを飼い、老人ホームを訪れ、美化運動ということで町の掃除をしたりした。それらは「良い子」になるための学習ではなかったのだろうか。勉強だったのではなかったのか。

小学校の高学年になると、私立中学校の受験の話をするようになり、中学校では、小学校の時ほど勉強が面白くなくなった。ぼくは中学校でも高校でも「良い子」だったが、周りの大人たちが思っているような「良い子」ではなかった。いや、彼らが思っている「良い子」を演じてはいたが、彼らの価値観に見切りをつけていたのだった。

学校の「教科・科目」の勉強をする代わりに、本を読んだ。漫画にはそれほど興味はなかったが、小説も詩歌も、父親の本棚にあった哲学書も、勉強をするふりをして読み漁った。『あれか、これか』という不思議な題目のついた本がその世界でどのような位置にあるのかなどは何も知らぬまま、ただただ文字の世界を楽しんだ。そして、それらの世界の方が学校の「教科・科目」の勉強よりもずっと面白かった。

ぼくの少年時代は時折、ぼくを訪ねてくる。これほどまでに優しく慈愛に満ちた人間がいるのだろうかという母や厳格で偉大な父がいつもそこにはいる。間違いなく尊敬でき、絶対にかなわぬ兄たちがいる。

その風景が時にぼくに語りかけるのだ。（あの影を出たところで照君、新しい照君になってみてはどうだい。もう一度夢に向かって歩いてみたら）と。

■2

教員の養成に取り組みながら、わずかな期間で一体何が教えられるだろうと立ち尽くすときがある。

教育は難しい。世にいう一流企業で働いた経験があるから学校の教師ぐらいはすぐできるだろうなどという考えで中学校の校長として採用し、それをマス・メディアがもてはやす愚かな風潮があるが、ならばどうして大学に教育学部が、教員養成課程があるのだ。どうして教員になるための必修科目・必修単位というのが定められているのだ。

商品としてのメディアには見えない、子どもたちの戸惑いやためらい、喜びや興奮を静かに見つめ、抱きしめている教師たちがいることに社会は気付かなければならない。そういう先生はたくさんいるのだ。

塾の先生のように点数で動機付けをしなくとも、お母さん受けのいい学級通信を出さなくても、ストップウォッチを握りしめて計算の競争に子どもたちを駆り立てなくても、せっかく塾とは違った何かがありそうな空間だった教室を夜の塾の授業に貸し出さなくても、そういう先生たちはじっと静かに子どもたちを、子どもたちのまなざしを守り、育てようとしている。その先生たちを認めよう。そうしなければ、大切な子どもたちをとんでもないところに追い詰めてしまう。

学校は学校でなければできないことをするところだ。夢や理想を恥ずかしがらずに口にし、語り合い、もっともっとよりよい社会を作る力を作ろうとする意志を育むところだ。今の社会に都合のいい人間を作る工場ではない。小学生のころからどうして株や金融なんかについて学ぶ必要があるというのだ。そういう時間があつたら絵を描き、歌を歌い、本を読み、昆虫や植物を観察させよう。

教師はそういうまなざしをもった人間でなくてはならない。算数や数学を教える教師も、英語やフランス語や日本語を教える教師も、物理や体育を教える教師も、「先生」と呼ばれる者たちはそのためにいるのだ。

教員の養成に取り組みながらぼくがしようとしていることは、ぼくたちの研究所がしようとしていることは、つまり教員を養成するとは、知識と技術を授けるばかりではなく、先生と呼ばれるようになった卒業生の教育者としての原点の風景を作ることではないか。

日常に疲れ、立ち尽くすとき、彼らを訪れ、傍らに静かに寄り添い、語りかけてくる、そういう風景を作ることはないか。

では、その原点となるべき風景はどのようにして作られていくのだろう。（「夢の途中」続く）

疑問

「森田ミツの意味」再考

この小文の No.113 でぼくは、遠藤周作の小説「わたしが・棄てた・女」を取り上げた。実はその際、紙面の都合で一部を削除したのだが、その削除した部分がぼくにとってはやはり重要なので、もう一度考えてみたい。

この物語のあらすじは次のようなものである。

町工場の事務員である森田ミツは大学生であった吉岡努に恋をする。ともに貧しく、戦後のすさんだ空気の中で生きている。吉岡はミツを犯し、棄てる。棄てられたという自覚のないままミツは、さまざまな苦しみや悲しみを抱えた人々を支えながら生きていく。会社員となって幸せの階段をのぼりはじめた吉岡への恋心をミツは持ち続けるが、吉岡とは対照的に社会のどん底へと転がっていく。そしてある日、癩病と診断され、絶望の中で隔離された病院に入ることになる。誤診と分かるがミツはそこにとどまり、病人の世話に献身的に打ち込む。ある日、その病院の仕事で外出したミツは、車にはねられ、死ぬ。

吉岡努は「犬ころのように棄ててしまった」ミツのことを、「理想の女というものが現代にあるとは誰も信じないが、ぼくは今あの女を聖女だと思っている」と振り返る。

また、吉岡への手紙の中で、スール・山形という修道女は次のように述べている。

「もし神が私に一番、好きな人間はときかされたなら、私は、即座にこう答えるでしょう。ミツちゃんのような人と。もし神が私に、どういう人間になりたいかと言われれば、私は即座に答えるでしょう。ミツちゃんのような人にと」

森田ミツは神に仕える修道女の心をも大きく揺さぶるほどの慈愛に満ちた女性であった。修道女がこのような女性になりたいと思うほどの存在であった。

ならば、どうしてだろう。

どうしてこのスール山形という修道女はかかることをしたのか。

「息を引き取る前に、私は独断で御殿場の教会に電話をかけ、神父さんに来ていただいて、洗礼をミツちゃんにそつと授けて頂きました」

キリスト教の信者でないぼくには、どうしてもこの点が理解できないのだ。この修道女からの手紙によれば、昏睡状態にあるミツは生前、この修道女からの信仰の勧めをはっきりと断っている。

「このミツちゃんは、私が信じている神については、決して首を縦にふりませんでした」

だのになぜ、この修道女は昏睡状態のミツに、「独断で」洗礼を授けるのか。

信者であることとそうでないことではいったい何が、どのように異なるというのだろうか。

ミツはなぜ、信者として死ななければならないのだろうか。傲慢なのだ。

「どういう人間になりたいかと言われれば、私は即座に答えるでしょう。ミツちゃんのような人にと」と言いながら、それでも信者でなければだめだということか。

恐ろしく独りよがりだ、傲慢ではないか。

信者でなければ認められないのか。

この発想が、平気で人を殺す論理を生み出すのだ。

世界中でいまだに続く宗教に根差した戦争という名の殺し合いは、このような傲慢な者たちによって肯定される。

ぼくの知っているファーザーやブラザーといったその世界のエリートたちの墮落は、その者たちに限定されるのではなく、宗教というものの持つ排他的で独善的な体質そのものではないか。

どうしてそのままを抱きしめることができないのだろうか。

どうして線を引こうとするのか。

どうして区別したいのか。

キリスト教信者である自らが許されることには極めて寛大であり、信者ではない他者の過ちは厳しく糾弾しようとする者には本当の愛はない。

遠藤周作は笑っているのではないか。

素晴らしく敬虔な修道女もまた、神を見いだすことのできぬ愚かしさを。

そしてその神に仕えるものと対峙するかのように描かれた吉岡が、抗いながらも神のまなざしにおののくことを。

その矛盾しているかのような構図を遠藤は描くのだ。

神はどこに、どのように、いるのか。

そして、なぜ、いなければならないのか。

森田ミツが、森田ミツの存在が意味を持つのは、吉岡においてであり、スール山形においてではない。スール山形がミツから受けた感銘は、スール山形をはじめとした修道女の体内にあり、ゆえに神のまなざしではない。

神はもっと厳しく、もっと冷たく、もっと深く、けれどももっと大きく、そしてしっかりと抱きしめようとする。

(次号は、「夢の途中」)

「赤めだか」 夢の途中 (5)

ロンドンで暮らしながらぼくは、毎週2席の落語は欠かさない。むろん演じるのではなく、観るのであり、聴くのである。DVDやCDで繰り返し聴いているので、ここで一つ咳をするといった落語家の癖や息遣いまで覚えてしまう。日本出張時は、時間があれば新宿の末広亭に通う。独演会があれば国立演芸場にも駆け付ける。

最近の若手では吉朝に惚れていたが、彼は数年前若くして逝った。これはとても悲しかった。枝雀もずっと前に自ら死を選んだ。志ん朝もよかったが、彼も死んだ。それでなんだか詰まなくなってしまった。最近、三枝の落語をDVDで20席ほど集中的に観た。三枝のは漫談である。創作落語が悪いのではないが、やはり古典の奥行きがない。二代目小さんの襲名披露も末広で観たが、並の真打である。やっぱり小三治に継がせるべきだった。本当に、寂しくなった。

だが、もう一人、まだ生きている。

談志である。最も好きな落語家である。好きな、というより、この人の落語が落語なんだという気がするのだ。大変な毒舌で、落語ではない語りに嫌な感じを持っている人も多いだろう。観客と喧嘩をすることだってあった。客に向かって、「帰れッ！」と怒鳴ったのだ。

が、談志の「芝浜」をじっくりと観て、聴いてほしい。きっと、ええっ、と思ってしまうだろう。これが落語だったのかと驚くだろう。その凄さに圧倒されるだろう。

その談志の弟子・談春が本を書いた。「赤めだか」(扶桑社)という本である。ぼくはこの本を一晩でいっきに読んだ。文芸評論家の福田和也は「笑わせて、泣かせて、しっかり腹に残る。プロの書き手でもこの水準の書き手は、ほとんどいない。間違いなくこの人は、言葉に祝福されている」と帯に書いた。

談志は小さんの弟子としてその天才的な能力を認められ、間違いなくこれからの落語界を背負って立つ人間として認知されていた。しかし談志は、師匠の柳家小さんが会長を務める落語協会に反旗を翻す。協会の旧態依然としたあり方に反発し、脱会する。協会の真打試験のあり方が気に食わなかったのである。いわば、親に子が嘔みついたのである。小さんは談志を破門に処した。談志は「上等だ」と吠えた。

協会を離れた落語家には寄席という舞台がなくなる。立川談志とその弟子たちは、いわば路頭に迷う。しかし誰もが談志の才能の確かさを知っていた。ビートたけし、横山ノック、上岡龍太郎、高田文夫などなど、落語界以外の者たちも次々と弟子入りした。立川流の誕生である。

談志の弟子たちはしかし、苦勞を重ねた。並の苦勞ではない。毎日ほとんど食事は1食。しかし、師匠の談志にはその空腹感を見せないようにし、ひたすら耐える。掃除から洗濯、あらゆる雑用をこなし、絶対服従の日々を送る。その厳しさに、精神の異常をきたしたと思われる者も出てくる。

この本のタイトルになっている「赤めだか」は談志が飼っている金魚だが、痩せた金魚を弟子たちはこう呼んだ。その金魚に餌をやれと命じられた弟子の一人・談秋は金魚の泳ぐ水がめを金魚の餌である麩で覆った。

談志が笑顔で、ものすごく優しい声で、「談秋、金魚はそんなに食わねえだろ」と云う。肩をふるわせて「申し訳ございません」と小声でつぶやきながら、談秋は手でお麩をすくって捨てていく。

談秋は談志のもとを去る。談春は師匠をじっとみつめる。そして、その日の談志の寂しさを知る。

厳しさの中で時にくじけそうになりながら弟子たちは、必死に前を見ようとする。

前座から二つ目、真打と落語家としての力を証明する立場を獲得するために談志の課した課題は落語協会のそれとは比べ物にならないぐらい厳しい。しかしそれを超えなければ、談志に認められた真打にはなれない。既成の権威におもねるのではない、たった一人の落語家に認められるために精進するのである。志の輔や志らく、談春といった実力を持った、今をときめく落語家はそうやって生まれた。

この本の後半に、談春は「真打を目指している人達へ」と書く。「もう時間がありません。...立川談志だっていつかは必ず死ぬのです。...談志が認めてくれなくて何のための真打か。何のために今まで頑張ってきたのか。耐えてきたのか。もっと言えば談志亡きあと、誰の責任であなた方を真打ですと世に披露するのか、問うのか。そんな真打になったところで嬉しいのか。意味があるのか、...」

時間がないぞ、早く頑張って真打になるんだ、何をしているんだ、と談春は熱い檄を飛ばす。

涙があふれた。この談春のたたみかける言葉がぼくの心を激しく打った。プロであろうとすると、一流であろうとすると、プライドを持とうとすると、甘んじられている者たちへの平手打ちである。

権威や権力にひれ伏す者たち

夢の途中 (6)

疲れたな、と思う。

その疲れが程よく、おいしいお酒が飲みたい、そういうときはいい。が、ふつふつとした怒りをこみ上げさせるときは、酒に宥め癒す力はない。

怒りは嫌な人間と一定の時間を過ごしながら生まれ、成長する。

*

国のオーナーは国民である。公務員は公僕であり、国民から給与が支給され、国民に奉仕する存在である。にもかかわらず、公務員があたかも国民の上に存在するような錯覚を持った輩がいる。国家公務員にも地方公務員にも少なからずいるのである。

そしてまた、そういった者たちにひれ伏す者たちがいて、勘違いをした公務員を増長させている。役人と訊くだけで腰を低くする者たちである。

おもしろいことに、特殊法人、あるいは独立行政法人などといった組織の者たちにも不遜な者たちがうようよしている。これらの法人のトップの多くは役人の天下りであり、また多くの資金が国などから供給されるため、まるで公務員であるかのようなそっくりかえった姿勢をとる者たちである。確かに、役人が出向してきていたりもする。

これらの組織は甚だ滑稽で、そこに勤める者たちをキャリアとノンキャリア、あるいはプロパーに分類している。キャリアとは国家公務員上級甲種あるいは1種試験に合格して採用された者で、若くして上位のポストに就く。プロパーはそれ以外の者で、もともと公務員試験とは関係なく、いわば会社員として就職している者たちをいう。

キャリアが公務員としてふるまうのは理解できなくもないが、プロパーもまたなぜか似た雰囲気を漂わせるのである。もちろん、キャリアの見えていないところである。この雰囲気というのが、何ともばかばかしい。ただの会社員であり、しかも国等の公的な資金を使わせてもらっている身分でありながら、そっくりかえるのだ。そっくりかえったその直後、キャリアの前ではひれ伏すのだから、このギャップは喜劇である。周りの者がそれを笑っていることに気づかず、外に出るとまた堂々とそっくりかえる。

それらには日本語教育やその他の教育に手を広げる機関もあり、そこには大量にそういった喜劇役者が生息しており、3流役者、端役特有の鬱屈したまなざしをもち、口臭のする息を吐いている。

そしてそこにも、そういった者たちにさえひれ伏し、すり寄っていく外部の機関の者たちがいる。むろん、少しでもそこにあると思われる権威にすがろうとするのである。

研究所のおよそ20年の、ロンドンにおける活動の過程にも、そのような生き物が現れては消えていった。公務員としての真摯な志もビジネスマンとしての専門性や能力も持たぬ中途半端な者が、いかにも自分の後ろには日の丸が控えているのだという雰囲気や漂わせ、そっくりかえりながら近づいてきた。

劣等感の裏返しなのだなと思いつつ、注がれる酒を飲む。この代金は税金だと思つくと、目の前の男に頭を下げる気にはなれない。利用できるものは利用し、相手に非常識なお願いをしても言うことをきかずだという思い込みや傲慢に、ぼくは何度も「ノン」と言った。「自分たちに刃向かうとセンサー、損しますよ」と言わんばかりの脅しに品位の低さが露呈する。いつからこの者たちはチンピラもどきになったのか。常に計算づくで姑息に振る舞うその者たちと別れた帰り道、ぼくは決まって嘔吐した。

そしてなんと、その「もどき」にさえも、えへらえへらとすり寄る太鼓持ちが、またいるのである。むろん、下心がある。「あのセンサーのところから手を引き、こっちへ」とムジナが集まる。

*

そういった者たちに教育や文化、国際交流などというものが委ねられているというのは悲劇である。3流の喜劇役者が演じる悲劇である。

どうしてみんな弱いのだろう。

どうして既成の権威や権力にひれ伏すのだろう。

日本の教育における受験戦争も一流と言われる会社志向もみんな一緒だ。既成の枠組みの中でうまくいった者たちは既得権を守ろうとし、うまくいかなかった者たちは次世代で、つまり自分の子どもたちでそれらを手にしようと必死である。

だから、枠組みはしっかりと守られていく。

押さえつけられた者は押さえる側に立ちたいと思ひ、願うのである。押さえつけているモノがどのような価値観に基づくモノであるかなどとはこれっぽっちも考えようとならないのである。

けれども、おそらくそういった恐ろしいほど幼稚なものの上に築かれた権威や権力は近いうちに崩れ落ちていくことだろう。なぜなら、そういったものを無視したり鼻で笑うような異文化という黒船が、本格的にすぐそこまで近づいてきているのだから。

ぼくたちの研究所はこれからも、既成の権威や権力と闘いながら、新しい権威の創造へと舵を切り続ける。まだまだ夢の途中だけれども。(続く)

突然 夢の途中 (7)

南川貞治先生は突然、現れた。

キャンパスの芝の上に座り込むと、「一緒に座ろうよ」とぼくを誘った。自己紹介もほどほどにして彼は、いいところだねえ、と呟くように言った。

あの日から10年以上も時が過ぎた。

いまぼくの手には日本から届いた一通の葉書がある。「故南川貞治儀」と始まるそれは、彼の逝去を報せている。81歳で彼は旅立った。

*

抱きしめるようにぼくを可愛がってくれた彼は、いったい何者だったのだろう。

大学の先生であり、芸術関係の評論家であり、しかしぼくはそれらの詳細を一度も訊ねなかった。

「先日、演出家の野田秀樹と飲みましてね。その時、こんなことを言って野田をからかってやったんです」

「それは面白い。今度野田君に会ったら、その続きでぼくもからかってやろう。ハ、ハ、ハ」

彼はいつも、あたたかいまなざしでぼくを見つめた。向き合っていると、ずっと前からの友人であるかのような錯覚を覚えるのだった。

年齢はずっと上の彼は、けれども友人だった。時に父親のような錯覚も訪れたが、けっして不自由な関係にはならなかった。

ある時、ホテルの部屋のFAX機から大きな文字で「会いたい」と書かれた用紙が吐き出された。忙しいだろうが、何とか都合をつけてくれないか、と書かれていた。

日本出張中のぼくのスケジュールは確かにかなりタイトだった。福岡から東京に戻ったとき、ホテルのレセプションには彼からのメッセージが届いていた。

「ホテルのすぐそばの東京會館のレストランで待っている。あわてないでいいから、シャワーでも浴びてゆっくり来なさい」

ポーターに荷物だけ部屋に入れておくように頼むと、急いでそのレストランへと走った。

井上壽子先生と一緒に彼は入口のそばのソファに腰掛けていた。そもそも井上先生が南川先生を紹介したのが始まりだった。

案内されてレストランに入る。

予約されていた席に座ると、二人ともうれしそうにほほ笑んだ。

「よかった。久しぶりだねえ。会えたねえ」と彼が言うと、井上先生も頷いた。

運ばれてきたフランス料理はぼくの好物ばかりだった。

「こんなものばかり食べていると体を壊すぞ、とお叱りを受けたことがありますが……」

「今日はいい、今日は許す、ハ、ハ、ハ」

二人の老名誉教授はニコニコしながらナイフとフォークを動かしている。

静かで、上品で、あたたかく、優しい時間が流れた。

食事を終え、席を立とうとすると、南川先生が言った。

「もう少し時間をくれないかなあ。実はもう一軒予約しているところがあるんだよ」

脚の悪い井上先生のために彼は車を拾った。行先は目と鼻の先で、数分で着いた。

「えっ、ここですか」

そこはカラオケのお店だった。

受付で、南川先生が店員の若い男に言った。

「来ましたよ」

二人の老教授は早い時間に待ち合わせ、レストランを決め、カラオケのお店の下見をし、予約していたのだった。

部屋に入ると、カラオケの機械の操作の方法を三人とも知らなかった。

店員に教えてもらって、流れ出した曲は原語で歌うシャンソンだった。懐かしい童謡だった。唱歌だった。

おそらくあのお店で初めての曲が次から次へと通路に漏れた。通る人たちがぼくたちの部屋をのぞきこんでいく。

ぼくは酔った。二人の老人にやわらかく抱かれていた。

*

それからまた時が過ぎ、日本に帰国した折、普茶料理（精進料理）と一緒に食べた。

南川先生は言った。

「今度一緒に温泉に行こう。絶対行こう。必ずね。それから、函師君、井上先生を頼むぞ。彼女には函師君しかいないんだから」

ぼくはその時、南川先生の不調に気付かなかった。やわらかく、シャンソンを口ずさむような彼の口元に、ある思いがあることに。

しばらくして、南川貞治先生は突然、逝った。（続く）

ごめんね 夢の途中 (8)

やはり、書いておくことにする。書いておかなければならないと思うのだ。他の形で書き遺すつもりでいたが、書ける時に書いておくのがいいように思う。この濫觴には今までも恥ずかしいことも心の内を曝(さら)すように書いてきたのだから。

*

長男の空(そら)には、秋(あき)という息子がいる。23日の今日で満1歳になる。つまりは孫というわけだ、ぼくにとって。

空は教育者として多忙な生活を送っている。大学やカレッジで教え、ケンブリッジ英検やIELTSの出題委員も兼務する。空手も時間を作っては道場で教えている。大変なスケジュールをこなしている彼を見ていると、若い時の自分の姿を想うのだ。

ぼくもまた、疾走する毎日だった。教育に加えぼくは、文学の世界にも棲(す)んでいた。とにかく必死で、もがくように努力をした。けれども自分の未熟さは識っていた。未熟である自分を、よく咀嚼していない理論や大量のアルコールでごまかしながら走っていた。深夜の路上で嘔吐しながら、瘦せた才能を信じようとした。周囲はそのぼくをなぜか許し、認め、評価し、つまりは甘やかした。ぼくはそのことを十分に認識していたが、ゆえにいつも不安だった。逃げ出したいと思っていた。

ぼくには3人の子どもがいる。空と次男の陽(よう)、それに長女の花(はな)である。それぞれ成長し、アカデミックな世界で何とか生きていく。

その子どもたちをぼくは深く愛しているが、空が赤ん坊の秋を愛するその姿を見て、ぼくはぼくを責める思いに襲われ、立ち尽くすのだ。

空は多忙にもかかわらず、息子の秋を徹底的に抱きしめる。頬ずりをし、キスをし、おしめを替え、お風呂に入れて、と。

ぼくは幼い空を書斎から締め出し、研究や創作に打ち込んだ。陽も花も、ぼくの手でおしめを替えられたことは一度もないのだ。

けれども、例えば空は、気がつくやと疲れてソファに横たわっているぼくに這いながら近寄ってきて、ぼくの胸の上で眠ったりした。その風景を写した写真は、けれどもその頃のぼくの心の中の不安や荒(すき)みまでは写してはいない。

ぼくはどうしてもっと子どもたちを抱きしめようとしなかったのだろう。愛しているよと言葉に出して言わなかったのだろう。頬ずりをし、キスをし、どうしてそれができなかったのだろう。孫の秋にできることが、どうして息子や娘にできなかったのだろう。

大人になった息子たちは、ベッドに横になっているぼくの傍にやってくるいつの間にか隣に横たわり、チョムスキーのことやピカソやゴッホの絵について話しかける。気がつくやと、ぼくに抱きついたまま寝息を立てていることだってある。

娘は出張から帰ったぼくに抱きつき、30分以上もそのまま離れない。キスをしてくれ、体をいたわってくれる。

ああ、幸せだなあという思いとともに、ぼくには苦(にが)さが込み上げてくるのだ。

*

ぼくはね、君たちを、空が秋を抱きしめるようには抱きしめなかったのだよ。ぼくは自分の疾走に必死だったのだよ。表面的な格好ばかりを気にする愚かな父親だったのだ。本を読み、詩を書き、研究発表をし、褒められ、おだてられることに喜びを感じながら、脚にすがりついてくる君たちを抱きしめることをしなかったのだ。

もっともっとぼくは、君たちを抱きしめなければならなかったと思うのだよ。もっともっと抱きしめておけばよかった、そう後悔しているのだよ、いま。君たちがもう一度赤ちゃんに戻ってくれたなら、ぼくは君たちが泣き出すぐらい強く抱きしめようと思えるのだよ。

ごめんね。

*

秋を連れて訪ねてくると、空は決まってまずぼくに秋を押し付ける。抱け、というのだ。自分の家に戻るときも、別際にぼくに抱かせようとする。

ぼくは優しく抱きしめ、頬ずりをし、キスをし、空に戻す。空は嬉しそうな顔をして、可愛いでしょ、と訊くのだ。ああ、可愛いね、というぼくの言葉には、時を越えて届いてほしいという思いがある。

けれども、もう子どもたちは大人になった。ある時、一緒に食事をし、お酒を酌み交わしながら、ついぼくは空に言った、君はパパよりずっと立派な先生になったし、大人になった、と。すると空は驚き、真面目な顔をして言った、パパにはまだまだ全然敵(かな)わないよ、本当に。

変数 χ の孤独 夢の途中 (9)

寒い朝、空が焼けている。きれいだな、と思う。もう少しそのまま置いてくれないかなと思う。

*

言語分析はぼくにとってはいわば一種のゲームだ。文法のある概念について書かれた論文を読みながら、その論理の破綻を見つけるとぼくは、味方の走者を自分の打撃でホーム・インさせて得点したような軽やかな喜びを感じる。オリジナルの論理を磨きながら微笑むのは、ずっと幼いころの野球ゲームでの独り遊びに通じる。

小学校に入る前からぼくは、独り遊びを覚えた。同じ年代の子どもたちと遊ぶのに比べて、幼稚な仲間意識や非論理的な秩序に振り回される必要がなく、なにより想像力が満たされた。

その頃人気のあったスポーツは何と言っても野球だった。だから野球に関する本やゲームが店先にはいろいろあった。もちろん今風のコンピュータを使ったゲームなどではなく、ボード・ゲームがせいぜいだった。パチンコ玉のようなボールを転がして、ボードに張り付けられたバットで打つといった他愛もないもので、ゆえにすぐに飽きた。小賢しい細工が施されてはいたが、それがかえって興ざめだった。プレゼントで貰ったどんなに新しいものもすぐに興味が失せていくのだった。

そこでぼくは、自分で作ろうと考えた。既成のもののように磁石やほんの少しの電気を使うのではなく、単純で、ふくらみのある仕組みはないかと考えた。いろいろ考えた上で、行き着いたのは薬品を入れた箱などのコーナーにくっつけている堅いスポンジと鉛筆とを用いた何とも地味でみすばらしいものだった。ボードの上に様々な模様を描き、二つのチームの選手を決め、投手の持ち球や決め球をそれぞれ設定した。決め球は絶対的ではなく、相性を組み合わせ、と次から次へとゲームの密度は複雑になっていった。ぼくは試合の解説をしながら延々と何時間も一人で遊んだ。目の前のボードの貧弱さとは大きなギャップのある高度で豊かな<遊び>が展開した。想像と創造の楽しい空間だった。あるいはその頃の遊びの方が今の言語分析よりも夢中だったようにも思える。

いや、その頃も、夢中になっている自分に耳元でささやく声が聞こえていた。ぼくはほとんど毎日全力疾走で生きているが、ときにふと、耳元でささやく声に立ち止まるのだ。<ボクハ・イツマデ・ボクナノダロウカ>

懸命に記録を伸ばそうとするオリンピックの選手たち、もはや絶対に使いつくすことのない財力を持ちながらさらに富を得ようと睡眠時間まで削る経済人、名誉と権力のために必死に演説する政治家、研究のために家族も友人も捨てる学者、いやこういった者たちはほんの一例に過ぎない。この世に生きとし生けるものすべてに、ある悲しみがある。

*

ぼくは幼い頃からよく空を見上げた。ずっと、ずっと上のほうからだれかが覗いているのではないかと思ったのだ。そしてまた、ぼくは不思議だった。足下を見つめ、この地面は何が支えているのだろう、と。

ぼくたちはある方程式の χ に投げ込まれた変数にしか過ぎない。あらかじめ設定されている方程式の一変数に過ぎない。ゆえに、 χ に放り込まれる数字の間で個性だの優劣だのと言ってみてもそれは滑稽なだけだ。ぼくたちは大きな誤解の中で生きている。最も大きな疑問と向き合うことから逃れながら、ごまかしながら、ほどほどの納得の上に築いた生なのだ。すなわち、<生きている>ということさえもあるいは誤解なのだ。もがき、喘ぎ、苦しみ、あるいは笑い、喜び、そういったものが落ち着くところはあらかじめ設定された方程式の箱の中なのである。

深く考える恐怖から逃れるために、ぼくたちは眠る。眠るために、歩き、食べ、恋をする。どのように歩くかとか、何を食べるかとか、どんな恋をするかとかは恐怖から逃れるためのちょっとしたレトリックやカムフラージュに過ぎない。そういったもので飾りつけることで、確かに眠りが訪れやすくなるのかもしれない。深く眠ることのできる者たちは幸せだ。けれども、眠ることを忘れた者たちは夜毎考えなければならない、<ボクハ・イツマデ・ボクナノダロウカ>と。

χ には毎日おびただしい数の変数が投げ込まれてくる。それぞれの変数は単なる一つの変数に過ぎない。変数 χ はゆえに孤独である。時と空間を見失いながら、 χ という入れ物の中でため息をつく。けれども、なかに何とか首を伸ばして隣の Ψ を見ようとする、あるいは χ から逃げ出そうとする変数が、いや、いまい。

ふうと風を産む

夢の途中 (10)

正月二日、書き初めをする。子どもの頃からの習慣である。新しい年を迎えて思い浮かんだ言葉を書くのである。

時間をかけて墨を磨りながら、静かに新しい年の自分を見つめる。気取った言葉を書こうとすると、それを見透かした自分が赤面する。あくまで素直でなければならない。

うまく書こうとすると、気持の悪い文字が目の前に嘲笑するかのように見える。心を空しくして書くのがいい。

*

今年、ぼくたちの研究所は20周年を迎える。ようやく成人するのである。早いものだ。実態はよちよち歩きからさほど成長していないのだが、それでも振り返ると胸が熱くなる。

20年前、ぼくは痩せた青年だった。

若く未熟なぼくの前に、なぜか数多くの人たちが現れた。その人たちは等しくぼくに対して頭を垂れ、笑顔で近づいてきた。ぼくの語る教育についての思いに頷き、褒め称えた。

しばらくすると、いろいろなプロジェクトが企画され、ぼくはいつもその中心にいた。土曜も日曜もなく、ぼくはそれらの仕事に没頭した。今までで会うことのなかった世界の人たちとの出会いも増え、ぼくはぼくの世界が急速に拡大していくのを感じた。

有名な人々と旅もした。

さまざまな国を訪れると、空港には航空会社の代表たちが出迎え、酒食を饗してくれた。ぼくよりもずっと年上の人たちが、ぼくの表情に敏感に反応した。

こうしてくれないかということにはだれもが快く応じた。

そのうちに、仕事から解放されたぼくは深夜、ぼくの部屋からまっすぐに見えるネルソン提督の像とビッグベンをしばしば眺めるようになった。その頃のぼくのオフィスはピカデリー・サーカスにあった。ビルの最上階の瀟灑な部屋で一人、ぼくはワインを飲んだ。

ぼくはなにをしているのだろう。

気がつくともぼくは、大きな仕組みの中で一つの都合のよい歯車と化していた。確かにすべての中心にいたが、その周りにはぼくの知らないモノが蠢いていた。

教育さえも飲み込もうとする<カネ>という名の化け物である。ぼくが依頼されて作る新しいカレッジ等のカリキュラムやコースデザイン、基本理念や謳い上げる理想といったものがすべて数字化されて知らないところで動いていたのだ。

ぼくは知らぬ間に立っていた見知らぬ足下を見つめ、それらとの訣別を決心した。

もう一度始めよう。ワインを飲み干すと、ぼくはたった一人の部屋で、その決意を口にした。全身が熱くなるのを覚えた。

教育を貶めたり、辱めてはいけぬ。信ずる教育の創造のためにもう一度始めよう。

ぼくは毎晩、一人でビッグベンの文字盤を眺めながら<人間と教育>について考えた。多くの人たちと酒を飲みながら語り合ったりもしたが、いつも最後は部屋に戻った。窓のそばに立ちビッグベンを眺めながら、あるいはファイアープレースの前の椅子に腰かけながら、教育の意味について考えた。

それはぼくがこれからどのように生きていくかについて考えるということでもあった。

その時ハッとしたのは、教育の名のもとに展開されている世の中の様々な営みが、実は多くの場合、その目的に教育とはまったく関係のないものを設定しているということだった。それに関わる者の名誉のためであったり、金銭欲によるものであったり。たとえ高名な学者であろうが、機関であろうが、<人間と教育>についての確かな思いを持つものは少なかった。

教育は人間を幸せにしていくものでなければならない。この<人間>とは動物としての<ヒト>という生き物を指すのではなく、自分以外の人との関わりを前提とした社会的存在としての人間のことである。人間は自分以外の者たちとの関わりを捨てて生きることはできない。

<幸せ>とは何か。おそらくそれは<捨てる>ということだ。生まれながらに持っている、あるいは生まれたのちに身につけた<欲>を少しずつ捨てていくことだ。手に入れるのではなく、捨てることである。油断するといろいろなものを気づかぬうちに身に纏ってしまうのが人生だ。身に纏ってしまったものは多くの場合、少しの快樂と多大なる苦痛をもたらす。

それらの身に纏ったものを少しずつ脱ぎ捨てようとするとき働くのが<知性>である。脱ぎ捨てることを続け、最終的に最後に残ったものを捨てる時、安らかに美しい死が訪れる。

*

今年ぼくは、「ふうと風を産む」と書いた。静かに、やさしく、心をこめて、息を吐く。それが風になる。

退陣要求 夢の途中 (11)

■退陣要求 (1) 内閣総理大臣

すごい、ものすごい。こんなことが許されるのか。この程度の人物が堂々と最高権力者の地位に鎮座していいのか。下品、下劣、無教養、いくらでもネガティブな形容詞が浮かぶ。朝令暮改は日常的で、加えてそのことに対する批判への居直りや恫喝までもある。「濡れ衣を着せるな (彼はカブセルナと言ったが)」とすごんで見せた彼は、漢字だけでなく小学生でも知っている慣用表現もその意味するところをよくは知らぬのだ。数か月前には「おれがやったんだから、そこのところ、よく覚えておいてくれ」とテレビカメラの前でチンピラ並みに啖呵を切ったそのことを、「濡れ衣を着せるな。おれがやったんじゃない」と吐き捨てる。第一、「濡れ衣」というからにはそのこと (郵政民営化) が悪事であったと言っていることになる。あくる日には「やっぱりおれがやった」と言いなおす。論理性なんて何もなく、ただ駄々をこねたり、いちゃもんをつけたりの繰り返しのだ。世界第 2 位の経済大国のトップが中学生にまでその知的レベルの低さをあざ笑われているのだが、どうしたわけか他国のトップとの会談をするために世界を駆けまわっている。国会答弁で「俺は、……」という言葉遣いしかできない人物が、どうして品位のある英語が使えるというのか。どうして内容のある協議ができるというのか。恐ろしくてハラハラする。

不思議なのは、周りに仕える連中である。この「未曾有 (彼はミゾユウと読む)」のコメディアンの一挙手一投足をおなかの中で笑いながら楽しんでいるというのか。国益を考えると一日も早く首相という役職も国会議員という立場も辞めさせなければ、彼の盟友の財務大臣も二日酔いと思われる会見で世界に醜態をさらし、大臣職を退いている。

■退陣要求 (2) マス・メディア

朝日、読売、毎日、産経、東京、日経の各新聞の記事を毎日読む。どれもこれももう駄目だ。商品と化した文字には生命力が感じられず、ジャーナリズム精神を感じない。ロンドン駐在のある新聞記者は、ウインブルドンでのテニスの試合のテレビ中継を支局で見ながら記事にして、現地からの記事として配信し、こうのたまった、「日本にいる者にはどうせわかんないんだから」と。面白ければいいんだよ、どうせ商品なんだから、というのである。

メディアが暴力的な力を持ち、跋扈している。通りの隅で刃物をちらつかせてゆすりたかりの類をしている者たちより恐ろしく悪質なのである。

日本で最も大きな自動車会社 (どうやら世界で最も大きな会社になったようだが) の名誉会長という男 (経団連の会長もやったことがある) が庶民を苦しめる年金問題を取り上げ検証するテレビ番組をやり玉に挙げた。彼はこう言った、「ああいう番組はけしからん。テレビのコマーシャルなどをやめて報復してやろうか」と。こちらも結局はチンピラなのだ。どんなに社会的な地位を手にしても、心の奥底はその筋の者と変わらない。いや、もっとタチが悪いのだ。すぐに会社をたたんで出直すのがいい。

こういう言動を新聞もテレビも、メディアはほとんど取り上げなかった。取り上げてもごく小さな記事であった。不買運動の展開が起きてもおかしくない暴言であるのだが、要するに広告を出されなくなると困るからだ。いつもの正義の味方ふうなポーズはどこへ行ったのだ。

■退陣要求 (3) 似非・教養人

大学に入学した若者の学力があまりに低いので、中学や高校の教科書を用いて補習する大学が増えているのだそうだ。そのことを推進する団体まで出現している。なんだか頭がくらくらする。

子どもたちに貧相なプリント教材を配って、ストップ・ウォッチで追い立てながら「百マス計算」などをやらせるのにも吐き気を覚えているが、大学生に対する補習をシステム化しようという者たちが集団を形成しているのには呆れて笑っちゃうぐらいである。しかも、真面目にそういった愚かな営みに打ち込んでいる者たちは大学の教授たちなのである。いや、これは意外なのではないのかもしれない。大学の教授にしてその程度のレベルなのだ。

大学の教授たちと話をしている不快になるのは、自分の大学の学生たちの質の悪さをとうとうと述べる輩が多いことである。その大学生たちの教育を担当しているといった責任感が全くというほどないのである。彼らが眼の色を変えるのは研究費という名の自由になるお金の獲得に対してであり、そのお金を使ったの海外遊学の楽しみにである。大学における教育の可能性や理想を語る者がほとんどいない今、みんなそろって辞めてもらうことにしたい。

*

気持の悪い大気汚染はまっぴらなのだ。権威も権力も、地位も名誉も一度、「ご破算で願いましたは」といきたい。

天命を待たず 研究所創立 20 周年 夢の途中 (12)

「人事を尽して天命を待つ」という言葉がある。「人間として出来るかぎりのことをして、その上は天命に任せて心を労しない」(広辞苑)という意味だ。

がむしやらに走ってきたぼくは時に、この言葉で以て自分を支えた。やれるだけのことをやったのだから、と自らを慰めた。神社やお寺では賽銭を上げて手を合わせ、教会を訪れた際には頭(こうべ)を垂れる。

けれども今、この言葉に甘えようとした自分を恥じるのだ。そもそも、「人事を尽し」たことなど一度もないのではないか、と振り返ってそう思う。ほどほどの努力しかしていないのに全力で事に当たったと納得してきたように思うのだ。いや、正確にいえば、納得しようとしてきたのだ。つまり、ぼくにはわかっていた、その妥協が、あきらめが。

ゆえに、ぼくにはうしろめたさがつきまとってきた。もっと、もっと、どうして努力しなかったのだ、と。

「天命を待つ」てはいけないのだ。「天命」などないのだ。すべては自ら生まれ、自らに對峙し、自らを裁くのだ。

*

今年の4月で研究所は20歳になった。ようやく大人になる歳なのだが、まだまだ幼く、未熟である。

瞬間に過ぎた20年であったが、その質感は重い。教育とは何かという問いに真直ぐに向き合ってきたつもりであったが、振り返ってみると自分の愚かしさだけが思い出される。

20年前のぼくは、確かに20歳若かった。ある神父が当時、「人生は闘いです」と話してくれたが、ようやく今、少しだけそれがわかるようにもなった。その時ぼくは、神父への手紙に「何のために人は闘わなければならないのですか」と問うた。おそらくその闘いとは「生きるとは何か」と問うことであろう。それはつまり、「死ぬ」ということについて考えることでもある。

*

この20年の間、ぼくにとって幸せであったのはさまざまな人との出会いである。研究所の所員として支えてくれた数多くの者たちに、まずは感謝したい。今年の4月3日の創立記念日にぼくは、ロンドンのピカデリー通りに面した研究所の最初のオフィスを訪れた。そこは20年前の、瀟洒で、贅沢な出発点であった。

突如、ぼくの眼頭が熱くなり、必死でこらえた。さまざまな仲間たちの顔が浮かんできたからである。

20年前のある夜、その裏通りのパブで、当時のぼくのアシスタント(補佐・イギリス人)の男と激しい口論をした。ぼくには彼の使う[**business**]という言葉が我慢ならなかった。「ぼくは **business** をするつもりはないんだ。ぼくがやろうとしているのは教育なんだ。どうして君にはそれがわからないんだ」

ぼくにはその頃、[**business**]という言葉の持つ意味の広さを理解する力がなかったのだ。教育一家に育ったぼくは、その言葉になんとか卑しい響きを感じていた。彼は「**Good luck!**」と言って去って行った。そのパブは今はなく、日本食のレストランになっている。

数多くの者たちとの擦れ違いがあった。そのすべてがぼくの未熟さによるもので、一人ひとりにお詫びを言い、またお礼を言わなければならない。

それにしても、なぜかすべての者たちが素晴らしい純粋さにあふれていた。すべての者がぼくの夢や理想を理解しようとしてくれた。一人残らず、ぼくにとっては大切な者たちで、ゆえに切ない思い出である。ぼくにもっと力があれば、もっと大きな愛情があれば、そう思うのだ。

幸いなことに、現在の所員も含めてみんな、学生に対する教育には打ち込んでくれた。日本の大学教授たちに会うと、ぼくはいつも誇らしげに口にする。「うちのスタッフはすごいんだ。みんな純粋に教育に打ち込み、成長を続けている。だから、学生たちも不思議なほどに努力をし、大きく成長していく」と。

きっと手前味噌なのだろう。親バカなのだろう。けれども、親がバカと言われるほど子どもを愛して何が悪いのだ。

*

ぼくは人事を尽そうと思う。巣立っていった卒業生の一人一人の顔を思い浮かべながら、時に涙を浮かべながら歯を食いしばって仕事に打ち込む仲間であり同士である所員のまなざしを受け止めながら。

ぼくは天命を待たない。ぼくやぼくたちの仲間の人生は、ぼくたち自身で隅々まで神経を行きわたらせて、自ら作っていくと思う。

研究所の20年は、まだまだわずかな一歩である。これからまた、新たな一日一日を積み重ねて、できうる限り純粋に、さわやかに、豊かな教育の世界の創造に努力していこうと思っている。

今年の春も、桜は美しく咲いた、全身の力を振り絞って。

おおい、雲よ。 夢の途中 (13)

夕刻になるとロンドンは空を青くする。そしてそこには、やわらかな白い雲が浮かんでいる。ぼくは椅子を回して、部屋の中からしばし眺める。今年のロンドンの初夏は美しく、晴れ渡る日が多いように思う。

キャンパスの芝の上を幼な子が頼りなげに走り回る。母親らしき若い女性が追う。それを、離れて見守る老人がベンチに腰かけている。

ぼくはぬるくなったコーヒーを口に含む。立ちあがってステレオに向かい、ボッチェリ Andrea Bocelli の Incanto (CD) を流す。盲目のオペラ歌手の、青竹の匂いを思わせる声がぼくを遠い日へと誘う。

*

リフト (エレベーター) を降りると不思議なことにぼくはかすかな緊張を覚えた。どうしてだろう、と戸惑う。日本出張中のぼくは、宿泊しているホテルの部屋からかつての教え子の待つロビーへと向かっていた。

ぼくを見つけ、ロビーのソファから立ち上がり、「先生ッ」と言った彼は、いい顔をしていた。まるで少年だ。もはや中年の彼には、けれども青い竹の匂いがした。

20 数年ぶりの再会は喜びにあふれていたが、瞬間に過ぎた。レストランではワインを飲み、ぼくの部屋では日本酒を飲んだ。彼の作った曲を聴き、静かに語る彼の軌跡を聞いた。

夜が更け、ホテルの出口まで送ったぼくに抱きついた彼は、声を出して泣いた。

部屋に戻り、ぼくはもう一度グラスに、今度は強い酒を注いだ。「がんばれ」と呟く。

*

雲が流れていく。すこし風が出たようだ。けれども、のんびりとしたものだ。微かにほほ笑みながら流れていく。どこへ？

ぼくの住むイギリスは、日本からは随分遠い。父が死んだ時はロンドンに、長兄が死んだ時はケンブリッジにいた。人は数百メートルも離れていれば、もう見えなくなる。見えないという意味では地球の反対側にいるのも同じだ。会いたいという時に駆け出していけば会えるというのと、駆け出したってすぐには会えないというのとの違いである。

少し切ないが、近くにいたって何も見えていないことがあるじゃないか、と自分を慰める。

*

時に、すべてがつまらないものに思える。世の権威あるものに薄っぺらさと醜さを感じるのだ。テレビや新聞の伝えるもののどれもこれもが、大切なものを放っておいてどうでもいいことに躍起になっているように思える。笑いの中に、怒りの中に、涙の中に、ぼくは偽りを感じてしまう。

子どものころ食べた西瓜の甘さはどこへ消えたのだろうか。蛍を追いかけた時の闇の怖さはどこに行ったのだろうか。近所のおばあさんの慈愛に満ちたほほ笑みはいつなくなったのだろうか。

*

ちぎれて取り残された白い雲が浮かんでいる。

モディリアーニ Amedeo Modigliani の画集を開き、「ジャンヌ・エビュテルヌの肖像」をみる。14 歳年下の愛人を描いたこの絵は見つめてはいけぬ。動けなくなり、何かを差し出さねばならなくなるから。飲んだくれで女たらしの天才画家はモデルとなったジャンヌに見つめられることで生きた。画家がモデルを見つめたのではない。

日本で買った『子葉声韻』(高貝弘也)を読む。「どうして、幼い子どもばかり死ななければならなかったのか」で始まる詩集。秀逸だ。言葉が勝手に動き出したかのような生命力がある。

*

雲もまた自分のやうだ
自分のやうに
すっかり途方にくれてゐるのだ
あまりにあまりにひろすぎる
涯 (はて) のない蒼空なので — 「ある時」 (暮鳥)

*

陽が落ちようとする。雲はどうするのだ。陽が落ちてしまったあとで、お前はどこへ行こうとするのか。

おおい、雲よ。

ぼくの心を吸ったお前はそれをどこへ運んで行こうというのか。ぼくの心はそこで、幸せにほほ笑むことができるというのか。

*

飲もうとしたコーヒーはポットを傾けてももう出てこない。今日も 5、6 杯は飲んだらうか。

あの頃の 夢の途中 (14)

吉田 (和彦) さんがわざわざ新幹線に乗ってやって来て、教え子たちも一緒に酒を飲む。吉田さんはぼくの後輩で、日本で暮らしているときはいつもそばにいた。

ぼくが研究発表をするときはいつも、レジュメの印刷を手伝い、段ボールに詰めたそれを抱えて大会会場までついてきた。ぼくが組織した研究会のメンバーとして、ぼくのがまみや厳しき、甘さや未熟さをだれよりも知っている男だった。

ぼくたちは狂ったように仕事をし、狂ったように酒を飲んだ。ぼくがウイスキーのボトルを一本空けると、彼も同じように一本空けた。そしてあくる日はきまって、二日酔いでのたうちまわっていた。ぼくたちは激しくわがままな兄と優しく善良な弟といった関係だった。

彼は自分が仲人をした若い教員を連れて来てぼくを紹介し、「この人がぼくの原点なんだ」と言った。ぼくはいつか言わなければいけないと思いつけていた言葉を、20年以上も経ったその時、ようやく言うことができた。「ぼくは吉田和彦を尊敬しているよ。この男はね、立派な教師なんだ」

研究の仕方や教育について、いつもいつも激しく彼を叱責していたぼくは、彼をもう一人のぼくに見立てていたのだ。彼にもっと頑張らなければと言うとき、ぼくはぼくを叱責していた。ぼくは彼が好きだった。

「老岐 (俊平) さんがいよいよ定年で退職だつてね。老岐さんから、あの頃はよかったね、と書いた年賀状が来ていてね」、吉田さんにそう言いながらぼくは、胸にこみ上げてくるものをどう抑えたらよいかめんくらっていた。

老岐さんはぼくの兄貴のような存在で、酒は彼に教えてもらった。夕方になると彼は、「行こうか」と飲みを誘うのだ。魚のうまい店で日本酒をそれぞれ軽く一升は飲み、それからスタンド・バーに向かう。そこではサントリーのオールダカリザープを水割りで飲むというのがいつもの流れだった。そのバーには、その頃のぼくから見たらずいぶん年上のママさんともう一人のやはり中年の女性がいた。10人も入れればいっぱいになる狭いその店には常連の男たちしかいなかった。

酒を飲み、歌を歌った。その頃のカラオケは今のようなものとはずいぶん異なり、映像などはなかった。

ぼくはそのお店の誰からもかわいがってもらった。生まれて数カ月の長男を抱いて、ぼくはそこで水割りを飲んだ。常連の男たちは、「まったくもう」とあきれながら微笑んだ。

老岐さんはいつも優しくかった。彼はとめどもなく駄洒落を言っては笑わせ、笑った。その彼はだれよりも教育熱心で、おそらく辞めるまで青年教師として情熱を注いだことだろう。

むしように声が聞きたくなくなった。吉田さんに言って電話をかけてもらう。

「あのう、夜分、すいません。今、函師先生と一緒になんです。ロンドンから帰ってきておられて、電話をしろって言うので」

「え、函師さん？」

電話の向こうで、老岐さんが話し始める。不覚にも、涙が浮かぶ。一緒に飲んでいて連中が静かになる。

どうしてだろう。

どうして、あの頃の声に涙が出るのだろう。

あの頃、ぼくたちは若かった。がむしゃらに仕事をし、徹底的に飲んだ。一所懸命であることは当然で、そのことで自分の未熟さを言い訳しようという者はいなかった。

ぼくたちは自分の未熟さを知っていた。お互いの力の無さを認識していた。だから、頑張るのは当然だと思っていた。頑張っている仲間の苦しみを黙って見ていた。慰めたり、表面的な励ましを言ったりすることなどまったくなかった。それどころか、厳しく磨き合おうとした。

大酒を飲みながらの話題はほとんどが教育のことで、つまりは昼も夜もどっぷりと仕事に浸かっていた。

老岐さんの先輩に大鎗 (正昭) さんがいた。ある日、彼は日本から手紙をよこした。「函師さん、日本の教育はどんどん変わっていくよ。こんなはずじゃなかったと思うんだよ。油断すると、また戦争に若者を送り出すような、そんな教育の片棒を担がされてしまいそうで」と書かれていた。彼もまた、真摯に教育に向き合っていた。

松井 (博文) さんや向井 (均) さんはもっと先輩だったが、まるで本当の兄弟のように支えてくれた。甘えるような喧嘩もした。この二人の存在はぼくの人生に大きな意味を持っている。

あの頃、ぼくたちは、ぼくたちであった。ぼくだけで終結するのではなく、ぼくたちであった。ぼくたちは同じ空気を吸い、激しくもがきながら、一緒に生きた。

あの頃、ぼくは未熟で、みんな未熟で、その未熟さに甘えないようにしよう、そう声を掛け合って生きていた。

道幅 1.5 メートルの教育

夢の途中 (15)

日曜日の夕刻、柔かい日差しの中を散歩する。樹林を切り裂いた小道を、時折横切る栗鼠たちと一緒に奥へと歩み入る。突然、芝の公園が現れ、真っ白いユニフォームを着た男たちがクリケットに興じている。そこには当たり前のように穏やかな時間が流れている。ぼくのわずかばかりの疲労感は、そういった風景の中に溶けていき、気がつくとも小椋桂を口ずさんでいる。

持ってきた文庫本を枕にして芝の上に横になる。空はまだ薄青色をしていて、高い。

どうしてだろう、吸われてしまいそうな空を見ながらつぶやく。教育の専門家である先生と呼ばれる者たちが、今の社会が評価するものばかりを追いかけて必死である。

たとえば、「百マス計算」である。テレビで特集されたものしか知らないのだから、論評は差し控えなければならぬのかもしれないが、少なくとも「百マス計算」に好意的な報道を見ての感想であるのだから許していただきたい。計算の速度と正確さを競う言わば訓練をストップウォッチを用いて行っていたのだが、その風景にぼくは怒りさえ覚えたのだ。こういった訓練を、幼い子どもたちは「学ぶ」ということだと思ふことになるのだろう。他人よりも多くの計算ができたことに喜びを感じ、できなかった者を蔑（さげす）むことになるのではないかと心配する。何より驚いたのはそれらを担当する教師たちの表情であった。まるで安っぽいゲームを楽しむような、教育とはずっと離れた遠いところに置かなければならないはずの、貧しさや卑しさを感じたのだ。まずは基礎力をつけさせるので、そのあとじっくり考える力は養成するのだ、とその教師たちは言う。それは根本的に間違っている。このような学び方で鍛えられた者は、じっくり考えることをしようとはしなくなるのだ。「まずは」というのは大人の勝手な論理である。その論理は、「わかりやすい」ということから導かれる。大人にわかりやすい力（学力）なのである。

たとえば、「夜スぺ」である。民間企業から公立中学校の校長になった者の発案で始まった。彼は成績上位の者たちのことを「吹きこぼれ」と呼び、その者たちへの特別教育を学校で行なおうとする。「上位層を伸ばすのも公教育の役目だ」といい、大手進学塾の講師たちが放課後の教室で特訓する。ここで身に付けた学力は「学力テスト」で測られる。つまり、テストで測ることのできる学力を養っていく。学校と塾との垣根がなくなったのである。放課後の教室は点取り競争をする者たちの戦場となり、彼らの言う「学力が低位の者たち」ははじき出される。代わりに土曜日に「底上げ」の教室を開いていると彼は胸を張る。

「百マス」も「夜スぺ」もメディアが大きく取り上げて、二人は教育界のスターとなる。大阪のタレント知事はこの二人を招へいし、大阪の教育の改革の旗振り役とした。確かにこの知事は大阪の赤字財政を立て直し、中央政権と闘うかっこよさを持っているが、少なくとも教育については大きな失政と言わねばなるまい。学力テストの点数を上げることが教育の向上であると考えた単純さは、確かにわかりやすいのだろう。いや彼はもっと強（したた）かで、一般大衆は単純な論理でなければついてこないと考えているのだろう。少し前の政権が短いフレーズ（語句）で大衆を煽ったその戦略（戦略）と同じなのだ。彼は学力テストの成績が上がったその時、誇らしげに言うのだろう、「私が大阪の子どもたちの学力を上げました」と。

数字は絶対であり、わかりやすい。8は5より3大きいのである。けれども、子どもたちが、たとえば学校というところで学ばなければならないのは、数字で表すことのできるものばかりではない。いくら考えてもなかなか答えの見つからない事柄についても、考えようとしなければならない。たとえば、「幸せってなんだ」と問わなければならない。ぼくの、私の、幸せばかりでなく、生まれてすぐに死んでいかなければならない子どもたちの存在についても押し量り、慮（おもんばか）る力をつけたい。そういった力は数量化できない。

ぼくたちに必要な力はわかりやすく、数量化できるものばかりではないのだ。学校は、今の社会にとって都合のよい人間の生産をする工場ではない。一見役に立たないものも大きな意味を持っていることを大人たちは、教育者は、為政者は知らなければならない。人間が簡単に測ることのできる力は、簡単であるがゆえにわずかばかりの力である。

家に戻りながら、足元を見つめる。ぼくが歩くのに必要な道幅はわずか 1.5 メートルもあれば十分だ。けれどももし、この道が 1.5 メートルの道幅しかなく両側が断崖絶壁であったなら、ぼくは足がすくみ、のんびりと歩くことなどできないだろう。今踏みしめている道が踏みしめない大地とつながっていて初めて、ぼくは歩くことができるのである。

捨てることば 夢の途中 (16)

夜中に目が覚めた。もっと眠らなければと思うのだが、眠れない。目を瞑ったまま、頭の中のカオスの整理を試みる。

*

ことばとは何だろう。

ここに「林檎」があるとす。いや、「林檎のようなもの」だ。名前はまだない。木の実であることは確かだ。じっと見る。触ってみる。指で弾いてみる。舐めてみる。齧ってみる。噛む。飲み込む。この木の実がどのようなものであるか、少しわかる。

ここに「林檎」がある。蜜柑でもバナナでもなく、間違いなく「林檎」である。触ったり、食べてみたりしなくとも、それはかつての経験や体験、学習した結果身につけた知識によってわかる。

ここに一人の「人間」がいるとす。いや、「人間のような動物」だ。名前はまだない。動物であることは確かだ。じっと見る。触ってみる。撫でる。指で弾いてみる。舐めてみる。抱えてみる。噛む。この動物がどのようなものであるか、少しわかる。

ここに一人の「人間」がいる。犬でも馬でもなく、間違いなく「人間」である。撫でたり、抱えてみたりしなくとも、それはかつての経験や体験、学習した結果身につけた知識によってわかる。

ここに一人の「男」がいるとす。いや、「男のような人間」だ。名前はまだない。人間であることは確かだ。じっと見る。触ってみる。撫でる。指で弾いてみる。舐めてみる。抱えてみる。噛む。この人間がどのようなものであるか、少しわかる。

ここに一人の「男」がいる。女ではなく、間違いなく「男」である。撫でたり、抱えてみたりしなくとも、それはかつての経験や体験、学習した結果身につけた知識によってわかる。

ここに「悲しい」という感情があるとす。いや、おそらくそれは「悲しい」というような感情だろうという程度だ。名前はまだない。心の中に芽生えたものであることは確かだ。じっと考える。悩む。泣く。叫ぶ。それらをじっと見つめる。「悲しい」という感情がどのようなものであるか、少しわかる。

ここに「悲しい」という感情がある。それは「嬉しい」とか「にくい」といった感情ではなく、間違いなく「悲しい」というものだ。いちいち考えてみなくとも、それはかつての経験や体験、学習した結果身につけた知識によってわかる。

ここに「愛する」という思いがあるとす。いや、おそらくそれは「愛する」というような思いだろうという程度だ。名前はまだない。心の中に芽生えたものであることは確かだ。じっと考える。思う。焦がれる。悩む。欲する。喜ぶ。悲しむ。泣く。笑う。沈む。浮かぶ。走る。立ち止まる。見上げる。うつむく。振り向く。待つ。あげる。もらう。産む。失う。それらをじっと見つめる。「愛する」という思いがどのようなものであるか、少しわかる。

ここに「愛する」という思いがある。それは「嬉しい」とか「にくい」といった感情ではなく、間違いなく「愛する」という思いだ。いちいち考えてみなくとも、それはかつての経験や体験、学習した結果身につけた知識によってわかる。

*

「林檎」ということばを用いた瞬間ぼくたちは、「林檎というもの」を認識する。「人間」ということばも、「男」ということばも、「悲しい」ということばや「愛する」ということばも、ぼくたちにそれらの意味や感情や思いを明確に整理した形で与えてくれる。そうすることでぼくたちは安心する。

けれども、そこで認識されたものは既成の知識や経験の枠の中で処理されるのであって、多くの場合それは、それ以外の何ものでもない。

たとえば「林檎」は、あくまで今までに知っている「林檎」でなければならぬ。「四角い林檎」などは認められない。

たとえば「愛する」ということばを用いるときぼくたちは、いつかどこかでインプットした「愛するということ」についての知識や見解や態度や姿勢や方法などといったもので、今まさに目の前にある「愛するもの」に向き合うのだ。その範疇にないものは認められず、時に、あっさりとして捨ててしまったりもする。

けれどもぼくたちが「その時」までに知りえたことやものというのは、そのものが持つ全体像のいかほどであることか。ぼくたちが知ることができるのは常に、そのものや事柄の一部分にすぎない。その一部分にことばというものを当てはめているのだ。つまり、ぼくたちはことばを用いることで、多くのものを捨てているのである。文学的表現の比喩などはそれらを克服しようと挑み続けてはいるのだが。

*

頭は冴えるばかりで、今夜もやはり眠れない。

忘れ物

夢の途中（17）

よく忘れ物をする。旅行中はホテルに忘れ、レストランに忘れ、会議室に忘れる。ペンを忘れ、眼鏡を忘れ、書類を忘れる。買い物をする、その買ったものを忘れて店を出る。少しばかり時間があるからと駅のコインロッカーに荷物を預け、その荷物の存在を忘れて新幹線に乗り、一駅も二駅も行ってから思い出す。若い頃からそうなのだ。

*

旅立つとき、故に、いつも何かを忘れていたような気がしてならない。けっして忘れてはならない、そういうものをぼくは忘れてはいないか。

*

昔の教え子が訪ねてきて、昔のぼくについて語る。未熟なはずのその頃のぼくにぼくは、嫉妬のような不思議な心の揺れを覚える。教え子の思い出話の中のぼくは活き活きと走っているのだ。伸びやかに呼吸をしているのだ。まっすぐに全力疾走をして今日まで来たはずのぼくがかなわない、青年という名のぼくがそこにはいる。

いや、そんなはずはない。ぼくは間違いなく今のほうが純粋で、知的である。若い頃のぼくは何も知らぬが故の、いわば未熟な純粋さを持っていたかもしれぬが、いまのぼくは数多くの体験や経験を経たのち、あるいは大きな責任や義務を背負いながら、それらを乗り越えて得た本物の純粋さを持っているはずだ。闘い、傷つき、起き上がり、そうしたのちになお純粋であろうとすることのほうが尊いに決まっている。いや、それこそが純粋という言葉にふさわしいのではないか。

確かに若い頃は前を見ていればそれでよかった。責任や義務といった抱えるべきものはわずかであり、それらを捨てることになったとしても何度でもやり直すことはできると信じていた。未来を見つめ逡巡することなど必要なかった。故に伸びやかに走ったり、飛んだりできた。

けれども、歳をとり、多くのものを背負った時、足下を見つめ、振り返り、しかしなお、前に一步、歩を進めることは確かに苦しく、つらいことであり、それでもなお純粋であろうとすることは、若いときのそれとは比べようもない力が要るのだ。そこにある純粋さこそが誇るべきものではないか。

しかし、本当にそうだろうか。ではなぜぼくは、今のぼくは立ち止まるのだ。立ち止まってため息をつくの。ぼくが手にしてきたものは、伸びやかさや純粋さといったものではなく、ただ狡猾な弁明やごまかしだったのではないか。ちっぽけな自分の心のみを宥（なだ）め賺（すか）す愚かな言い訳だったのではないか。ぼくは自分の心をも偽ろうとしているのではないか。

そうなのか？ いや、違う。ため息をつくぼくが求めようとしているものは、少年のころや青年のころには見えなかった、もっと高く、もっと輝き、力あるものなのだ。

大人になってようやく見えてくるものがある。繰り返し転ばなければ見えてこないものがある。大量の本を読み、音楽を聞き、絵画と向き合い、お酒を飲み、口論し、恋をし、裏切られ、病に倒れ、肉親を見送り、命が生まれ、そういった様々な経験や体験が、あるいは学習が、それまで見えなかったものを見えるようにしてくれる。

それは、〈愛する〉ということだ。〈愛する〉ということの厳しさであり、優しさであり、大きさである。純粋であるとは〈愛する〉力を持っているということであり、〈愛そう〉とすることである。

この〈愛〉はしかし、難しい。油断すると利己的なものになり、危険な力を持つことになる。自分が幸せでない他の人を愛したり幸せにしたりは出来ない、という若者がたくさんいる。だから、まずは自分が幸せにならなければ、というのである。この陳腐な論理はかなり支持されており、故にわがままが正当化される。

ぼくにはまだ〈愛する〉ということを定義する力はないが、かつて何度か〈愛〉というものに触れたような気がするのである。極めてささやかな日常の生活の中でぼくは、それらに包まれて微笑んだ思い出があるのだ。それはいつ、どこにあったのだろう。

それを思い出さねばならない。いつまでもそれを忘れ物として放っておくわけにはいかない。なぜならぼくは今、旅立とうとしているからである。もう一度ぼくは旅に出ようと思っている。旅の支度は時間をかけずに、あっさりとしたものにしよう。けれども忘れ物をしたままでは旅立てない。ぼくが〈愛〉にほほ笑んだその時を思い出さなくてはならない。それはどのような風景であったか。その風景を求める旅なのだから、しっかり思い出さなくてはならない。

線 夢の途中（18）

子どもの頃ぼくは、よく一人で遊んだ。本を読み、絵を描いた。庭の木々や草花を繰り返し描いた。特に、決して華やかではないマツバボタンの花を好んで描いた。大きな樹木も描いたが、気がつくともまたマツバボタンを描いていた。

絵を描くのが好きなのだと思った親は、プロの画家の先生のところへぼくを連れていった。毎週のようにぼくは、その先生に連れられてスケッチ旅行に行った。小学校に入る前のぼくは、大人の男の画家と二人きりで海に向き合ったり、山に入り、滝の傍らに咲く草花を描いたりした。何時間もほとんど話すことはなく、時々彼はぼくの絵を覗き込んで、一言二言何かを言った。母親の作ってくれた弁当を食べる時も、静かにあたりを眺めていた。

彼はしかし、厳しかった。いきなり描き出してはいけないとぼくの逸（はや）る気持ちを制した。よく見なさい、静かによく見なさい、と彼は描こうとするものをじっと見つめることを教えた。

ぼくは見つめた。そしてある時、ハッとしたのだ。ぼくはいつも柔らかい鉛筆で下書きをし、縁取られたそれに色を塗っていったのだったが、ぼくが見つめた草の葉には、そして花には線による縁取りがなかったのだ。

家に戻り、卵をテーブルの上に置いた。そしてじっと見つめる。ぼくが描くすべてのものはいつも線によって縁取られていたが、よく見ると卵のどこにも線はなかった。掌（てのひら）を見つめる。柔らかな肌色のどこにもやはり線はなかった。

線を引くことなく絵を描いてみよう、そう思ったぼくは、筆に絵の具を含ませると白い画用紙にいきなり塗りつけていった。それに気付いた先生は、ほうッ、と微笑んだ。その微笑みの意味はぼくにはわからなかった。

モノが持つと思いつめていた線という縁取りがぼくの視線から消えると、影さえも不思議な生命力を感じさせた。少年の日、ぼくは密やかなものに触れた衝撃に打たれた。

*

平山郁夫さんが亡くなった。日本画の最高峰として偉大なる業績を残した彼とずいぶん前のことだが、二人でのんびり小一時間ほど話したことがある。

彼が旧制の中学生（現高校）の頃の思い出話である。彼が通った学校は藩校を前身とする私立男子校で、いわゆる進学校である。

日本語学者の三上章（「象は鼻が長い」等の著者）も数年、教師として勤めたその学校にぼくも、国語を教える青年教師としてしばらくの間勤めたことがある。

学校の周りをのんびり歩きながら平山さんは、懐かしそうに彼の少年時代を語った。

「この塀を乗り越えてね、ええ、授業をさぼってね、お好み焼きを食べに行っただですよ、仲間とね。うまかったなあ」

「先生たちは怖かったけれど、立派でね」

ある雑誌に特集されるということで懐かしいキャンパスを訪ねた彼は、日本の画壇の最高峰という必要のない威厳のようなものは微塵も感じさせなかった。少年時代を思い出しながら静かに息を吸い、吐いていた。

「K君は元気かなあ」

「ええ、お元気です」

かつての同級生の名前を挙げて彼は聞いた。Kはその時のぼくの同僚で、音楽教師をしていた。

東京芸大の学長を務めるなどの激職をこなしながら絵筆をとる彼のまなざしは、優しかった。

「あのう、先生。この学校に先生の絵を頂けませんか」

気が付くとぼくはとんでもないお願いを彼にしていた。彼の息遣いを後輩である子どもたちに直接感じさせたい、そう思ったのだった。

「わかりました」

いやな顔一つせずには彼は、微笑みながらそう答えた。他の画家とは桁違いに高額で、値段のつけようがないという画家の絵をくれないかと簡単に言ったぼくは、一瞬聞き間違ったかなと思ったが、彼はゆっくり肯いた。

あくる日ぼくは、そのことを校長に伝えた。驚いた校長は本当かと何度も聞き返した。しばらくして、大きな絵が届いたのだった。

*

人間を、心を、描こうとする。さて、どう描こうか。線を引かなければ切り取ることでできない対象は、けれども線などは持っていない。ぼくはいつの間にか、縁取ることでものをとらえたつもりになってはいなかったか。

ことばもまた、同じである。

一文字、一文字を 夢の途中 (19)

「ごんぎつね」や「手ぶくろを買いに」などの名作で有名な絵本画家・黒井健はいつも黒ずくめのファッションで決めている。どうしてかと聞くと、「だってボク、黒井だもん」との明快なる応え。

日本に出張した際、「うまいラーメンが食べたいなあ」というと、「わかった。行きつけの店があるから」といってホテルに迎えに来てくれた。

「どうしてラーメンを食べに行くのに、ベンツなんかでいくの？ しかも電話で予約なんかして」

「いいから、いいから」

連れて行ってくれたのは、恵比寿のしゃれたレストラン。ファッションナブルなカップルで席が埋まっている。

「あれっ、ラーメンじゃないの？」

「まずはここで食事してからね」

食事を終えると、「じゃあ、いよいよラーメンだ」と車を走らせる。

「もう、満腹だよ」

「大丈夫、大丈夫」

半分残したぼくに、「もったいないなあ。実は今日の昼もここに来たんだよ」と言いながらぺろりとどんぶりを空にした。

「もう一軒、行こうよ、飲みに」

「いや、今日のところはやめておくよ。明日、講演だから」

あの、吸い込まれるような、素晴らしい絵本を描く男は、まだまだ大きな世界を飛び続けるのだらう。彼の食欲やあらゆるものに対するまっすぐなまなざしはそばにいただけで心地よい。

*

健人は黒井健の長男である。彼は成人した立派な大人であるが、今、自分というものをじっと見つめ、考える生活を送っているようだ。ある年の正月二日、彼に今年の抱負は何だと聞くと、一文字、一文字を丁寧に書こうと思います、と答えた。

ぼくはそれを聞き、うなった。そして、それはすばらしい決意だね、とほめた。黒井健にもそれを伝えた。

他愛もないことに思う人もいるかもしれないが、ぼくはいい決意・抱負だなと心から感心した。

*

そして今年、ぼくの決意 **resolution** は「一文字、一文字を丁寧に書くこと」である。健人の真似をしたのである。

考えてみればいつも、急ぐ必要のない時でさえもぼくは、走り書きのような乱暴な文字を書くようになってきているのではないか。

故に、書いた文字に愛着を覚ええない。つまり、残したり、振り返ったりするものに、心がこもっていないのだ。

残してきたものに、振り返るべきものに対する思いはいつも、そして長い間、ぼくを責め続けてきたではないか。いや、そう思い込んでいただけで、実はいつも一目散に逃げてばかりではなかったか。

一文字、一文字を丁寧に書こうと思う。

そうするためには、焦る心を押さえ、静かな心を持たなければならない。対峙するものとまっすぐに向き合うということだ。怯（ひる）むことなく、じっと見据えるということだ。

それはおそらく、今を大切に生きるということの意味するのだらう。

*

正月はいい。誰もが生まれ変わることができる。三日で躰（つまず）き、ああ今年もだめかなどとつぶやいている者もいるかもしれないが、なかに、気にすることはない。一年後にはまた新しい年が必ずやってくる。それまでじっくり力を付けて、来年こそはもっと長く続けられるようにすればいいのだ。

色鉛筆の芯をほぐしながら目に見えないものまでもつかまえようとする黒井健も、じっと、切ないほどに自分を見つめようともがく健人も、ぼくも、愛すべき者たちも、ひとしく新年を迎え、生まれ変わったのだ。

目の前の一文字、一文字を大切に、丁寧に、心を込めて、きれいに書こう。間違ったら、消しゴムで消して、書きなおせばいいのだ。一文字も間違えずに書ける人間なんか一人だっていないのだから。

しかし、書かなければならない。

恐れず書かなければならない。

書こうとしなければならぬ。

一文字から書きださなければならない。文字は、ことばを産み、ことばは愛する人に語りかけ、ことばは立ち尽くす自分に語りかけてくれるのだから。

まずは、一文字書くのである。丁寧に、心を込めて。

外国語を学ぶということ I イメージする力 夢の途中 (20)

毎日のようにBBCのニュースではアフガンに行った英国人兵士の死が報じられ、棺の行進の映像が流れている。遺族の悲しみははかりしれない。愛する者を失った悲しみは、たくさんの涙を流し、大きな声で泣き叫んでも癒されることはない。失った者が再び戻り来ることはないのだから。悲惨なことだ。

けれどもまた、その棺に取りすがる遺族の悲しみに重なるもう一つの慟哭が聞こえる。亡くなった兵士が戦った相手の遺族の泣き叫ぶ声である。つまりは、相手を殺しに行った者が殺されて帰ってきたのだ。その間、相手の何人かを殺しているかもしれないのである。

戦争ということばには、ずいぶん曖昧な、いやらしい狡猾さが潜んでいる。戦争とは、人が人を殺し、人が人に殺されるということだ。それを戦争ということばで表す時、一人ひとりの身近な感覚から遊離した国家間の概念となり、正当化さえ可能となる。人を殺してもよいという理屈が生まれるのだ。けれどもやはり、戦争とは殺し合いなのだ。愚かなことだ。

しかしながら、その愚かなことを指導する者たちはそれぞれの国やグループのとびきりのエリートたちである。優れた知能と知性を持った者たちなのだ、おそらくは。純真な子どもたちが学習し、努力を重ねて獲得することのできたものの一つが命あるものの命を奪いうるという論理なのだ。そのことを正当化するといった知性なのだ。

子どもたちはいったい、何のために学ぶのか。

*

アメリカに誕生した素晴らしい大統領がブラハで核廃絶の演説をした時、人間の未来はまだまだ信じられるぞと思った人たちが大勢いたに違いない。

けれども、ノーベル平和賞の授賞式で、正義のための戦争や平和のための戦争という論理を格好良く演説した彼に、あの広島や長崎に落とされた原子爆弾を平和のための投下と位置付けるアメリカという国の手前勝手な論理を重ね合わせた人も少なくなかったのではないか。

彼はなぜ苦悩を浮かべながら、格好悪く、無様にスピーチをしなかったのだろうかとは私は落胆したのだ。彼が胸をそらして言うアフガンへの数万人の兵士の増派はつまり、相手を殺して来いという命令ではないのか。そしてそのことで本当に、確かに、平和が訪れるというのか。

いやいや、世の中はそう単純なものではないのだよと耳で諭す賢人がいれば、ぼくは言いたい、ならばぼくは愚かしくも単純でありたいと。

今年も戦争が続く。一方では自然のメカニズムが大きく崩れてもいく。ため息がなにも生産することはないと知りつつも、気が付くと大きなため息をついている。

*

ぼくたちが生きている間に会うことのできる人間の数は限られている。この地球に生きている人間の総数と比べてみればごくごくわずかだ。だから、たとえば、アフリカの山奥に暮らす人たちの毎日の暮らしについては何も知らない。知らなくても生きていけるようにも思える。

では、身近に接する者たちについてはよく知っているかといえば、実はほとんど何も知らないのだ。知っていることはその人間のごく一部にすぎない。知ったつもりになって、あの人はいい人だとか、あいつは嫌な奴だとか、彼は優しい人だとか、彼女は冷たい人間だとか、決めつけている。その根拠となるものは、入手したささやかな情報である。交わしたことばや顔の表情、たまたま共にした経験や体験、その他のわずかな事柄をもとにぼくたちは、自分以外の人間を評価・査定している。

好ましいと思っている人間についてはあまり問題ないが、そうではない感情を抱いている者が傍らにいと、毎日が鬱陶しくなる。けれどもその人間について知っていることは、繰り返すが、わずかなのだ。

別の視点で、異なった角度から、違う価値観でその人物を、あるいは現象をとらえると、全く異なった印象や新鮮な発見に出会うことがある。そうすることでぼくたちがもし、好ましくない人物や現象への温かい理解が可能になるとしたら素敵なことではないか。

外国語を学ぶということは、母語では獲得できなかった新しいまなざしを手に入れ、見えないものを豊かにイメージする力を手に入れようとするることなのである。(つづく)

外国語を学ぶということⅡ イメージする力Ⅰ 夢の途中 (21)

日曜日に DVD を見た。15 年前、1995 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災の際の、地元の新聞社・神戸新聞の格闘のドキュメンタリー・ドラマである。

死者 6434 名、行方不明者 3 名、負傷者 43792 名（重傷者 10683 名）等の未曾有の被害を出したこの災害の中で、神戸新聞の記者たちが彼らの使命である新聞発行のために闘う姿にぼくは、あふれる涙を押さえることができなかった。

老いた父親が埋まる現場を離れて社説を書く男、泣きながら、震えながら、詫びながら、被害者にカメラを向けるカメラマン、血を流しながら、自分の家族の安否への心配を胸の奥深いところに呑みこみながら紙面編集に走る男。

それらの者たちの、自分がしなければならないことは何なのか、自分の仕事とは何なのか、人間としての自分と仕事との関係をどう整理すればよいのか、と問う姿にぼくは、深く息を吐いた。

自らを責めながら、罵りながら、疑いながら、呆然と立ち尽くし無力感にさいなまれながら、そういったものと渾身の力を振り絞って闘う姿は、ぼくを激しく打撃した。仕事というものの厳しさや尊さについて目の前に突き付けられた気がして、「ぼくは、ぼくたちは、まだ、仕事と呼べるほどのことは何もしていないではないか」と自分を責めた。

ある記者が言う、「ぼくたちは何もわかつちやいなかった。わかつたふりをしていただけで、被害者の気持ちや思いは何にもわからずに、記事にして報道してきたんだ、今まで」

*

わかる、というが、実は何にもわかってなどいない。

ぼくたちはいつも、ほどほどの理解の中にいる。向き合う人物や現象のごく一部を把握することによって、すべてがわかつたつもりである。

この「濫觴」でも書いたことがあるが、ぼくが「わからない」と思い始めたのは、小学校を卒業し、中学校に入る前の春休みだった。小学校卒業式のあくる日、後頭部を強打し、意識のない状態で入院したぼくは、病院のベッドで「ぼくは一体何なんだ」と考え始める。

いつからぼくはぼくであり、ぼくの命はどこから来たのだろうか。今いるぼくの空間は、宇宙がどうのこうのといってみたとところで、結局のところわからないということではないか。さらに驚くべきことには、ぼくは一度だって自分の顔を生で見たことがないのである。鏡に映る顔はいわばフィクションにすぎない。

そしてぼくは、ぼくのみからしか世界を見ることができない。本当にぼくが死ぬことなんてあるのだろうか。だってもしぼくが死ねば、この世は終わりにになってしまうではないか。

幼いぼくはしかし、狂おしいほどにその「わからない」ということと格闘した。そして今もなお、ぼくには「わからない」のである。

*

2011 年の春から、日本の小学校の 5、6 年生の児童の英語の学習（年間 35 単位時間）が始まる。「外国語活動」の名の下に行われるのだが、「英語を原則」としている。

学習指導要領によれば、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」というのが「目標」である。

今回の外国語活動の新設は中央教育審議会からの答申を踏まえたものであるが、その答申には「人材育成面での国際競争も加速していることから、学校教育において外国語教育を充実することが重要な課題の一つ」とあるように、国際競争力には英語力が欠かせないといった判断が重視されている。この国際競争力とは国際経済競争力を意味し、そこで求められている「人材」とは英語力を用いて国際ビジネスのできる人間のことをいう。

小学校から英語を学ばせたいということの、おそらくこれが本音なのだろう。経済大国日本が他の国の後塵を拝しては耐え難いというのだ。とくにアジアの、中国や韓国などには絶対に負けたくないという思いが感じられる。実際、早期英語教育に関するシンポジウムでは、中国では、韓国では、といったレポートが盛んになされ、このままでは負けてしまうといったことをたびたび耳にする。

そんな時ぼくは、負けたり、勝ったりする学習とはなんだろう、と考え込んでしまうのだ。

そして、そういう位置づけをされた英語という外国語の学習に子どもたちは、どんな豊かさを感じるのだろうか、と心配するのだ。

本当にそういった考え方は小学校の教育の位置づけとして好ましいのだろうか。もっと大切なものが学校というところの教育には位置付けられなければならないのではないかと、思うのだ。（続く）

外国語を学ぶということⅢ イメージする力 夢の途中 (22)

St Paul's School for Girls というのは英国を代表する中等学校である。GCSE や A レベルの成績は常に全国のトップであり、生徒たちの多くはいわゆるオックス・ブリッジ (Oxford University と Cambridge University を合わせていう) に進学する。

ある日、その学校の校長から電話がかかってきた。生徒たちへの日本語教育に取り組みたいので相談に乗ってほしい、というのである。かつて、プリンス (皇太子) が行くので有名な Eton College から依頼された時には多忙を理由に断るといった失態を演じた反省から、協力することにした。

校長の部屋で質素なランチをいただきながらぼくは、なぜ子どもたちに日本語を教えようとするのかと訊いた。「この学校の子どもたちは英国だけでなく、世界のリーダーとして生きていきます。学科だけでなく芸術の面でも、あらゆる点で優れた成績を収めている彼女たちは、しかしながら自分の知識や能力といったものが極めて限られたものであるということを知らなければなりません。異質のものに触れるということは人間のまなぎしを豊かにしていきます」

*

日本の小学校の校長が大変な剣幕で英語教師を派遣する業者に電話をかけてきた。

「これは一体どうなっているんだッ！」

「えッ！」

「なんで、黒人を派遣したんだッ！」

「彼は英国人で、立派な教育を受けており、英語教員の資格も持っていますが……」

「そんなことはどうでもいいから、すぐに白人に替えろッ！」

*

国際人を養成するというのが謳い文句の幼稚園を経営する理事長が、自分の娘が滞在することになったロンドンのホームステイ先が気に入らないと紹介した機関にかみついた。

「英国人の家にしてくれと頼んだらッ！」

「はい、英国人の家ですが……」

「何言ってるんだよ、黒人じゃないかッ！」

「でも、確かに英国人で、素晴らしい英語を話すファミリーですが、……」

「黒人なのに、何言ってるんだよ！ とにかく娘は白人の家に替えろッ！」

*

教育者にしてこうなのだ。国際人養成や英語教育に熱心な教育機関にしてこのありさまなのだ。いち早く英語の教育に取り組んだ小学校の校長にとって、英語という外国語を教えるということはどんな意味があるのだろうか。子どもたちに何を学ばせたいのか。幼稚園の理事長が考える国際人とは何なのか。

ぼくは講演や公開討論の場で繰り返し、この種の危惧を語ってきた。2011 年の春から始まる外国語活動という名の英語教育は油断すると危ない。いつの間にか有名中学の入試科目になってしまい、子どもたちはひたすら単語を覚え、例文を暗唱する。先生がもっとコミュニケーションな英語をと叫んでも、母親が許さない。「何言ってるんですか、入試に必要なことから、まずはやってください。中学校の英語を前倒しでやってもらわないと高校入試が心配です」などと。

いや、英語に限らない。国語も算数も理科も社会も、みんないったい何を目標としているのだろう。

つまりは、なぜ教えるのか、なぜ学ぶのかについて、教育に携わる教師も、親も、教育行政に関わる者たちも、しっかりとした理念など持ち合わせていないのだ。

不真面目だ。

この不真面目さについてぼくたちは、もっと反省しなければならない。教師失格、親失格、役人失格、社会失格なのだ。

*

異質のものを学ぶことによってぼくたちは、知識を超えた、今まで感じたことのない世界の存在をおぼろげながらも識ることになる。それはイメージする力である。

ぼくたちが存在する世界はその自らの存在さえもわからないのだから、すべてを知ろうとしても知りつくすことはできない。それはもう悲しくなるほどにぼくたちは、何も知らない、わからないのである。考えることさえもうやめてしまおうと思ったりもするほどだ。

けれどもなおぼくたちは、知りたいし、わかりたい。たとえば愛する人の喜びや悲しみを、できれば同じように感じたいと思うのだ。そのためには、知っているわずかなことを通してわかってもらう、イメージする力が必要だ。想像力が、とびきり上質の想像力こそが、ぼくたちに見知らぬ国で飢えや病気に苦しむ子どもたちの涙をたしかにわからせようとするのだ。

外国語を学ばせようとするぼくたちはまず、そのことを忘れてはならない。

日本人の論理

日本の首相がまた変わった。毎年新しい首相が誕生する先進国は他にもあるのだろうか。外交は間違いなく希薄なものとなり、日本の国際的な発言力などなくなっていくだろう。

ところで今回の首相や民主党の幹事長の辞任については、よくわからぬことばかりだ。

まず沖縄の基地の問題だ。ぼくが米軍普天間基地に隣接する沖縄国際大学に招かれ、講演をしたのは、この大学に米軍ヘリが落ちた事故の直後で、学長室はプレハブだった。学部長の研究室からは基地の中が手に取るように見えた。こう近接していたのでは確かに危険だと、そう思った。

その基地の移転を旧政権・自民党と米国との間で決められていた名護市辺野古ではなく、沖縄県外へ、できれば国外へ、という鳩山首相の思いは無残な形で挫折した。沖縄県以外のどこも引き受けようとはしなかったからだ。他の県への受け入れ要請が確かな手順で行なわれたかどうかは疑わしいが、発想としてはおかしくはないだろう。仮に日本と云う国の平和と安全が米軍の駐留によって保たれているとするなら、沖縄だけが過重にそれを負担しなければならない論理は成立しない。

もしぼくなら、と子どもじみた仮定をしてみる。もしぼくなら、沖縄以外のすべての地方自治体の首長に対して、何月何日までにそれぞれの住民の意向をまとめさせ、報告させる。基地の受け入れをするかしないかである。

おそらくどこも受け入れようとはしないだろう。であれば、日本国民は米軍を受け入れることを拒否するというのであるから、政府は米国に対して米軍の完全撤退を命じればよい。

そんなことをしたら日本の平和と安全はどうするのだともし言う輩がいたら、ではあなたのところで基地を引き受けなさいと言えよ。自分の身を守るために他者を犠牲にする論理がまかり通ってはならない。

そのために軍隊が必要であると思うのなら、憲法を変えて軍隊を持てばよい。軍隊を持つことに反対なら、軍隊をもたないで国を守る方法をみんなで考えるのだ。あるいは、軍隊をもたないがゆえに他国から攻められたときは、それに耐えることを選択するのだ。

そんなに単純ではないよ、政治は、といういかにも政治等に通じているという者がしたり顔で言うならば、政治家を見なさい、そんなに優れた知性や論理的思考のできる者たちであると自信を持てるかと訊ねたい。

単純でいいのだ。いや単純でなければならないのだ。単純であることを筋を通して守ろうとする勇気が必要なのだ。

ところで、今回の鳩山首相の迷走は確かにみつもなかったのだが、元に戻っただけのことだ。しかし、沖縄の問題や米軍基地の問題、日本の平和と安全が米国の力によって守られていること、その歪み等、いろいろ隠れていたことや隠されていたこと、敢えてみようとしなかったことが表に出てきたことは大いに意味のあることではなかったか。

新聞や雑誌、テレビ等のメディアは今回も事の本質から外れた周辺の面白おかしさだけを報じ、醜悪さを露呈した。

鳩山首相がなんとか沖縄の負担の軽減をと志向したことこそ、もっと見つめる必要があった。

米国のオバマ大統領は米国のために働いているのである。そのオバマに日本の首相が軽くあしらわれたということを楽しめるメディアの愚かしさこそが、気持ち悪いではないか。オバマが言ったチェンジは自分の国・米国のためであり、日本のチェンジなんか関係ないよという姿勢に多少なりとも不快感を持ってよい。

さらに、小沢幹事長に関する報道もよくわからない。彼は検察の繰り返しの捜査、取調べの結果、不起訴になった。犯罪は有罪と無罪のどちらかなのではないか。不起訴と云うことは、裁判にかける必要がないとの判断が下されたということで、有罪、無罪を論ずる必要もないとされ、白と判断されたのだ。しかし、メディアは灰色として報道を続け、世論を操作する。

冤罪について話題になった際、警察や検察の攻撃をしたメディアは、その人が逮捕された時にはいったいどのような報道をしたか。掌を返したように冤罪報道に走るメディアのいやらしさを忘れてはならない。

小沢幹事長が実際はどうであるのかは分からない。しかし、黒でないと結論付けられたものを灰色としてメディアが裁くというのは恐ろしい社会を生み出すことにはならないか。

勝手に、証拠もなく、ある人間を突然、恣意的に、時に特別の意図を持って、社会的に葬り去ることができるのだ。

ぼくは鳩山氏にも小沢氏にも、民主にも自民にも与しないが、論理を軽んずる社会は恐怖である。情報を狡猾に操作し、販売しているメディアによって、国民は弄ばれているのではないか。

まだまだ 夢の途中 (23)

恐ろしいほどの大酒飲みであったぼくは最近、もうそんなにたくさんの酒を飲みたいとは思わなくなった。

かつてのぼくは、宴会のはしごの後、足を向けたバーでウイスキーのボトルを一本空にして、それから別の店へとさらに夜の街を彷徨い歩いた。

来客があれば、ビールをたっぷり飲んだ後に、一升瓶二本の日本酒を相手と二人で一本ずつ飲み干した。客は間違いなく酔いつぶれた。

近くに小さな焼鳥屋が開店したと聞き、仲間3人でその店のビールがなくなるまで飲み続け、店の亭主を驚かせた。

休みの日は朝からワインを空け、昼と夜はそれぞれ別の酒を味わった。

さすがに体の調子がおかしくなり、病院に行くと医者はいこう言った。「どうせ酒を止めるなんてことはできないだろうから、もっと弱い酒を飲んだ方がいい」と。

しかし、酔わなかった。飲むことはなんだか一種のスポーツみたいなもので、飲んでいたからよく覚えていない、などと言い訳をいうことは一度もなかった。

けれども、どうやらアル中でもないようだ。ためしにひと月、一滴のアルコールも飲まないことに挑戦したら、苦もなくてできた。

けれども、今ぼくは、そのような、浴びるような酒の飲み方をしたいとは思わない。

できれば、ゆったりと、静かに、夜の闇の音を聞きながら、味わいたいと思う。

歳をとったせいだろうか。

*

かつてのぼくには、ある種の怒りが巣食っていた。何に対してというより、すべてに対する怒りである。すべてに対する怒りとはつまり、自分に対する怒りという意味になる。

ぼくはぼくの存在の意味がわからなかった。何のためにぼくがいるのかといったことではなく、ぼくとはどういった存在なのかかわからないということで、この「濫觴」にもたびたびそのことについて書いた。

ぼくはどこから来て、どこに存在し、これからどこへ行くのかといったことがまったくわからないのだ。

ぼくは神が創った、よくわからない装置や数式に放り込まれる一つの変数に他ならないと思うのだ。（「変数 χ の孤独」濫觴 120）

にもかかわらず、どうして安穩と生きることができようか。（意識）というものから逃れることができないまま（生きる）ということの苦悩は、実にわかりやすく単純で、残酷な一つの回答を突き付けてくる。逃れようと本当に思うのなら、その〈意識〉を抹殺すればよいのだ。

目の前にそびえるピカソの絵画も、モディリアーニのスカルプチャーも、朔太郎の詩も、ショパンの旋律も、八百屋のおばさんのやや下品な笑い声も、サンドイッチ屋のかわいい女の子の澄ました顔も、わずかばかりの知識で胸を反らせる学者の愚かしさも、その頃のぼくにはすべて苦悩から逃れるための悲痛なうめき声に聞こえていたのだ。

ぼくは耳をそば立てて、彼らのうめきを聞き続けた。それらを言葉に写し取り、一つずつまとまりをつけ、名前をつけて詩という形で放りだした。

朔太郎は猫の泣き声を「おわあ」と、「おわああ」と、「おぎゃあ」と書いたが、朔太郎自身はもちろん、そうは聞いていない。

彼は怒りとともに猫にそのような鳴き声を与え、見捨てるのだ。表現は表現する者に、絶望感を与え、より深い孤独感を突き付ける。

けれども詩人は書こうとする。谷川俊太郎が数年前、ロンドンにやってきたとき、「もうぼくは詩は書かない。書くものがなくなったから」と言ったが、書くものがなくなったのではなく、彼には詩が書けなくなっただけのことなのだ。彼は今、朝日新聞に毎月作品を載せているが、たしかにもはや詩とは言えない。耳を澄ませてもうめき声などまったく聞こえない。

*

歳をとったせいだろうか。

いや違うのだ。

ぼくはもっと耳を澄まして聞きたいと思うのだ。逃れられないぼくの〈意識〉がとらえようとするものをもっと深く、もっと丁寧に、じっと見つめようと思うのだ。ぼくが愛する者をじっと見つめることでおそらく、ぼくはぼくを発見することができるだろう。

ぼくの心臓や胃や腸、あるいは肺や肝臓が反応し、耳が、目がとらえようとするものを見つめ、聞くとき、ぼくは変数 χ の孤独の数式に抗うことができるのだ。

ぼくはまだまだ、闘おうと思うのだ。

夏の終わりに 夢の途中 (24)

夏はもう、逝ったようだ。空を見上げると上品な青がさわやかに、うっすらと刷毛で掃かれている。風が心地よい冷たさで、頬を撫でる。

ああ、今年の夏もまた明らかに筋肉が瘠せた。たくましい青空に対峙することのできる筋肉はもう随分前に失せて、木陰で静かに、さまざまな書物の世界に遊ぶのがせいぜいである。

けれども、明日を忘れたのではない。明日を忘れようとしているのではない。ぼくはまだ、夢の途中を歩いているのだから。

休日の午後、庭の芝においた椅子に腰かけながらいろいろな想いに耽っていると、突然立ち上がってしまいそうな、そんな激しい思いに襲われることもあるのだ。

足もとまで来ていた栗鼠が驚いて、傍らの樹木にかけのぼっていく。

*

詩人の辻井喬が書いている。

記憶が
花になる人は幸福だ
過ぎた時間が
無数の犬になって
俺を責める
死者の枕辺に
立ち騒ぐ波のよう — 「犬」 『不確かな朝』

詩人とは何と哀しい、哀れな姿を晒す生き物であることか。それはどうしようもない程の露出狂であり、ゆえに、隠れようとして、もっと深く、もっともっと深く、自らの奥へと分け入っていくしかないのだ。

車にはねられた犬の死体を
仲間の犬が喰っていた
陽炎の立つ道で
そいつの眼には
街路樹の緑が綺麗で
何だか俺を責めているようだった — 同

*

ことばを仕事にしているが、ことばへの不信というか、ことばの貧しさというか、そういったものが鼻につくことがたびたびで、世界中のことばをミュートしてしまいたくなることがある。わずかな力を、それがすべてでもあるかのように取り扱う、そういったふるまいが我慢ならないのだ。

ことばなんてたかが知れているのだ。

辻井は強かだ、だから自分の生み出したことばに恐れおののく自分を表現できるが、ほとんどの人間は、たとえば、<愛している>と云えば、確かな何かがそこに生まれ、それで事足りるといったふうを装っている。

うん、そうなのだ。最初は装っており、ほんの少し時間が経つと、その装いを捨て、いや忘れてしまい、そのことばが産み出した貧弱な<愛>の世界に浸ることができるようになる。

たとえば、知的であると思われる学者や研究者たちの頭の中は、他の者に負けたくないとか、できるだけ多くの者に尊敬されたいとか、そのための肩書や権威といったものがほしいとか、そういった実にわかりやすい、おどおどした思いで満たされている。

おそらく彼らはほどほどに知的であるのだから、自分の力が実は大したことではないということに気付いており、しかしながらそのことをできる限りカムフラージュしなければ恐ろしくて夜も眠れなくなってしまうのだ。

知的であるかないかなんて実は大したことではないのである。

*

ぼくがぼくであるかどうかなどどうでもいいことではないか。

背を倒した椅子に横たわりながらぼくは、うつらうつらと微睡む。ん、何だかこの風景には既視感を覚える。

堂々巡りをする思いの中でもがいている男がいて、どこかでその男を見たことがあるのだ。その男についてかなりのことを知りながら、どうしてもすべてを知ることができないもどかしさでいつも、まあ、いいさとあきらめてしまうのだが、いや、やめよう。その男の正体は最初からわかっているのであり、ゆえにいつまでたってもわからないのだから。

ぼくがぼくであるとは何だろう。

夏が死に、秋が生まれる。歩き続けなければならないぼくは、足下からぼくのからだの上によじ登ってきた栗鼠を驚かさなだけのわずかな優しさでもう少し、夏と秋のはざまの空気を吸うのである。

それでいい 夢の途中 (25)

夢から覚めたぼくは、ベッドに横たわったまま天井を見つめる。夢を反芻しながら、ふうと息を吐く。

*

夢の中でぼくは、黙々と拭き掃除をしている。山深い田舎の小さな木造校舎の教室の床に四つん這いになったぼくは、硬くしぼった雑巾で行ったり来たりしながら拭いている。床も壁も木でできているその教室にはせいぜい 20 人が座れる椅子と机しかない。その椅子も机も全部木製で、相当使い込んだ古いものだ。その机もぼくは丁寧に雑巾で拭くのだ。机の表面には彫刻刀で彫ったと思われるさまざまないたずらが描かれ、消しゴムのカスとその溝にたまっている。折れた鉛筆の芯もある。

早朝だ。まだ完全には陽は昇り切っていない。

誰もいない。鳥が鳴いている。

ぼくはきっとその学校の先生なのだ。

ゴシゴシとぼくは、力を込めて拭き掃除をしている。腕の筋肉がよみがえったのか、机の汚れがみるみる落ちてゆく。子どもたちが登校する前に、すべての机を磨きあげておこう、ぼくはそう思っている。窓ガラスの木枠も、出入り口の木製のスライド式のドアも、バケツの水を何度も代えながら洗った雑巾できれいに磨き上げる。ひたすらぼくは拭き掃除をしている。

ぼくは笑っている。楽しくてしようがない、そういった表情だ。

気がつく、父が立っている。いつものように威厳のある顔つきで、「それでいい」と一言つぶやく。母がいる。父の言葉に柔らかな笑顔で肯く。

ぼくはポケットから柔らかいタオル地のハンカチを取り出して、額の汗をぬぐう。

*

研究所に向かう電車の中でぼくは、夢について考えている。朝、目覚めたぼくの頬には伝う涙があり、ぼくは戸惑いを覚えたのだ。

実際には一度も経験したことのないその風景はしかし、懐かしく、温かかった。

父も母も教育者であり、幼い頃、ぼくの家には大勢の青年教師たちが毎日のようにやって来ていた。彼らは大酒を飲み、大きな声で歌を歌い、激しく教育論をたたかわせた。先生とはかくもすごい人たちなのかとぼくは、幼心に憧れを持った。

ぼくは大人になり、教育一筋に 30 年以上を生きてきた。教育の世界にさまざまな表情があるのをぼくは知った。その中にはどうしてもどうしても受け入れることができないものもあった。

教育にもいろいろあり、教師にもいろいろいるのだ。

ぼくが今、「いろいろ」と書くのは、「こんなもの、教育なんかじゃない」、「こんなやつ、先生と呼ばれるべき人間じゃない」と、そういった怒りを覚えることが時にあったからである。

自らの名誉や欲のために教育という世界を弄ぶ政治家や役人、その者たちにこびへつらう役人もどきや卑しい教育関係者たち、貧しい教育理念しか持たないにもかかわらず、メディアに注目されもてはやされることのみ大切にしようとする似非学者や教師たち、それらの教師たちをおなかの中で馬鹿にしながらか商品化して儲けようとするメディアの連中、それらに面白いほど踊らされる愚かな母親たち、陰で愚痴を言うしかない情けない父親たち。

学ぶ立場の者たちにもいろいろいる。

努力なんか一度だってしたことないくせに、「努力なんかして何になるんだよ」と格好つける、気持ち悪い程腑抜けた青少年たち。努力ということばの意味も知らないくせして、「懸命に努力したんだから認めてくれてもいいではないか」と甘える青年。「褒めてくれないとやる気が出ないじゃないか」と大きな勘違いをしている若者。「いろいろな生き方があるじゃないか」などと、生きてるとも言えない生活をしながら居直る者たち。個性ということばを盾にしながら、わがまま以外に何一つ個性らしきものを持っていない者たち。わずかばかりの知識を身につけただけで自分より知識のなさそうな者を必死で見つけて偉そうにふるまう愚か者。自分のものではない権威を身に纏おうと権威の傘の中に入ろうと走り回る小さき者。

怠惰と諦めと狡猾さと裏切りと、そういったものに支配されている社会とその社会に翻弄される教育、ぼくはそういったものに少し疲れていた。

教育とはどんな意味を持つのだろう。

*

雑巾がけを終えたぼくは、しんと静まり返った教室の窓際の椅子に腰かけて、朝の冷気に姿勢を正す校庭を眺める。教育はきっと、こういう静けさの中で、一冊の書物や白いノートの一ページを開くことで、明日の幸せを見つめることで始まる、ささやかな行いであり、それ以上のものであってはならないのだ。

S 氏からのメール 夢の途中 (26)

「親友が永眠」というメールが届く。つい 1 週間前、日本出張からロンドンに戻るぼくを、成田空港まで見送ってくれた S 氏からのメールである。

*

「札幌に住む私の高校の親友が函師先生が帰英した翌日に永眠し、11月2日に福岡にて供養するというので、今日昼の便で福岡に来ており、空港から博多駅に来て、駅ビルの焼きそば屋で焼酎を飲みながら函師さんにメールしてます。メールしたくなりました。センチメンタルジジイですかね。寂しかですよ、そんな時函師先生に何かを伝えたいっちゃうのは、何か不思議な思いがしてます。函師先生も無理するなよ、頼むよ、友は欠けたら駄目だよ。生きててなんぼとちゃうか？体に気をつけてよ。」(2010年11月1日受信。原文のまま)

*

ぼくより 2 歳年上の S 氏は福岡の出身で、彼の高校時代の親友が癌におかされ、危ないという話は以前から聞いていた。そうか、とうとう亡くなられたか、と思う。ぼくはその人に会ったことはないが、S 氏と酒を酌み交わす時、S 氏が彼を案じているのを繰り返し聞いた。「辛いよ、しんどいよ、参ったよ」と彼は何度も口にした。かけがえのない親友が逝く日が遠くないことを彼は恐れていた。

S 氏は情が厚く、まるで「フーテンの寅さん」のような男である。他人の世話ばかり焼きながら、気が付くとポツンと一人取り残されているような、そんな寂しさも漂わせている。

親友の遺影を前にして S 氏は、顔をくしゃくしゃにして、あたりかまわず泣くんだろなあ、と思う。明日のことなんかどうでもいいや、と親友への思いに浸ってしまうんだろなあ、と思う。

会いに行く前に彼は、酒を飲んでいて。一人で焼きそばを食べながら焼酎を飲む姿は、あまりに寂しいではないか。

だって素面で会えるはずないじゃないか、とぼくがそこにいれば絡むことだろう。ぼくも親友が急逝した際、何年も遺影の前に立つことができなかった、そういう思い出がある。

*

滞日中にぼくは S 氏に電話をかけた。留守であったが、彼の一人娘の「さくら」(本名)と話することができた。幼かったさくらは、早いものでもう高校3年生になったという。

「さくらのお父さんはいつもさくらのことばかり考えているんだぞ。さくらに幸せになってもらいたいといつも言っているんだぞ。わかるか、さくら。お父さんを大切にしろよ」

余計なお世話だとはわかっているが、ついいつもこういったことを云ってしまう。ぼくが云わないといけないような気がするのである。S 氏は立派なんだぞ、と大きな声で云いたいのである。そんなことはきっと、十分にわかっていることなのだ、さくらにも。やはり、余計なことだ。

*

S 氏の奥さんがつい先日、癌の手術を受けた。日頃は奥さんに対して強がっていた S 氏も、完全に参っていた。

「冗談じゃないよ、俺じゃなくてあいつがこんな病気になるなんて、冗談じゃないよ、ほんとに」

独り言のように彼は何度もそうつぶやいた。

手術の状況や術後の経過について知らせてくれた S 氏は、その成功に安堵し、「心配なんかしちゃあいなかったよ、ちっとも」と強がった。周りの者にはそのいじらしさが見え見えだった。

*

心細やかな人間がささやかなことに喜んだり、悲しがったり、ため息をついたり、怒ったり、そういう息遣いがぼくには今、とてもいとおしい。

生きるということの恐ろしい程の孤独感はどうにも思考を巡らせてみても、結局のところそこから逃げだす術は見つからない。ぼくたちの背負った寂しさは消そうとしても消し去ることのできないものであり、もがけばもがくほど手足の自由が奪われていく。

ならば、ぼくたちはどういったものに笑おうか。どういったものに歓喜しようか。生きる喜びをどこに求めようか。

それはおそらく、一人一人の掌(てのひら)の上にある。踏みしめるわずかばかりの大地にあり、息が届く距離に佇む人たちと共にある。

愚かな名声や富を求めず、今自分が求めようとするものの価値を繰り返し繰り返し問い直しながら、ひたすら丁寧に、抱きしめようとしていかねばならない。

S 氏のメールはぼくに、彼の食べる焼きそばの香ばしい醤油のにおいや、アルコール臭の強い芋焼酎のにおいをさえ感じさせながら、体に気を付けてということばと共に、いいか、間違えるなよ、じっと見据えるんだぞ、じっとじっと大切なものを見据えながら生きて行くんだぞ、そのあたりに転がっている偽物に騙されてはならないぞと語りかけてくるのだ。

灰色・考 夢の途中 (27)

日本からやってきた大学教授と数時間の論争をした。せつかくの楽しいはずの会食の場を議論の場に変え、そしておそらく、疲れていたはずの彼をさらに疲れさせることになったのではと申し訳ない思いである。

*

小沢（一郎・元民主党代表）の問題が発端だった。この件についてぼくは詳しくはないが、なぜ不起訴になった者があたかも犯罪者のように報道され続けるのか、とぼくは訊いた。

それは現時点では黒ではなくても限りなく黒に近い灰色だからだ、と彼は言った。

「では、だれが灰色だと決めているのですか。だいたい灰色の意味がぼくにはよくわからないのですが」

「みんながそう思っているということですよ」

「〈みんな〉というのは誰ですか」

「ぼくの友だちもそう思っているし、……」

「先生のお友だちが、〈みんな〉ということですか」

「いや、社会のみんなが、メディアも」

「ということは、テレビや新聞などが〈みんな〉ですか。ぼくはそのあたりがよくわからないんです。検察が何度も徹底的に調べた結果、起訴できなかったことを、でも怪しい、灰色だという裁き方は危険ではないでしょうか。ぼくはメディアを信用してはいないんです。起訴できなかったということは、裁判すらする必要はないということですから、有罪、無罪を論ずる以前のことで。その段階で、でも本当は黒ではないか、だから灰色だ、という考え方は随分乱暴な、論理ともいえないものに思えるのですが」

「だから、裁判で白黒をつければいいのではないかとということです」

「でも、それはおかしい。起訴するに足る十分な証拠がないにもかかわらず、とにかく裁判してみましよう、というのは法治国家の基本的論理を揺らがすものであるとぼくは思います」

「でも、いろいろとおかしい点があるわけで、それを裁判で公にしてといった考え方で」

「しかしながら、その怪しい点というのも誰が怪しいというのですか。〈みんな〉が言っている、思っているという、その〈みんな〉の正体がぼくにはどうも気になるんです」

「では灰色ということはないというのですか」

「犯罪に灰色はないと思います。白か黒かしかないのです」

「でも、立証はできなくても悪いことをしている者はいるんじゃないですか」

「でも立証できないのに、どうして悪いことをしているといえるのですか」

「法が裁かないから、法の網目をかいくぐって悪いことをしてもいいというのとはおかしいと思いますが」

「悪いことをしてもいいと言っているのではなくて、もしおっしゃるように法の網目をかいくぐって悪いことができる状況であれば、法を改定すべきことであって、法を超えて何者かが、つまりよくわからない存在である〈みんな〉が裁くという形はやはりぼくは間違っていると思いますし、危険だと思います」

「危険だというのはどういう意味ですか」

「たとえばメディアを押さえておけば、法を超えて、いかなる者も思想も悪とすることができるということです」

「そのために裁判があるのです」

「いや、その裁判が行われる、つまり起訴されること自体が実際には既に裁かれていることになりませんか。ぼくは小沢が悪いことをしているかどうかといったことは知りません。おそらくほとんどの人が実は知らない。メディアがこんな怪しいことがあるぞと報道したことで、怪しいと思っている。知ったつもりでいる。本当にそれが起訴するに足るのであるならば起訴されるだろうし、そうでなければ起訴されない。現時点で起訴されていないということは立証できないということです」

「でも、法が絶対ではないから」

「ぼくもそう思います。法は絶対ではない。しかし、ならば人を裁くのには何をもってするかということです。ぼくたちは灰色の意味を問う必要があります。さもないと、たとえば先生を社会的に抹殺しようとすればいとも簡単にできることになります。先生はどうも怪しい、疑わしいと喧伝するだけで社会的に裁かれてしまいます。あるいは、宗教も、さらには国と国の関係であっても。そういうことから戦争も度々起きたのではないのでしょうか。日本の大新聞は戦争のときにはすべて、戦争を支持したのです。後になってその時は仕方なかったといっても、その報道によって多くの国民は動かされたのです。死んだのです。最近も繰り返される冤罪に見られるようにメディアというものにはそういった恐ろしさがあります。灰色という言葉の響きには人間の持っている情念的なものも含まれるようにぼくは思います。つまり、いやな奴は消し去ってしまおうという、論理を無視した恣意性です。メディアが操作するのです」

曖昧なものは曖昧なものとして位置付けるのがいいだろう。曖昧なものを曖昧でないもののように取り扱い始めると、権力や財力などを持っている者が、その者にとって都合のよい身勝手な社会を形成することになる。すでに、そうやってはいまいか。

新しい年、助走。 夢の途中 (28)

年が改まった 4 日にぼくは書き初めをした。年の初めに墨を磨り、大きな筆で文字を書くのは子どものころからの習慣である。その年の抱負を文字にするのだが、今年は「育」と書いた。

研究所は 1989 年に設立され、今年で丸 22 年が経った。瞬間に時は過ぎたが、その間さまざまな方や機関の助力を得て、何とか今日まで活動を続けることができた。日本経済新聞や毎日新聞、英国の新聞や英国 BBC 放送などが取り上げてくれたり、英国の大臣がコンファレンスにおけるスピーチで研究所の活動を評価してくれたり、ヴァージン航空などを擁するヴァージングループ代表のリチャード・ブランソン卿がさまざまな形で支えてくれたりした。英国に駐在する日本大使や日本から戻ったばかりの英国大使等も温かく支えてくれた。

とはいえ、いわば荒地を耕し、種を蒔き、水や肥料を与えるといった開拓民に類する労力は、ささやかなものではなかった。そして今、ようやく若芽が萌え出ようとしている。

か弱く芽を出したそれらを見つめながらぼくは、その頼りない命を育てるためにこれから、どれだけ多くの時間と労力があることだろうと武者震いする。

深く、広く根を張る確かな樹木として育てたいと思うのだ。華やかな花を咲かせる必要はない。太い幹と豊かな緑葉を持つ樹木でありたい。芽を出した生命を丁寧に、心を込めて育てたいと思う。

*

書き初めをしたあくる日、井上康生と飲んだ。シドニーオリンピックの柔道の 100 キロ超級で金メダルに輝いた彼はぼくとほぼ同じくらいの身長で、しかしぼくより 20 キロ以上も重い。

飲みながらぼくは、彼に話した。

「サッカーのカズという選手がいるが、彼はいわゆるスーパースターだったけれどもワールドカップの代表チームの選手選考に漏れる。もはや下り坂だったということだけれども、カズはそのショックから立ち直り、サッカーを続ける。たとえ 2 軍選手のような取り扱いをされても、彼は現役を続けようとする。

彼は言う、ぼくはもはや若い選手のような華やかなプレイはできない、速く走れない、しかしぼくは、サッカーがもっとうまくなれる、ぼくの知らないぼくを見つけたい、と。

プロ野球の投手に工藤という選手がいる。西武や巨人等を転々とし、優勝請負人といわれるほどの活躍をする。どうやら現役最年長であるらしい。彼もまたスーパースターであったが、来期は所属するチームがない。つまり、浪人中だ。けれども彼はあくまで現役にこだわる。

ぼくはもうかつてのような速い球は投げられない。けれども、ぼくは打者の心理を読むことができる、前よりもずっと。コントロールも磨くことができる。ぼくはまだまだ野球がうまくなれると信じている、と。

この二人に共通する、そう、なんといいたらよいか、信じるものに殉死さえいとわぬような熱い思いにぼくは心打たれた」

ぼくは、康生に訊いた。

「ところで、井上康生さんにとっての柔道はどんなものなのだろうか。カズや工藤の場合と違い、柔道は格闘技だ。一対一で闘う競技だから、同じ思いで打ち込むことはできないのではないかな。

中国のオリンピックの代表選手の選考のための予選で負けた時、その瞬間、畳の上でどんな思いだったか。

世界の頂点に立った君は、これから何を指そうというのか。

まだまだ若い青年である君にとっての人生は、これからどういう形をとるのか」

彼は何杯目かの芋焼酎のロックを飲みながら言った。

「ぼくの、勝つための柔道は終わった。けれども、ぼくはまだまだ未熟です。オリンピックで金メダルを取った直後も、ぼくは父親から厳しく叱られたことがあります。調子に乗るな、お前はまだ未熟だ、と。ぼくはもっともっと、柔道を極めたい。柔道の<道>を極めて、そして後に続く者を育てたい。教育をしたいのです。

そして、柔道を通して、世界の平和に貢献したいと思っています。ぼくは、それができると信じています」

*

日本に一昨日、着いた。3 週間の出張である。さっそく昨夜は女優の竹下景子や写真家の関口照生が歓迎の宴席を設けてくれた。近々ハリウッド映画でデビューする青年も一緒だ。それぞれが近況について語る。おいしいワインと洗練された料理をいただきながらぼくは、静かに深呼吸をする。新年を迎え、昨年と比べてみる。ぼくは変わったか、成長しているか。軽いジョークに興じながら、自分の笑い声がいつもよりも大きいことに気付く。そのことが、ホテルに戻るタクシーの中で妙に気になる。もう一度深く、息を吐く。

ロンドンを発つ前の日、25 歳の娘と話す。彼女の仕事上のストレスを聞いてやる。そうか、いろいろと大変だな、と思う。パパもスタッフに大変な苦勞をかけているんだよ、それが辛くてね、と話すと、「パパはいい人だから、大丈夫だよ」と言ってくれる。こぼれそうな涙をごまかしながら、生意気言うな、と娘の額を人差し指で押す。

新しい年である。

もう一度、始めよう。ぼくという人間を探す旅の、夢の途中なのだ、まだ。まだまだだ。

特別な料理 夢の途中 (29)

目覚めたぼくは、今どこにいるのだろうかと不安になる。あたりを見回して、ようやく日本に行く飛行機の中なのだ、と気付く。

最近、こういうことが増えた。何をするにも緊張感が失せてしまっている。そのためか、よく忘れ物をする。泊まったホテルにはたびたび物を置き忘れ、あとで送ってもらうこともしばしばである。忘れたことも忘れてしまって、数ヵ月後に同じホテルにチェックインした際に、「お預かりしておりました」とその忘れた物が差し出されることもある。

緊張感が失せている、と今ぼくは書いたが、それは心がそれらの物事にしっかり向き合っていないということで、つまりは感動とは程遠い日常がぼくを包み込んでいるということだ。

刺激のない毎日というのではない。さまざまな人たちと会い、語り合い、お酒を飲み、食事をする。それらの人たちの中には社会的に有名な人たちも数多くいる。周りの人たちが振り向くようなそういう人たちと一緒にいても、少しも緊張したりはしない。

ぼくが求めているものと少しだけずれが生じているのかもしれない。

*

では、ぼくが求めているものとはなんだろう。

たとえば、正月だ。もうすぐ正月がやってくるという年末、ぼくは興奮した。まったく新しい一年が始まる、と少年のぼくは緊張したのだ。

たとえば、新学期だ。新しい教科書の匂い、同級生の顔が新鮮で、新しい先生の鼻の動きまでじっと見つめた。

いや、新しいものだけではない。

深夜、自衛隊の問題や環境破壊について父親と討論する高校生のころのぼくは、なんだかうんと背伸びをしているようで、しかもそれを父親が認めてくれているようで、うれしかった。

母親の手作りのマヨネーズや餃子や、あるいはあんみつはぼくをそのたびに歓喜させた。母親が編んでくれたセーターやカーディガンはたまらなく暖かかった。

将来の夢を語る兄の静かな言葉に感動した。「そんなこと言ったって」と繰り返す子どものぼくに、三歳上の兄は怒ることもなく静かに繰り返す自分の思いを語った。

近くの川に向かって石を投げ続けたぼくは、投げた石が大きな岩にぶつかって割れるとき、泣きそうな顔でそれを見つめた。

どの思い出も全て、ぼくには特別なのだ。

*

ぼくは特別な、なにものかがほしい。

たとえばぼくのために心をこめて作られた特別な料理。それはおそらくたくさんの時間を要するであろう。ぼくはそれが出来上がるのを空腹を我慢して待たなければならない。贅沢である必要はまったくない。見かけが悪くたってかまわない。ミシュランの星のついたレストランでは絶対に食べることのできない特別な料理が食べたい。

たとえば、とびきりの授業がしたい。徹底的に準備をして、学生の動きを完璧なほどに予測し、計算しつくした、特別な授業がしたい。

たとえば、旅だ。行き当たりばつりの無計画な旅がしたい。ホテルなど予約しないで、多少困ったりする旅である。心奪われる風景に出会ったら何日もそこに逗留する、そういった特別な旅である。

たとえば、特別な人に会いたい。

*

ぼくたちは朝起きて、食べて、働いて、時に少し遊んで、夜になると眠る。歩いたり、走ったり、笑ったり、悲しくなったり、そういうことを繰り返しながらぼくたちは、次第に同じ朝を迎えるようになる。同じ道を歩き、同じ乗り物に乗って、同じ駅で降りて、同じことにため息をつき、同じことに喜び、同じことに少しだけ怒ったりする。

愛するとはこういうことだとずっと昔からみんなが信じている形に肯きながら、同じ高揚や諦めを経験する。

繰り返される日常の中で人間が選択して歩いていこうとする先には不思議な定型が待っている。慣れるということはおそらく安心できるもので、自分がどこにいるかさえ時に忘れてしまったりするほどだ。

けれどもぼくは、地下鉄に貼られた詩人の詩に出会うとき、幼子が必死に母親の乳房に吸い付き、母親の命さえも吸い取ってしまうおもうとするのを見るとき、ホームレスの少年が街角に座り込みはるかな天空を鋭いまなざしで睨みつけるのに出くわしたとき、嫉妬するのだ。

惰性に流された眠りは、ぼくをむしろ眠らせぬように向こう岸に引き戻そうとする。日常が鬱陶しいのではない。日常に不必要に微笑もうとする自分がたまらなく哀しいのだ。

*

特別な料理が食べたい。ぼくのためだけに心をこめて作られた料理が食べたい。それはごくごく普通の皿に盛られた、ごくごく普通の名前を持ったものでなければならない。普通でないものがしばらくするとだらしなく変化し、いわゆる普通になるのは耐え難い。普通が時とともに魅力的に変化していくのでなければならない。特別な普通、普通の特別がぼくは今、恋しいのだ。

ずっと神はそこにいた 夢の途中 (30)

あの日から不思議な感覚に襲われている。けれども実は、ずっと前からその感覚はぼくを包み込んでいたのであり、あの日の衝撃がそれを確かなものにしただけなのかもしれない。

おびただしい生命が圧倒的な、有無を言わせぬ力で呑み込まれていった。その映像はテレビのスイッチを切ることで一旦消すことはできるが、閉じたまぶたをこじ開けて、許すことなく侵入してくるのだ。

「3・11」は地震であり、津波であり、原発であったが、もっと異質の、得体の知れない恐怖をぼくに感じさせている。

*

シンガー・ソング・ライターの長渕剛が今回の震災について書いたという散文詩「復興」を読む。彼は、「自然が憎い」「海が憎い」「地球よ 貴様が狂っている」と書く。詩作品というよりも肉声そのものであり、叫びであるが、確かにあの映像はまず、どのような発声も許さぬ完璧な沈黙を、次いで深い悲しみを、そして激しい怒りを抱かせた。

なぜあの人たちがあのような形で死ななければならなかったのか、という怒りである。もし、神というものがいるとするならば、なぜあのような仕打ちを彼らにするのかといった怒りである。

ぼくはかつてローマ教皇の住む宮殿・ヴァチカン Vatican を訪れたとき、激しい怒りを覚えた。このとてつもない絢爛豪華さは何だ、このひとかけらで飢えや病気に苦しむ子供たちのいったいどれだけの者たちが救えるだろう、とその建物の豪華さや陳列されている宝石等を見て思ったのだ。神に最も近いとされる者に、それは見えていないのかと憤ったのだ。

日常の生活においても、善良なる生活者が虐げられ、搾取する者が支配する。神は何を見ているのか、とぼくは怒り続けた。神など存在しない、その神に祈るなど愚かなことだ、偽善であり、気持ちの悪い戯れだ、そう思っていたのだ。だが、ぼくは今、それらの怒りとは異なった不思議なもの向き合っている。

*

ぼくの前に今、神がいる。

神はずっと前からそこにいた。微笑むことも、怒ることも、嘆くことも、許すことも、創ることも、壊すことも、神は一切何もしないで、ただじっとそこにいた。

ヒトはその沈黙に耐え切れずに、動き始める。立ち、座り、歩き、走り、泳ぎ、飛び、転び、起き、笑い、泣き、悲しみ、憂い、喜び、憎み、励まし、だまし、裏切り、信じ、そうやってヒトは、<生きる>ということ<定義>しようとし始めた。

ヒトは群れることでその<定義>を正当化しようとしていく。数多くの同調者がいればそれは正義であり、少数の者を異端視する。

<生きる>とは<定義>されて初めて意味を持ち、ヒトは<生命>さえも<定義>していこうとする。もともとヒトにとっては、<生命>の意味を<定義>することと、たとえば<走る>ということ<定義>することとに大きな違いはなかったのだろう。

そしてヒトは、<神>を創る。<神>が万物を創造したのではなく、ヒトが<神>を産んだのである。どうしても<神>が必要だったのである。なぜなら、いろいろな<定義>にはところどころに矛盾が生じ、わからないことが出てきたからである。

むろん、<神>を<定義>しようとするそのことこそが不遜であり、あるいは滑稽であった。

いや、つまりは、もともとその他の一つ一つの<定義>にもなにも意味がなかったのだ。あるとすれば、<戯れ>としてのそれであり、<諦め>としてのそれであった。

優れた者と劣った者、美しいものと醜いもの、富める者と貧しい者、大きなものと小さいもの、前に進むことと後ろにさがること、痛みと快感、呑み込むことと吐き出すこと、などなど、それらはすべて他愛もない<戯れ>が産み出す<諦め>にすぎない。

にもかかわらず、愉快なことにヒトは、その意味を持たぬものを大切にあげめ、囚われ、時に泣き、笑うのだ。

*

ぼくたちは、あらかじめ設定された<関数>に投げ込まれる<変数>にすぎない。すべての生き物はその<関数>の設定に従って<解答>へと導かれる。にもかかわらず、<自分>という存在については異なった存在であるかのような錯覚に陥る。

<自分>の周りの<他なる存在>はすべて、<変数>の一つに過ぎないのだが、<自分>だけは異なった存在であるかのように思いたいのだ。

ならば、その<自分>をどう<定義>することができるのだろうか。

*

神はずっと前からそこにいた。

幼い子を、母を、年老いた女を、たくましい父を、理知的な教師を、赤銅色に肌を焼いた漁師を、妊婦を、犬を、そういったすべての愛すべきものたちを瞬にして海が呑み込んでいこうとするとき、神はそれでも、静かに、そこにいた。

少なくとも、そこにいたのは、ヒトという生き物が刹那の快樂のために勝手に創り上げた神ではなく、ぼくたちがもっと謙虚に、あるいは素直に向き合えば、見えてはこない神が、そこにはいたのである。

ぼくは今、その神を前にして震えている。

雨の声 夢の途中 (31)

着陸態勢に入っていた飛行機が突然、高度を上げた。俯（うつむ）いていたのを無理やり仰向けにされたように。機長からのアナウンスが流れる、「視界不良のため着陸ができません。しばらく旋回して、もう一度やってみます」

激しい風雨のため、もしかしたら着陸できずに羽田に戻ることになるかもしれません、という空港でのアナウンスを聞きながらぼくは、羽田から飛んだのだった。どうしても行きたかった。

幸い2度目の試みが成功して、飛行機は宮崎空港に着陸した。

*

ターン・テーブルからスーツケースを取り、振り向くと、義姉と姪が迎えに来てくれていた。兄は車の中で待っているという。ハンドルを握る兄に、仕事を休ませて申し訳ないと云いながら、車に乗り込む。いや、と一言、寡黙だが、相変わらずの優しさに心打たれる。

「直接行きたいんだろ」と兄が訊く。

「うん、そうしてくれるかな。でも、すごい雨だね」

「ああ。しばらくはこのままだろ。ゆっくりできないのか。泊まっていけばいいのに」

「うん、仕事があってね。どうしても今日のうちに、福岡に入らないといけないんだ、残念だけど。夜の便だから、時間は少しある」

花屋に立ち寄り、花を買う。

酒屋に立ち寄り、酒を買う。

何も云わないのに、ぼくが望むところに兄は車を走らせた。父と母の眠る墓へ参るときは、ぼくはいつもそうしていたからだ。

*

父や母とゆっくり話がしたい、とぼくはロンドンを発つときから思っていた。少なくとも年に3回は日本に出張するぼくは、いつもそう願いながら、仕事に感（かま）けて足が遠のいていた。航空券の手配をしながら、断念したこともある。

しかし今回は、どうしても会いたいと思った。墓の前でゆっくり話したかった。

*

激しい雨が降り続く。傘を差していても、ぼくの体はびしょ濡れで、兄が準備した線香の火もたたきつける雨に降参した。

墓をきれいに掃除しようとして東京で買って持ってきていたゴム手袋も棒の付いた硬いスポンジも、たわしも、結局何にも役に立たなかった。苦笑しながら、けれどもいつものように一升瓶の栓を抜くと、墓のてっぺんからそれをかけた。左手で傘を差し、右手で一升瓶を持つのは大変だった。手が滑って、墓に落とすとビンが割れて大変なことになる、と少し緊張した。

一升瓶の半分ほどをかけると、栓をした。残りは近くに眠る中学時代の恩師の墓にかけるのだ。ぼくの父を敬慕した彼は、父の墓のすぐそばに自分の墓を立てていた。そして父と同じく、こよなく酒を愛した人だった。

いつもなら辺り一面に漂う酒の匂いは、強い雨によって掻き消された。漂う酒の匂いをかぎ、少しその酒を口に含みながらぼくは、父に問い、母に語り掛けるつもりだった。

尊敬する教育者としての父に教えを請いたいという思いがあった。何十年も必死に打ち込んできたはずの教育の、そのすべてについてぼくは、もう一度考え直さねばならないような、そういった思いの中にいる。

こんなにも優しい人がいるのかと思わせる母にぼくは、まずは、ぼくからは優しくすることが何一つできなかったことを詫びたいと思っていた。そしてまた、ぼくのさまざまな愚かさや醜さを一つ一つ話そうと思ってきた。きっと母は、静かにそれを聴いてくれるだろう。悲しそうな表情や寂しそうな表情を浮かべた後で、それらの思いを全て飲み込むように少しうなづいて、それからきっと優しく微笑むだろう。何も云わない、励まそうともしない、しかし優しいまなざしでじっと微笑むだろう。

いや、ただ語りかけるためだけに、教えを請うためだけに、ここに来ようと思ったのではなかった。

ぼくがここに来た本当の目的は、墓に眠る父と母に、ある挨拶をしようと思っていたのだ。

けれども、激しい雨は、そのぼくを許さなかった。激しい雨に、まだまだ、という声を聞いた。

*

墓参りを済ませたぼくは他の兄や姉、その子どもたちや孫たちといった大勢で食事をする。兄姉は歳をとり、けれども仕事を引退した今のほうが活き活きとしていて元気だ。今も一緒に暮らしているかのように、ぼくに話しかける。他愛のないことばかりで、特別なことは何もない。その心地よさに感謝する。

しかしぼくは、この人たちにも挨拶をしようとしてやってきたのだった。

*

会食の後、兄の家に祀（まつ）られた父と母の位牌と遺影に手を合わせる。

空港に向かうため家を出ようとする直前、部屋から庭を眺めていると、今日一日付き合ってくれた兄がやってきて、庭の手入れをもっとちゃんとしなければいけないんだけどね、とつぶやく。二人でしばらく黙ったまま並んで庭を眺める。揺らいで見えていた庭の池の水が、ぼくの頬を伝って落ちる。

「哀しみ」のコミュニケーション 夢の途中 (32)

ぼくたちには<うれしい>とか、<かなしい>とか、<たのしい>とかの感情がある。

たとえば<うれしい>は、広辞苑によれば、「はればれと喜ばしい。こころよく楽しい」と説明される。辞書による説明はこの程度が限界なのだろうが、あまりに無味である。

ではお前はどのように説明するのかと訊かれると、少し考え込んでしまう。

くたくたに疲れて満員電車に乗り込んだとき、腰掛けていた小学生の少年が恥ずかしそうに席を譲ってくれたときの、そのときの気持ち。

ずっと前から想い続けていた人に何も言えずにただ時が過ぎ、離ればなれになってしまったひと月後に手紙が届き、私もあなたのことが好きでしたという文字を見つけた、そのときの気持ち。いやこれは<切ない>というべきかな。

救急車で運ばれ、死を見つめたベッドに、「ぼくはぼくの人生をあなたとシェアしたいのです。だから、ずっと元気でいてほしい」という手紙を息子からもらった、そのときの気持ち。これも、切ないなあ。

教え子がアフリカでの教師経験の後、たくましくなって、大きくなって、夢を持って、帰ってきたときの、一緒に酒を酌み交わすときの、そのときの気持ち。うん、これはうれしい。教え子の成長に出会うときのうれしさ、喜びは、数え切れないぐらいある。

<かなしい>はどうだろう。「自分の力ではとても及ばないと感じる切なさという語。悲哀にも愛憐にも感情の切ないことをいう。①泣きたくなるほどつらい。心がいたんでたえられない。いたましい。②身にしみていとしい。かわいくてたまらない」(広辞苑)ということだが、①の思いはどんなときに浮かんでくるのだろうか。

幼いときからの親友が急逝し、いくら時間が経ってもその遺影の前に立つ勇気が出ない、そのときの気持ち。うーん、これは<苦しい>、かな。

雲海を眺めながら、ぼくは結局一人だなあ、とつぶやくとき、そのときの気持ち。

既成の権威になびいていく、愛すべき仲間の姿を見た、そのときの気持ち。

東アフリカの食糧危機で、やせた駱駝(らくだ)とともに歩く幼い子どもの胸の浮いた骨を見る、ただBBCのニュースの画面で見るだけの、そのときの気持ち。Death Noteと書かれたノートに毎日書き込まれて行く夥(おびただ)しい子どもたちの名前、その名前をテレビの画面で見る、そのときの気持ち。

まだ残っていたはずのウイスキーが、留守にやってきた息子によって飲まれて無くなっていた、そのときの気持ち。

えっ、もう卒業するのか、もっとここに残っていてくれよと、巣立つ者たちに証書を手渡す、そのときの気持ち。これは、<さびしい>かな。

なかなかむずかしい。

こういった心の有様を表すことばは、一人ひとり、それぞれの思いで、それぞれの「心の辞書」に収まっている。

それぞれの思いで、と書いたが、そのそれぞれの、それぞれがそれぞれ、それまでに経験したことや学んだことによって作られる。一人ひとり自分の感情を持っている。自分のことばを持っているのである。

だから、ぼくの<哀しみ>は、ぼく以外の人間の<哀しみ>とは違うのだ。彼の<哀しみ>は彼のものであり、彼女の<苦しみ>は彼女のものである。

ぼくはこのことに慄然とする。

ならば、ぼくには愛する者の心の揺れやときめきが、わからないということではないのか。

わからないのだ。

ぼくたちは自分以外の人間の心を全(まった)きかたちで識ることはできない。

君の気持ちはよくわかる、などと打つ相槌(あいづち)は、少しわかるような気がするというほどのことで、しかしながらそれは大したことなのである。

数多くの経験をした者、たくさんの本を読んだ者、勉強をした者、いろいろと思い悩み、考えた者、そういった者の<哀しみ>と、そういった経験や学習の歴史を持たない者の<哀しみ>とではおそらく、量ってみれば重さが違うに違いない。

一編の詩に動悸を覚え、一枚の絵に射精し、奏でられるヴァイオリンの音に涙を流し、乱暴な男の靴によって踏みつけられた名もない雑草の付けた花に微笑む、そういった人間の<哀しみ>はおそらく、毎日ハンバーガーによって胃袋を満らし、酔うだけの酒を飲み、ほどほどの友情で時間をつぶし、ほどほどに笑い、叫び、時に泣いてもみせる人間の<哀しみ>とは、もはや別のカテゴリーに収められるほど異なった、そういうことばなのではないか。

どちらの<哀しみ>が高尚であるとか、下劣であるとかといっているのでは決してない。もともと<哀しみ>には実は、辞書が定義するような、平たい意味はないのだから。

ただ、ぼくたちは、自分以外の者と繋がるうとするとき、自分の体内に蓄えたものによって、果たして確かに、コミュニケーションすることができるだろうかと、一瞬でもよいかたじろいでみなければならぬ。

少年の憂鬱 夢の途中 (33)

「ナイフ」(重松清)を読んでいたぼくは、気が付くと降りるべき駅を乗り過ごしていた。しかも何駅も過ぎていたのだった。やむなく降りた駅のプラットホームの椅子に腰掛けて、文庫本を握り締めながら、戻る電車を待つ。

切ない小説である。穏やかで平凡な日常を突如襲う絶望的なゲーム、中学生の息子に対する陰湿な<いじめ>。父親として闘おうと手にした小さなナイフ。貧弱で臆病な父親の、息子を守ろうとする闘いはひどく惨めで見苦しい。しかしそれは、父親自身の<生>との闘いでもあった。

父と子の同志ともいうべき絆に心が震えるが、とはいえ、この子どもたちの世界の息苦しさは、一体どうしたというのだろうか。

*

ぼくには幼稚園の園児のころから小・中・高・大にいたる学生時代に、いじめられたという思い出もいじめたという記憶もまったくない。

子ども同士のけんかはあった。小学生のころは、どこかでだれかがけんかをしていると、友だちが「図師君、けんかをしてるよ、来てくれない?」と呼びに来た。駆けつけたぼくが「やめろよ」と睨みつけると、けんかは終わった。体が大きくて、威圧感のあったぼくは、一度も殴り合いなどしたことはなかったが、強かった。

中学生のころはバレーボール部のキャプテンをしており、部員の一人の、まなざしが暗く歪み、乱暴な男を軽く投げ飛ばして諷めたことがある。彼はいわゆる番長だったらしく、見ていた他の部員によってこの話には尾ひれがつくことになる。

いじめたり、いじめられたりしたことはなかったが、それでもぼくは、早く高校や大学に進級したかった。

少しでも論理性のある世界に住みたかったのだ。幼稚な者たちの怖ろしいほど稚拙な、論理ともいえない論理に付き合いたくはなかったのだ。

もっとも、高校にも大学にも似たような幼さが感じられた。しかしながら、それらを見捨てた自分の生活が、ある程度は保障された。

*

けんかは対等なぶつかり合いであると思いが、いじめはそうではない。

集団で無視をしたり、教科書や持ち物を水浸しにしたり、「死ね」というようなことばを差出人のない手紙で繰り返し送りつけたり、さらに今はインターネット上で誹謗中傷、攻撃する。

そのような行為がゲームとして行なわれているのだという。ゲームとはいえ、いじめに耐え切れず自死を選ぶ子どももいる。

そして、そのようないじめにあう者だけでなく、いじめをみてみぬ振りをせざるをえない消極的な加害者も、あるいは積極的加害者もみな、消すことのできない傷を負うことになる。

戦争における悲惨さは、殺されるということだけでなく、人を殺したといった経験や記憶を背負わせることにもある。級友を追い込み苦しめた記憶は、追い込んだ者のその後の人生に暗く歪んだ影響を及ぼすであろう。

*

しかし、どうもおかしい。

子どもたちは他の人間を陰湿にいじめたり苦しめたりする存在として生まれてくるのではない。また、親をはじめとした周りの大人たちも、子どものすくすくとした成長と幸せに生きていくことを心から願うのである。

小学1年生になるとき、子どもも親たちも果てしない未来に胸膨らませている。そこには希望がある。

けれども、しばらくすると、子どもたちのまなざしも親の言葉遣いも大きく変わっていく。

周りの者たちに負けない、競争のための学習が始まり、数字で評価することのできるわかりやすい学力だけが大切になり、上を見ることにのみ必死になる。足下を静かに優しく見つめようとする柔らかさは瞬間に消えていくのだ。

「一所懸命勉強して立派な大人になるんだよ」と言った大人たちの指す「立派な大人」とは、まずは高所得の職業に就くことのできる人間のことであり、級友たちへの思いやりや優しさよりもその者たちを踏みつけてでも上に行こうとするさもない強さを持った人間であることにまもなく子どもたちは気付くのだ。

そういったことを、親も先生も、大人たちみんなで教え込むのだ。

「悪意と策略と暴力とのしりと虚勢と苛立ちと退屈」(「ナイフ」)に微笑む大人たち、彼らはなぜ、理不尽な、不条理な圧力に佇む子どもたちを抱きしめようとはしないのか。

そんなにも大人たちの住む世界は淀み、希望や信頼の失われた世界なのか。

子どもの世界もなかなか残酷だよと言うが、子どもの世界を残酷なものに変えたのは大人たちではないか。

子どもたちはいつの間にか、大人の残酷さと冷酷さと悪意を学ぶのだ。

子どもたちの歪んだまなざしは、親よ、あなたのまなざしである。子どもたちの悪意と策略の知性は、教師よ、あなたが教えた知性である。子どもたちの憂鬱は、世の大人たちよ、あなたたちの汚臭のするため息と絶望が産み出したものなのだ。

なぜ、学ぶのか。

夢の途中 (34)

ぼくはずっと〈教えて〉きた。
ぼくはずっと〈せんせい〉だった。
ぼくの生きている時間のほとんどは、〈教える〉ことに、〈せんせい〉と呼ばれることに費やされた。
それ以外のことはしたことがなく、それ以外の存在であったことはない。
けれども、数十年も教えながら、ぼくにはわからないことが多すぎる。それはどんどん増えていくのだ。
〈教える〉ということは何であるのか。それを考え、考え込み、疲れて眠る夢の中でもまた、考えるのだ。
その答えを見つけようとするのは、ぼくの〈生きる〉ということの意味を探そうという行為に等しい。

*

気がつく、目の前には〈学ぶ〉者がいる。
いや、この〈学ぶ〉者がいなければぼくは、〈教える〉ことはできない。ぼくに向き合うそれらの者たちがいなければ、ぼくは〈せんせい〉ではない。
ならば、この者たちの〈学ぶ〉ということについて考えれば、その意味について整理すれば、ぼくの生の意味を定義できるのではないか。

*

なぜ、〈学ぶ〉のか。
研究所のさまざまな教育課程に入学する者たちについて考える。ある者は、日本や英米の大学や大学院を卒業するとすぐに入学してくる。ある者は、さまざまな種類の会社での就業経験を持つ。またある者は、入学する直前まで学校の先生であった。20代の若者もいれば、50代や60代の者もいる。
学ぶことで彼らは、知識や技術を、あるいはさまざまな思考の座標軸を、新しいまなざしを得ようとする。
では、それらは彼らにとってどのような意味を持つのだろうか。
性別や年齢、それまでの社会体験や経験、そういったものに関係なく、人には、今の自分を見つめようとする、そういう時がある日、訪れる。
その時、つまり今の自分を見つめようとするその時、その時間と向き合うには少しだけ勇気が要る。まっすぐに自分を見つめるためにはそうしようとする意志の力が必要だ。
しかしながら、いや、だからこそ、人は自分の今をそのまま見つめることを恐れる。怖いのだ。自分が見つめなければならぬと思う自分の今は、本来自分が自分に課している、期待する自分の姿とは、少しであったとしてもずれがあるのだ。そのずれと向き合うことは辛く、怖く、逃げたい。だが、いくら恐れて逃げようとしても、その思いから完全に逃げ切ることにはできない。追いかけるのが、自分自身であるからだ。
このような学生生活を送っていてもよいのか。ぼくが友人として付き合っている連中は、本当にぼくにとって大切な友人といえるだろうか。会社の愚痴ばかりを言いながら過ごす私の人生って何なのか。妻として過ごす私の人生は決して恵まれていないわけではないが、毎日夕刻になるとつく溜め息はなんだろう。
いやいや、そもそもぼくはいつの日からか、何かに打ち込み、努力しようとする人間ではなくなっていないか。言い訳ばかりをいつもポケットに忍ばせている人間になってしまっていないか。私が本当におなかの底から笑ったのはいつだっただろうか。ぼくが本物の涙を流したのはいつだったろう。
そういった思いは毎日少しずつ、静かに沈殿し、溜まっていく。いつかその溜まったものと向き合わなければと思いつつながら、巧みにごまかし、逃げ続けてきたのだ。
けれども、自分を信じようとする自分がそれを許さない。
私は変わりたいと思うのだ。ぼくはもう逃げたくないと思うのだ。
そして、学ぼうとする。変わるために学ぼうとするのである。
それは無意識なものであるかもしれない。けれども、学ぼうという思いは、つまりは、変わろうとすることなのだ。
そして変わるために学ぼうとするのは、学べば変わることができると信じていることになる。自分は学ぶことで成長できると信じていることになる。
明日を信じようとしていることになる。
学ぼうとしたその時、すでに一歩前に足を踏み出しているのである。このことはとても素晴らしいことではないか。
ゆえに学校は、明日を信じようとする者たちが集うところなのだ。
このことはあらゆる学校に当てはまるはずだ。小学校の児童も、中学校や高校の生徒たちも、大学などの学生も、すべて明日を信じようとする者たちであり、その者たちが集うところを学校と呼ぶのだ。
持っていた夢や理想を捨てさせ、現実を教え、現実にも適合する人材を生産しようとするところではけっしてない。現実というものがあるとすれば、そしてその現実におかしなところがあれば、それを変えようとする精神を育むところが学校である。すべての人間が平和で幸せに生きていこうと願っている。そのことを確かなものにするために、必要な知性や心を育てていくところである。
学ぶとは、そういうことだ。そして、教えるとは、その学ぼうとする者たちに寄り添う行為である。

少年の秘密 夢の途中（35）

少年が通っていた小学校は石垣に囲まれたお城の跡にあった。

半世紀も前の話である。

通学路は、登校時のその道と下校時のそれが同じ道であるとはとても思われなほど、帰りの道は遠かった。けれどもそれは理屈で言えばおかしい。小学校は、つまりお城は高台にあり、登校する際はまさに登っていくのであり、下校時は下るのである。だから、下校するときのほうはずっと楽だったはずなのだ。

登っていかなければ学校というところはないのだと思込んでいた少年は、初めて平地にある他の学校を訪れたとき、空気のよどみを感じた。凜としたものが感じられなかったのである。

下校する少年は疲れていた。何度も何度も途中でランドセルを投げ出しては休憩した。途中にはお寺やお屋敷が続いた。それは休憩というよりも、ところどころで座り込み、本を広げたり地面に落書きをしたり、いわば遊びながらの下校路であった。

高学年になると、道はいくぶん短くなった。途中、文房具屋や駄菓子屋に立ち寄ることもあったが、どうしたわけかそこにいる厳しい雰囲気のおばあさんたちが苦手で、またそこで売っているもののクオリティがいかにもいい加減な感じがして、嬉々として屯（たむろ）する同級生ほどには魅力を感じなかった。

*

登校する少年の右手に、すなわち下校する少年の左手に、お寺や墓地を通り過ぎた辺りに竹林があるのに少年が気付いたのは、もう少年が6年生になっていたころかもしれない。

少年はその日も疲れていた。学校では良い子の典型みたいな存在で、いつもリーダーであった少年は、けれどもなんとなく疲れていた。家に帰ればいつもたっぷりと時間をかけて母が作ってくれるおいしい夕食と優しい笑顔とが、そして父の大きな、どんな時でも守ってくれるに違いないたくましい愛情とが少年を包み込む。

だからその日も、その竹林に差し掛かったとき、立ち止まる必要などまったくなかったに違いない。早く帰り、抱きしめんばかりに少年を迎えてくれる母の顔を見ればよかったはずなのだ。

けれども少年はそのとき、どうしても立ち止まらなければならぬような、<立ち止まりなさい>という声を聞いたのだ。その声は、少年が年老いた今もまだ、時折聞こえてくる。たとえば、駅のプラットフォームで電車を待っているとき、反対方向の電車が滑り込んでくると、その電車に乗せようとする強い力を感じてしまうことがある。もしもそのとき、その声に素直に従えば、きっと違った世界に入っていける、そういう思いがするのだ。それはいつか、いつの日か訪れるのかも知れないが。

竹林の前で立ち止まった少年は、道を外れ、がけをよじ登り、踏みしめる草木が音を立てないように恐る恐る奥へと進んだ。そして周りが全て青い竹で囲まれ、ほかに何も見えなくなったそのとき、少年は慄然と立ち尽くすのだ。

その震えはどのくらい続いたのだろう。少年は天空を突き刺すように伸びる竹に身構え、怖れ、震えた。

しばらくして少年は、地面に座り込んでいる自分に気付く。音が聞こえる。虫の羽音のような音が微かに、けれども確かに聞こえる。

震えは、ない。消えた。

ゆっくり立ち上がった少年は靴を脱いだ。靴下を脱ぐ。上着を脱ぎ、シャツを脱ぐ。ズボンを脱ぎ、下着を脱ぐ。身につけていた一切のものを静かに脱いだ少年は、その細い体をつま先で支え、両手を頭の上に伸ばし、手の指のすべてに力を入れて伸ばし、目を閉じた。

少年は竹になり、天を突き刺し、少年の繊毛のような神経を地面に這わせ、深く深く潜っていく。

そして、少年はもう一度震えるのだ。

少年の秘密はその後ずっと、今に至るまで封印される。

*

中学生になった少年はある日、街の書店でボードレールに出会う。『悪の華』という詩集である。

またしばらくして少年は、次の詩と出会うことになる。それは少年を激しく貫く。いわば、少年がいまだに抗い続ける生の、つかみよのない、見えない、その一瞬の影との対峙であった。

光る地面に竹が生え、
青竹が生え、
地下には竹の根が生え、
根がしだいにほそらみ、
根の先より繊毛が生え、
かすかにけぶる繊毛が生え、
かすかにふるえ。

かたき地面に竹が生え、
地上にするどく竹が生え、
まつしぐらに竹が生え、
凍れる節節りんりんと、
青空のもとに竹が生え、
竹、竹、竹が生え。

—— 萩原朔太郎「竹」

梅の花、咲く。

新年・断章

暖冬のロンドンから、氷点下の成田に着く。機内から眺めた富士が白く化粧し、美しい。
空港に迎えに来た東京のスタッフが寒さに震えている。前日にかなりの雪が降ったらしい。
新年の雪、いいじゃないか、と少年のように心が弾む。
ホテルに到着してつけたテレビのニュースが大雪に苦しむ人たちの顔を映す。
そうか、そうだな、と未熟さを恥じる。震災の被害者への思いやりを欠いていた。

*

ホテルの庭を散歩する。凍った小道に足を滑らせそうになる。大気もまた、凍っている。
あ、梅が咲いている。
つぼみだが、梅だ。
ン、いつだったかな、前に見たのは。
いや、同じ花と二度と出会うことはない。
利休の云う「一期一会」である。
〈現在〉という時は、瞬時に〈過去〉となる。とどまることはない。

*

新年ということばの響きが好きだ。
昨年や去年はすでに死に、同じ季節が巡り来ることはない。
時は常に生まれ、次の瞬間には死んでゆく。
〈未来〉はあるようで実はなく、あるのは〈過去〉だけである。
ゆえに〈今〉は、まさに戦慄を覚えさせる儂い時であり、ぼくたちはしかし、あたかも〈今〉を生きているような錯覚の中にいる。

*

ぼくは今、〈生きている〉と書いた。
けれども、〈生きている〉ということばが表すアスペクトは何とも頼りない。
時の流れの中のいつ、それが始まり、いつ終わるのがはっきりしないのだから。
周辺に様々な生が誕生し、あるいは朽ちていったとしても、少なくとも自分のそれは分からない。
かつてこのコラムでぼくは、「変数 x の孤独」という小文を書いた。ぼくたちの〈生〉はあらかじめ設定された関数の変数として放り込まれた、極めて孤独なものであり、ゆえに時の流れという座標軸に抗うことも何らかの傷をつけて痕跡を残すこともできないのだ。

*

今年もぼくとぼくの仲間たちは、教育というものの可能性を信じて懸命に、真摯に取り組み、闘おうとするだろう。
ぼくたちは、〈ヒト〉という哺乳動物が〈人間〉という社会的存在となった時、その社会性を支える豊かさと残酷さ
とをしっかりと見据える力の必要性を訴えようとする。
それを仮に〈知性〉と名付けるならば、その知性は静かに澄んで、確かなあたかさに満ちていなければならない。
例えば、学校とは何か、と問い続けよう。
学力低下の元凶とされた「ゆとり教育」の健全な方向性が稚拙な現実主義に押しつぶされたが、百ます計算や学校内
における塾教育などの愚かで幼い、教育まがいの手法の跋扈は必ずや近い将来、大きな社会問題を引き起こすだろう。
学校というところは訓練の場ではない。今の社会や大人にとって都合のいい人間を生産する工場ではない。
今の社会の持っている病や問題点をしっかりと見つめ、より良い、もっと幸せな社会を作ろうとする力を持った者
たちを育むところである。

*

日本語教育や英語教育といった外国語教育もまた、もっと豊かで幸せな世界を作ろうとする行為である。
世界を作る、というのは自分のまなざしを豊かであたかきものに変えていこうということである。
外国語としての日本語を学ぶ外国人が、日本語や日本文化の学習を通して発見した日本的なまなざしが、どの国の人
にとっても価値ある普遍性をもったものであった時、その学習者の〈生〉を豊かに変えていく。
この日本語教育、世界中で数多くの日本語教師たちが必死で格闘している。その努力の成果は少しずつだが上がりつ
つある。
しかしながら、残念なことに日本国の政府の取り組みは、その独立行政法人の活動も含めて、極めて表面的であり、
役人のための、機関のためのそれを越えない。この点はしっかりと知っておく必要がある。昨今の日本という国のあら
ゆる点における縮む姿は内なる崩壊であり、必然なのだ。
早期外国語教育としての小学校英語（児童英語）教育も、それ自体は良いことであり、その充実が望まれるが、す
でに問題が吹き出ているように、外国語教育の目的の欠如や貧しさ、教員養成に関するその中途半端なシステムはまさに、
今の日本という国の問題点のサンプルとして厳しく検証する必要がある。

*

時間の流れを区切り、年を改めて〈新年〉と呼び、もう一度始めようとする先人の知恵は素晴らしい。
新しい梅の花が、今、咲いたのである。

欲しい 夢の途中 (36)

人は時に、欲しい、と思うものがある。
それはモノであったり、カネであったり、ヒトであったりする。

*

たとえば、モノである。

長男がまだ少年であった頃のことである。ロンドンの中心点ともいえるピカデリー・サーカス *Piccadilly Circus* にぼくは、オフィスを持っていた。近くにはメリディアン・ホテル *Le Méridien Piccadilly* があり、ぼくはよく、そのラウンジを応接間代わりに使っていた。

午後 4 時ごろだっただろうか、その日も、日本からやってきた客と紅茶を飲みながら会議中であった。すると突然、「パパ」と長男が現れた。真剣な面差しで全身に力が入っているのがわかる。

「あ、どうしたの？」

「パパ、お願いがあるの」

「なあに、云ってごらん」

「あのー、ぼく、ゲーム・ボーイがほしいの」

やっと言えたと、ほっとした、けれども不安な表情の長男の頬は紅潮している。ぼくは決して友達のような、優しくものわりのいい父親ではない。むしろ怖い父親だったろう、その頃。

しばらくじっと長男の顔を見つめたぼくは、「わかった。自分で買いにいけるか」と訊いた。喜びに泣きそうになった長男は、ウン、とだけ応えた。

長男がぼくに直接、モノをねだったのはそのときが初めてだった。そしてそれ以降、そのような記憶はない。

長男が立ち去った後、そうか、そうか、とぼくは独り言（ご）ちたのだった。

*

少年の頃、ぼくはなにが欲しかっただろうか。

小学生の頃、年の暮れ、本屋さんにまぶしく積まれた「お正月特別号」の雑誌を買って貰い、家まで走って帰ったことがあった。

まだまだ珍しく、誰も持っていなかったテープレコーダー（ソニーのソニオマチックといった、確か）が欲しいと母親に囁いたら、本当に父親が買ってきてくれて驚いたこともある。もっとも、それに母親が漢字の読みを吹き込み、それを聞きながら漢字を書いて練習することになったのだが。

百科事典が要るといったら、ブリタニカの堂々たるセットが届いた。父親が注文したらしい。めくってみたら英語版であった。

視力がそれほど落ちていなかったのに、メガネをかけてみたくなった。中学 3 年生の頃である。見えない、といったら母親が驚き、すぐに眼鏡屋さん連れて行かれた。

高校生になると、自転車を買ってもらう。スポーツタイプのそれには、なんと曲がる方向に光が流れる方向指示器がついていた。その自転車に乗っているとき転倒し、危うく車にはねられそうになる。手の平を何針か縫う。

大学生の頃、刊行が始まった萩原朔太郎の全集は、当時のお金で一冊あたり 1 万円近くもする高価なものだった。同級生たちと居酒屋や喫茶店で屯することを拒んでいたぼくには、しかしながら手の届く額であった。酒と詩集が欲するものだったのだ。

今ぼくは、何が欲しいだろう。どんなものが欲しいのだろう。

*

もし可能であるなら、時間が欲しい。

ゆったりと静かに流れる時間が欲しい。

心穏やかで、優しい表情のぼくが欲しい。

誰も傷つけることのない、ゆるやかな時間が欲しい。

大切な人を守るために自らが激しく傷ついても、それを痛みと感ぜない強靱な精神が欲しい。

愛する人のところへ瞬時に駆けつけることができる筋肉が欲しい。

*

たとえば、カネである。

人がお金が欲しいと願うのはどんなときだろう。そのお金がなければ生きていけないのではないかと不安に思うとき、そのお金があれば欲しいモノが買えると思うとき、そのお金があればしたいことができると思うとき、より多くのお金を持つことで周りの人たちから敬いや羨望の目で見られるのではないかと期待するとき、などなどいろいろであろう。

息子の大学時代の友人とぼったりロンドンの街角で出会う。インド出身の彼は大学を卒業すると、世界でも有数の銀行に就職した。初年度から表彰されるほど優秀な成績を積み上げ、若者としては驚くほど多額の報酬を得ることになる。いくつもの大学院を経て英国の大学の貧乏教員をしている息子と比べると、5 倍以上の年収である。「でも、彼（息子のこと）がうらやましい。彼のような人生を送りたいとぼくはいつも思っているんです」と別れ際に、なぜか思いつめたように彼は言った。その彼はつい最近、銀行を辞め、家族と一緒にインド料理店をやっている。

お金なんて、とは言わない。この世の中でお金の持つ力を知らないわけではないし、飢餓で苦しむアフリカの人たちの命が、いかなる種類の、わずかなお金であったとしても救える現実、目をつぶろうとは思わない。けれども、お金で全てを手に入れることができるとか、お金のために生きるなどということばは使わない、わずかばかりの知性は持っていたいと思っている。

まだ、間に合うよ。

夢の途中 (37)

*

激しい雨と雹（ひょう）と雷に、突風が加わった。

会議に出かけようとしたぼくは、テレビの天気予報官の「外には出ないでください」との警告に足止めをくった。日本では数日前には竜巻がつくば地方を襲い、大変な被害をもたらしたという。昨日英国から日本に着いたばかりのぼくは、2月の大雪に続く悪天候に驚いている。

清掃が行われるので、ホテルの部屋を出る。ホテル内の陶器屋さんをのぞく。ロンドンを発つ前に娘が、急須を買ってきてほしいとねだったのだ。今年 27 歳になる娘の 25 年間はロンドン暮らしだが、緑茶も日本料理も大好きだ。ついでに、ぼくに似て酒飲みの息子二人に、漆塗りの小さな器を買う。二人とも深夜、原稿を書いたり、研究をしたりしながら、ちびちびとウイスキーをストレートで飲んでいよう、ちょっと贅沢だが、自分の若い頃にこんな器で飲んでいたらもっと上質の文章が書けたかもしれないなあと思ひ、奮発する。

昼ご飯を食べそこなっていたぼくは、けれども食事をする気力はなかった。そうなのだ、最近では食事をすることも気力がある。

陶器屋さんを出たぼくは、同じくホテル内の「とらや」の前で立ち止まる。西洋のケーキ等には興味のない左党のぼくはしかし、日本の小豆の甘さは好きだ。

「とらや」にはちょっとした食事のできる甘味処もあり、そのメニューにかき氷を見つけた。盛夏にこそ似合うかき氷である。しかも今日は大変な悪天候である。さらにぼくは、食事をすると一人で入ることは苦手である。

けれども、かき氷は魅力的だ。しかも宇治金時とある。甘味処はきつと、女性ばかりではないかという不安もあったが、勇気を出して中に入った。

席に案内されながら周りを見ると、確かに女性が多い。だが、ご婦人と表現した方がいい落ち着いた女性がほとんどだ。

宇治金時に練乳をかけてもらったものを注文する。運ばれてきた宇治金時をスプーンで食べる。何年振りだろう、宇治金時を食べるのは、少なくとも 25 年間は食べていない。

かき氷はうまく食べないと、無様に崩れてしまう。そんなことを思い出しながら少し緊張しながら食べる。それがたまらなくうれしい。

**

宇治金時を食べながらぼくは、一冊の文庫本を読んだ。ホテルの部屋を出るとき、部屋の清掃が終わるまでホテルのラウンジで、コーヒーを飲みながら本でも読んで時間をつぶそうと思っていたのだった。

重松清の『小さき者へ』は短編集だ。文庫本の表題となっている「小さき者へ」は、「海まで」「フィッチのイチ」に続く 3 番目の物語である。級友にいじめられた中学 2 年の少年が、母親に対する暴力と引きこもりに逃げ込む。その少年の姿はほとんど描かれてはいない。その少年の父が手紙をつづること少年に語りかける形で物語は進んでいく。渡されることのない手紙を毎日、深夜に書きながら、少年の父は、自らが少年の頃の父との対峙を振り返ることになる。

わかったふりをする大人が許せなかった少年の頃の彼であったが、彼もまた気がつく、同じ大人になっていたのだった。

彼は少年の頃、父親の学歴の低さを、父親の仕事を恥じ、嫌い、憎んだ。学校でいじめの標的になりつつあった彼は、いじめから逃れようとして、級友の気を引くために、母親の財布から紙幣を抜き取る。それを父親（中 2 少年にとっての祖父）に見つかるが、父（祖父）はぼうぜんと立ち尽くし、しばらくして静かに言うのだった、「おまえが落としたものは、一緒に拾うちゃるけえ」と。

子どもの落としたものを見ることのできる父親がいる。落としたものがなんであるかを見ようとする親がいる。一緒に拾おうとする大人がいる。

なにも落とすことのない子どもなんていない。

もしいるとしたら、大人たちによってなにも落とさないようにとがんじがらめに動けなくされてしまっている子どもだ。

そういう子どもをよい子としてぼくたち大人は、歓迎しているのではないか。

大人は子どもの幸せを願うのだが、親は子どもの幸せを祈るのだが、教師や先生は幸せの形らしきものを教えようとするのだが、しかし、それは本当だろうか。

ぼくは「小さき者へ」の 5、6 頁を残して、「とらや」を出た。もうそれ以上読み続けることがどうしてもできなかった。

部屋に戻り、冷蔵庫からエビスの缶をとりだすと一気に飲んだ。それから冷たい水で顔を洗った。夕刊を読み、窓の外を雨を見つめた。そしてようやく、ソファに腰掛け、続きを読む。

読み終えたぼくはまた、窓際に立ち、外を見る。

ぼくたちはまだ、間に合うだろうか。たとえば教育は、恐ろしく間違った方向へと走ってはいないか。学ぶべきこととして大人たちが今、子どもたちに示しているものは確かなものだろうか。

止んだはずの外を雨の風景が、けれども水の中にゆがんでいる。